ISSN 2187-4441
ISSN-L 0289-8160

大学入試研究の動向

令和５年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 18 回）

令和５年(2023 年)12 月 独立行政法人大学入試センター 41 号

大学入試研究の動向

41 号

独立行政法人大学入試センターは，令和 5 年 5 月 18 日～20 日，北海道大学との共催で，令和 5 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 18 回）をオンラインで開催した。本報告書は，同大会における講演，討論等を当センターの文責で採録したものである。

＊本報告書で言及されている高大接続改革の進捗状況及び講演者の肩書等は，大会開催当日のものである。

目　　次

令和５年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第１８回）特集

◉ 全体会１（大学入試センターセミナー）

「CBT(Computer Based Testing)における大学等機関の有機的な連携に向けて」 …… 3

◉ 全体会２

「国際入試の現状と展望」 ……105

◉ 全体会３

「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて」 …… 183

全体会１（大学入試センターセミナー）

「CBT(Computer Based Testing)における大学等機関の有機的な連携に向けて」

司　　会：　寺尾　尚大（大学入試センター研究開発部准教授）

趣旨説明　大学入学者選抜におけるCBTの現状と最新動向 …… 5
寺尾　尚大（大学入試センター研究開発部准教授）

報 告 ①　佐賀大学の学校推薦型選抜におけるCBT …… 10
西郡　大（佐賀大学アドミッションセンター長）

報 告 ②　九州工業大学の総合型選抜におけるCBT …… 20
播磨　良輔（九州工業大学情報基盤課長）

報 告 ③　大学入試センターにおける令和７年度入試に向けた試行調査の遠隔実施事例 …. 29
堀越　健一郎（大学入試センター事業部事業第一課試験実施第三係長）

報 告 ④　大阪大学の調査研究におけるCBTシステム …… 45
萩原　兼一（大阪大学 名誉教授／大学院情報科学研究科招へい教授）

報 告 ⑤　国際技術標準に準拠した出題モジュールの開発・評価 …… 60
宮澤　芳光（大学入試センター研究開発部准教授）
水野　修治（大学入試センター試験問題調査官）

報 告 ⑥　電気通信大学におけるCBTの取り組み …… 81
植野　真臣（電気通信大学大学院情報理工学研究科教授）

全体討論 …… 95

内　　容：

近年、民間の学力試験・資格試験においては、コロナ禍の影響も手伝って、コンピュータを用いたテスト（Computer Based Testing、 CBT）が注目されている。大学入学者選抜においても、複数年にわたってCBTを導入する先駆的な大学・選抜区分がいくつかある。

大学入試センターが令和3年3月に公表した報告書「大規模入学者選抜におけるCBT活用の可能性について（報告）」（以下「令和3年報告」という。）では、現行の共通テストのような大規模入学者選抜でCBTを行う場合、全国的に均質で質の高い受験環境の確保、トラブルが生じた場合

の対応体制の構築、新しい試験のあり方に対する受験者を含めた社会の理解の3点が、実施上の主な課題であることを浮き彫りにした。同年7月に公表された大学入試のあり方に関する検討会議の提言では、CBTの優れた点を多数挙げながら、各大学の個別試験や総合型選抜・学校推薦型選抜における望ましい先行事例を拡大することの必要性も提言された。そして、翌年６月にはセンターより「個別大学の入学者選抜におけるCBTの活用事例集」を公表した。本事例集の作成過程において、CBTに取り組む大学が直面する課題には共通性があり、これらの大学が知見を共有することでCBT実施に伴う困難を軽減できるのではないかという示唆を得たところである。そこで本セッションでは、CBTに取り組む大学に、受験環境、トラブル対応体制、新しい試験に対する社会の理解等の試験実施上の課題について、その対応方法を発表いただくとともに、他の大学や機関と連携することでそれらの課題をさらに克服できる可能性について議論いただく。本セッションを通じて、CBTに関する知見を共有するプラットフォームを提供するとともに、CBTの実施に関する知見を複数大学・機関で共有し、入学者選抜でのCBTを活用する際の課題を共同で克服するための仕組みの構築の足がかりとしたい。

全体会 1（センターセミナー）◉ 趣旨説明

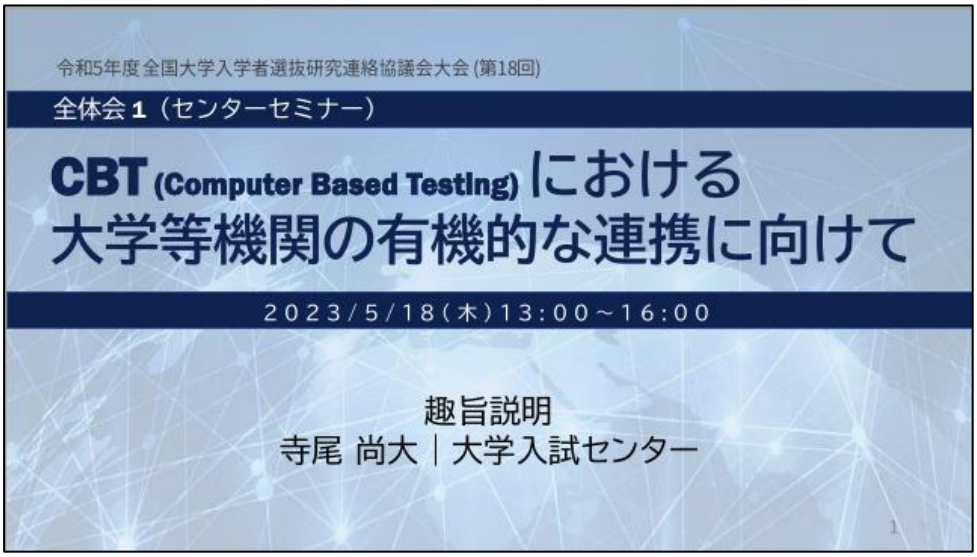
大学入学者選抜における CBT の現状と最新動向

■寺尾　尚大（大学入試センター研究開発部准教授）

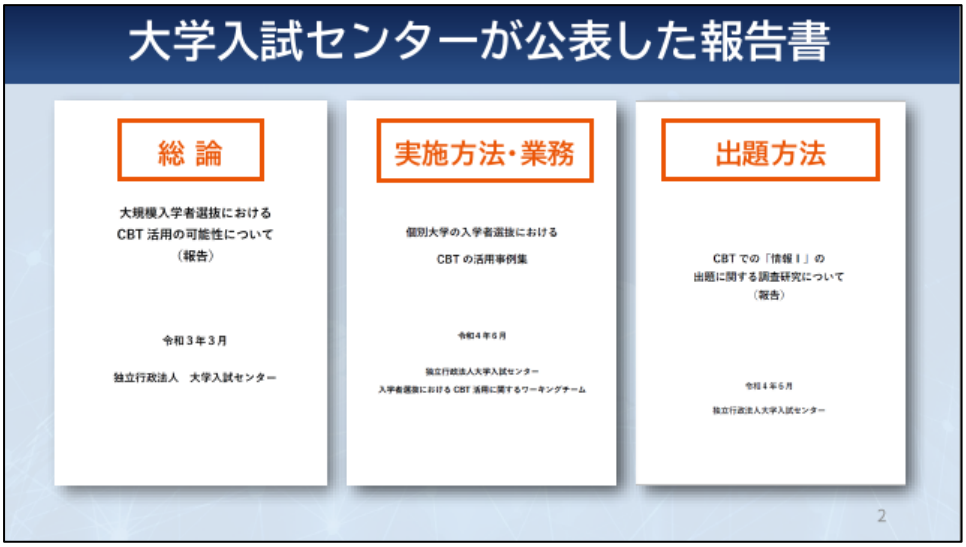
それでは，令和 5 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 18 回）の全体会 1「CBT（Computer Based Testing）における大学等機関の有機的な連携に向けて」を始めたいと思います。本日の司会を務めさせていただきます，大学入試センター研究開発部の寺尾と申します。よろしくお願いします。

この全体会 1 では，新しいテストの方法としての CBT について，特に大学入学者選抜での取り組み，あるいは活動等について理解を深めていければと思います。

まず，趣旨説明ということで私からお話しさせていただきます。



CBT（Computer Based Testing）とは，コンピュータを使った試験ということです。入試関係者の中には CBT に非常にお詳しい先生方，あるいは職員の皆さまもたくさんいらっしゃると思うのですが，初めての方，あるいはなかなかこの話題にキャッチアップしてこなかった先生方や職員の皆さまも多いのではないかと思いますので，少し丁寧に CBT の今の取り組み状況あるいは今後についてお話させていただきます。

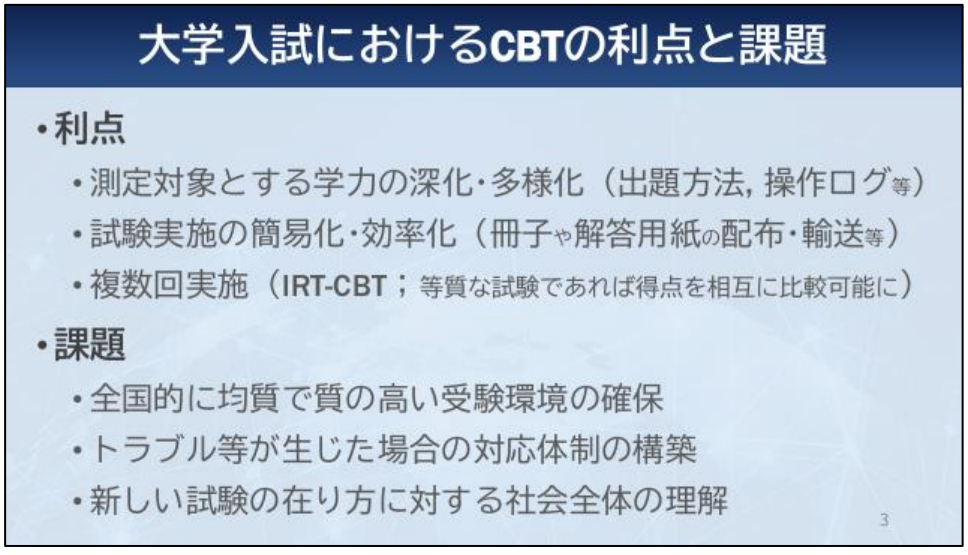


まず，2021 年から 2022 年にかけて，大学入試センターから報告書を 3 点公表しました。

2021 年 3 月に公表した「大規模入学選抜における CBT 活用の可能性について（報告）」は，CBT に係る総論のような報告書であり，多様な観点を盛り込んだ形で，CBT について検討しなければならない事項，メリット，課題等を網羅的に報告したものです。

2022 年 6 月公表した「個別大学の入学者選抜における CBT の活用事例集」は，CBT のワーキングチームを所内に立ち上げ，外部の有識者の先生方にもご協力いただきながら作成しました。後でも出てくるのですが，幾つかの大学・学部において，特に総合型選抜や学校推薦型選抜の枠組みの中で CBT を導入されるというケースが出始めており，その活用事例を示したものです。

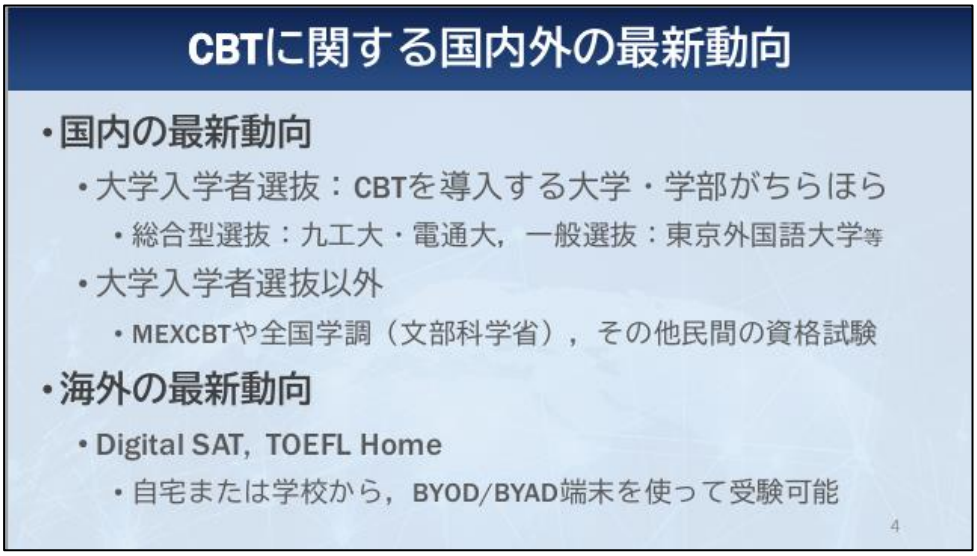
同じく 2022 年 6 月に公表した「CBT での「情報Ⅰ」の出題に関する調査研究について（報告）」は，調査研究の一環として，もし仮に CBT で情報Ⅰの出題をやるとすると，どういうことが問えるだろうか，あるいは，出題の仕方としてどのような方法があり得るだろうかということをまとめた報告書です。まだお読みになっていない方がいらっしゃいましたら，ぜひ一度お手に取っていただければと思います。



総論の報告書の中でいくつかの利点と課題が示されています。CBT を使う利点として，その測定対象とする学力がより深化したり多様化したりするということ，紙という印刷媒体の物理的な制約がある中で，コンピュータを使うことによりそれが拡張されるということもあり得るでしょうし，解答の操作ログ等も残りますので，そういうものの分析を通して評価すべき学力の深化・多様化があり得るということです。

入試関係者にとっては，試験実施の簡易化や効率化にかなりご関心があるのではないかと思います。紙の場合は冊子を配ったり解答用紙を配ったり，あるいは数を数えたりというところに大変ご苦労をされていると思うのですが，CBT で特定の方法で実施すれば，ある程度簡素化できたり効率化できたりします。あるいは，CBT の一つの理想形として IRT を使った，問題をたくさん集めた問題バンクを構築した上で，かなり柔軟に難易度を等しくするような試験をいくつかつくって，複数の試験の得点を比較可能にするという枠組みなども提案されているところです。

ただし，CBT の実施に関しては課題もいくつかあげられます。1 つ目は，受験環境を質の高いものにするということです。これは結構ハードルが高い課題です。2 つ目は，トラブル等が生じた場合の対応体制の構築です。紙の試験以上に非常に高度な機械を扱いますので，トラブルが起こった時にどう対応するのか，そこまで考えておかなければいけません。3 つ目は，今回のご発表にも出てきますが，CBT は新しい試験のやり方ですので，社会に理解してもらえる，納得してもらえる試験をつくることも非常に大事ですし，ご納得いただけるように丁寧に説明をすることも大事だと考えています。

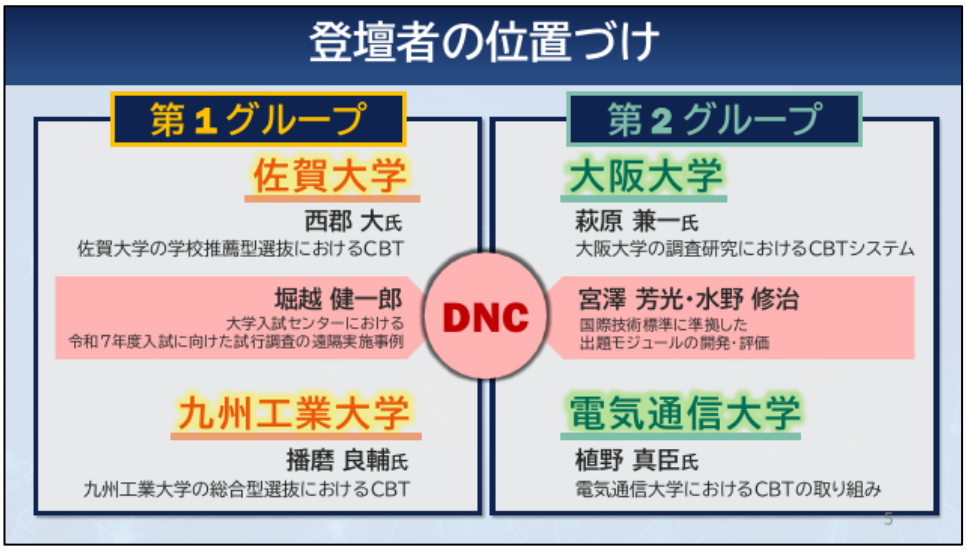


先ほど，大学入学者選抜でも CBT を導入する大学・学部があるという話をさせていただきましたが，先駆的な大学として佐賀大学がいち早く総合型選抜で CBT を取り入れられましたし，九州工業大学あるいは東京外国語大学でも取り組まれています。電気通信大学でも今後 CBT を導入される方向で準備を進めておられるという状況です。

入試に限定しなければ，文部科学省が MEXCBT（メクビット）という CBT システムをリリースして運用されておられますし，その他の民間試験等ではコロナ禍も拍車をかけ

て CBT 化しつつあるということです。

海外の大学入試，あるいはその関連というところで言えば，アメリカの SAT は Digital SAT という，CBT 版の SAT を開発し，リリースしているところです。これの大きな特徴は，自宅または学校等から特別な試験会場を用意することなく，生徒あるいは受験者の BYOD(Bring-Your-Own Device)/BYAD(Bring-Your-Assigned Device)端末を使って受験できるところが新しいところです。以上が最新情報のひとまとめになります。



この全体会 1 では，ご覧の先生方にご登壇いただいて話題提供を頂きながら，CBT の大学間の連携を見据えて議論を進めていきたいと思います。

第 1 グループとして，佐賀大学の西郡先生からは，特にいち早く取り組まれた佐賀大の CBT のお話をしっかりと伺いながら，長く運用する中での課題についても幾つか話題提供を頂きたいと思います。

九州工業大学の播磨課長からは，九工大での CBT についてお話しいただきたいと考えています。佐賀大と九工大は，実は綿密な協力体制にあったということです。佐賀大の知見をうまく生かして九工大でも活用されたというところで，ここでも既に大学間連携の芽はあると言えるかと思います。

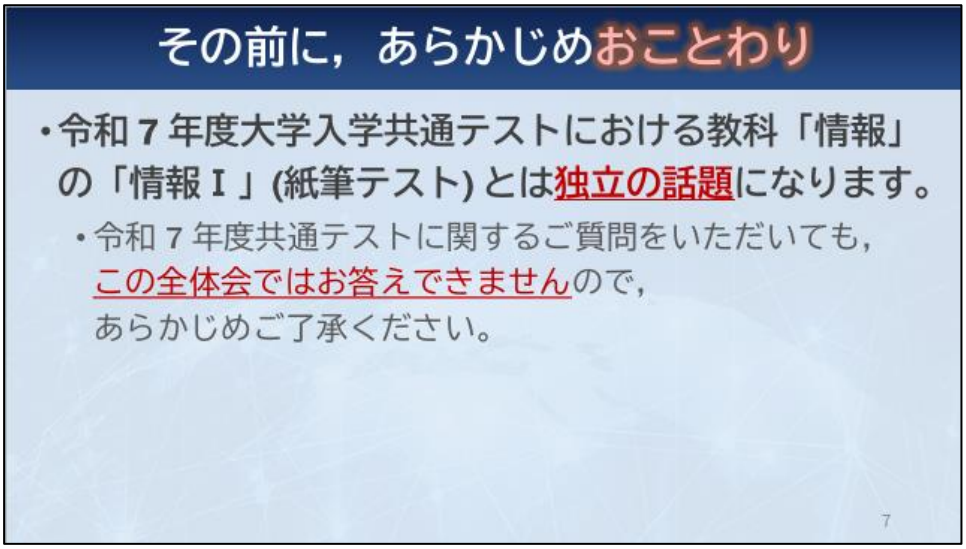
大学入試センターの堀越からは，紙のテストでの調査という事例ではありますが，昨年，令和 7 年度入試に向けて試行調査を遠隔で実施し，大学生から解答データを得たという取り組みがありましたので，それについての実施方法に注目してお話をさせていただければと思います。

第 2 グループとして，これは連携があるというよりは少し枠組みに似た点があるというくらいだと思うのですが，大阪大学の萩原先生から，文部科学省の委託事業で調査研究として開発された CBT システムについて，特に情報というところを題材としての調査研究の取り組みについてご紹介いただきたいと思います。

大学入試センターの宮澤，水野からは，阪大の委託事業の結果をうまく活用させていただいて，国際技術標準に準拠した出題モジュール，具体的には情報 I を題材とした出

題モジュールの開発に挑戦しましたのでそのお話をさせていただければと思います。

電気通信大学の植野先生からは，電気通信大学での CBT の導入に向けた取り組み状況等を，オンゴーイングのものでなかなかお話ししづらいところもあるのかもしれませんが，ぜひその野心的な取り組みについてご紹介いただきたいと思っています。



今回，まず共有しておかなければいけないこととして，本セミナーは，令和 7 年度大学入学共通テストにおける情報Ⅰの紙のテストとは独立の話題になりますこと，あらかじめご承知おきください。■

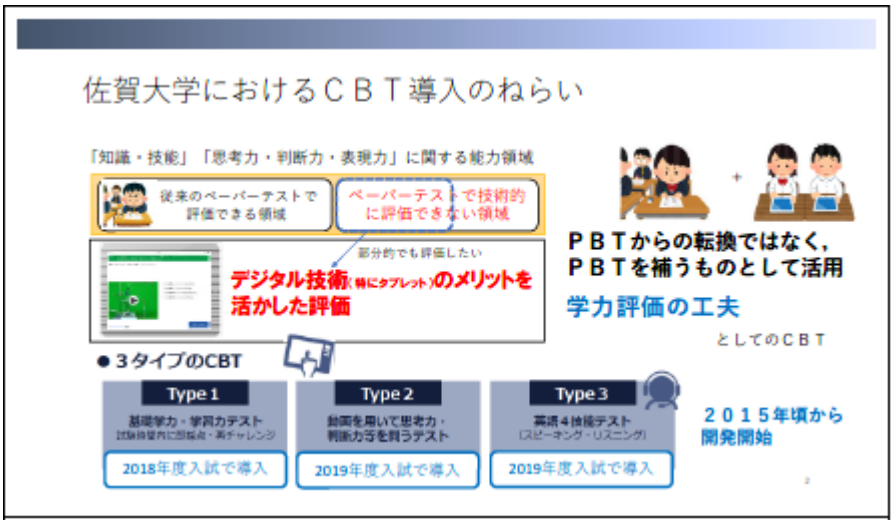
全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 1

佐賀大学の学校推薦型選抜における CBT

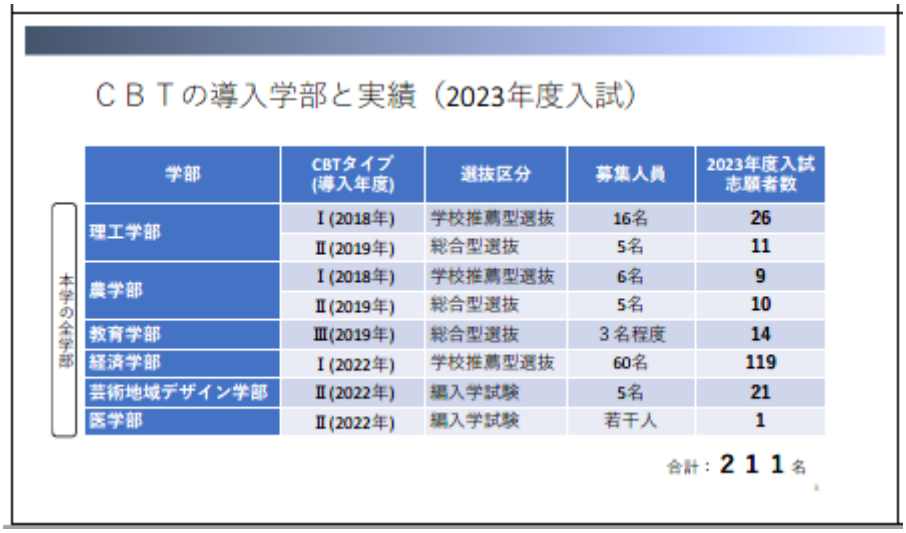
■西郡　大（佐賀大学アドミッションセンター長）

それでは，「佐賀大学の学校推薦型選抜における CBT」ということで報告させていただきます。





まず，佐賀大学における CBT 導入の狙いです。ペーパーテストでは技術的に評価できない，評価しにくい領域に注目し，デジタル技術のメリットを生かして評価できないかということで開発を進めてきました。これは PBT を全部やめるということではなく，PBT を補うものとしての活用ということで，学力評価の工夫として CBT を位置付けようという発想のものです。



現在，3 つの種類の CBT があります。タイプⅠは基礎学力・学習力テストというもので 2018 年度から導入しています。タイプⅡというのは，動画を用いて思考力・判断力等を問うテストです。そして，タイプⅢがスピーキング・リスニングの技能テストというものになります。この CBT 自体の開発は 2015 年度頃からいろいろとプロトタイプをつくってやってきたということです。佐賀大学は 6 つの学部がありますが，現在，編入学も含めて全ての学部で CBT を実施しています。

本日は，タイプⅠ，学校推薦型選抜を中心にお話をしますが，総合型選抜でも実施をしています。今現在，全ての募集区分の志願者数の合計を見ますと大体 211 名で，多い年で約 250 名弱の規模で CBT，タブレット試験を実施しているということです。

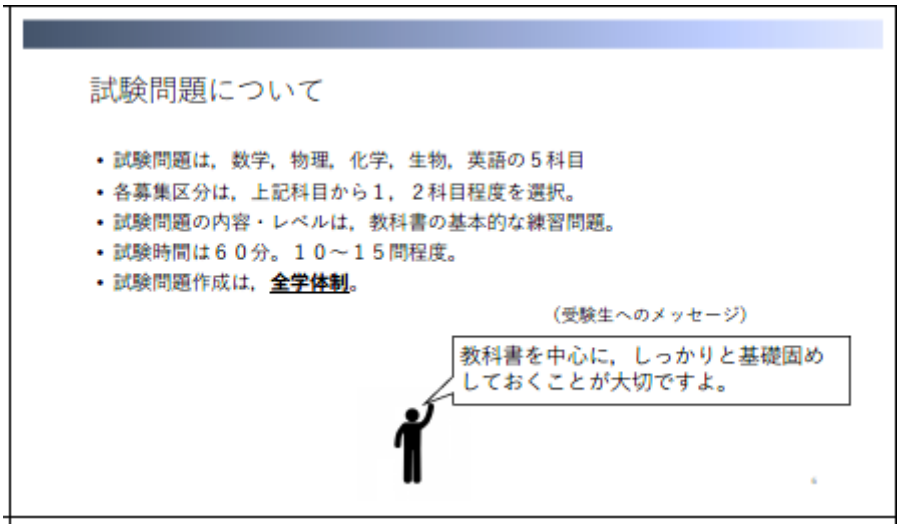


このタイプⅠについて簡単にポイントをご紹介して，それを踏まえて話を進めていきたいと思います。タイプⅠというのは，基礎的な問題を出題するというものです。数学，物理，化学，生物，英語からそれぞれの学部・分野に関連した科目を指定して 15 問程度出題します。それと同時に計算用紙，メモ用紙も一緒に配布し，それを解いていくということになります。試験時間は 60 分ですが，15 問を解き終えると受験生自身が採点ボタンを押して採点をします。100 点満点だったらそこで試験は終了ですが，間違いがあった

場合は試験が続きます。採点ボタンを押すのは，試験時間中いつでも構いません。



間違った場合，不正解問題の一覧が出てきますが，それと一緒にその問題の解き方ではなく，その問題に必要な知識や考え方を解説文として提示します。受験生はそれを読んで必要な部分をメモ用紙などに取り，学習してもらうことになります。ある程度自分なりに理解したと判断したら，類似問題に再チャレンジしてもらいます。再チャレンジは 1 回のみです。再チャレンジは試験中には採点は行いませんが，試験終了後にそれが正解したかどうかを考慮して判定を行います。現在，こういったタイプのものを実施しています。



試験問題ですが，先ほど言いましたように，数学，物理，化学，生物，英語の 5 科目があります。問題内容は教科書の一般的なレベルです。ミニマムの学力，最低限このぐらいは備えておいてほしいという学力を評価しようというものですので，そこまで難しいものはありません。

試験問題の作成は全学体制ということで，全学の中で作題体制を設けましてそこで作っています。受験生には何か特殊なことを勉強しておいてくださいということではなく，

教科書を中心にしっかりと基礎固めをしておいてくださいと伝えています。学校推薦型で使いますので，基礎的な学力があるかどうか，そして，間違ったとしても学習できる力があるかどうかを評価するものです。



CBT のメリットとしてはすぐ採点が終わるということです。実際にタブレットで試験を午前中に行い，このような形で解答情報が出るのですが，それをすぐにプリンターで出力し，午後の面接試験，口頭試問の参考資料として活用しています。こういったことは従来の形ではできなかった点であり，CBT を使ったメリットということになります。資料には，当初の問題で正解したかどうか，再チャレンジで正解したかどうか，そういった情報がリストで出力されます。



こういった CBT の仕組み，システムの概要ですが，基本的にオフラインで実施しています。なぜオンラインにしなかったのかといいますと，やはりネットワーク通信について安定を担保しようとするとそれなりにコストはかかりますし，同時にセキュリティの確保を考えますとかなり大きなコストを要するため，ちょっとこれは難しいなというところで，オンラインは選択肢から外しました。

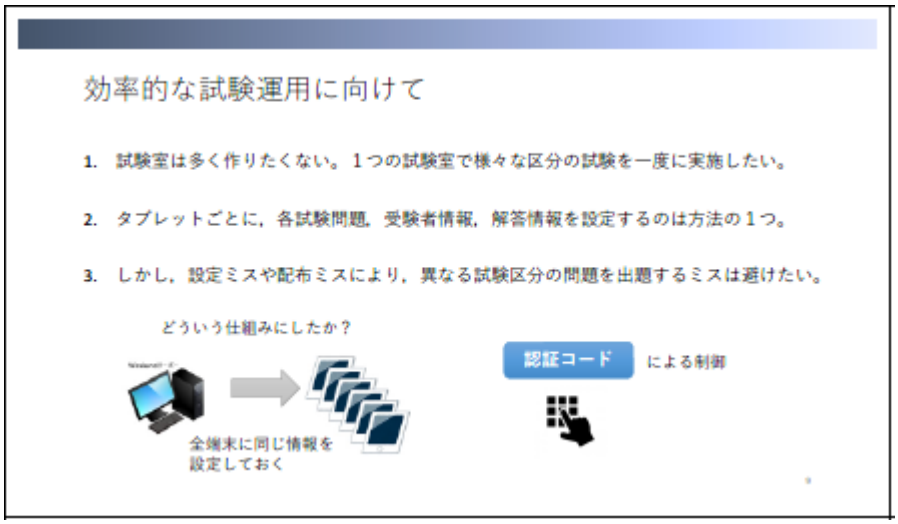
オフラインでタブレットにした訳は，タブレットであれば試験室などの条件の制約を受けず，通信経路などから問題が流出するリスクを避けられるためです。ただ，全てのタブレットに，試験に必要な情報，例えば受験者情報や設問，正解の情報を事前に設定する必要があります。仕組みとしては，試験管理や受験者管理の管理システムは PC を，CBT アプリはタブレットを使っています。

こちらはスライドのみの情報になります。タブレット画面のイメージといいましょうか，一例です。数学であれば，選択肢の中から選んだり，センター試験や共通テストのように数値を入れたりします。実は，佐賀大学で開発した当初は選択肢のみでしたが，九工大さんがこのように入力させるという機能を追加したため，今はわれわれもこの機能を使っているところです。

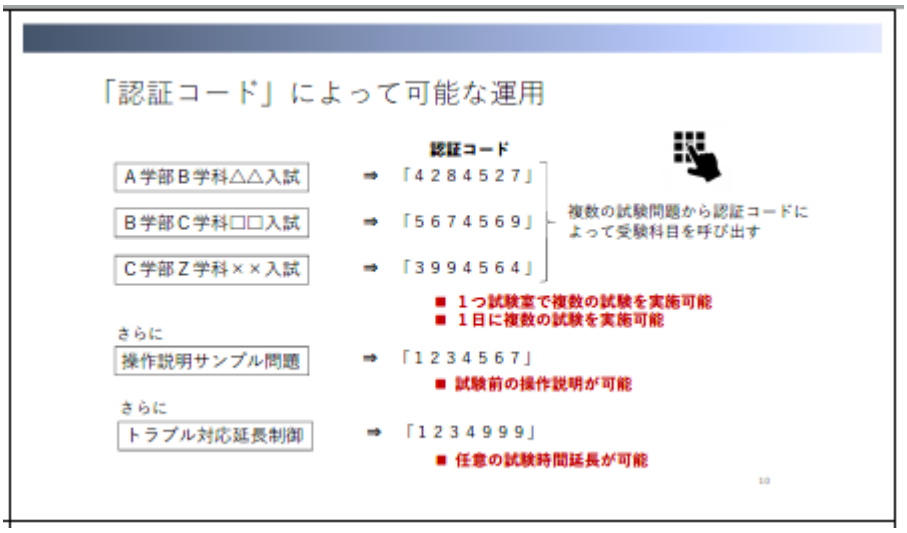
こちらは管理システムの画面です。科目に関する編集画面や選択肢を設ける際の画面ですが，あまりシステムに詳しくなくても試験問題を管理できる仕組みになっています。

タブレットの管理は, このようなラックで管理していて, 1 つに 40 台ぐらい入ります。このパソコンからここにあるタブレットに情報を一括送信するという形です。タブレット自体は 200 程度あるのですが, 手作業でできる範囲の量ですので, 大体, 多くても 100, こういった形で管理しています。

試験会場に運ぶ時などはタブレットを傷付けないようにするため，このような箱の中に緩衝材を入れて学内のそれぞれの教室に運んでいるというところです。



できるだけタブレットを使って試験を行う際に効率的な試験運用をしたいわけですが, やはり試験室は多くつくりたくない, 1 つの試験室でさまざまな学部の試験を一度に実施したいところです。そうした中，タブレットごとに試験問題や受験者情報，解答情報を設定するというのは一つの方法なのですが，設定ミスや配布ミスなどで異なる試験区分の問題を出題するというミスは避けたい。そこで，全てのタブレットに同じ情報を設定しておく。そして，認証コードというものにより制御する，コントロールするという仕組みにしています。



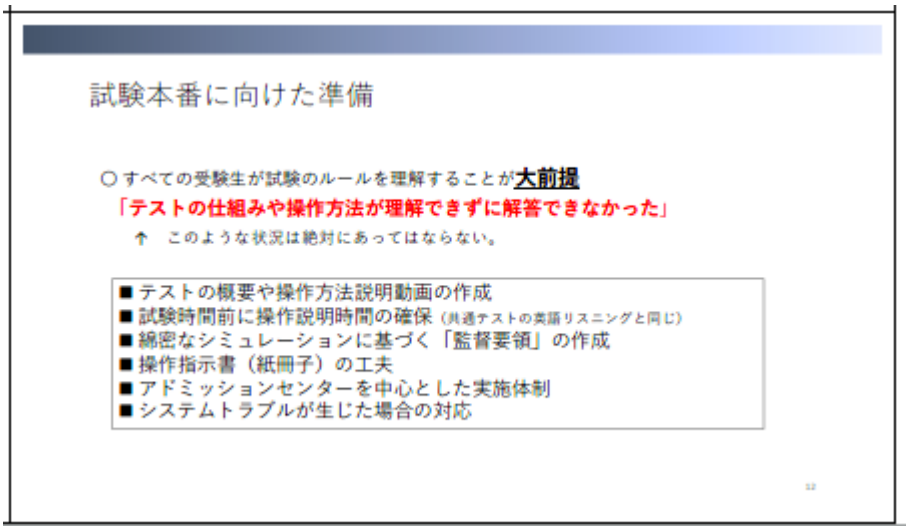
どういったイメージかといいますと，このように各学部の入試があって，この A 学部 B 学科の入試はこの認証コードですということでそれぞれ設定して，この認証コードを打ち込むことによって対象となる受験科目を呼び出します。これによって 1 つの試験室で複数の試験を実施することができますし，1 日に複数の試験を実施することが可能です。操作説明を試験前に行っていますが，そういった練習用のコードを設定することもできます。また，試験中のトラブル，予期しないトラブルがあった際の認証コードというものもあります。



トラブルにはさまざまなトラブルが考えられます。例えば，停電とか周囲の受験生が嘔吐してしまった，地震があった，など。かなり深刻な場合はすぐに試験自体が中止になるということもありますが，そこまで急を要さない場合，数分程度の試験の中断だった場合は，paper-based のテストであれば対応のノウハウはあるわけですが，タブレットを使いますとこのタブレットの中で試験時間が進んでいますので止めることができません。当初の 60 分の試験時間で終了してしまいます。

対応方法を考えた際に，全員に対して試験を中断した時間だけ延長したいということ

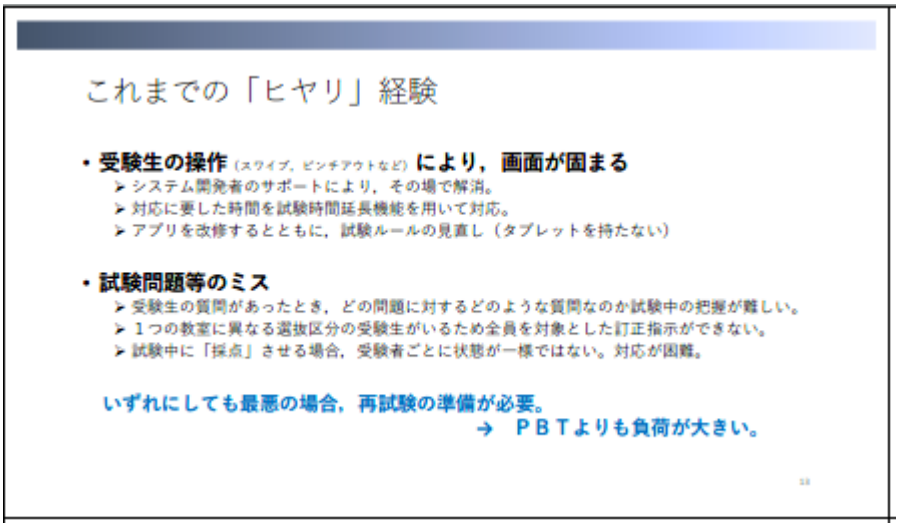
になるわけなのですが，当初の試験時間が終了した後に試験延長のための認証コードを打ち込んで，任意の時間分を例えば 3 分だったら 3 分だけ手動で時間管理をするという形で対応しています。



試験本番に向けていろいろな準備が必要になりました。その中で重要視したのは，特殊な形の基礎学力・学習力を測る試験ですので，試験のルールをきちんと受験生が理解してくれることです。受験生がテストの仕組みや操作方法が理解できずに解答できなかったということは絶対避けたかったため，テストの操作方法などの動画を作成したり，試験時間前に操作説明の時間をきちんと確保したり，監督要領についても何度もシミュレーションをして作成しました。

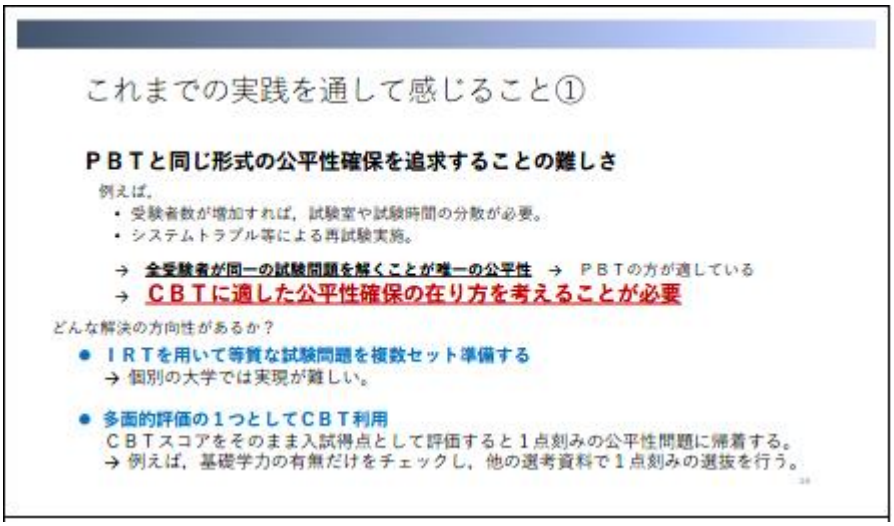
さらに，アドミッションセンターを中心として試験の実施体制をつくっています。タブレットにトラブルが生じた場合には，システムをつくった業者さんにサポートしてもらうことが可能です。

試験のイメージとしては，これは試験開始前の様子なのですが，受験生はこのように並んでいます。私は試験監督をしていますが，学部の先生たちが机間巡視という形で関わっています。試験前にスクリーン等で操作の説明を十分に行いますし，受験生には注意事項を紙で配ってそれをしっかりと読んでもらいます。このような形で 30 分間操作練習をしっかりとしてもらって，不明な点を解消して本試験に挑んでもらいます。



このような形でやっているのですが，やはりこれまでヒヤリとした経験は幾つかあります。１つ目は初年度にありました。受験生が操作する際，スワイプやピンチアウトを頻繁に行いますが，あるタブレットの画面が固まってしまいました。システム開発をされた業者さんにその場で解消してもらい，対応に要した時間を先ほどの延長機能を用いて延長して対応したというところです。翌年はアプリを改修して，試験ルールを見直して受験生にタブレットを持たせない形で対応しています。

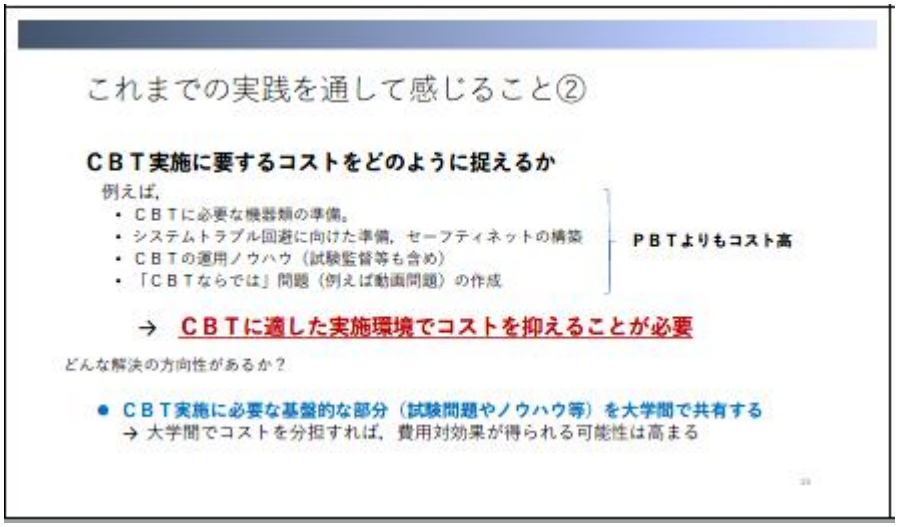
２つ目は，試験問題自体のミスです。受験生の手が挙がって質問があった時に，ペーパーテストに比べ，どの問題でどのような質問なのかを非常に把握がしづらいというところが難しい点です。また，１つの教室に異なる選抜区分の受験生がいるため，全員を対象とした訂正指示がしにくいのです。自身で採点させる仕組みを取っていますので，場合によっては採点が終わっている受験生もいます。そうなりますと対応が困難になります。これはヒヤリとしただけで終わりましたが，最悪のケースは再試験が必要になります。こういった仕組みにおいては，PBT よりも負荷が大きくなるということは言えるかなと思います。



まとめに入ります。これまでの実践を通して，ペーパーテストと同じ形式の公平性確保を追求するのは非常に難しいと思います。受験者数が増えると試験室や試験時間の分散が必要となりますし，システムにトラブルが生じますと再試験の実施が必要になります。全受験者が同一の試験問題を解くことが唯一の絶対的な公平性だということになれば，ペーパーテストのほうがより効率的だと言えます。そうなりますと CBT に適した公平性確保の在り方を考えることが必要になってくると思うわけです。

では，どのような方向性があるのかといいますと，例えば，IRT です。項目反応理論などを用いて等質な試験問題を複数セット準備することが考えられますが，個別の大学では実現が難しいなと思います。もしかすると電通大さんのような大学ではできるかもしれませんが，われわれのところでは難しいなと思います。

その他の方向性としては，多面的評価の一つとしての利用ということです。CBT の得点スコアをそのまま合算して入試得点として評価すると，結局，1 点刻みの公平性問題に帰着してしまう可能性がありますので，あくまでも基礎学力の有無のチェックに活用をとどめて，それ以外の選考資料で 1 点刻みの選抜を行うという使い方があるのかなと感じているところです。



次は，CBT 実施に要するコストです。これをどのように捉えるのかということですが，やはり機器をそろえるということはそれなりのコストが生じますし，システムトラブルを回避するための準備やセーフティネットの構築や運用ノウハウなども考えなければいけません。「CBT ならでは」問題もあります。このような点を考えると，PBT よりもかなりコストが高くなるのではないかなと思います。そうなりますと，CBT に適した実施環境でコストを抑えるということが必要になってきます。それらを考えるとやはり CBT の実施に必要な基盤部分，試験問題やノウハウを大学間で共有することがコストを抑えるための一つの方向性かなと考えています。



最後に，これは私の個人的な思いです。CBT を利用・活用しようと思っている大学が基盤的な部分の連携・共有をしていくことが，入試における CBT 活用の一つの筋道なのかなと思っています。いろいろな共有の仕方があると思うのですが，例えば，試験問題の蓄積と管理および共有です。この場合は，試験問題は恐らく非公開になると思いますが，このようなものをイメージしています。

例えば，中位の学力層を識別するテストを実施したい，トラブル発生時の再試験用に等質の問題セットが欲しい，少ない問題でアダプティブな適応型の CBT を実施したいなど，各大学にはそれぞれのニーズがあるかもしれません。それに対して，共有部分をしっかりとここで管理しておいて，ニーズに応じて等化された試験問題を提供したり，少ない問題数のアダプティブなテストを提供するなど。PBT を前提とした入試からの転換の一つの在り方なのかなと思います。

もちろん試験問題の共有だけではなく，機器類や運用ノウハウなど，基盤的な部分を共有できるような仕組みがあれば，利用しようかなと思うところも増えてくるのかなと思います。

私からの報告は以上です。どうもありがとうございました。■

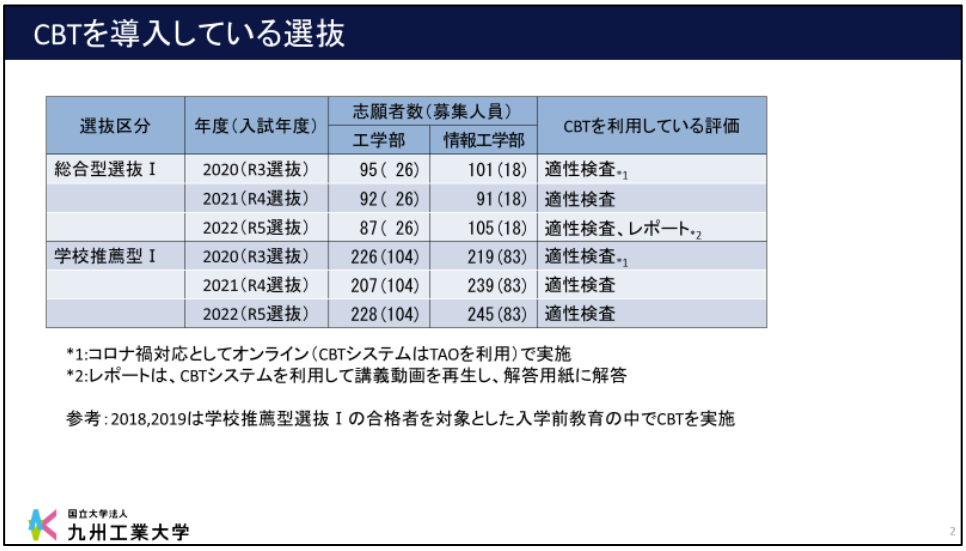
全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 2

九州工業大学の総合型選抜における CBT

■播磨　良輔（九州工業大学情報基盤課長）

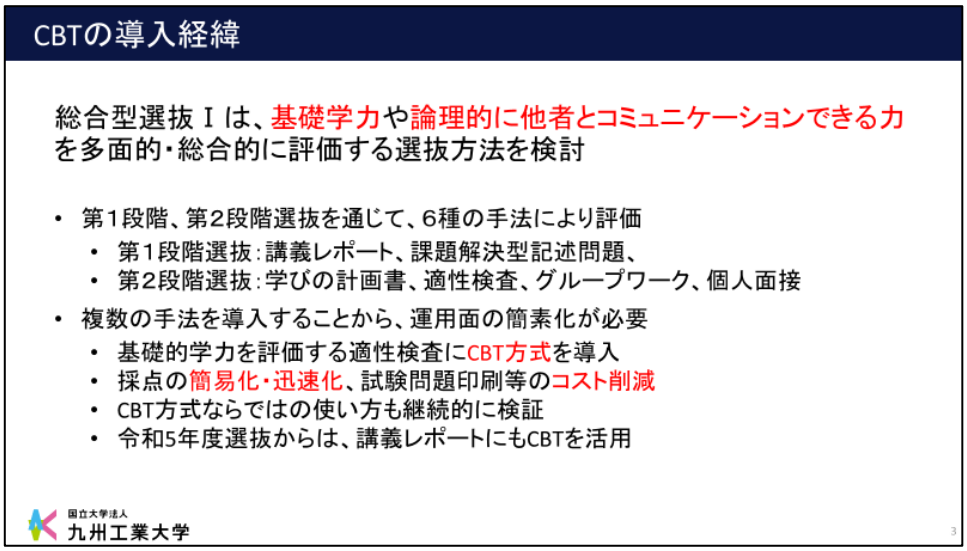
九州工業大学の播磨と申します。どうぞよろしくお願いします。役職が情報基盤課長となっていますが，今年の 3 月までは入試課長でしたので，入試課長として振り返ってお話をさせていただきたいと思います。また，佐賀大学さんと同じシステムを利用していますので，先ほどの西郡先生のお話と重複する部分も多々あるかと思いますが，ご了承願いたいと思います。





はじめに，本学が CBT を導入した年度と選抜についてです。令和 3 年度選抜から総合型選抜Ⅰと学校推薦型選抜Ⅰに導入しました。導入の規模としましては，本学は 2 学部（工学部，情報工学部）ですが，募集人員としては合わせて総合型選抜Ⅰが 44 名，学校選抜型選抜Ⅰが 187 名で，例年の志願者が約 200 名と約 400 名強となっています。

なお，令和 3 年度については，当初予定していたオフライン型の CBT ではなく，コロナ禍の緊急的な対応として，オンライン型の CBT で実施しました。本日は令和 4 年度から使っていますオフライン型の CBT について説明をさせていただきます。なお，総合選抜を導入する前に事前検証として 2018 年度・2019 年度に入学前教育の学力確認テストで CBT の試行運用を行っていますので，CBT システム自体は 2018 年度から利用しています。

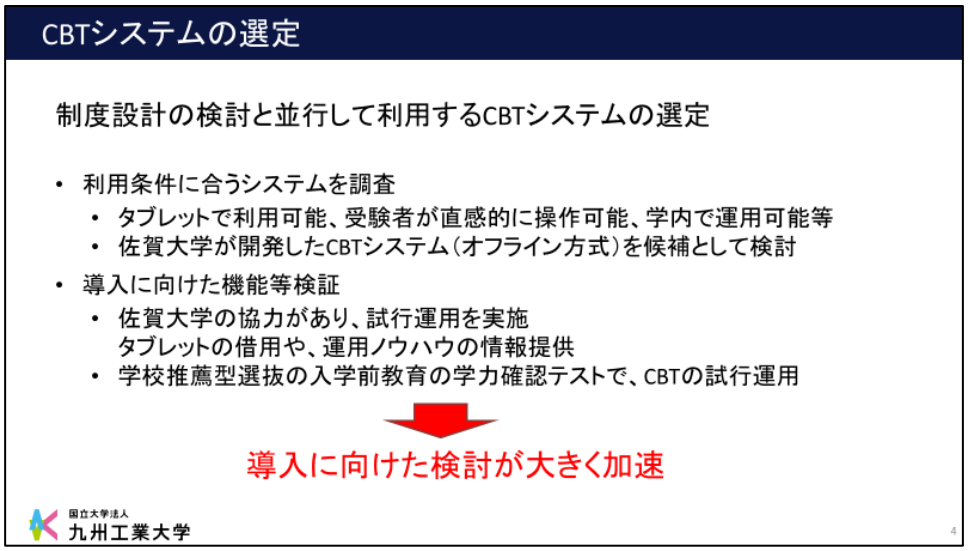


続いて，CBT の導入経緯について説明させていただきます。CBT は総合型選抜Ⅰと学校推薦型選抜Ⅰの 2 つの選抜に導入していますが，検討は総合型選抜Ⅰの制度設計から始まっています。その経緯を簡単に説明させていただきます。

まず，総合型選抜Ⅰの制度設計では，基礎学力を持ち，論理的に他者とコミュニケーションできる力を持つ学生の獲得を目指して，多面的・総合的な評価による選抜方法の検討を行いました。その結果，第 1 段階選抜として講義レポート，課題解決型記述問題，第 2 段階選抜として学びの計画書，適性検査，グループワーク，個人面接の 6 種の手法を用いることにしました。

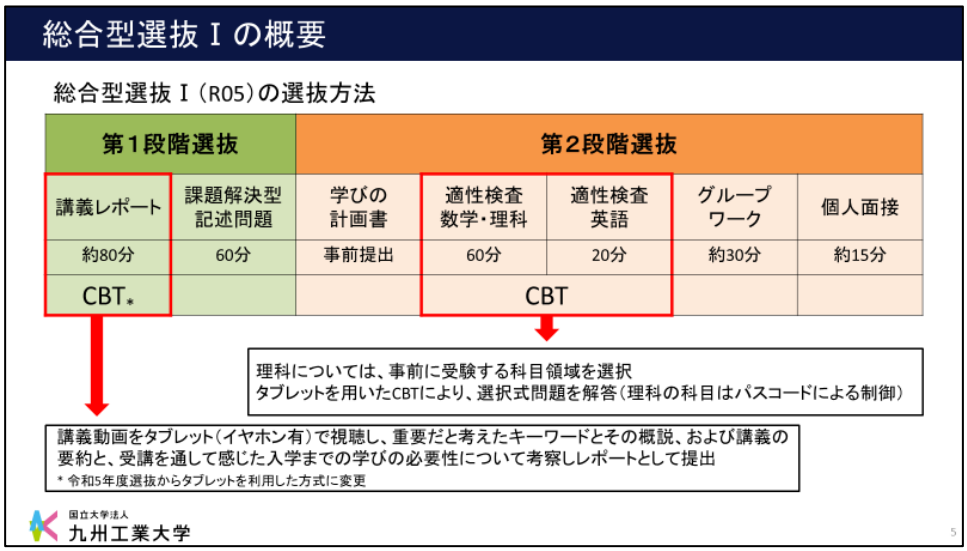
学力の 3 要素としては，思考力，判断力，表現力と主体性，多様性，協働性を重視した選抜となっています。また，一つの選抜で複数の手法を実施しますので運用面等の負担を軽減するための手段について同時に検討を行いました。その中で基礎学力を客観的に評価する適性検査は CBT 方式と親和性が高く，試験の方法からも採点の自動化や集計の迅速化，印刷コストの削減等が図れると考え，CBT 方式で実施することを決定しました。

また，導入時の検討では CBT の導入は適性検査のみでしたが，令和 5 年度選抜からは講義レポートにも CBT システムを活用しています。



CBT システムを選定するにあたり，適性検査への CBT 導入の検討と並行して，本学が考えている試験方法にマッチする CBT システムの調査を行いました。その最中，タイミングよく佐賀大学さんから CBT システムを開発していると連絡を頂きました。開発業者からも仕様等を詳しく聞かせていただいたところ，タブレットで利用でき，受験者が直感的に操作できるユーザーインターフェース，オフラインでの実施，大学職員によって管理システムを操作できるなど，本学が考えていた条件に近いことが確認できましたので，導入候補として機能検証を進めることにしました。

機能検証に当たっては，佐賀大学さんからタブレットの貸し出しや運用ノウハウの共有など，積極的にご協力を頂きました。そのおかげで，従来は紙で行っていた入学前教育の学力確認テストを CBT に置き換えて試行運用を実施することができました。一般的なデモではなく，自分たちで試行運用を行ったことで実際の試験に準じた流れが経験でき，さまざまなノウハウを得ることができました。それにより，CBT 導入の検討や実施要領等の作成など，実施に向けた準備を円滑に行うことができました。



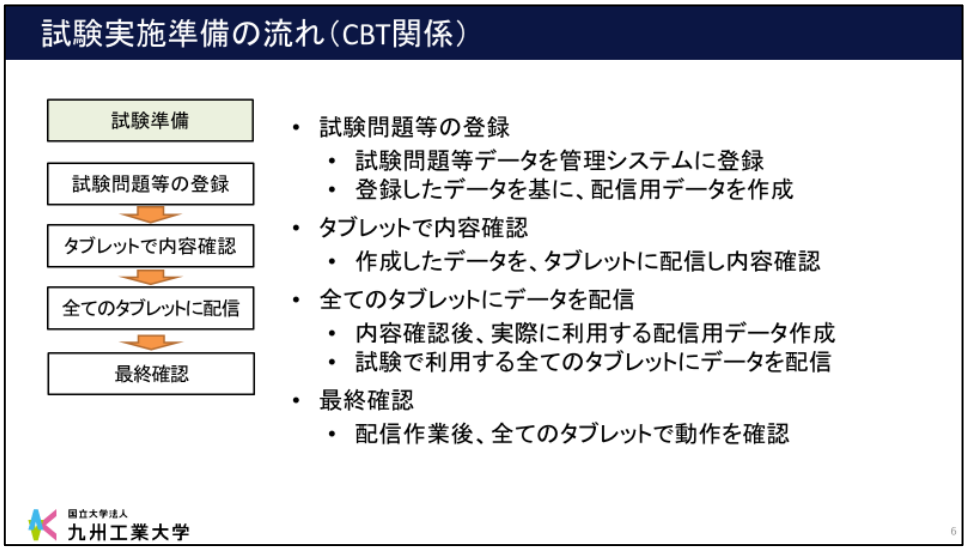
このスライドは総合型選抜Ⅰの選抜方法の概要です。先ほどの説明のとおり，総合型選抜Ⅰは 2 段階選抜方式であり，第 1 段階で講義レポートと課題解決型記述問題を，第 2 段階で学びの計画書，適性検査，グループワーク，個人面接を課しています。

適性検査は選択式問題で，数学・理科および英語の 2 つを CBT で実施しています。理科については，物理，化学，生物から受験する 1 科目を事前に選択し，試験当日は監督者が指示する各科目のパスコードのうち，自身が選択した科目のパスコードを入力することで，選択した科目を解答することができるようにしています。

タブレットの設定は全て同じで，受験科目をパスコードで制御していますので，例えば，物理と化学の受験者が同じ試験室で受験をしても問題はありませんし，タブレットを科目ごとに分ける必要もなく，受験者にひも付ける必要もありません。

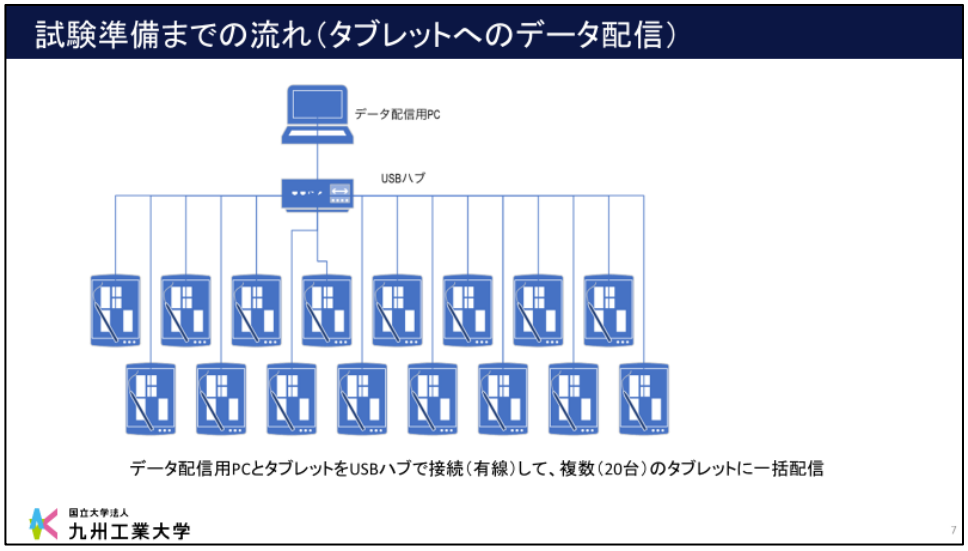
講義レポートについては，講義動画を視聴して重要だと考えたキーワードとその概説，講義の要約，及び受講して感じた入学までの学びの必要性について考察したレポートを作成してもらいます。当初は講義動画をパソコンで再生してプロジェクターに投影していましたが，スクリーンの大きさやスピーカーの位置などの条件を考えると，試験室として設定できる部屋が限られていました。また，座席の位置により不公平感が生じる懸念もあったことから，令和 5 年度選抜から CBT システムで動画を再生する方式に変更しました。

なお，講義レポートの動画は実際の講義をイメージしていますので，再生を止めたり巻き戻したりはできないようにしています。音声については，イヤホンを配付し，イヤホンを装着して聞いてもらいます。イメージとしては共通テストのリスニングに近い形になっています。また，解答はレポート形式となっていますので，解答用紙は紙を使っています。

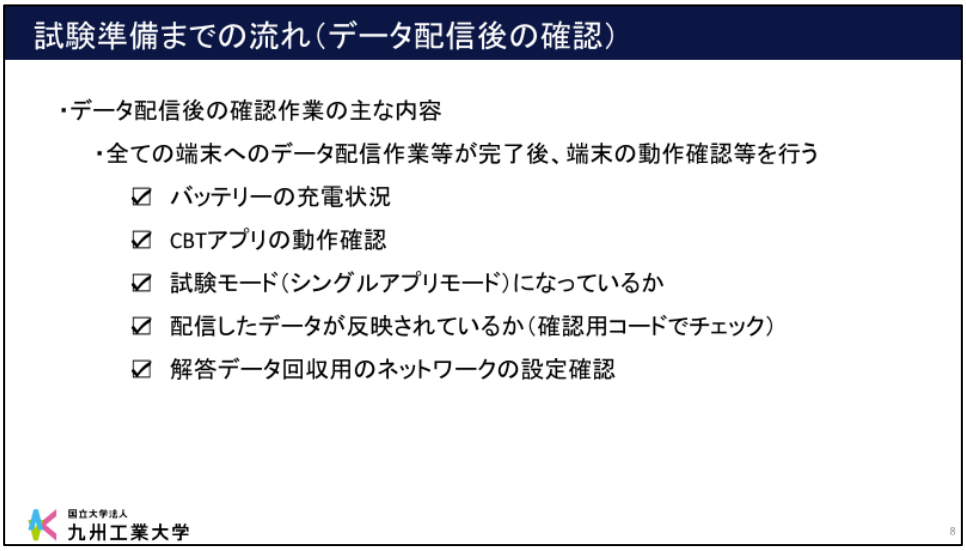


続いて，CBT システムに関する試験実施準備の流れについて説明します。試験実施の準備として，まず CBT 管理システムに試験問題データを登録します。その後，試験時間や配点などの試験実施に必要な設定を行います。設定が完了したら，検証のためにいっ

たん一部のタブレットにデータを配信して，出題者および入試課職員が確認を行います。主に問題の内容確認やタブレットで見た際の体裁の確認，試験時間の測定などのチェックを行います。問題がなければ，志願者データの登録後，実際の試験で使用する配信用データを作成し，試験で使用する全てのタブレットにデータを配信します。データ配信が完了したら全てのタブレットで最終動作確認を行います。



こちらのスライドは，タブレットに試験データを配信する際のイメージ図です。データの配信にあたり，データ配信用 PC とタブレットを有線で接続する必要があるため，複数台接続できる USB ハブを利用して 20 台ずつ処理を行います。例えば，100 台に配信が必要な場合は同じ作業を 5 回行う必要があります。

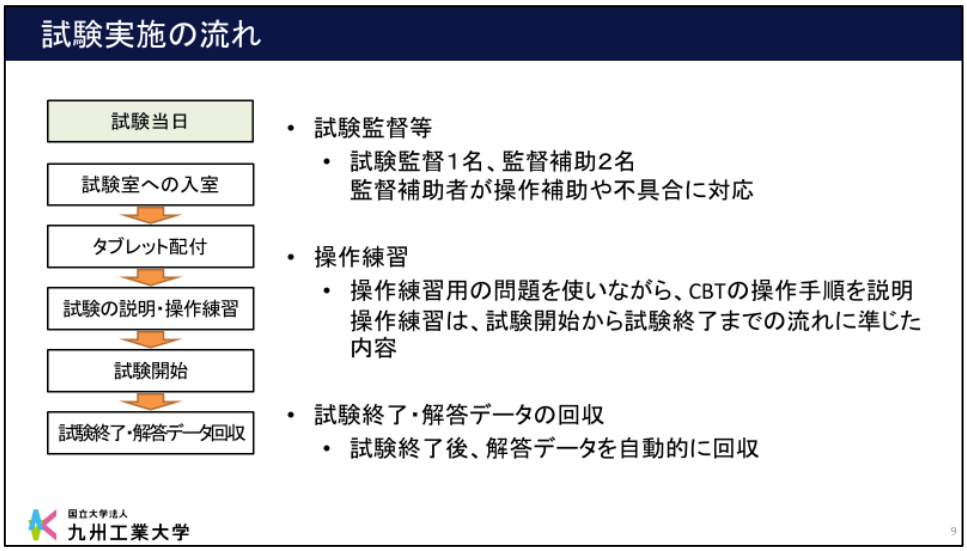


こちらのスライドは 6 枚目のスライドで説明した，データ配信後の最終確認作業の主な内容となっています。定期的に充電はしていますが，故障などもなく正常に充電できているかを確認するために，バッテリー残量等の確認を行います。

CBT アプリの動作確認については，CBT アプリは定期的にバージョンアップしていま

すので，最新のバージョンであるか，また，アプリが起動するかなどの確認を行います。試験中の誤操作等により他のアプリの起動を防止するため，CBT アプリしか起動できないように設定していますので，この設定がうまく反映されているかどうかの確認を行います。試験実施に関する最新版のデータが間違いなく配信できているのかを確認コードによって確認を行います。解答データ回収用のネットワークの設定について，設定したアクセスポイントに接続できるかの確認を行います。

これらの最終確認作業のタイミングは試験直前であり，限られた時間で行う必要があるので，入試課職員が手分けをして行っています。この辺りは CBT ならではの人的なコストがかなりかかっている部分となります。



続いて，試験当日の流れの中で通常の試験と異なる部分について説明します。試験監督者の体制は，試験監督者が 1 名，監督補助者を 2 名です。タブレットの操作方法や不具合発生時に対応するため，監督補助者には入試課職員等が入っています。試験室に入室してタブレットを配付した後，操作練習用に作成している操作練習用問題を使って試験開始から試験終了までの流れに準じて CBT の操作手順を説明しながら，受験者にも実際にタブレットの操作を行ってもらいます。この時点で操作方法等の質問があれば監督補助者が対応し，機器の不具合があればタブレットの交換などを行います。

なお，タブレットの操作は落下等防止のため，手に持たず，机の上に置いたままで操作を行うようにしています。これらの事前の操作練習はトラブルを未然に防ぐために重要な手順だと考えています。試験が終了しましたら，通常は答案を回収しますが，適性検査の解答データは試験終了後にシステムで自動的に回収しますので，タブレットは答案回収のように試験終了時に回収する必要はありません。



こちらのスライドは解答データ回収のイメージです。実際に解答データは Wi-Fi を使って各タブレットから事前に設定している管理端末にデータがアップロードされます。これによって試験終了後，即時に結果を確認することができます。なお，Wi-Fi 接続に関しては試験時のみルーターを立ち上げて外部との通信はできないように設定しています。導入当初はタブレットを回収して有線で接続して解答データを回収していましたが，現在の方式に変更したことで解答データ回収にかかる時間を大幅に削減することができています。



機器の種類	台数	備考
タブレット	240台	iPad第6～7世代
USBポートハブ	11台	データ配信・充電兼用（20台接続）
タブレットラック	6台	タブレット40台収納
MacBook	2台	データ連携・iPad設定用
WindowsPC	1台	システム管理用
WiFiルーター	2台	解答データ収集用

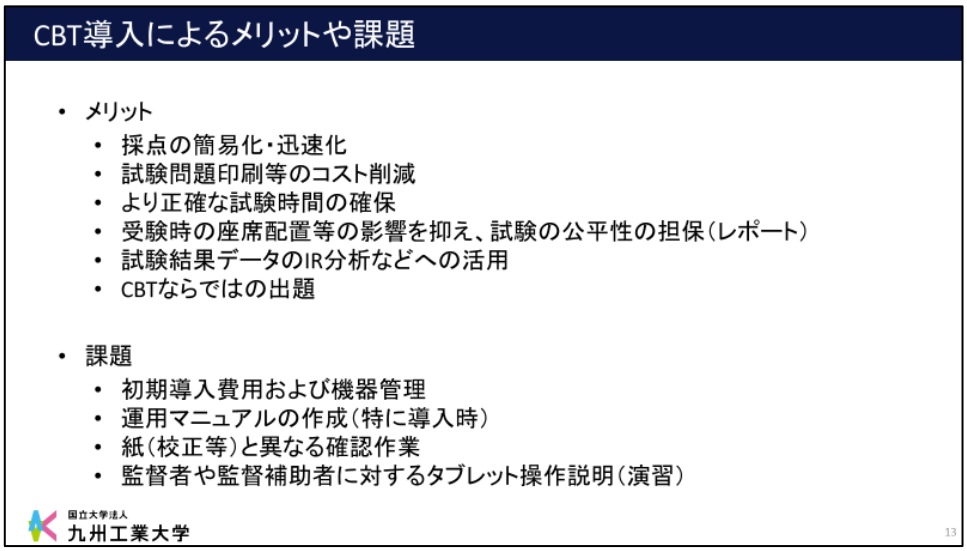
こちらのスライドは本学が保有している CBT に関する機器類についてです。タブレットに関しましては，iPad が 240 台あります。段階的に購入を行いましたので，複数の世代が混在していますが，試験の運用には問題はありません。

USB ポートハブが 11 台。このハブでデータ配信や充電を行っています。MacBook が 2 台。こちらは iPad へのデータ配信やタブレットを管理するためのものとなっています。Windows の PC が 1 台。こちらは CBT の管理システム用の PC となっています。Wi-Fi

ルーターが 2 台。こちらは先ほど説明しました解答データ回収用に使っているものです。以上の機器で本学の CBT を実施しています。なお，機器もいろいろとありますので，機器の管理にもかなり人手がかかっています。今後，管理の集中化などにより少しでもコストを減らそうと検討を行っています。



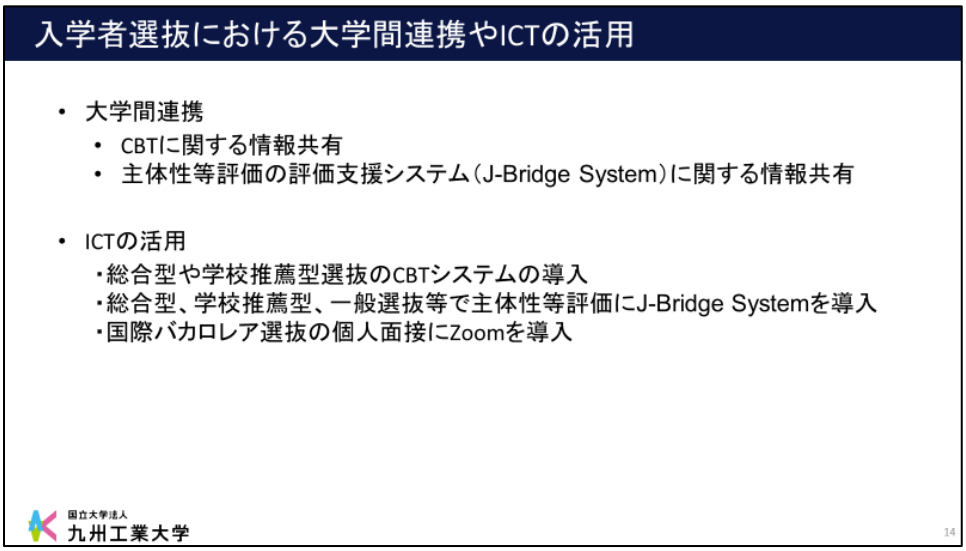
こちらは，ラックや実際にハブに接続して収納している写真です。ラックにはタブレットを 40 台収納できますので，このようなラックが計 6 台あります。また，タブレットは放電状態が続くと故障の原因になりますので，タイマー付きのテーブルタップを使って定期的に充電を行っています。



こちらは，ここまで説明した CBT 導入によるメリットや課題についてのまとめです。CBT のメリットとして感じていますのは，採点の簡易化・迅速化，試験問題印刷等のコストの削減です。システムで試験時間を管理するため，正確な試験時間が確保できます。主に講義レポートに関しては，受験時の座席配置の影響を抑えたことによる試験の公平性が担保できます。また，試験結果データの IR 分析などの活用があります。

課題としては，比較的，導入時の課題が多いのですが，初期導入費用や機器の維持管

理コストです。運用マニュアルの作成，CBT ならではの機器の確認作業，それから，監督者や監督補助者に対するタブレットの操作説明が必要となります。導入前は受験者がタブレットをうまく操作できるかを心配していましたが，こちらについては実際にやってみると特に心配する必要もなく，スムーズに操作をしていました。



最後に，CBT とは少し離れるところもありますが，大学間の連携や ICT の活用の状況を説明します。大学間の連携としましては，佐賀大学さんと CBT に関する情報共有や主体性等評価の評価支援システム，J-Bridge System に関する情報共有などを行っています。

これまでの経験からいいますと，実施時のノウハウや課題を共有することによるコストの削減など，さまざまなメリットを感じていますので，今後さらに連携や共有を広げていけば，さらなるコストの削減やよりよい環境整備につながるのではないかと考えています。

また，ICT の活用としては，総合型選抜や学校推薦型選抜への CBT システムの導入のほか，総合型選抜や学校推薦型，一般選抜での主体性等評価システムの J-Bridge System システムの導入，国際バカロレア選抜の個人面接への Zoom の導入などを行っています。これによる新たな課題もありますが，紙の書類やコピーなどの作業の大幅な削減など，業務の効率化に寄与していますし，受験生の利便性向上などの効果も生まれています。

簡単ですが，本日の説明は以上となります。ご清聴いただきありがとうございました。

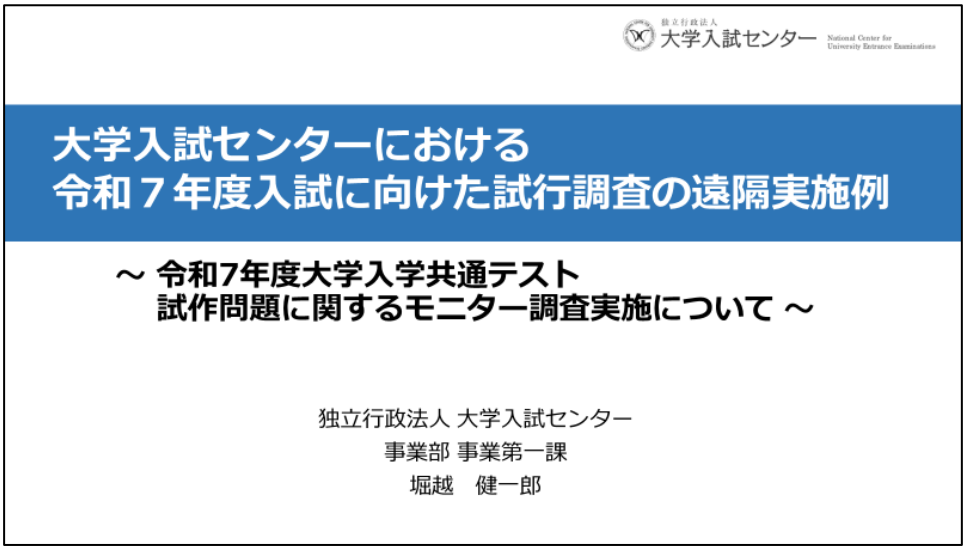
■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 3

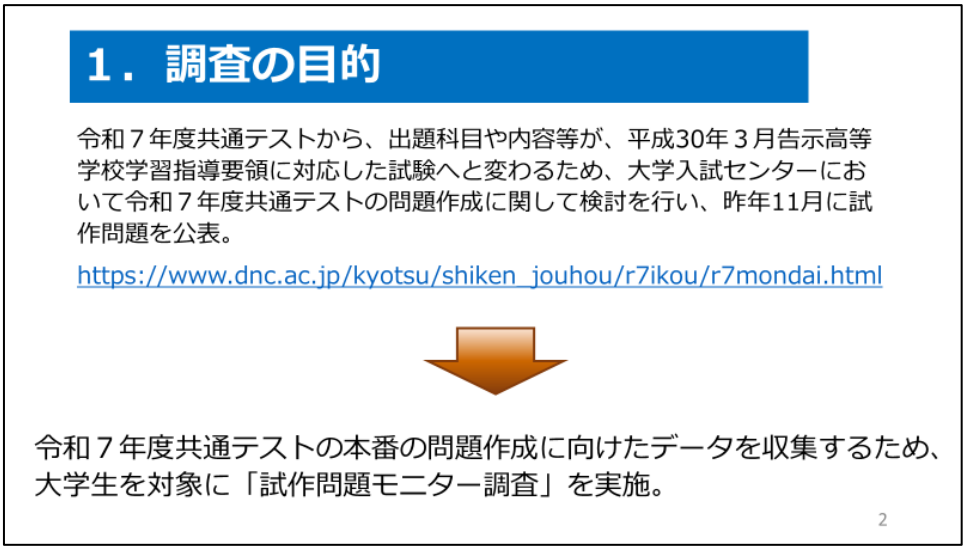
大学入試センターにおける令和 7 年度入試に向けた試行調査の遠隔実施事例

■堀越　健一郎（大学入試センター事業部事業第一課試験実施第三係長）

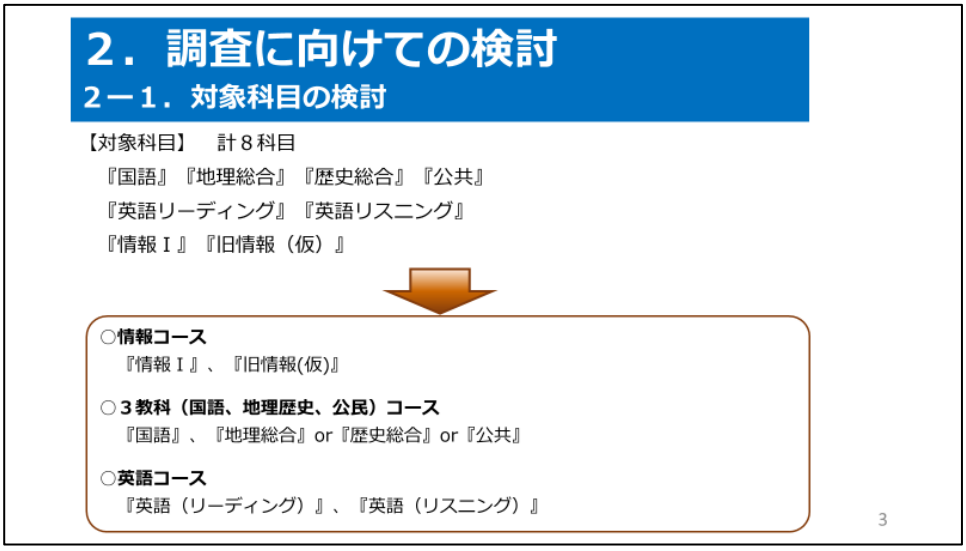
大学入試センター事業部事業第一課の堀越と申します。私からは，「大学入試センターにおける令和 7 年度入試に向けた試行調査の遠隔実施例」としまして，昨年 11 月に実施した令和 7 年度共通テスト試作問題に関するモニター調査の実施について報告をします。



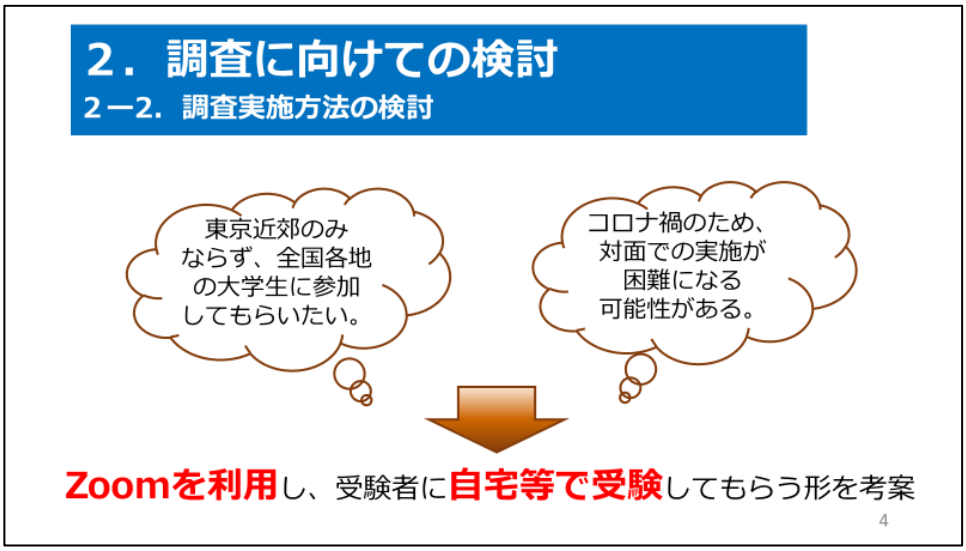
実施形式自体は問題冊子も解答用紙も紙を使用した PBT 形式でしたので，CBT で実施をしたということではありませんが，先ほどご発表のありました九州工業大学さんにおいて，コロナ禍のため自宅での受験により実施された令和 3 年度入試の事例を参考にさせていただき，オンラインを活用して実施しました。どのような点を参考にしたかということと，また，私どもの調査でオンラインを活用した際に見られた課題などを少しでも共有できたらと思っています。



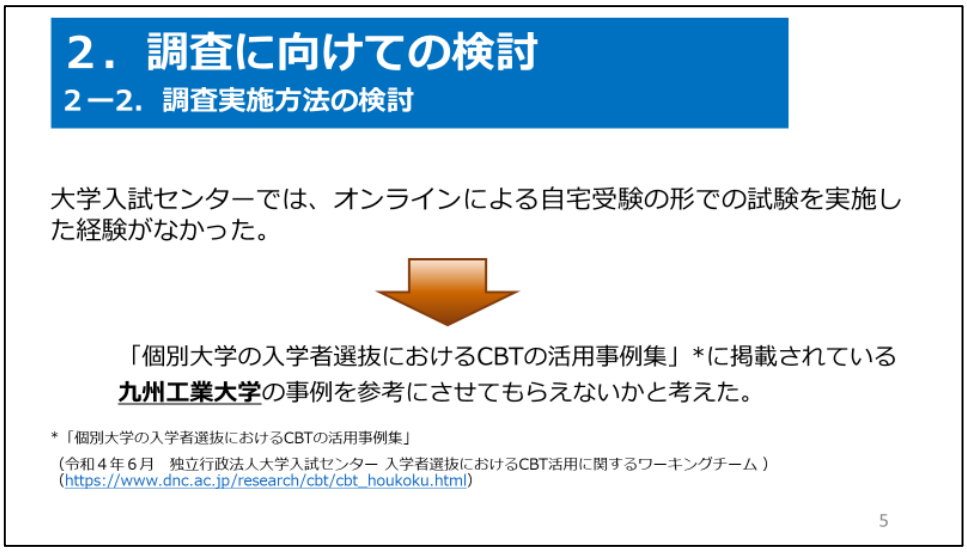
まず初めに，この調査の目的についてです。大学入学共通テストは令和 7 年度試験から新しい学習指導要領に対応したものとなります。出題科目や内容などが大きく変わりますので, 大学入試センターでは令和 7 年度共通テストの問題作成に関して検討を行い，昨年 11 月に試作問題を公表しました。今回，ご説明するモニター調査は，この試作問題を使用して，令和 7 年度共通テストの本番の問題作成に向けたデータを収集するために大学生を対象として実施したものです。



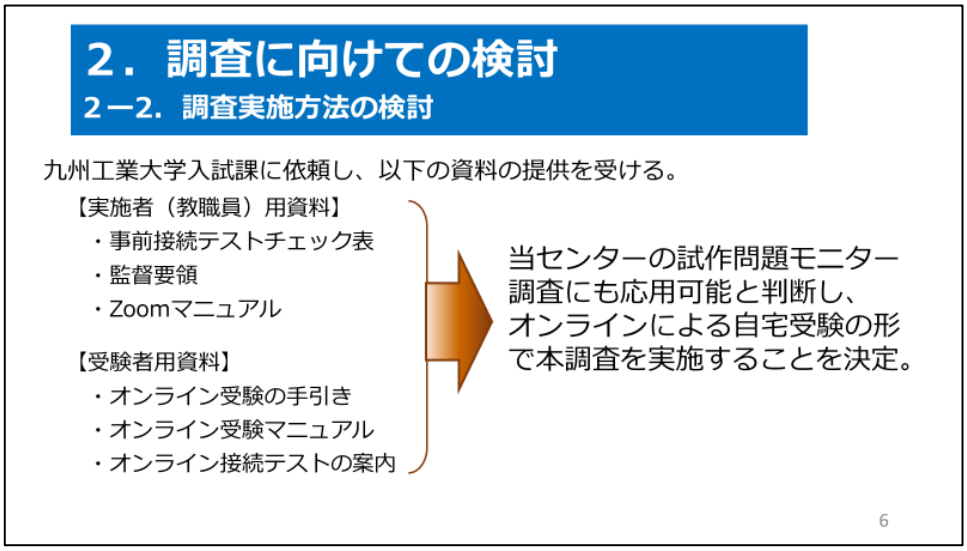
今回のモニター調査では 3 つのコースに分けて受験者を募りました。それぞれのコースにおける受験科目数は 2 科目です。なお，情報コースと 3 教科コースは，昨年 11 月中旬頃，3 日間に分散して実施をしましたが，英語コースについては 12 月上旬に実施しました。実施方法につきましては，これら全コースともに同じ形ですので，今回の説明では，11 月中旬頃に行った情報コースと 3 教科コースを例にして説明をします。



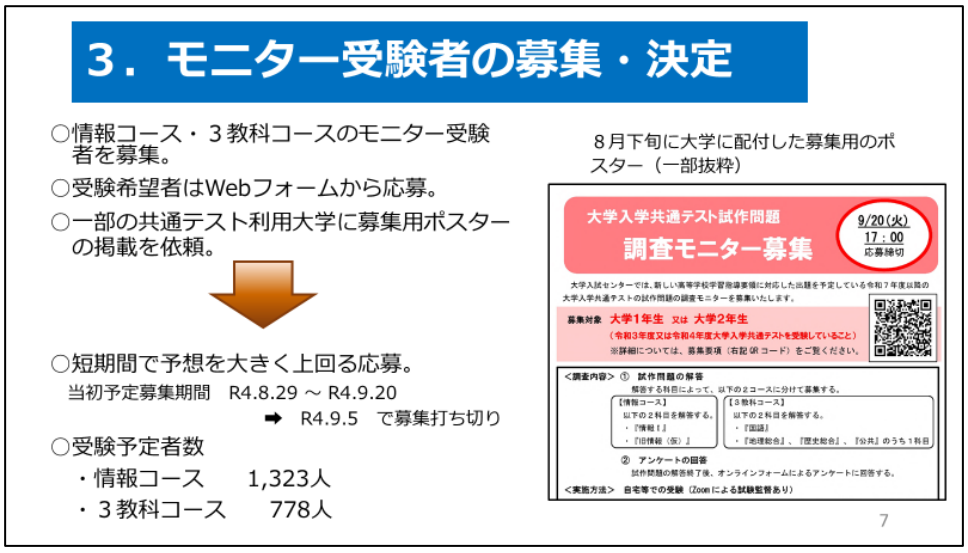
続いて，調査実施方法の検討についてです。検討を始めた当初は東京近郊の大学生を対象にどこか大きな会場を手配して対面で行おうと考えていました。しかし，今回の調査では，特定の地域に偏らずに多くの大学生に参加していただきたく，また，コロナ禍にあって，感染状況によっては対面での実施が困難になる可能性も否定できませんでしたので, Zoom を利用して受験者には自宅などで受験をしてもらう形で実施できないかと考えました。



ただ，われわれにはオンラインによる自宅受験の実施経験がありませんでしたので，令和 4 年 6 月に当センターで公表した「個別大学の入学者選抜における CBT の活用事例集」に掲載されており，われわれがイメージしていた実施方法と近かった，九州工業大学さんの令和 3 年度に行われた自宅受験での事例を参考にさせていただきたいと考えました。

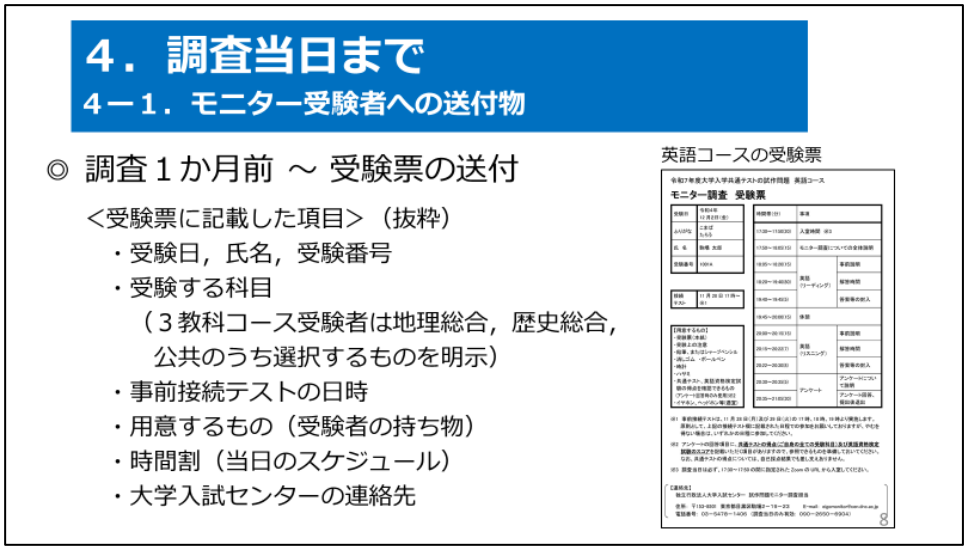


参考にさせていただくにあたり，より詳細な情報を把握したかったため，九州工業大学さんより実施者用のマニュアルや受験者向けのマニュアルなどの資料をご提供いただきました。頂いた資料は大変分かりやすく，さらに非常に丁寧に作成されていましたので，われわれのモニター調査にもこれで十分応用できると判断し，オンラインによる自宅受験という形式でモニター調査を実施することとしました。

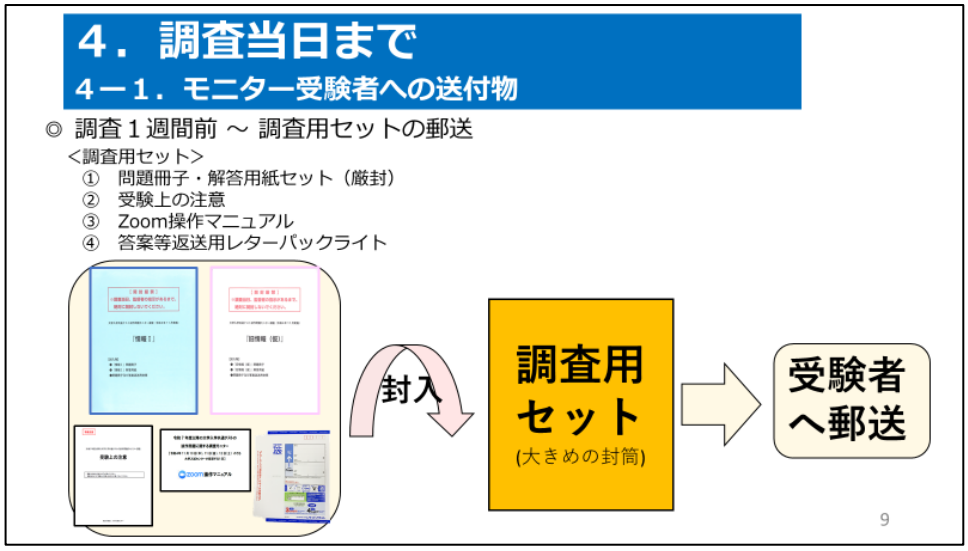


それでは，われわれセンターがどのように実施に向けて具体的な準備を行ったのかを説明いたします。

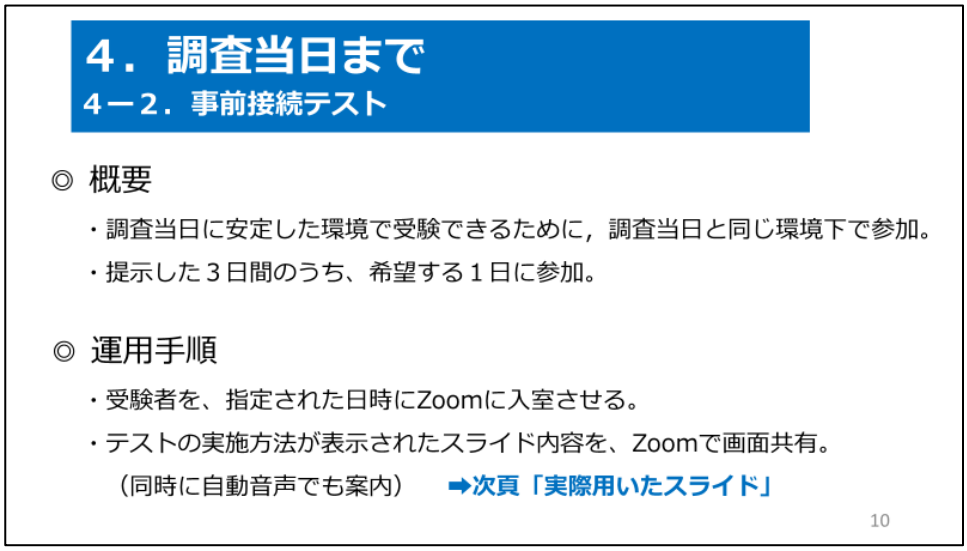
受験者はウェブ上の申し込みフォームにより募集しました。共通テスト利用大学に周知にご協力いただいたおかげもあって，短期間で当初の想定を大きく上回る受験者から応募がありました。最終的には，情報コースで 1,323 人，そして，3 教科コースで 778 人，合計でおおよそ 2,100 人の方に受験をお願いすることになりました。



受験者が確定した後の調査当日までの準備についてです。まず，調査のおおよそ 1 カ月前に受験票を送付しました。受験票には受験日や氏名，受験番号はもちろん，時間割，調査当日に用意をするものなど，最低限把握してほしい内容を記載しました。



次に，調査の 1 週間前までに問題冊子や解答用紙，それから，受験上の注意，Zoom 操作マニュアル，答案等返送用のレターパックなど，調査当日に使用するものを同封した「調査用セット」を受験者に送付しました。事前の送付物についても九州工業大学さんの事例を参考に検討しました。



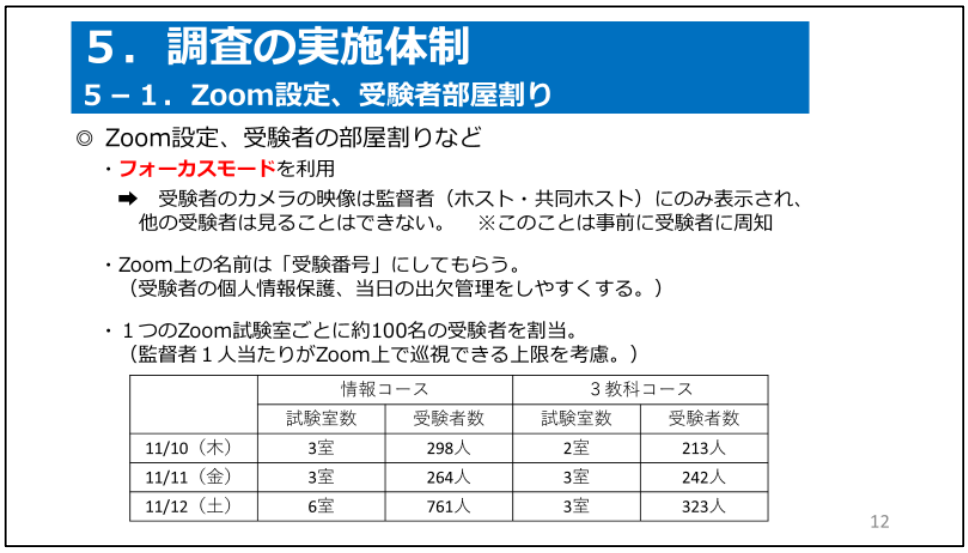
次に事前接続テストについてです。これも九州工業大学さんの事例を踏まえて実施することとしました。調査当日に安定した環境で Zoom 受験者に接続してもらうため，事前接続テストとして調査のおおよそ 1 週間程度前に Zoom への接続を確認してもらいました。調査対象日として 3 日間を用意して，受験者にはそのうち希望する 1 日のみに出席してもらいました。運用手順ですが，まず，受験者には事前にセンターからメールで送付された事前接続テスト用の Zoom の URL から入室してもらいます。入室後，受験者は画面上に表示された実施方法に従って自分で確認するための作業を行います。



こちらが，実際に事前接続テスト中に画面に表示されていたものです。このスライドが表示されている最中は常にこのスライドの内容に沿った説明音声が流れています。まずこの音声が聞き取れているのかということ，そして，調査当日と同じ環境で出席しているのかということを受験者に確認します。次に，調査当日の Zoom についての注意事項を読んでもらいます。それらの作業が全て終了しましたら，最後に，出席したことなどを確認するための参加確認回答フォームにアクセスしてもらい，それを回答してもら

った後に終了ということになります。

この方法でおおむねスムーズに実施をすることができましたが，1 点，苦慮したことがありました。接続テスト中に不具合などがあった場合には手を挙げるボタンで知らせることとしていたのですが，3 日間，各日ともに 100 名程度の手が挙がってしまいました。そのほとんどは顔と手元を同時にカメラに映すというセンターの指示に対応ができない，つまり，顔か手元かどちらかしか映すことができないというものでした。手を挙げた受験者にはブレイクアウトルーム機能を使用して別室に移動をしてもらい，そこで 1 人 1 人カメラ位置を指示するなど，個別に対応することで何とか対応ができました。



5．調査の実施体制

5－1．Zoom設定、受験者部屋割り

◎ Zoom設定、受験者の部屋割りなど

・フォーカスモードを利用

➡ 受験者のカメラの映像は監督者（ホスト・共同ホスト）にのみ表示され、他の受験者は見ることはできない。 ※このことは事前に受験者に周知

・Zoom上の名前は「受験番号」にしてもらう。
（受験者の個人情報保護、当日の出欠管理をしやすくする。）

・１つのZoom試験室ごとに約100名の受験者を割当。
（監督者１人当たりがZoom上で巡視できる上限を考慮。）

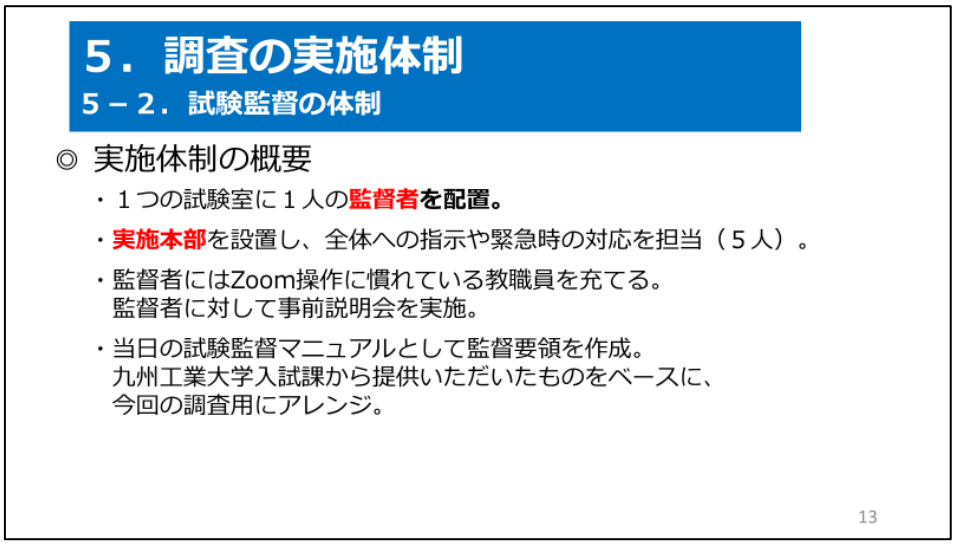
	情報コース		3教科コース	
	試験室数	受験者数	試験室数	受験者数
11/10（木）	3室	298人	2室	213人
11/11（金）	3室	264人	3室	242人
11/12（土）	6室	761人	3室	323人

12

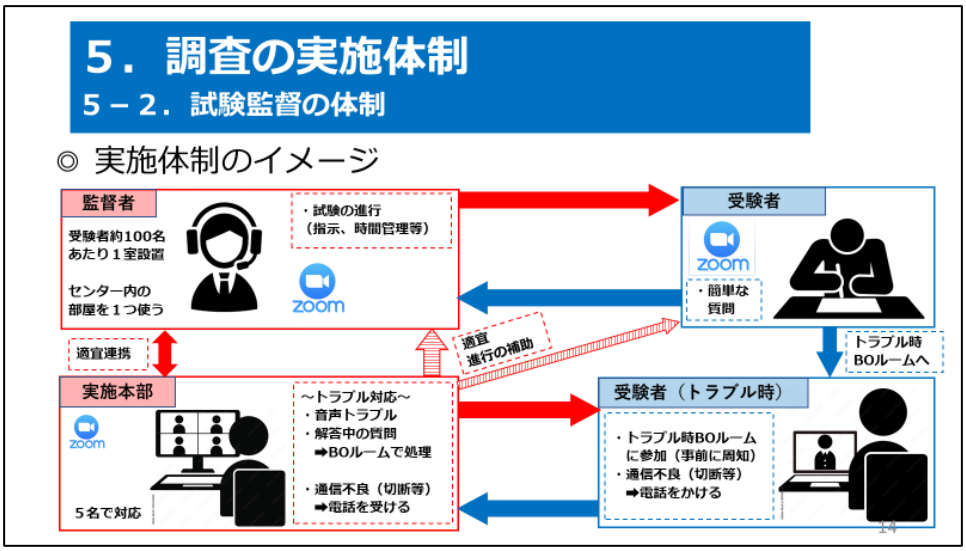
続きまして，調査当日の実施体制についてです。まず，Zoom の設定や受験者の部屋割について，今回はプライバシー保護の観点から，Zoom のフォーカスモードという機能を使用しました。これは受験者のカメラの映像は監督者にのみ表示がされて，他の受験者は見ることができないという機能です。この機能を使用することは受験者に事前に知らせ，安心して受験していただけるようにしました。

Zoom 上における受験者の名前は受験番号に統一しました。これによって受験者の個人情報を保護できるとともに実施においても当日の出欠管理がしやすくなったと考えています。また，監督者 1 人当たりが Zoom 上で巡視できる上限を考慮して，一つの Zoom 試験室ごとの受験者数を約 100 名程度としました。

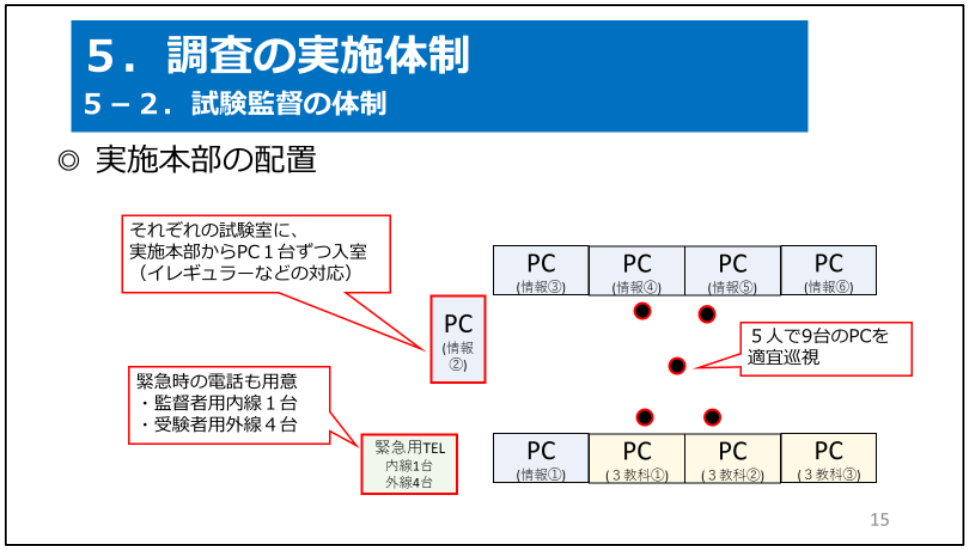
なお，調査日ごとの情報コースと 3 教科コースの試験室数，それから受験者数は表のとおりです。



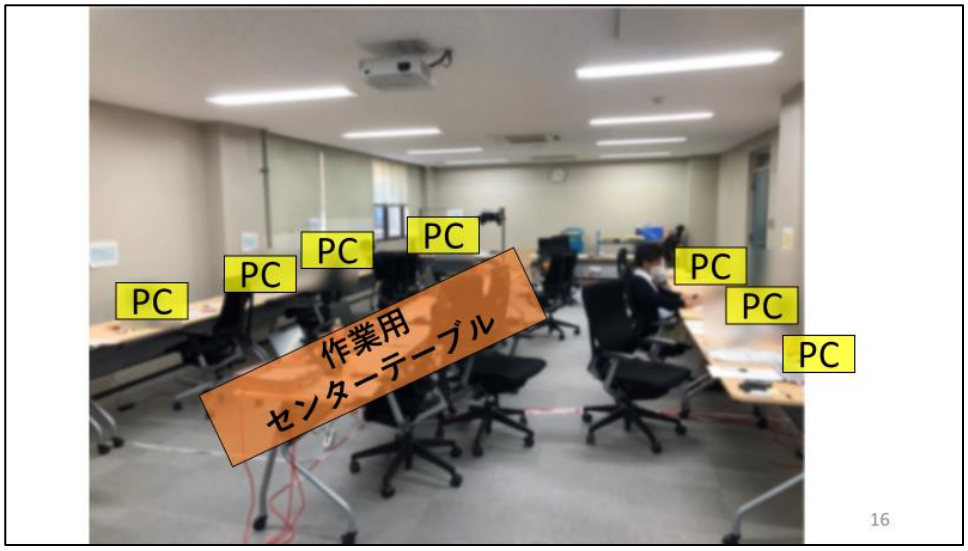
次に，試験監督の体制についてです。まず体制の概要ですが，各試験室に監督者を 1 人配置しました。各試験室への統一的な指示をするため実施本部を置き，緊急時の対応要員として職員 5 人を配置しました。監督者用に監督要領も作成して事前説明会等で周知をしました。



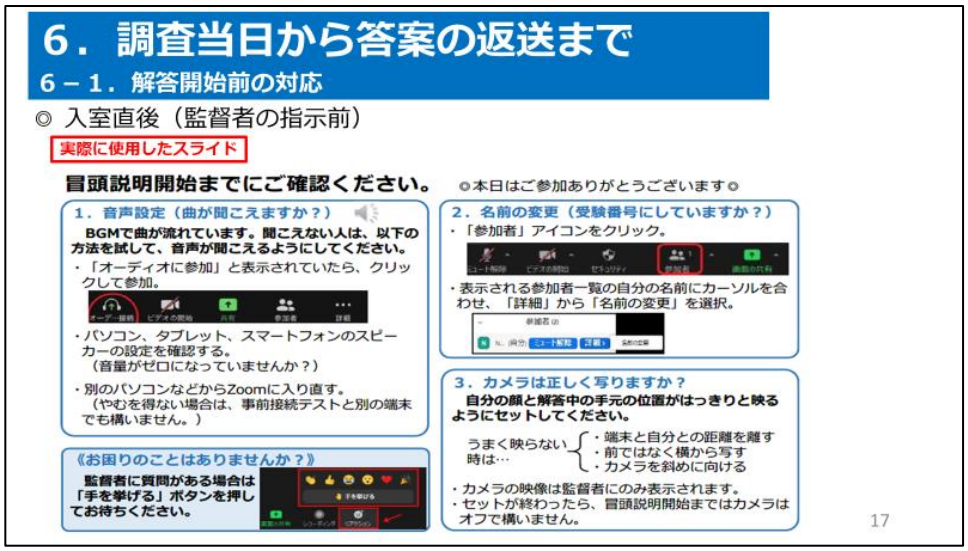
こちらが調査当日の実施体制のイメージです。監督者はこの試験室に入り，受験者への指示，試験時間の管理や試験の進行を行います。そして，実施本部に試験室分のパソコンを用意して，監督者と連携をしながら全ての試験室の状況を把握できるようにしました。そして，受験者からの質問があった場合，簡単な質問であれば監督者がその場で回答しますが，短時間での対応が難しい場合には，試験室の進行を止めないために実施本部の職員がこの受験者にアプローチをして，この受験者をブレイクアウトルームに誘導をして個別に対応するという形式で対応をしました。



こちらが実施本部の配置図です。このようにコの字でテーブルを配置して，そこに各試験室に対応したパソコンを 1 台ずつ配置しました。実施本部の職員は部屋中央で，随時，各試験室の状況を確認していました。

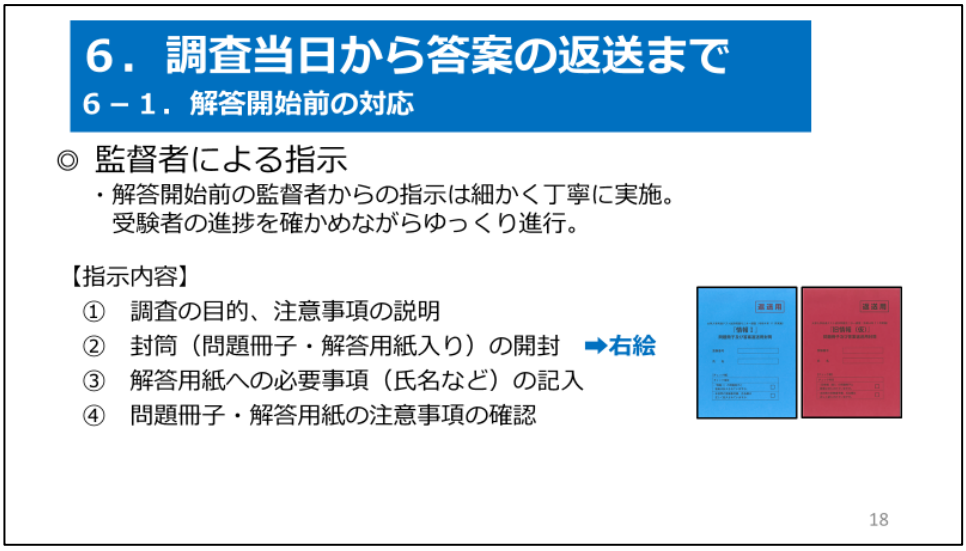


こちらが実際の写真です。



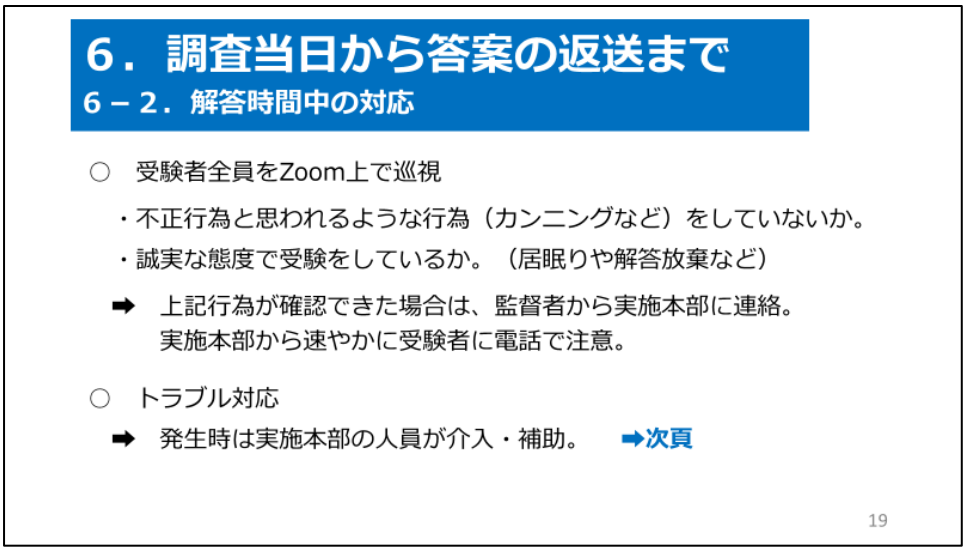
続いて，調査当日から答案の返送までの実施方法について説明します。受験者はセンターが事前に送付した Zoom の URL から試験室に入室します。試験室では監督者の指示が始まるまでスライドにあるように「事前に確認してほしいこと」,「やってほしいこと」を画面共有で表示しておきました。

実はこの画面共有ですが，調査の 3 日目からこれを導入しました。最初の 1 日目と 2 日目は監督者の指示によって音声確認や名前の変更をしてもらっていたのですが，思ったより多くの受験者から「音声が聞こえない」「名前の変更方法が分からない」といった申し出があったため，2 日目の調査終了後に急遽このスライドを作成して，3 日目からこちらを導入しました。このスライドのおかげで 3 日目は受験者からの申し出もほとんどなく，非常にスムーズに開始前の準備を行うことができました。



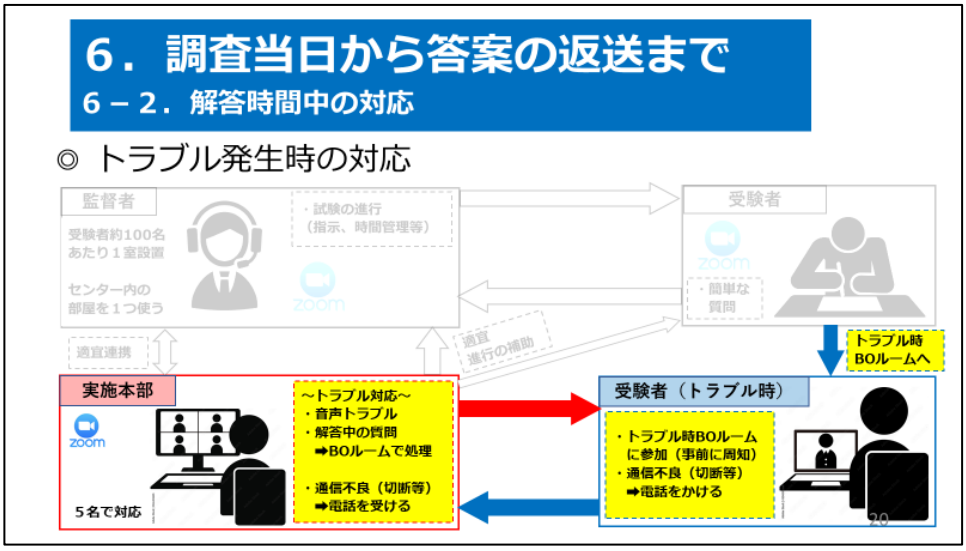
次に，解答開始までの監督者の指示ですが，オンラインによる自宅受験という性質上，やはり受験者の様子を十分に確認することはできないため，指示は細かく丁寧に行うようにしました。今回のモニター調査は，事前に送付した封筒をはさみで開封して問題冊子や解答用紙を取り出したり，解答終了後に返送用の封筒に答案などを封入してもらう

など，対面による受験ではなかなか発生しない作業を多くお願いをしましたので，作業の一つ一つで区切って監督者から受験者に進捗を確認するという行為を多く入れるように工夫しました。

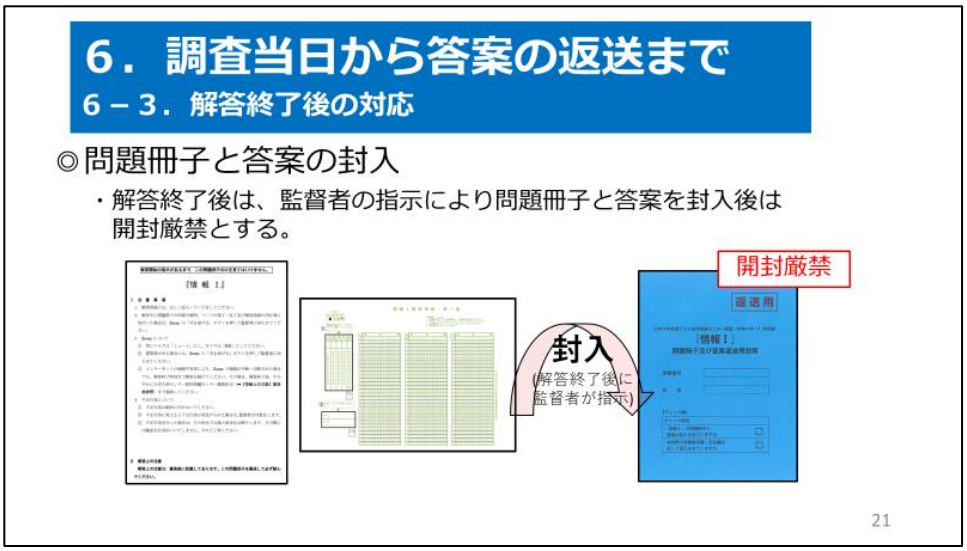


次に，解答時間中の対応についてです。こちらは大きく二つあります。まず一つは，巡視です。カンニングなどの不正行為をしていないか，また，今回はモニター調査でしたので，居眠りや解答放棄などをせずに誠実な態度で受験をしているかということに留意をして巡視を行いました。万一，監督者がこれらの行為を確認した場合は，監督者から実施本部に連絡をして，実施本部から当該受験者に電話で注意をするという体制を取りました。

解答時間中に行ったもう一つはトラブル対応です。発生時は実施本部の人員が速やかに介入をして補助をするという体制を取りました。



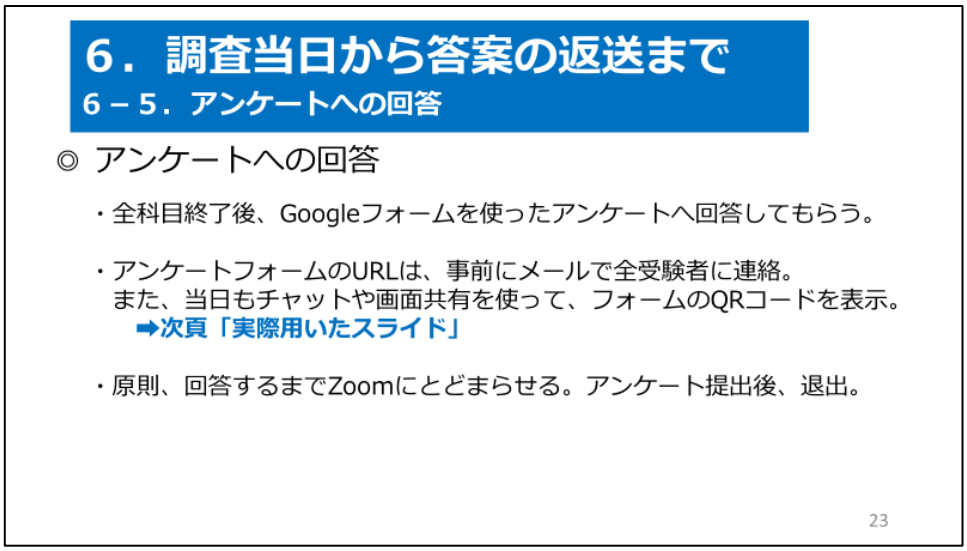
実施本部では，先ほども申し上げたように，常に全ての試験室の様子を確認していますので，ある試験室でトラブルが発生した際にはすぐに実施本部の人員が当該受験者に声をかけて，そしてすぐにブレイクアウトルームに誘導するということにしていました。ブレイクアウトルームに誘導した後は受験者から詳細な情報を聞き取り，対処方法を指示して，解決したら速やかに通常の試験室に戻すという形で対応しました。また，通信不良などによってネットワークが切断されてしまったとか，そういった場合には事前に周知をしていた問い合わせ先に電話をしてもらって，実施本部でこちらも対応をしました。



続きまして，解答終了後の対応です。受験者には監督者の指示に従って毎時間問題冊子と答案を返送用の封筒に封入する作業をしてもらいました。封入後はもちろん開封厳禁としていました。



次に，答案の返送作業についてです。全ての科目終了後，監督者の指示に従って，問題冊子と答案を封入してある二つの科目の返送用封筒をレターパックに封入する作業を行ってもらいました。

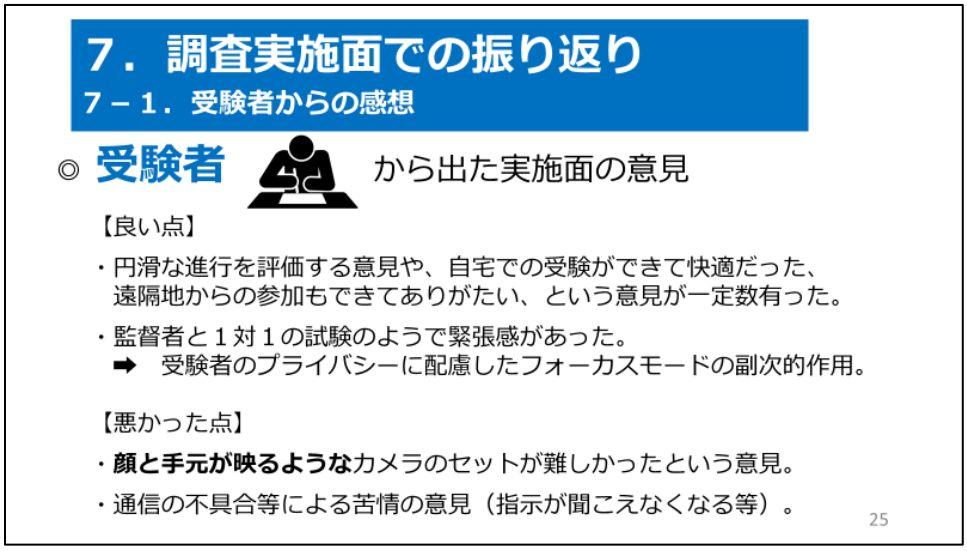


そして，次にアンケートへの回答です。全ての科目終了後，受験者に今回のモニター調査に関するアンケートにウェブフォーム上で回答してもらいました。



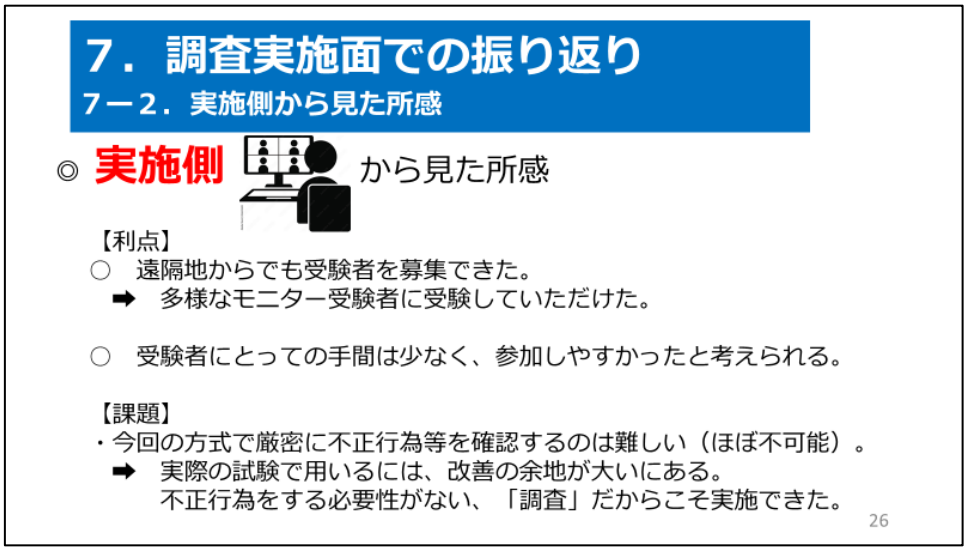
こちらはアンケート回答の際に画面に表示させておいたスライドです。アンケートフォームの URL は事前に全ての受験者に連絡していましたが，調査当日もこの画面共有や，さらにはチャットでも知らせることで，受験者がスムーズにアンケートフォームに入れるように工夫をしました。

以上，大変駆け足になってしまったのですが，ここまでがモニター調査の実施までの準備，それから調査当日の実際の流れになります。



最後に調査実施面の振り返りをお話ししたいと思います。まず，アンケートの際に受験者から出た実施面での意見ですが，良い点としましては，「監督者の指示が分かりやすく丁寧だった」，地方の受験者からは「遠隔地から参加できてありがたかった」という意見が多くありました。また，「監督者と１対１の試験のようで緊張感があった」という意見も頂きました。これは受験者のプライバシーに配慮し導入したフォーカスモードの副次的な作用でもあるのではないかと実感しているところです。

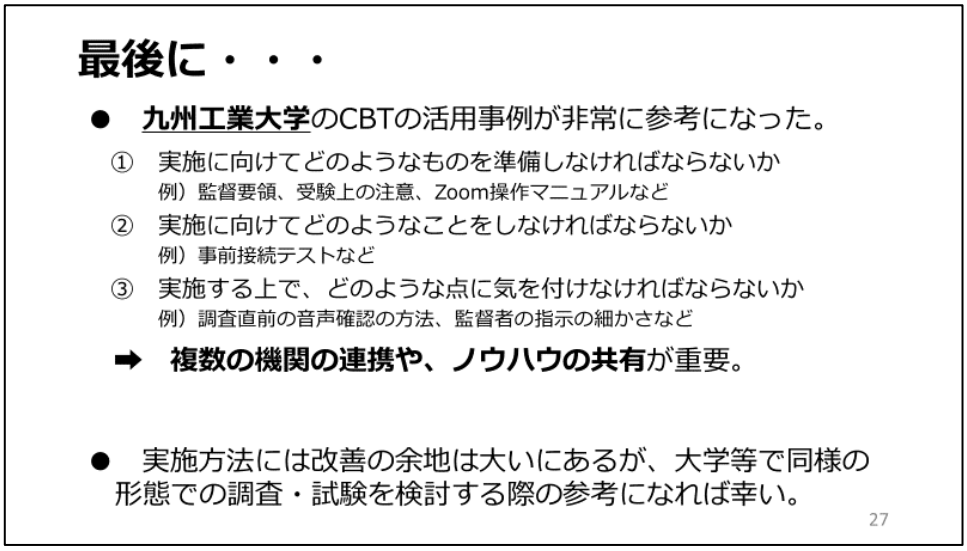
一方，悪かった点ですが，「顔と手元を映すことが難しかった」という意見や，「通信の不具合などのよって監督者の指示が聞こえなかった」といったオンライン特有の意見が多くありました。オンラインは接続環境によって試験の円滑さは左右されるため，一定程度はこのような意見が出ることは想定していましたし，多少，仕方がない部分はあったと思いますが，もしこれがハイステークスな選抜試験のようなものであった場合には仕方がないでは済まされませんし，この点は非常に難しい点だと感じました。



続いて，実施側から見た所感です。まず利点としては，やはり「遠隔地からでも受験者を募集できた」ということが挙げられます。また，「受験者にとっても移動が少なく，自宅で受験ができ，手間が少なくて参加がしやすかった」のではないかと感じます。これは想定以上に多くの受験者に参加いただけたことの裏付けにもなっているのではないかと考えています。

一方で，課題ですが，やはり「オンラインによる限界がある」ということは感じました。特にスライドにもありますように，不正行為を確認するのは非常に難しかったです。画面に映っている範囲でしかわれわれも確認することができませんし，今回の方法では，例えば，共通テストのような，大規模でハイステークスな使われ方をする試験を実施するのはその点は非常に難しい，ほぼ不可能ではないかということも感じました。

この点は実際に試験として行う場合には改善の余地は大いにあると思いますし，今回は受験者にとって不正行為をする必要性のない調査という形式のものであったからこそ無事に実施ができたのではないかと感じているところです。



最後に，今回は，九州工業大学さんの令和 3 年度の CBT の活用事例を非常に参考とさせていただきました。九州工業大学さんの事例がなければこのモニター調査のオンライン実施に踏み切ることはできなかったといっても過言ではありません。

実施するに当たって参考になった点は大きく三つあります。まず一つ目に，実施するに当たってどのようなものを準備しなければならないかということです。特に監督要領は共通テストのものをベースに作成をしたというところもありますが，それにどのような形でオンライン形式に対応した指示事項や注意事項を入れ込むかという視点は，九州工業大学さんのものがなければ作成は難しかったと感じています。

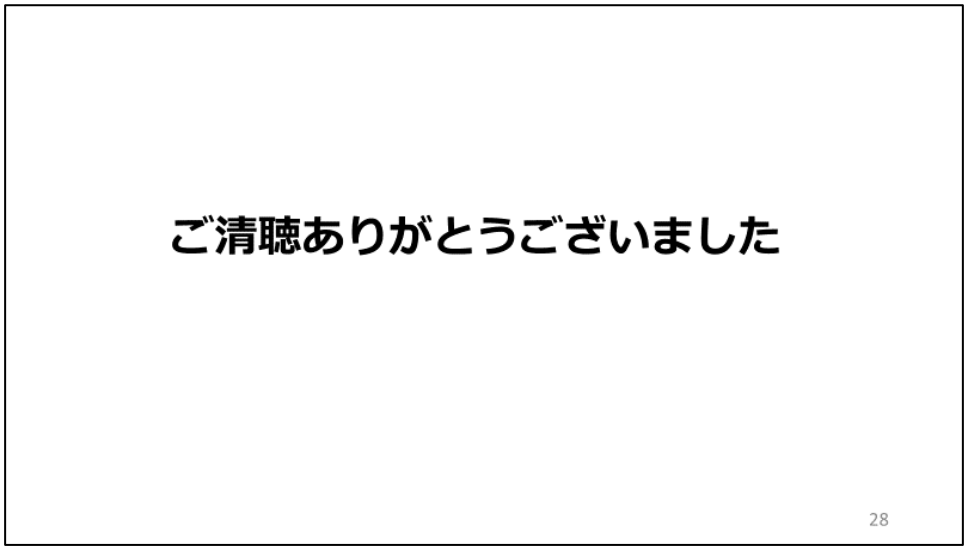
二つ目は，実施に向けて何をしなければならないかということです。マニュアル類の作成もそうですが，特に事前の接続テストについては，われわれは想定していなかったため非常に参考になりました。

三つ目は，調査を実施する上でどのような点に気を付けなければならないかというこ

とです。調査開始直前の試験室での受験者の音声確認の方法や，一つの作業に対してどの程度細かく丁寧に受験者に指示を出さなければならないかという，ある種，感覚的なところはこちらも九州工業大学さんが作成した監督要領などを非常に参考にさせていただきました。

今回のこのモニター調査を通じて，従来とは異なる形式で試験を実施しようとした場合に，先行して取り組んでおられる他の機関から共有いただくノウハウは本当に重要だということを実感しました。

今後も，各大学における試験実施のノウハウについて私ども大学入試センターが参考にさせていただくこともあると思います。また，私ども大学入試センターからも，改善の余地は大きくありますが，今回の事例も含めて試験実施のノウハウについて今後もお伝えできる範囲で共有させていただきたいと考えています。



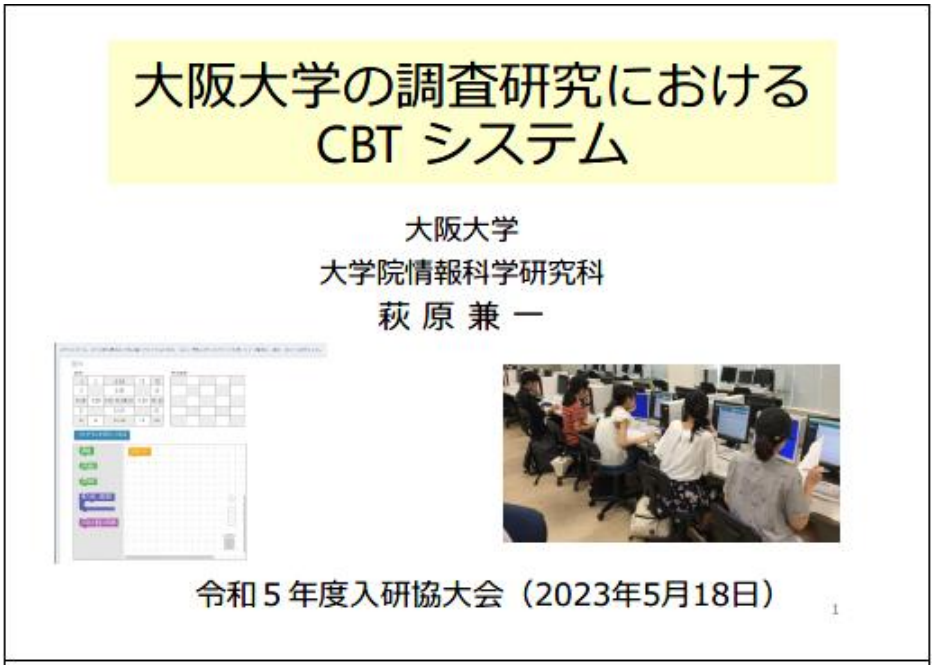
以上，大変駆け足で恐縮でしたが，私からの報告は以上になります。ご清聴ありがとうございました。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 4

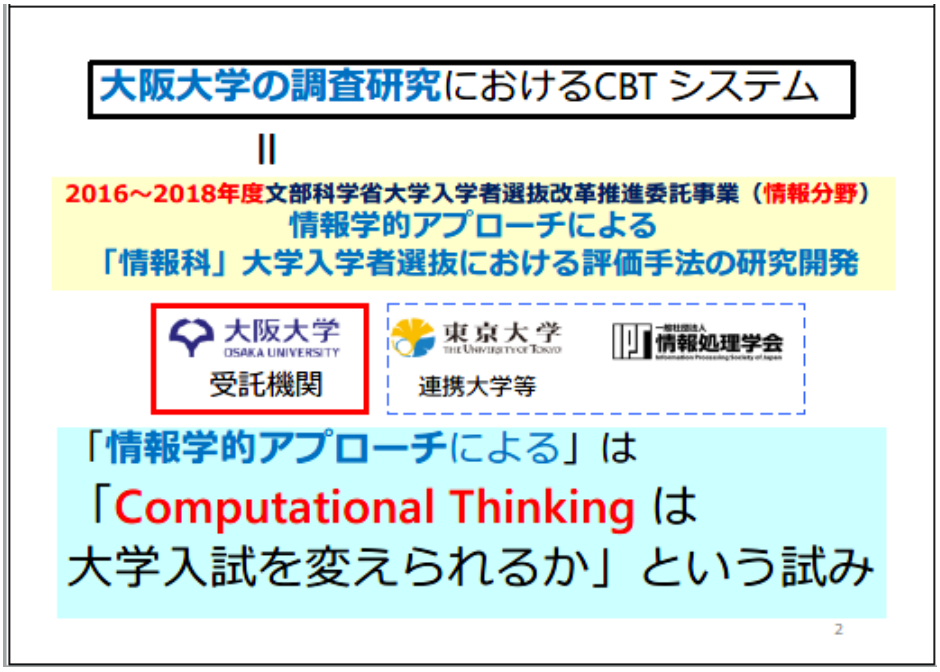
大阪大学の調査研究における CBT システム

■萩原　兼一（大阪大学 名誉教授／大学院情報科学研究科招へい教授）

大阪大学の萩原です。



「大阪大学の調査研究における CBT システム」というタイトルで講演してくださいというご依頼が大学入試センターの石岡先生よりありました。石岡先生，関係者の皆さま，発表の機会を頂き，ありがとうございます。

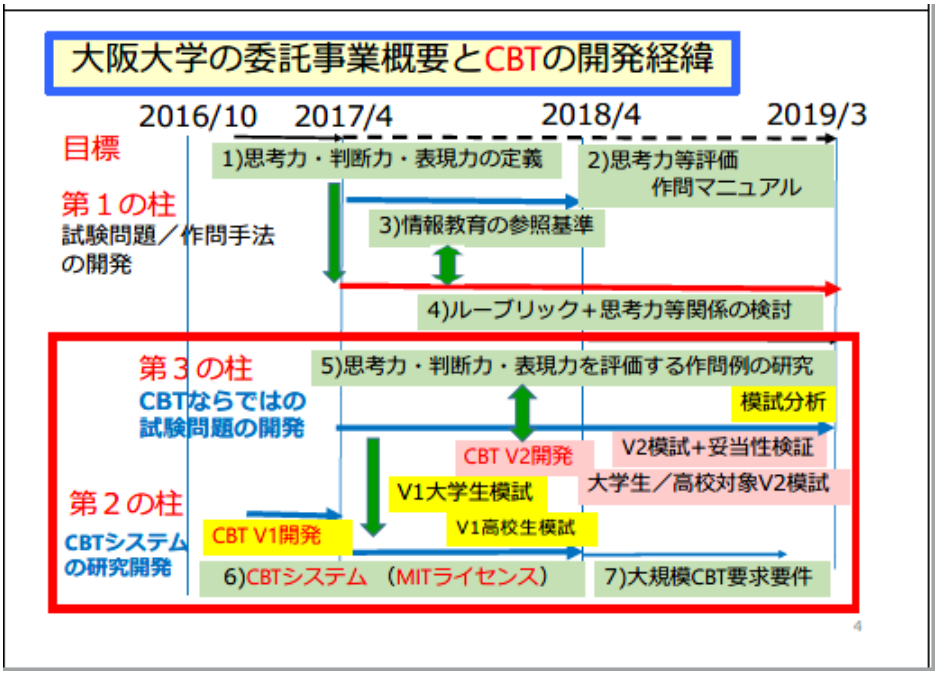


まず，発表タイトルの「大阪大学の調査研究」について説明します。2016 年度から 18 年度までの約 3 年間，文部科学省の大学入学者選抜改革推進委託事業というものがありました。その情報分野を大阪大学が受託し，東京大学と情報処理学会を連携大学等として実施しました。タイトルにある「情報学的アプローチによる」というのは「Computational Thinking は大学入試を変えられるか」という意味を込めています。



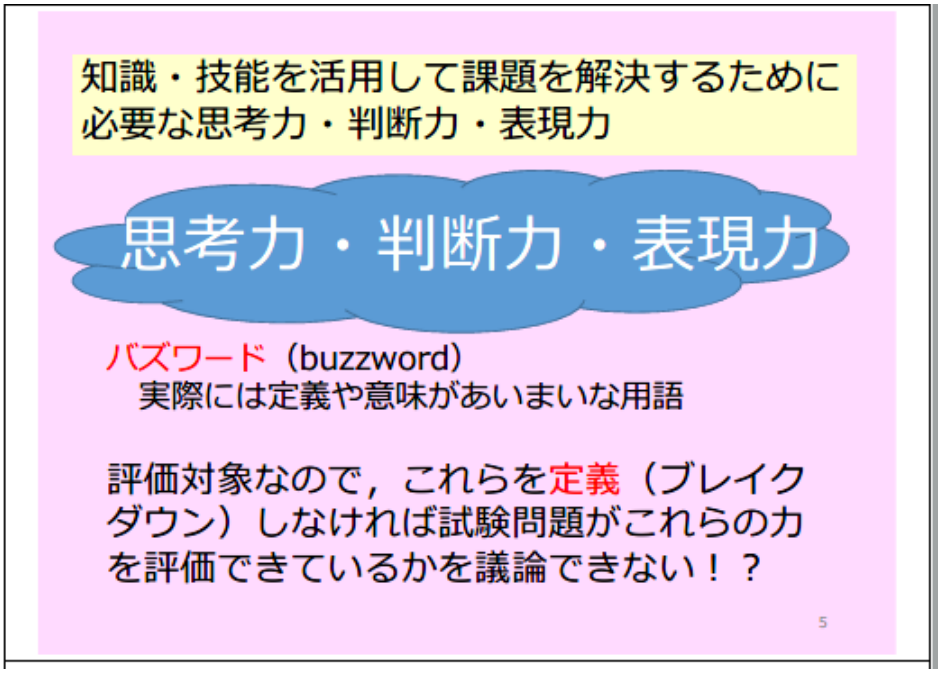
必要となる CBT 機能は評価内容や使用目的によって異なると思います。それを示すためにまず委託事業の内容についてご説明します。委託事業で要求されたことは，個別入試において思考力・判断力・表現力を評価する，情報分野における試験問題の作問に関して研究・開発することです。

委託事業では CBT を求められているわけではありませんが，後で説明しますとおり，情報分野では思考力・判断力・表現力を評価する試験問題の幅を，CBT を使うことにより広げることができるという信念の下，CBT に関しても研究開発しました。

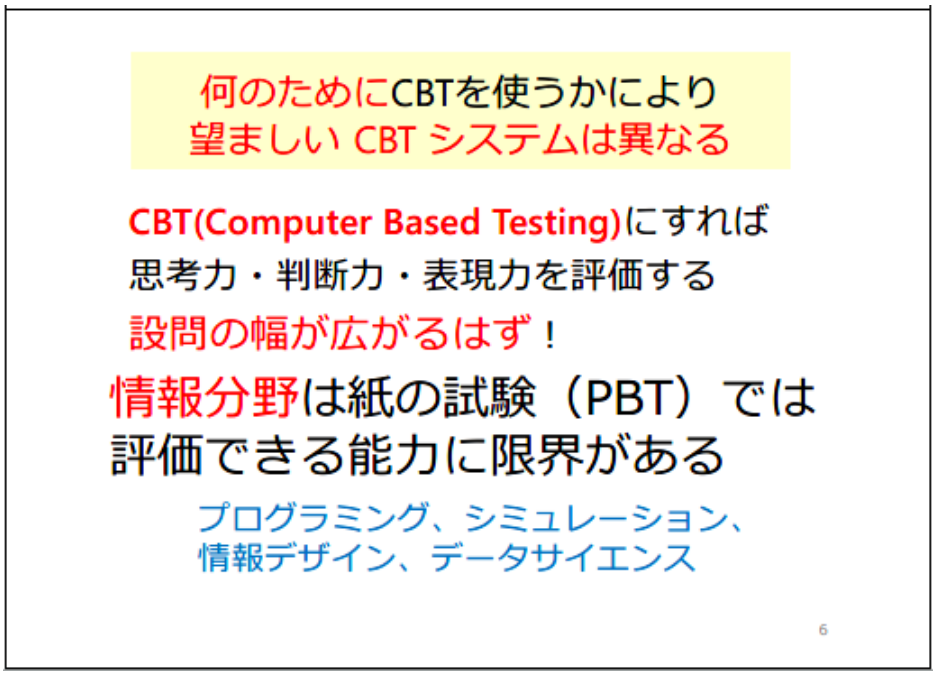


上記スライドの緑色の 1）から 7）までが主な成果物です。そして，赤い枠で囲んだところが CBT に関する研究開発をしたところです。5）に関しましては，後で少し説明します。

まず初年度に，V1 と名付けた CBT システムを開発しました。2 年目にその V1 を用いて模擬試験を実施しました。2 年目に V1 システムを拡張した V2 という CBT システムを開発し，3 年目に V2 システムを用いて模擬試験を実施しました。

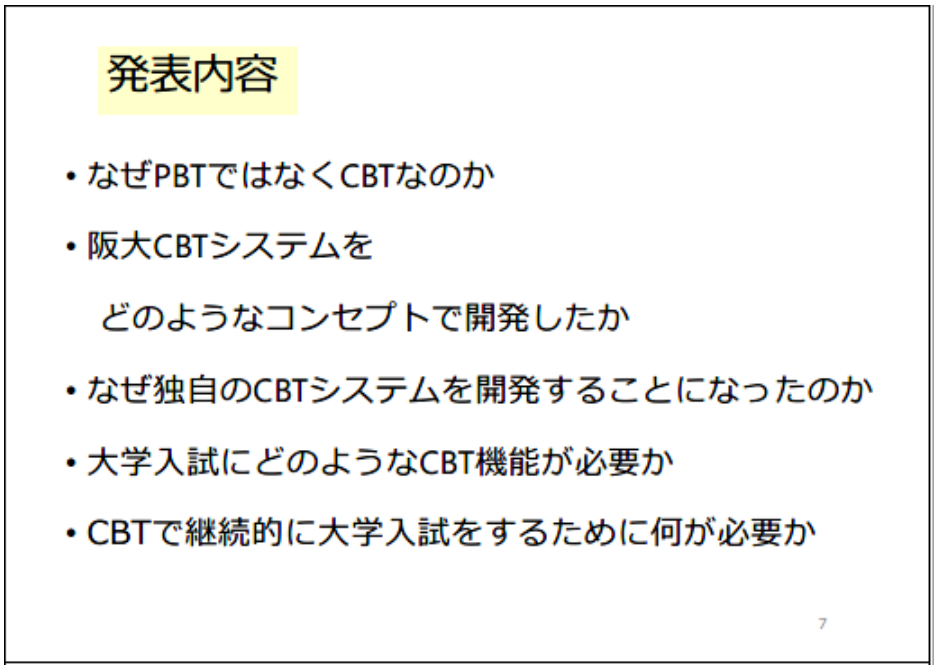


研究成果の 1）思考力・判断力・表現力の定義について述べます。この思考力・判断力・表現力はバズワード，すなわち実際には定義も意味も曖昧なものです。したがって，これらの定義が曖昧なままで，これらの能力を試験で評価せよといわれても難しいことです。したがって，これらをまず定義しました。この講演では詳しく説明する時間がありませんので，参考資料としてスライド 24 から 27 にその抜粋を付けています。このような定義から始めるのが Computational Thinking の一つの考え方です。

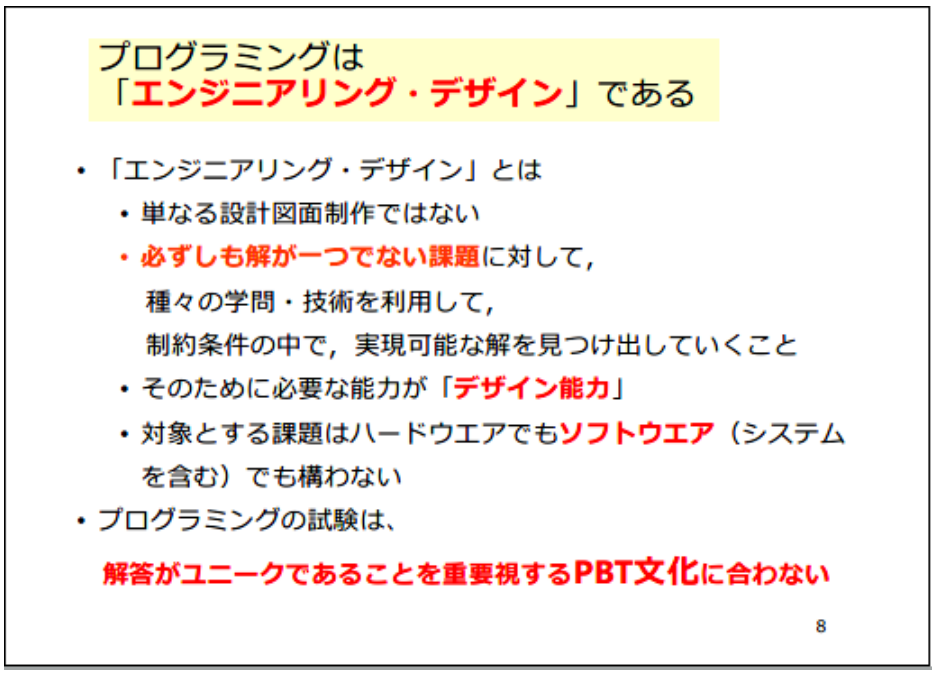


CBT を使う目的は，実施する試験によりさまざまですが，大阪大学の委託事業では，CBT を用いれば情報分野で思考力・判断力・表現力を評価する設問の幅，問題の幅が広がることを示すために CBT を使いました。

情報分野にはプログラミング，シミュレーション，情報デザイン，データサイエンスという領域があります。これらに関する能力を紙の試験で評価するのには限界があると考え，CBT を活用することにしました。



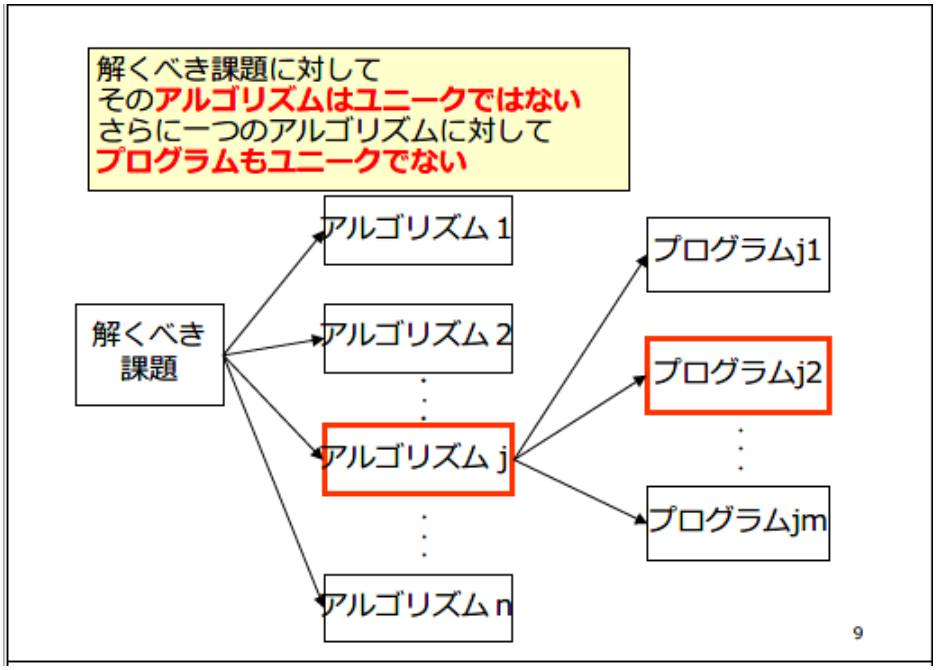
前置きが長くなりましたが，上記スライドの５つの項目について発表いたします。なぜ PBT ではなく CBT なのか，阪大 CBT システムをどのようなコンセプトで開発したのか，なぜ独自の CBT システムを開発することになったのか，大学入試にどのような CBT 機能が必要か，CBT で継続的に大学入試をするために何が必要かに関して述べたいと思います。後半の３つの項目が，本セッションで議論する内容に関係すると思います。



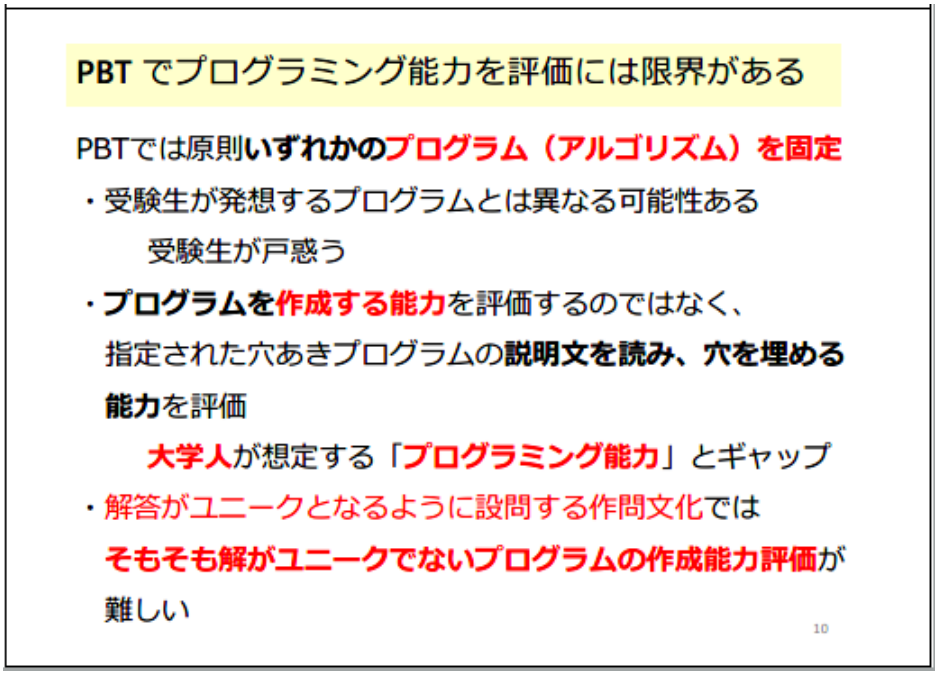
まず，なぜ PBT ではなく CBT なのかをプログラミングを例に説明します。

プログラミングはエンジニアリング・デザインです。エンジニアリング・デザインとは，単なる設計画面の制作ではなく，必ずしも解が一つではない課題に対して種々の学問・技術を利用して，制約要件の中で実現可能な解を見つけていくことです。

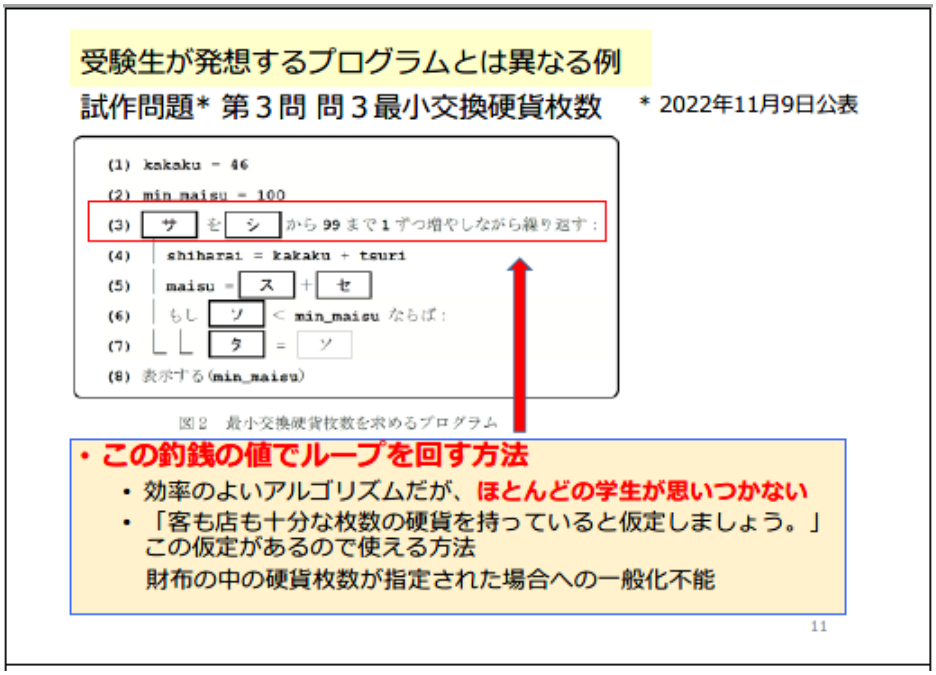
したがって，プログラムを作成するためには多種多様の「思考力」と「判断力」を必要とします。また，作成されたプログラムは，情報分野での「表現」の一つですので，「表現力」も必要とします。



解くべき課題が１つあったとして，解き方であるアルゴリズムは複数あります。さらに，１つのアルゴリズムに対して，それを実装するプログラムは複数あります。したがって，プログラミングというものはそもそも解がユニークではないのです。PBT に限りませんが，解がユニークであることを重要視する試験問題を作成する文化には合わないと思います。



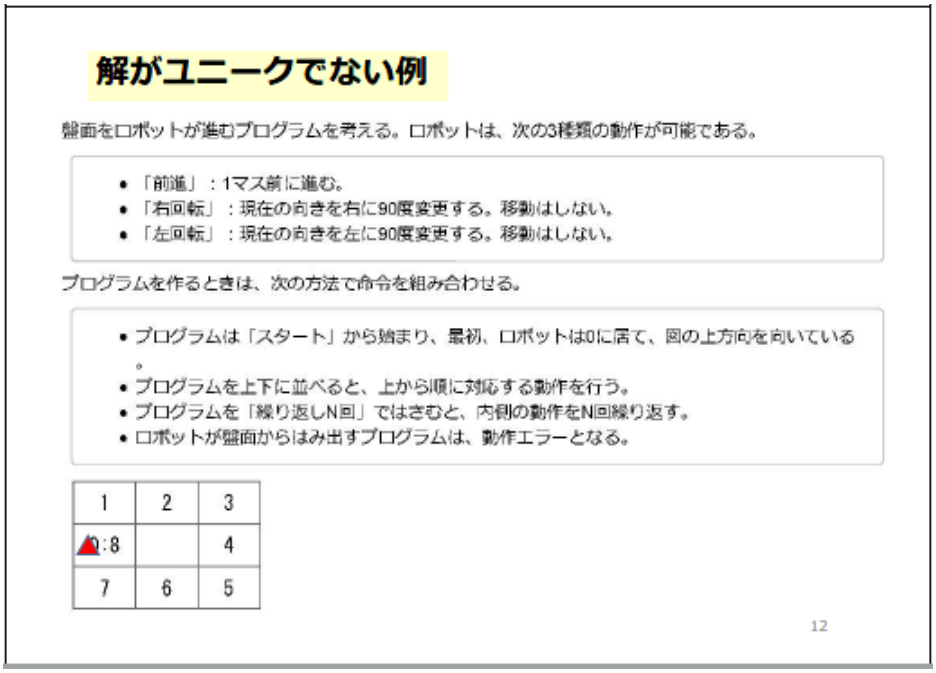
次に，プログラミングを PBT で試験する場合にはどうなるかについて考えてみます。まず，これらのアルゴリズム，あるいはプログラムをどれか一つ固定せざるを得ないため，受験生がイメージするアルゴリズムとは異なる可能性もあるわけです。その場合は受験生が戸惑います。なぜこのような処理をするのかなと戸惑いながら解答するわけです。このような状況ですと，PBT の場合，プログラムを作成する能力を評価するというよりは，指定された穴あきプログラムの説明文を読み，穴を埋める能力を評価することになります。もちろん，ある種の論理的判断能力は必要ですが，大学が期待するプログラミング能力とはギャップがあります。したがって，繰り返しになりますが，解答がユニークとなるような設問・作問文化では，そもそも解がユニークではないプログラムの作成能力を評価するのは難しいのです。



受験生が普通に発想するプログラムとは異なる例としては，2022 年 11 月 9 日に大学入試センターが公表した教科「情報」の試作問題の第 3 問の問 3 があります。プログラミングの問題です。詳しい説明はできませんが，3 行から 7 行目のループは，釣銭の値でループは制御されています。ほとんどの学生は，このプログラムを直接思いつきません。このプログラムに至るまで，数ステップの思考が必要だからです。

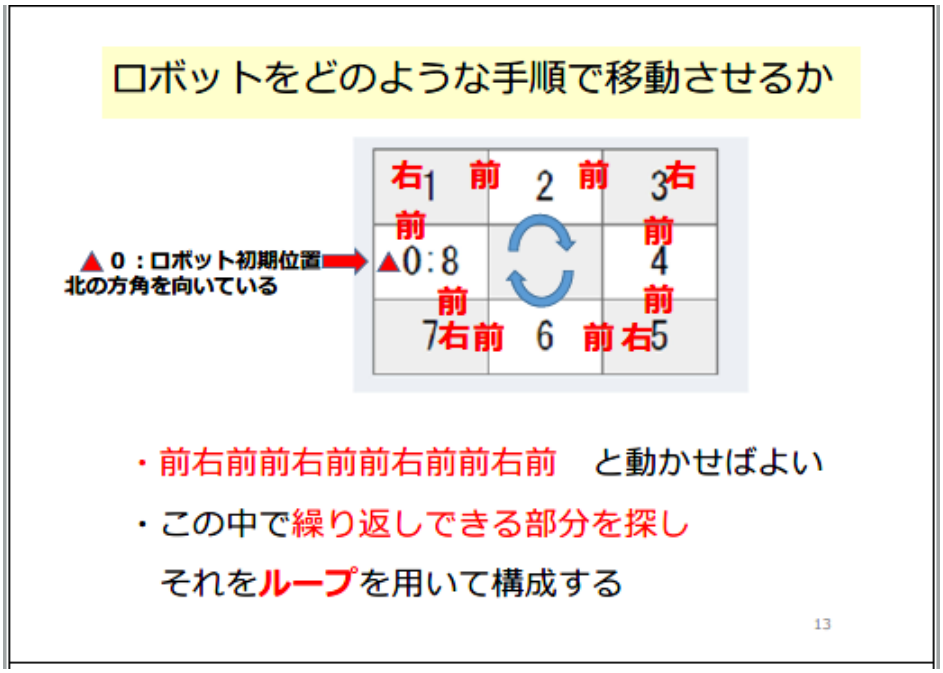
あと，もう一つ，「客も店も十分な枚数の硬貨を持っていると仮定しましょう」という仮定があり，この仮定があるので使えるループ制御なのです。

さらに，明確には書かれていませんが，発展問題として次に解きたい状況，すなわち客の具体的な財布の中身の内容が具体的に与えられた場合，例えば，10 円玉がたくさんあるのではなく 2 枚しかないという状況に一般化をしようとすると，このプログラムを拡張する形では一般化できません。そのような意味で，この問題の流れとして問題があると言えます。

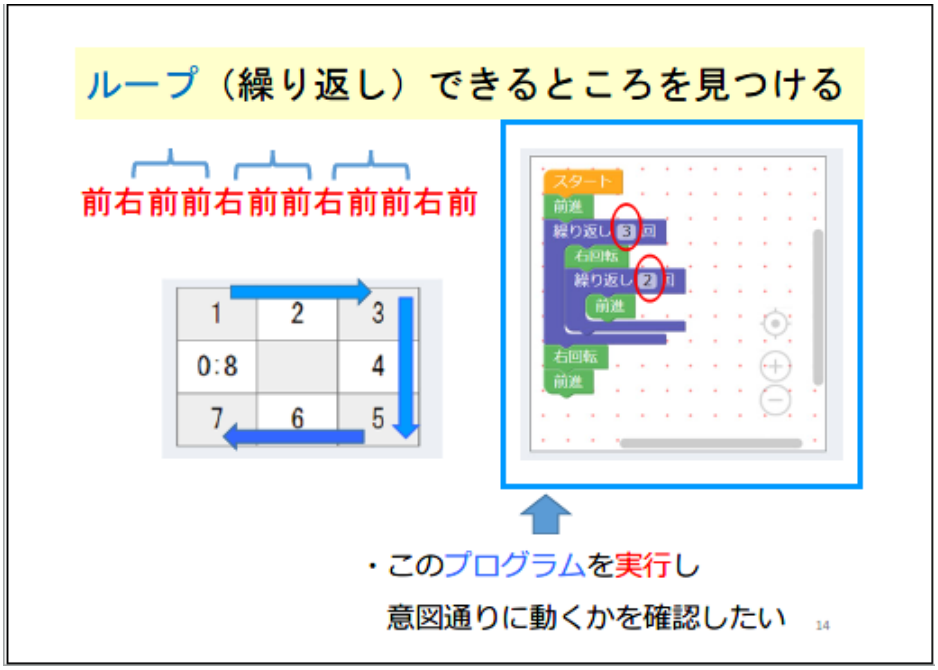


次に，単純な問いであっても解がユニークではない例を説明します。

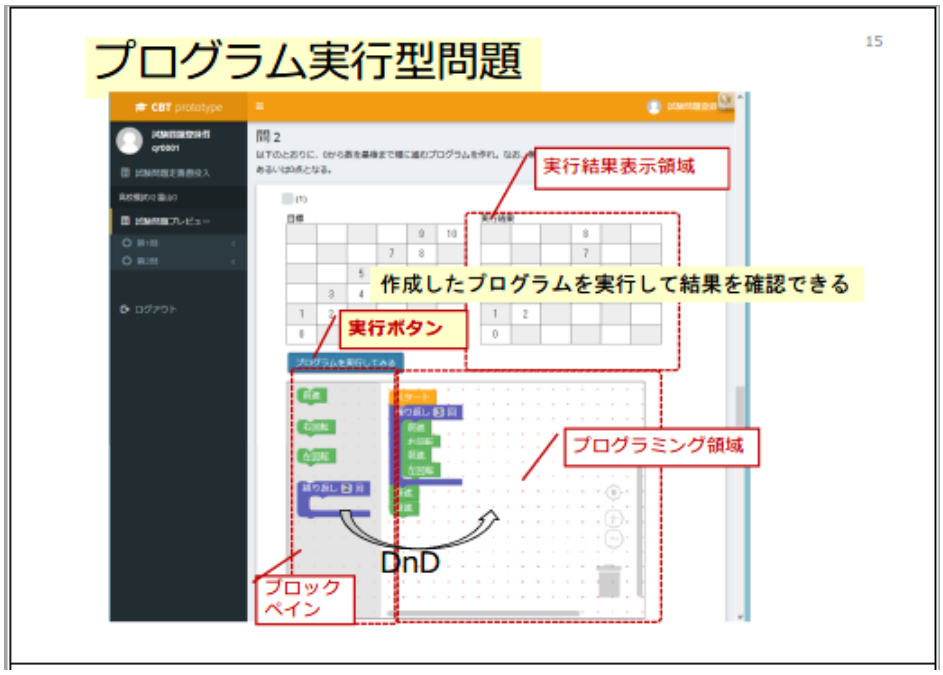
まず，上記のような碁盤の目状に 0，1，2，3，4 と数字が書かれており，この番号順にロボットを移動させるプログラムを作るという問題を考えます。実行できる命令は「前進（前に進め）」，「右に 90 度回転」，「左に 90 度回転」の 3 つだけです。これらの移動命令は，それぞれ前，右，左と一文字で省略することにします。初期状態としてロボットは 0 番の場所に北を向いているとします。



この例の場合は，赤字で書いた＜前右前前右前前右前前右前＞と移動すれば，与えられた順番どおりに移動できます。ここで，かぎ括弧＜＞内の文字系列は，命令の系列を表します。この（ループのない）直線状プログラムは一つの解となります。



ただ，この中で繰り返し実行できる部分を探し，ループを用いてコンパクトに表現できます。例えば，上記スライドの青い矢印の部分の移動です。＜前前＞と一直線に進んでいますが，ここは繰り返しにできると考えます。さらに＜前前＞の直前に常に＜右＞があるので，これも含めて＜右前前＞として，それを 3 回繰り返せばよいと考えます。その３回のループの，直前に＜前＞と，直後に＜右前＞を付け加えれば全体として指定通りに動くことができる（上記スライドの青い四角形内部の部分）。このように考えてプログラムを作ります。



話がそれますが，プログラムの実行機能について説明します。

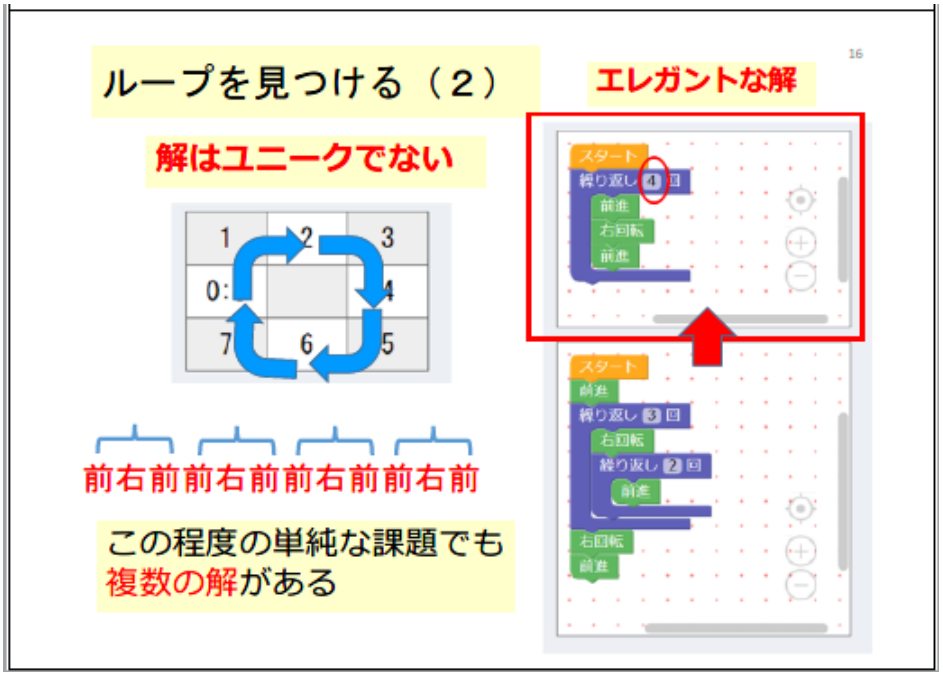
受験生はプログラムを作った後，目標の移動順とおりに移動するのかなと思い，プログラムを実行したくなります。上記スライドは異なる目標の問題ですが，阪大が委託事業で開発した CBT システムでは，プログラムを実行し，実行結果を見ることができます。

画面の左上に，問題として与えられる目標の移動順が表示されています。左下に「ブロックペイン」というものがあります。ここはプログラムで使える命令，つまり前進，右回転，左回転という移動命令，さらにループ命令が使えることが書かれています。

画面の右下には「プログラミング領域」があります。ブロックペインに書かれている命令をプログラミング領域へダウンロードし，プログラムを作っていきます。このようにプログラムを作り「実行ボタン」を押せば，そのプログラムが実行され，画面右上の「実行結果表示領域」に移動順に番号が表示されます。

実行結果を目標の移動順と比べると，このプログラムは間違っているかどうかがわかります。

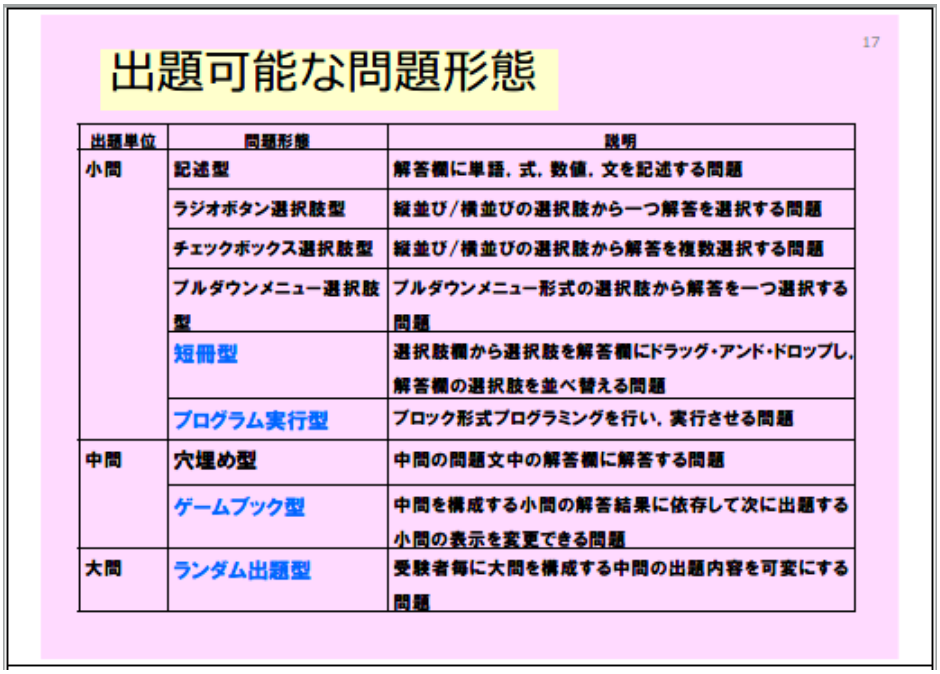
上図の課題に関してはスライド 30 で説明します。



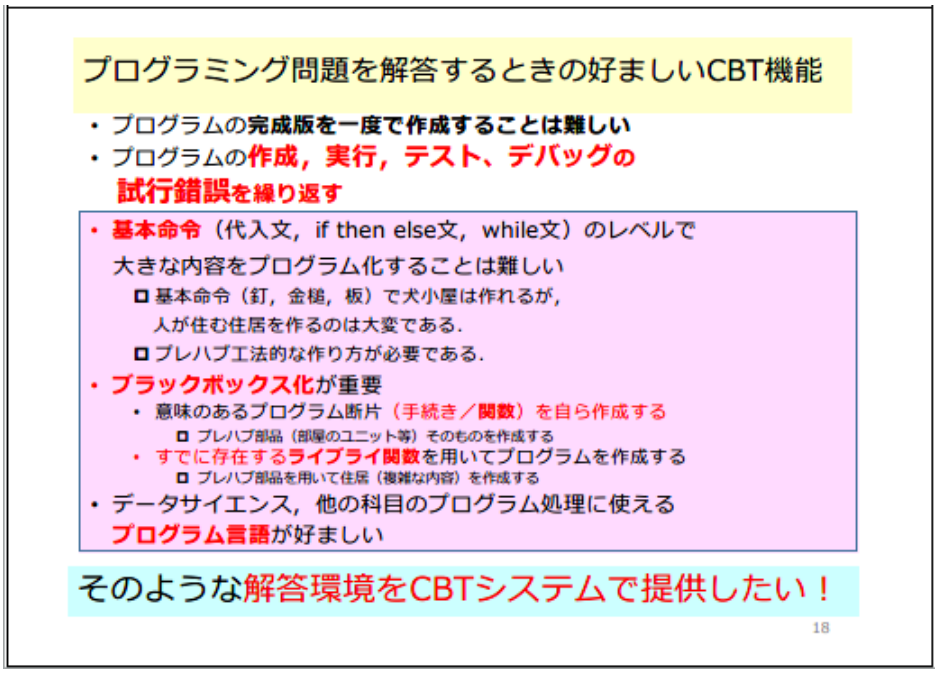
解はユニークでない説明に戻ります。ループを使った別の解があることを説明します。上図の青い部分の移動系列＜前右前＞を繰り返せばよいと考える受験生もいるでしょう。この場合は 4 回繰り返し，上図の右上のプログラムとなります。これも解となります。

上のほうがエレガントな解で，もし異なる点数を与えるとすれば，上のほうが点数は高いでしょう。

この程度の単純な課題でも解が複数個あるという例でした。



情報分野向きの他の問題形式には上のスライドに示すように短冊型，ゲームブック型があります。これらは後ろのスライド 32 から 34 に例を示しています。



プログラミング問題を解答するときに好ましい CBT 機能を上のスライドにまとめました。

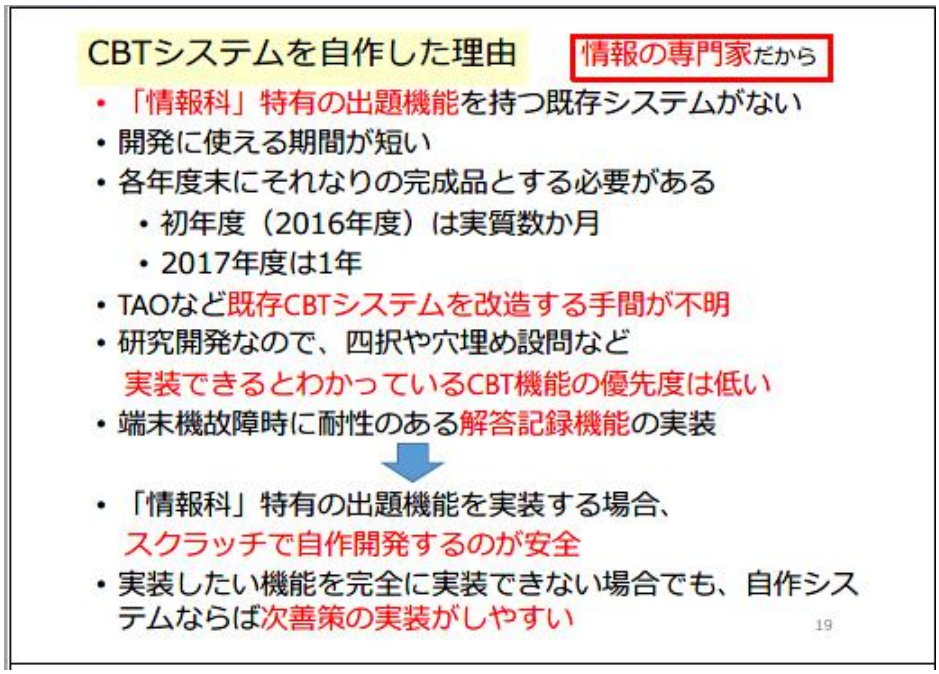
詳しくは説明できませんが，プログラミングにおいてプログラムの完成版を一度で作成することは難しいです。プログラムの作成，実行，プログラムが正しいかどうかを確認するテスト，正しくない場合はどこがだめなのかを見つけるデバッグ，これらの 4 つのステップを試行錯誤を繰り返して，プログラムの完成版ができあがります。

このような解答環境が好ましいのですが，CBT では可能ですが，PBT では難しいでし

ょう。このようなプログラミングの解答環境を実現する CBT システムを開発することが委託事業の一つの目的でした。

また，今回時間の都合で上図のピンクの部分は説明できませんが，プログラムを作るときに「ブラックボックス化」というものも重要で，これはプログラムにおける「関数」を使うことに相当します。スライド 31 に関数を使う例が示されています。

高校でどのような情報能力をつけるべきかに関しては，委託事業の成果物 3 の「情報教育の参照基準」を作り，そこにまとめてあります。そのうち，プログラミングに関する部分のみスライド 28 と 29 で概略を説明しています。



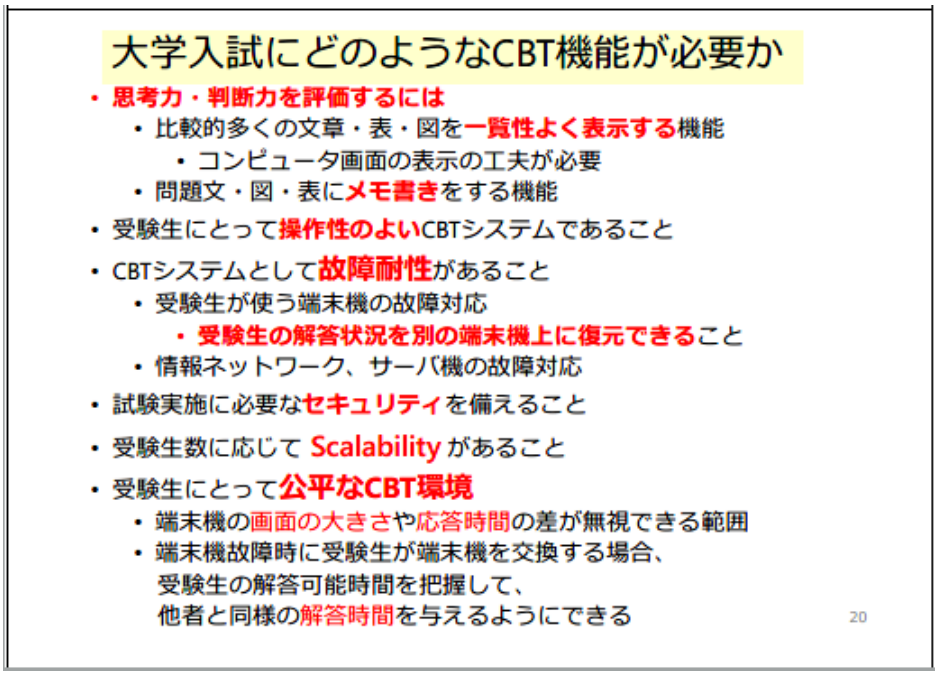
以降の 3 枚はこのセッションで議論する内容だと思います。まず，CBT システム TAO などの既存システムを改造するのではなく，CBT システムをゼロから自作した理由をこの 1 枚で説明します。

先に説明した情報科の出題で必要な機能を持つ既存システムが，探す範囲では存在しなかったということが第一の理由です。さらに，委託事業では開発に使える時間が短いことが挙げられます。初年度は実質 6 カ月しかなく，そのうちの 3 カ月ぐらいしか CBT システムの実装時間がありません。2 年度は 12 カ月あります。そのため，開発期間が短いことが既存システムを改造しない一番大きい要因です。TAO などの既存システムを改造するには，そのシステムの内部実装を解明する必要があり，委託事業で欲しい機能をシステムに追加するための手間が不明なのです。したがって，既存システムを改造する勇気がなく，それならばゼロから作ろうということになりました。

さらに研究開発なので，実装できると分かっている四択とか穴埋めとか，そういうものは優先度が低いということになります。

そして，CBT システムを使う目的が大学の入学試験なので，CBT システムに故障が起きたときに，受験生が故障するまでに解答した内容が消えてしまったりすると大問題と

なります。その対策のための実装が，既存システムを改造して実現できる保証がありません。



次に，大学入試にはどのような CBT 機能が必要かということについてまとめました。

思考力・判断力を評価するには簡単な四択の問題では難しいと個人的には思います。思考力等を試すときには，比較的多くの文章・表・図を見比べたりする必要があり，小さなコンピュータ画面ではそれが難しいのです。一覧性が紙に比べると良くありません。それを何とかできるようにコンピュータ画面の表示に関する工夫が必要になってきます。

さらに，人は何かを思考するときに，紙にいろいろとメモ書きします。問題文・図・表に書き込んだりします。CBT システム上でそのようなメモを書くことができる機能も必要です。

受験生にとって操作性の良いシステムであることは自明です。

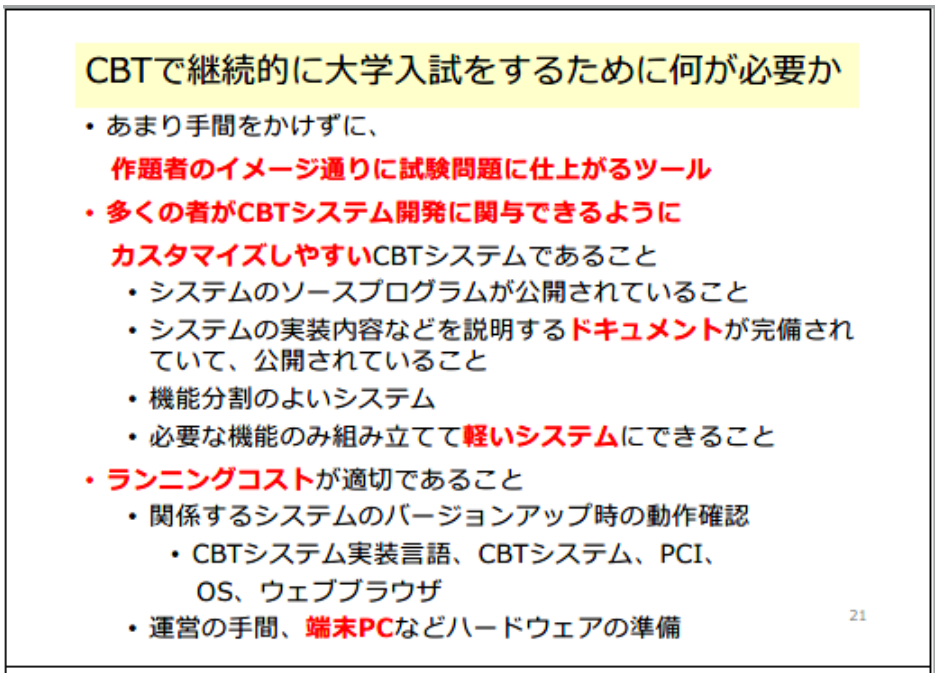
あとは，大学入試として大事なのは CBT システムとして故障耐性があることです。受験生が使う端末が故障した場合，受験生は予備の端末に移って解答を続けることになりますが，その予備端末で受験生の解答状況が復元できている必要があります。解答を最初からやり直させるのは論外です。さらに，情報ネットワークやサーバーを多重化するなどして，故障したときにうまく切り替えられるような故障耐性のあるソフトウェアシステムである必要があります。

受験生の人数に応じて Scalability があること，これは例えば，受験生が 100 人だったらスムーズに動くが，10 倍の 1,000 名になったらほとんど動かないということでは困るということです。受験生の人数が多くなっても，サーバーなどを追加して CBT システムとして稼働することが必要です。

受験生にとって公平な CBT 環境であることは重要です。たとえば，端末の画面の大きさが，17 インチと 12 インチとを比べたら 17 インチのほうがたくさんの情報が見られま

す。画面サイズが違うとそれは不公平です。また，古い CPU を使っている端末ですとレスポンスタイムが遅く，受験生はいらいらしますので，コンピュータの処理性能に本質的な違いがあってはいけません。

いわゆる端末が故障し，端末を交換した受験生に関しては，交換に要したロスタイムを加味して解答時間の延長を設定できること，すなわち，他の受験生と同じ解答時間を与えるようなことができること，そのようなシステムになっていることが重要だと思います。



最後に，CBT で継続的に大学入試をするために何が必要かについて述べます。

まずは作題者が，作題者のイメージどおりに問題作成できるようなツールであることです。多くの人が CBT システム開発に関与できるようにカスタマイズしやすい CBT システムであることが重要だと思います。たとえば，システムのソースプログラムが公開されており，システムの内部資料，実装内容などを説明するドキュメントが十分にあり，それも公開されていることです。

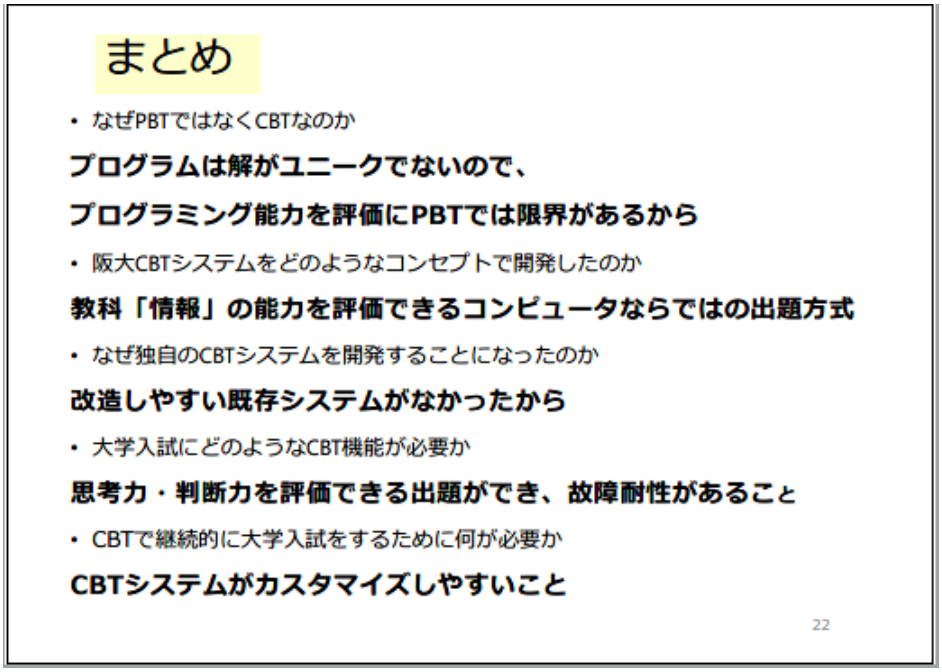
また，CBT システムのある部分を改造するのに，CBT システムの多くの箇所を修正しなければならないようでは不適切で，少ない部分だけを修正すれば済むようにうまく機能分割されたシステムであることです。

さらに，必要な機能だけをうまく選択して軽いシステムとして構築できることです。これは Scalability を上げるためには軽いシステムが好ましいことにも関連します。

最後に，ランニングコストが適切であることが挙げられます。年が経過すると CBT システムを構成するいろいろなソフトウェアがバージョンアップされます。具体的には，CBT システムの実装言語，OS，ライブラリ等のバージョンアップ，CBT 画面を表示するウェブブラウザ等のバージョンアップなどです。そのときに今まで動いていた CBT システムが正しく動くかどうかを確認する必要があります。きちんと動くようにバージョン

アップしてほしいのですが，動かないことが多いので，確認が必要です。

最後に運営です。先ほどの九工大さんの話のように，運営の手間や端末，PC などのハードウェアの準備にランニングコストがかからないこと，これが重要だと思います。



最後にまとめです。上記スライドの内容に関して説明しました。

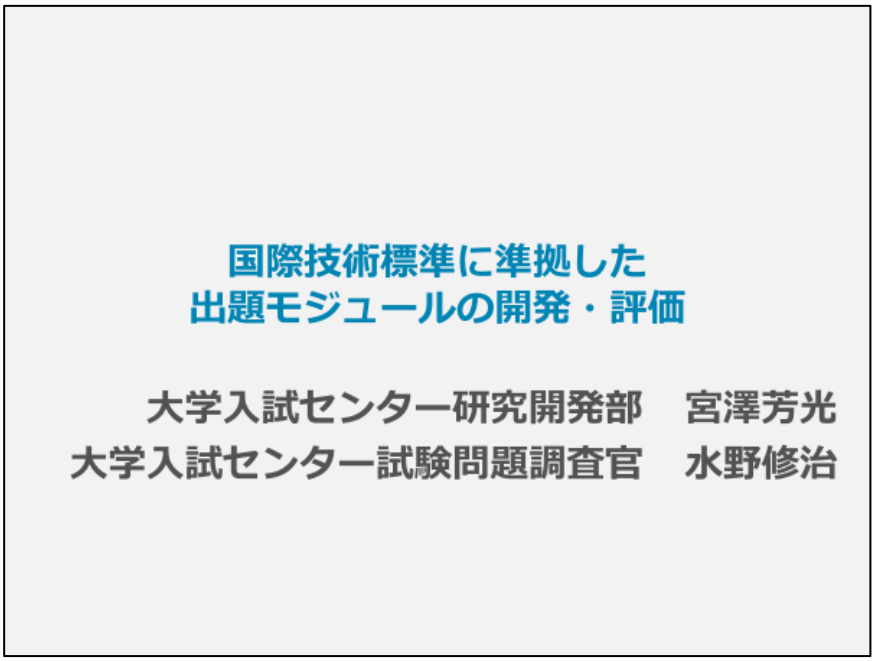
この写真に写っている方々は大阪大学の委託事業に参画しご尽力していただいた方々です。これらの方々に感謝いたします。以上です。よろしくお願いします。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 5

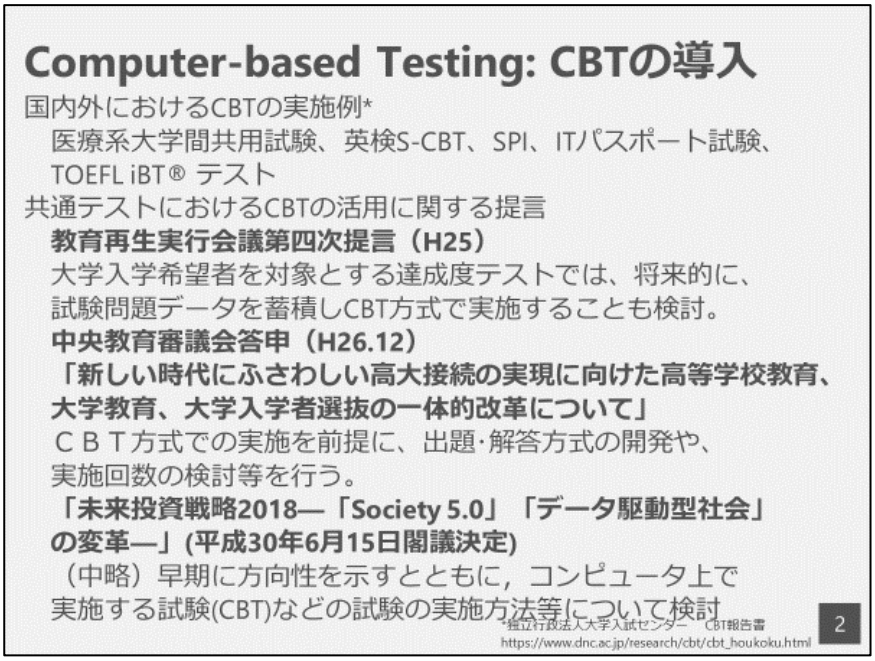
国際技術標準に準拠した出題モジュールの開発・評価

■宮澤　芳光（大学入試センター研究開発部准教授）/
　水野　修治（大学入試センター試験問題調査官）

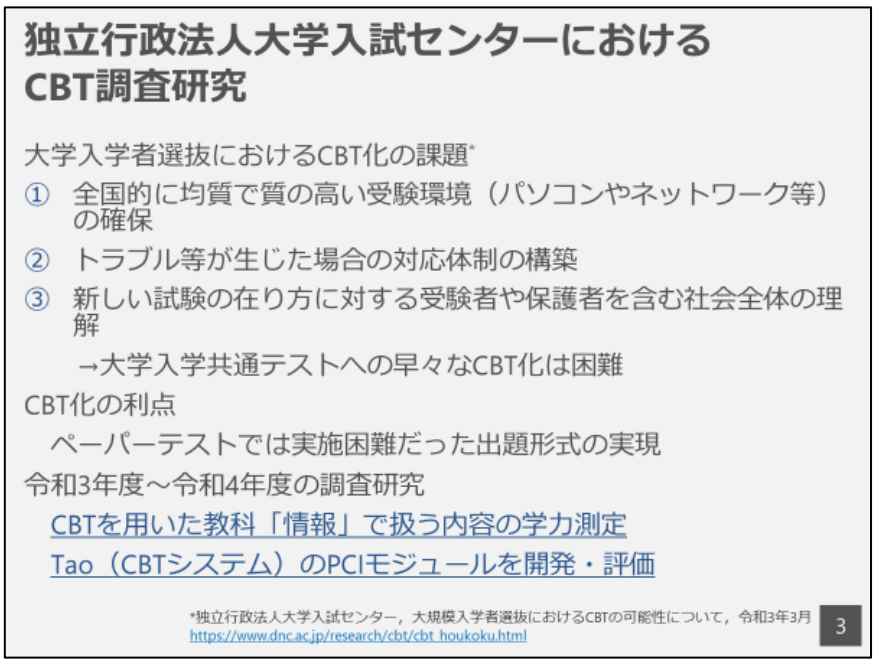
【宮澤】　よろしくお願いします。



本講演では「国際技術標準に準拠した出題モジュールの開発・評価」を紹介します。講演者は大学入試センター研究開発部の宮澤と，情報の試験問題調査官である水野先生です。



近年，紙と鉛筆を用いる方式からパソコンやタブレット等のコンピュータを用いる CBT に置き換わる事例が見られるようになりました。例えば，ETS が実施する TOEFL では，日本で平成 12 年から CBT が導入されており，OECD が行う国際的な学力調査である PISA も平成 27 年から全面的に CBT に移行しています。国内では，医学部や歯学部の学生が受験する医療系大学間共用試験や IT パスポートといった試験で CBT が導入されています。



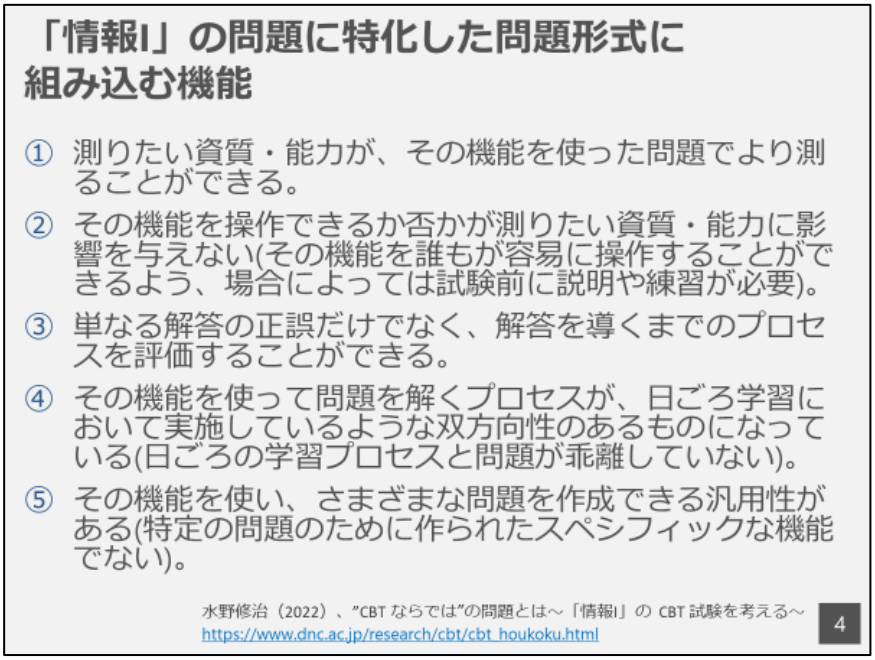
大学入学共通テストは，受験者数が 40 万人以上に上る大規模試験であり，かつ，受験者や関係者に重大な結果をもたらすハイステークスな試験として実施されています。共通テストは，紙媒体の問題冊子とマークシートを使用し，OMR で読み取って解答データ

を取得するという形式で実施しています。

この共通テストについても，提言の中で CBT 化の検討が求められてきました。大学入試センターでは，各分野の専門家を交えて検討を行い，令和 3 年 3 月に「大規模入学者選抜における CBT 活用の可能性について」という報告書を公開しました。

報告書では，大学入学選抜における CBT 化の課題として 3 つを挙げています。1 つ目に全国的に均質で質の高い受験者環境（パソコンやネットワーク等の確保)。2 つ目にトラブル等が生じた場合の対応体制の構築。3 つ目に新しい試験の在り方に対する受験者や保護者を含む社会全体の理解。これらの課題を踏まえて共通テストへの早々な CBT 化は困難であるということが述べられています。

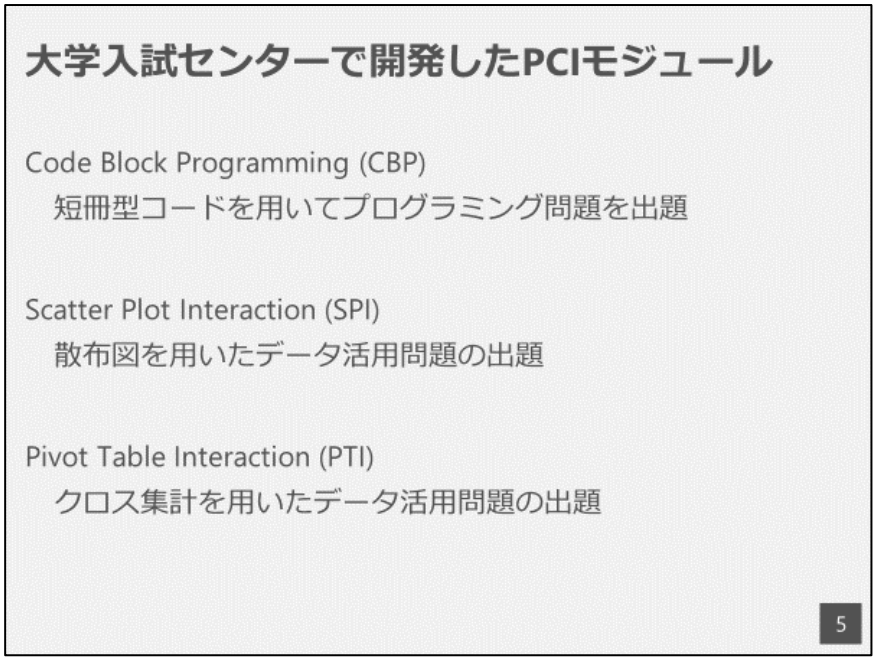
一方，この報告書では，CBT 化の利点として，ペーパーテストでは実施困難であった出題形式の実現を指摘しています。



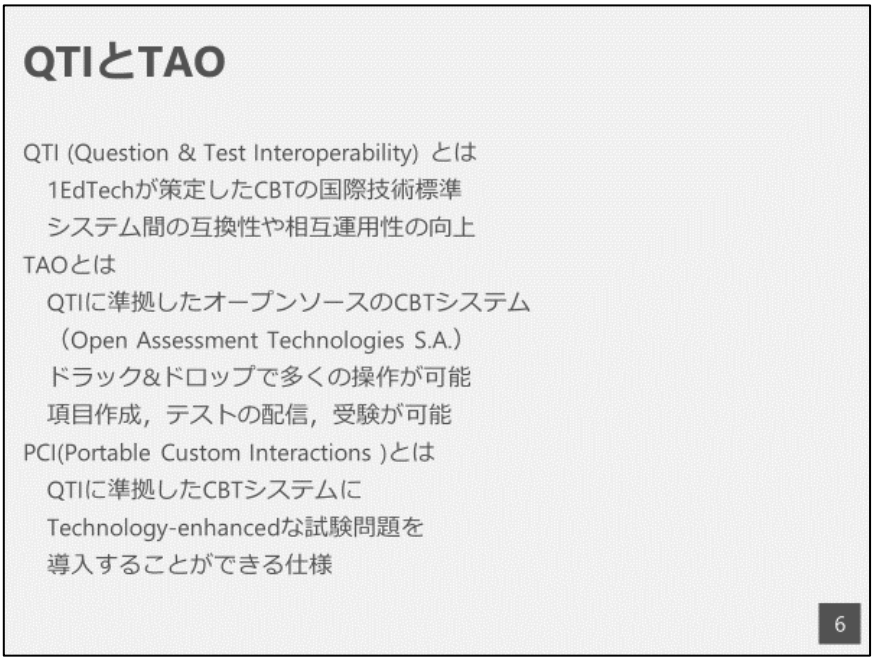
大学入試センターでは，令和 3 年度に各分野の専門家からの意見を踏まえ，CBT を用いて教科「情報」の試験問題を出題できるモジュールの開発に取り組みました。

開発では，まず，情報 I の試験問題に特化した問題形式に組み込む機能を整理しました。1 つ目は，測りたい資質・能力を，その機能を使った問題でより測ることができる。2 つ目は，その機能を操作できるか否かが測りたい資質・能力に影響を与えない。これには，その機能を誰もが容易に操作することができるよう，場合によっては試験前の練習が必要です。3 つ目は，単なる解答の正誤だけではなく，解答を導くまでのプロセスを評価することができる。4 つ目は，その機能を使って問題を解くプロセスが，日ごろの学習で実施しているような双方向性のあるものになっている。これは普段の学校の中での授業であり，日ごろの学習プロセスと試験問題が乖離していないことを意味します。5 つ目が，その機能を用いて多様な試験問題を作成でき，汎用性がある。これは，特定の試験問題のためにつくられたスペシフィックな機能ではないということです。これらを満た

すようなモジュールの開発を検討しました。



大学入試センターでは，3 つのモジュールを開発しました。1 つ目が，Code Block Programming(CBP)であり，短冊型コードを用いてプログラミング問題を出題するモジュールです。2 つ目が，Scatter Plot Interaction(SPI)で散布図を用いたデータ活用問題の出題するモジュールです。3 つ目が，Pivot Table Interaction(PTI)，クロス集計を用いたデータ活用問題を出題するモジュールです。



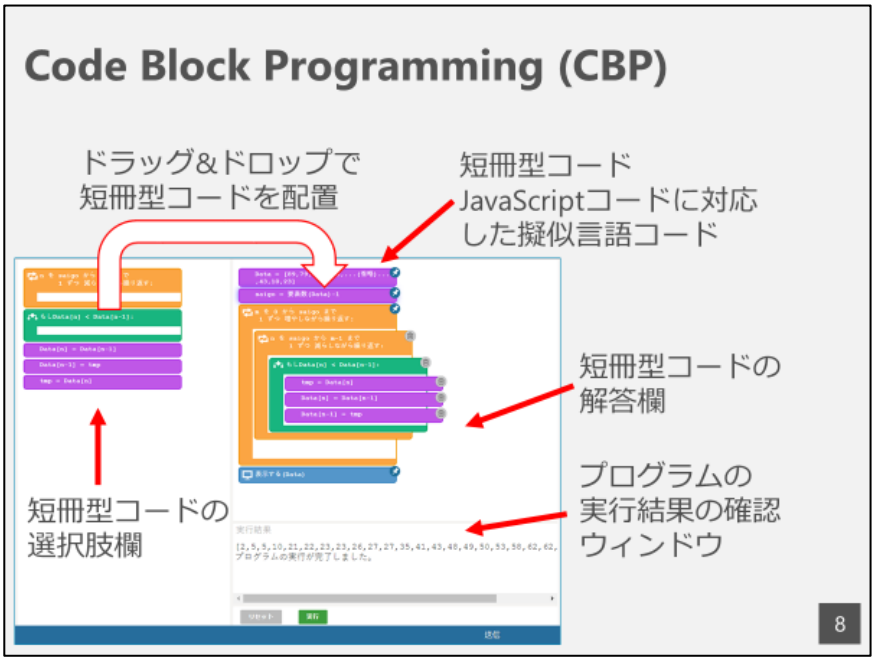
センターでは，CBT の技術標準に沿った試験環境の構築を検討しました。CBT の技術標準には，国際標準化団体である 1EdTech が作成した QTI があります。QTI は，XML 形式のデータ構造を用いて，オーサリングツール，アイテムバンク，テスト構成ツール，学習プラットフォーム，スコアリング，分析エンジン間で試験問題やテストコンテンツ，解答データの共有を実現しています。

QTI に準拠した CBT プラットフォームには，OAT の TAO が知られています。TAO は近年，OECD の PISA や文科省で開発されている MEXCBT で使われています。TAO は，ドラッグ＆ドロップ(D&D)で多くの操作が可能であり，D&D で項目作成，テストの配信，受験が可能です。

センターでは，QTI に準拠した CBT に Technology-enhanced な試験問題を導入することができる規格である PCI に準拠したモジュールを開発しました。

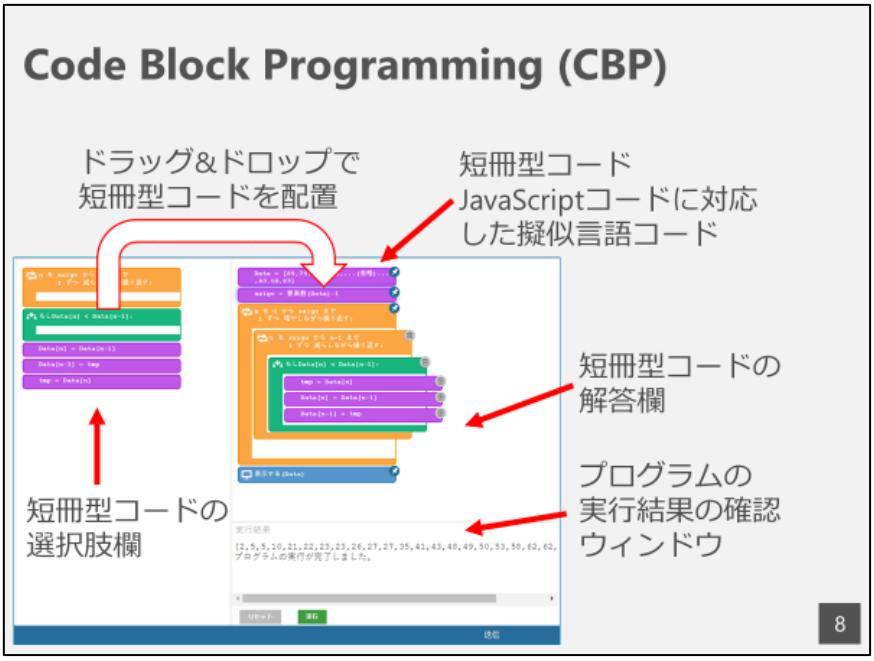


開発したモジュールは，試験問題の 1 つとして TAO で出題することができます。TAO は GitHub で公開されており，パソコンやサーバーにインストールして実際に使ってみることができます。



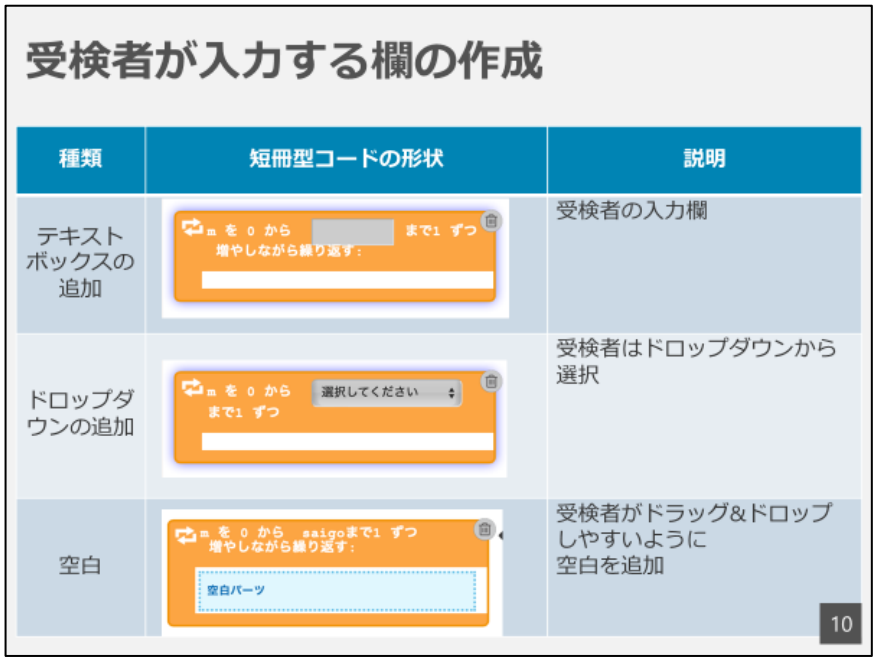
CBP は，作問者が自由にプログラミング問題を作成し，CBT で出題させることができます。受験者は，短冊型コードを並び替え，その実行結果を踏まえてプログラムを完成させます。

短冊型コードとは，プログラムのコードを機能単位で分割し，その分割されたコードのまとまりです。作問者は，短冊型コードに表示する擬似言語コードと，その短冊型コードが実行する JavaScript コードを設定します。

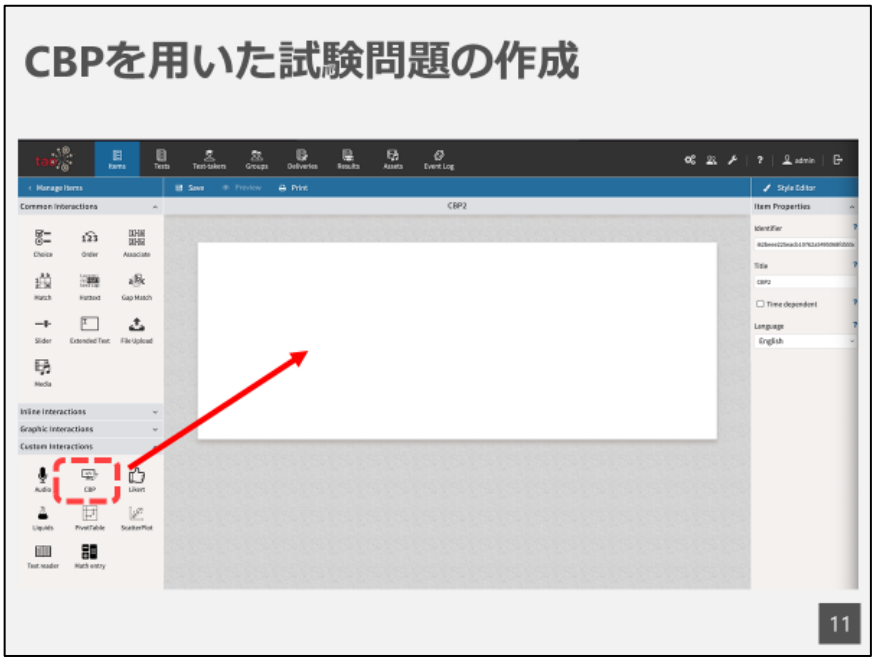


短冊型コードの種類は 6 種類です。単純処理は，変数の定義や演算を記述し，複数行のコードを登録できます。while 型の繰り返しは，繰り返し条件を記述でき，同様に for 型で繰り返し条件を記述できる短冊もあります。条件分岐 if は，分岐条件を記述でき，

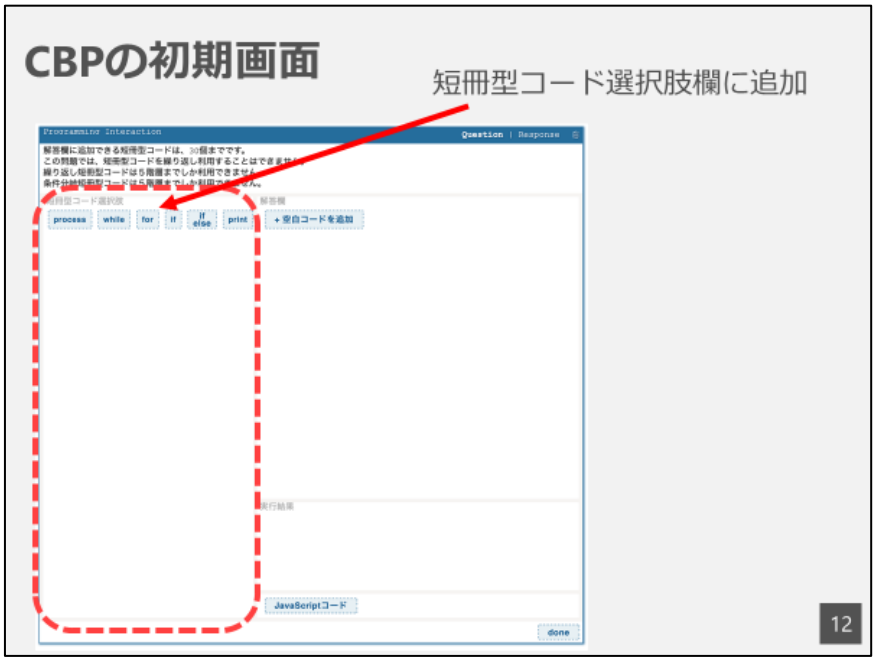
if-else 型は，条件に不一致した時に処理されるコードを記述できます。print は，変数の値をコンソールに出力する短冊です。



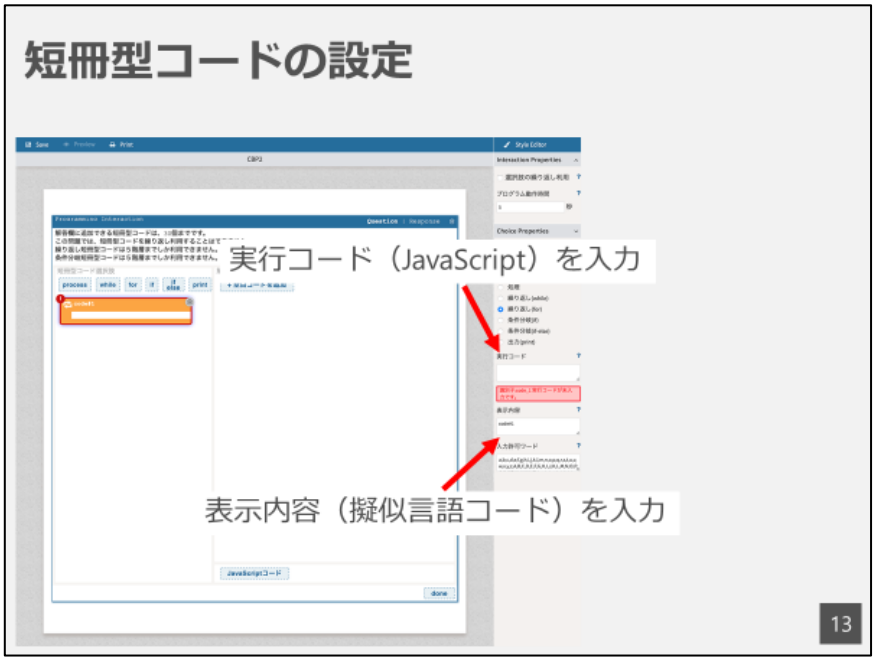
さらに，短冊型コードには，入力欄を設定できます。入力欄には，テキストボックスやドロップダウンリストを追加できます。この他にも，短冊中に別の短冊を埋め込むような場合，空白パーツというものを入れ込み，受験者がドラッグ＆ドロップしやすいようにすることができます。



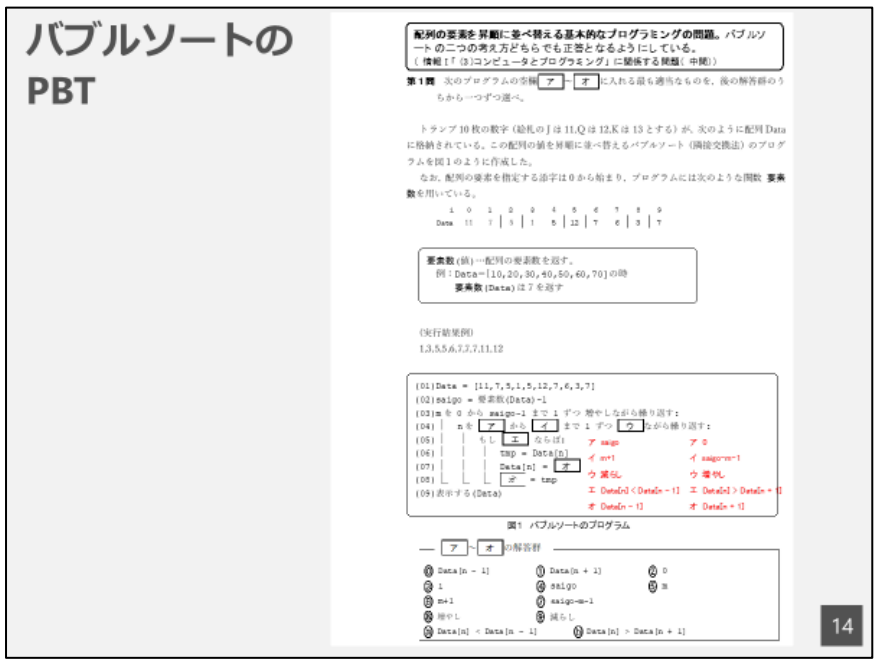
試験問題の作成では，CBP のモジュールを作問画面にドラッグ＆ドロップします。



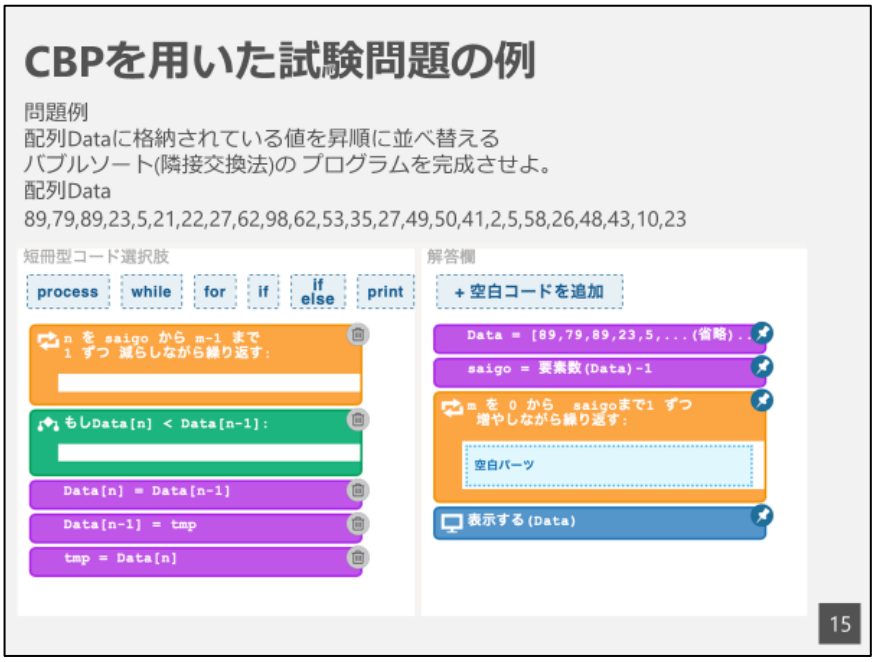
次に，短冊型コード選択肢欄に短冊型コードを追記します。



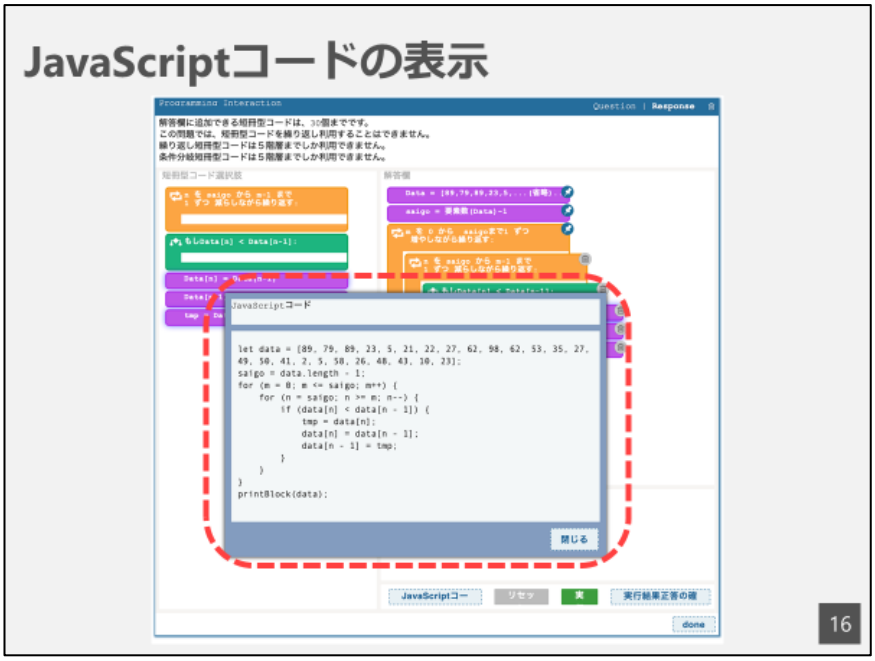
短冊型コードに JavaScript のコードを登録し，擬似言語コードを入力します。



マークシート方式では，プログラムに空欄が埋め込まれており，その空欄に解答群から適切なコードを選択する方式でした。



CBP では，短冊型コード選択肢から解答欄にドラッグ＆ドロップしてプログラムを作成することができます。



作問者の画面では，JavaScript の表示内容を確認することができます。



また，作問者の画面では，プログラムの実行結果をコンソール画面に表示できます。



プログラムが適切でない場合はエラーを表示します。



受験者は，短冊型コードを選択肢から選び解答欄にドラッグ＆ドロップしてプログラムを作成し，そのコンソール結果を踏まえながらプログラムを完成させます。

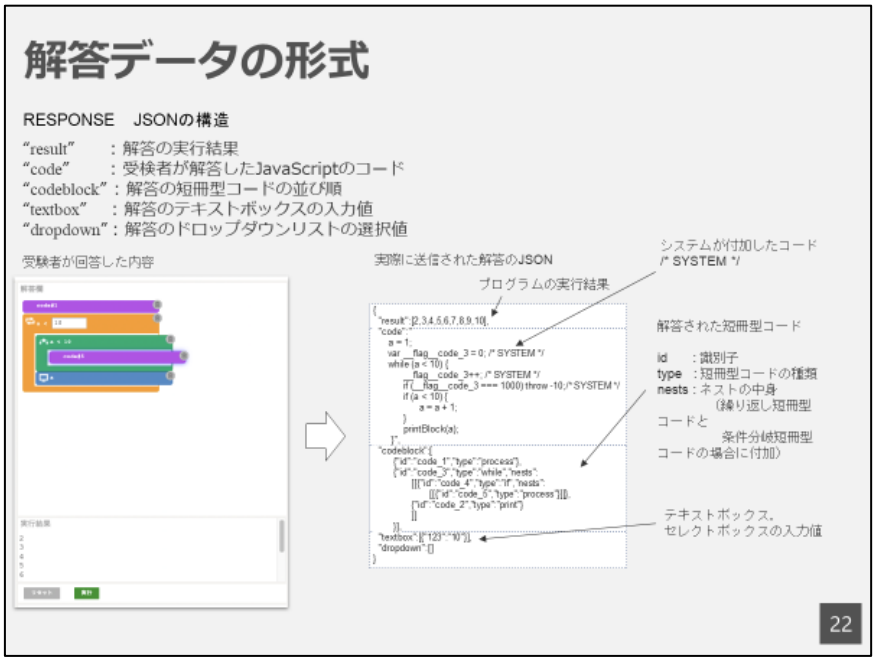


作問者と同様，コンソールにプログラムの結果が表示されます。

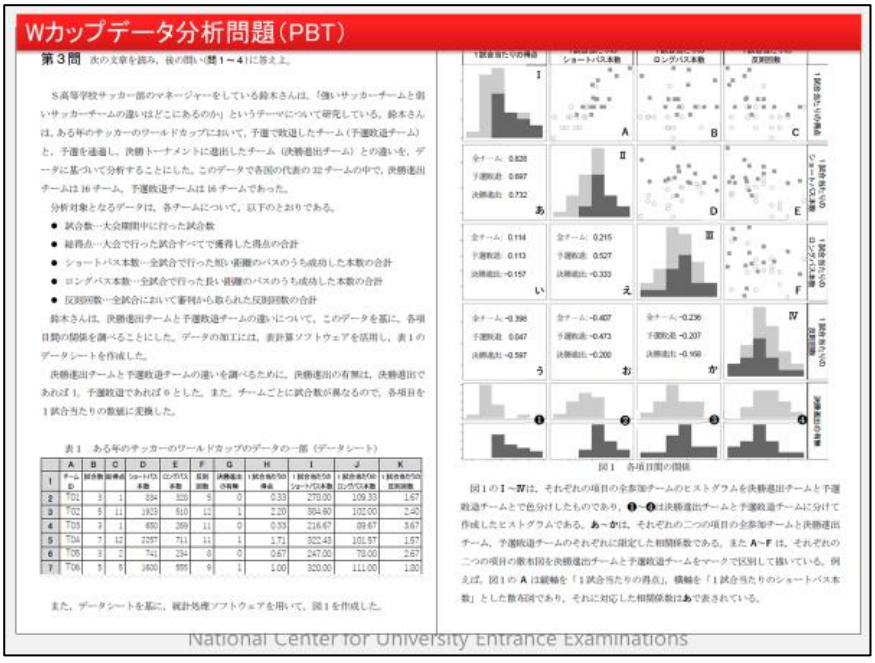


エラー内容	発生条件	対処方法
識別子が未入力です。	未入力	識別子を入力してください。
識別子が他の短冊型コードと重複しています。	他の短冊型コードと重複している	識別子重複部分を確認して重複しないよう再設定してください。
実行コードが未入力です。	未入力	実行コードを入力してください。
表示内容に入力したテキストボックスが、実行コードにありません。	表示内容にテキストボックスキーワードが存在するが、実行コードにない	実行コードにテキストボックスキーワードを入力してください。
表示内容に入力したドロップダウンリストが、実行コードにありません。	表示内容にドロップダウンリストキーワードが 存在するが、実行コードにない	実行コードにドロップダウンリストキーワードを入力してください。
利用できるテキストボックスは一つのみです。	テキストボックスキーワードが複数存在する	テキストボックスのキーワードの重複を削除してください。
利用できるドロップダウンリストは一つのみです。	ドロップダウンリストキーワードが複数存在する	ドロップダウンリストの中の重複を削除してください。
表示内容が未入力です。	未入力	表示内容を入力してください。
実行コードに入力したテキストボックスが、表示内容にありません。	実行コードにテキストボックスキーワードが存在するが、表示内容にない	表示内容にテキストボックスキーワードを入力してください。
実行コードに入力したドロップダウンリストが、表示内容にありません。	実行コードにドロップダウンリストキーワードが 存在するが、表示内容にない	表示内容にドロップダウンリストキーワードを入力してください。
テキストボックスの入力許可ワードが未入力です。	実行コードにテキストボックスキーワードを設定しているが、入力許可ワードが未入力	入力許可ワードを入力してください。

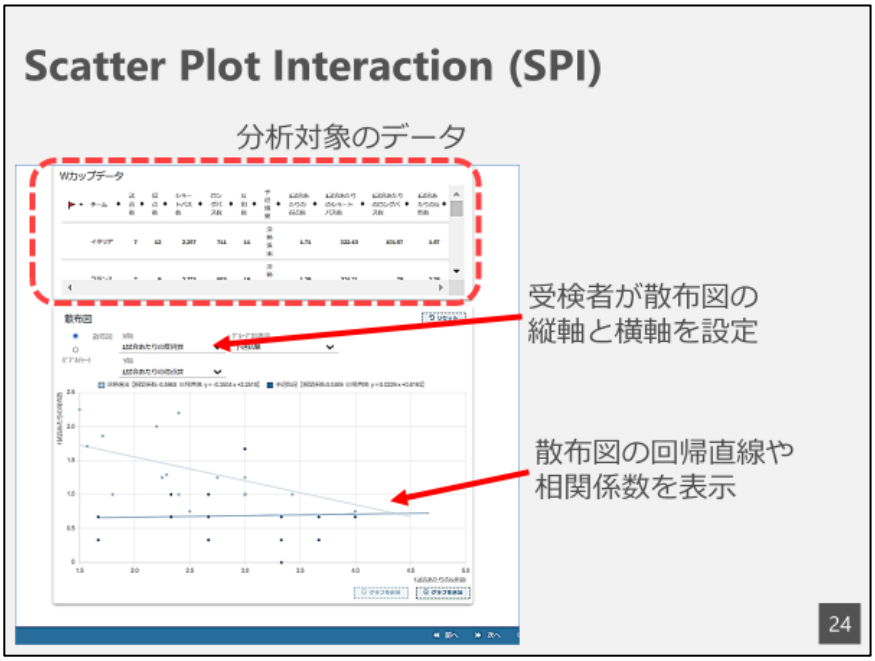
プログラムが適切でない場合，コンソールエラーが表示されます。エラーの一覧は，スライドの通りです。



解答結果は，JSON 形式で蓄積されます。コンソールの出力結果のみならず短冊型コードの並び順を保存します。



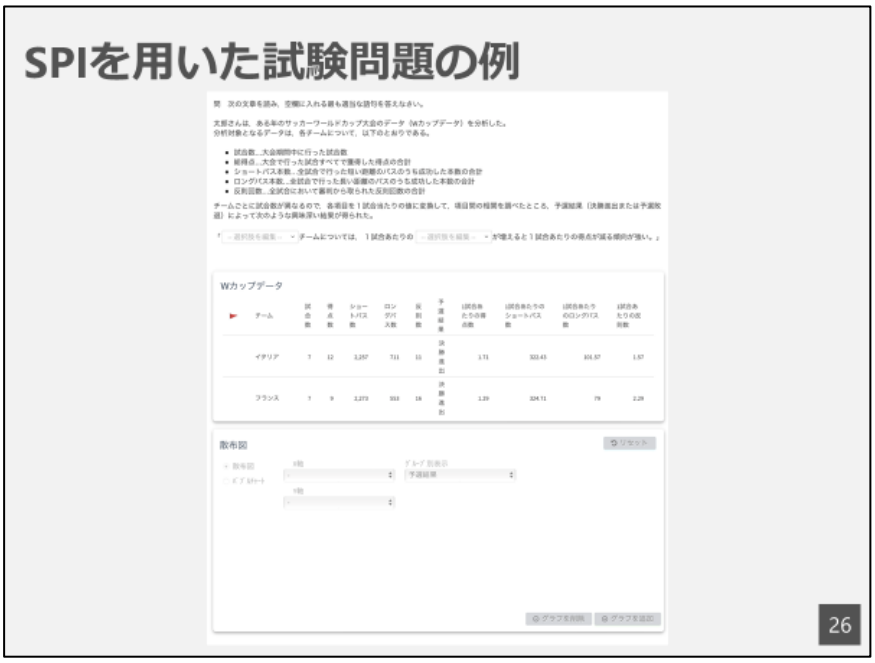
データ活用問題では，データを分析し，その分析結果から解答を考える必要があります。従来のマークシートの解答では，分析後の図表を示し，その図表から解答を考えるものでした。このため，受験者自身がデータを分析し，図表を作成することが困難でした。



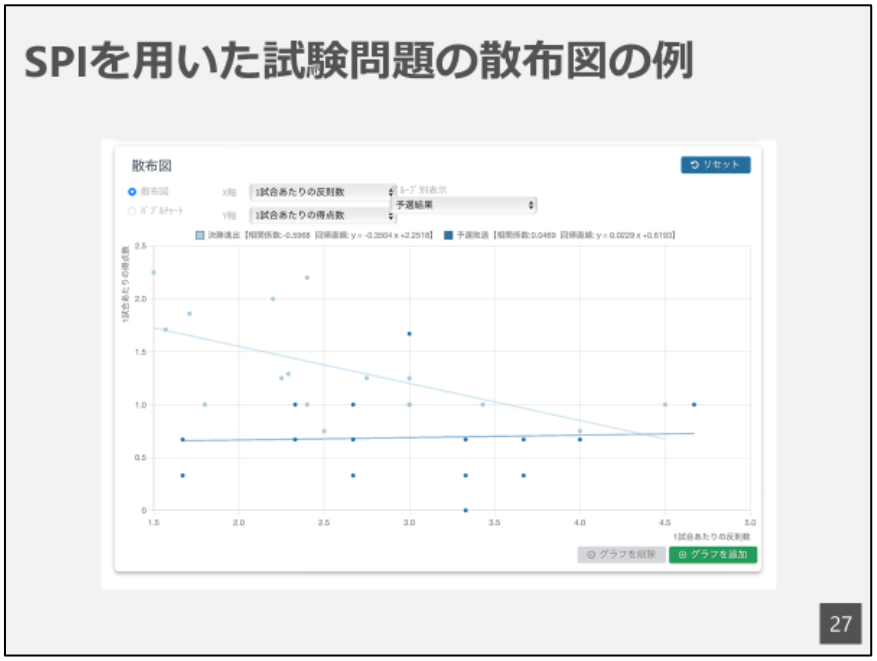
SPI では，事前に作問者が CSV 形式でデータを登録し，そのデータについて受験者が分析軸を選ぶことで散布図を表示できます。受験者は，散布図の回帰直線や相関係数の結果を踏まえて試験問題に解答することができます。なお，SPI は，外れ値を除外して分析結果を表示することが可能です。



SPI を用いた試験問題の例です。SPI を用いてデータを分析し，その分析結果を踏まえて選択肢から解答を選択します。



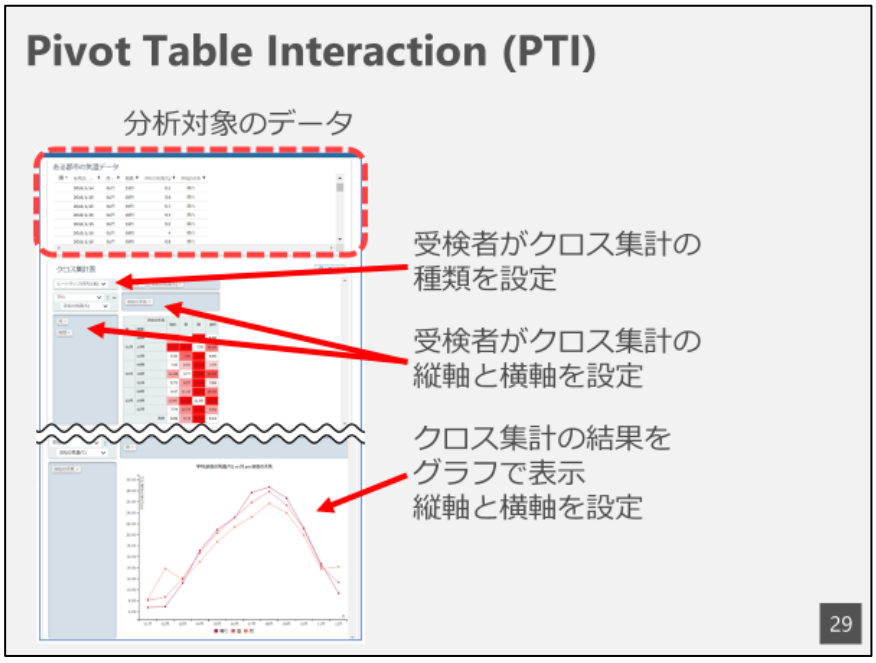
受験者には，試験問題，データ，散布図が表示されます。



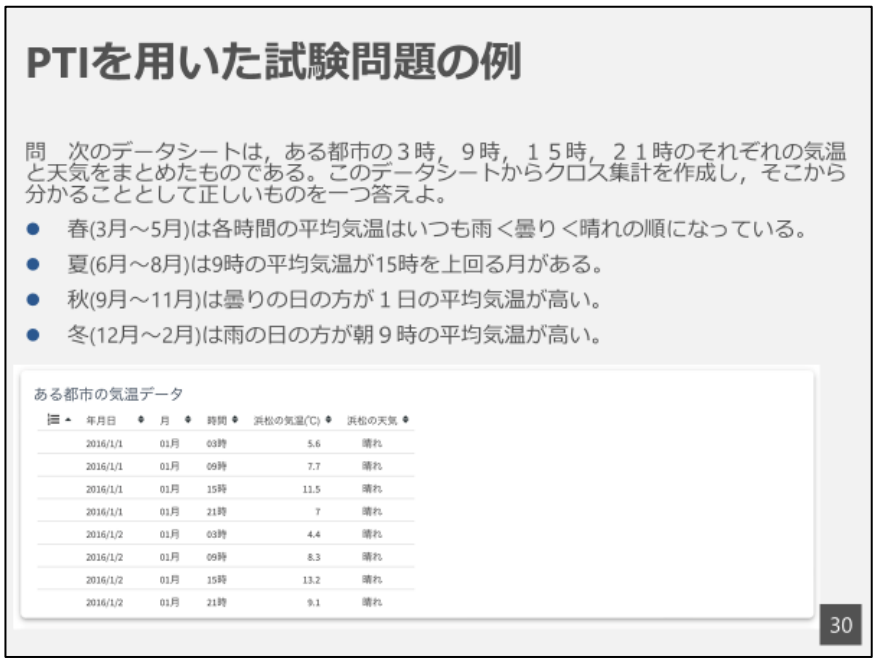
受験者は，散布図を作成しながら適切な選択肢を選ぶという形式になっています。



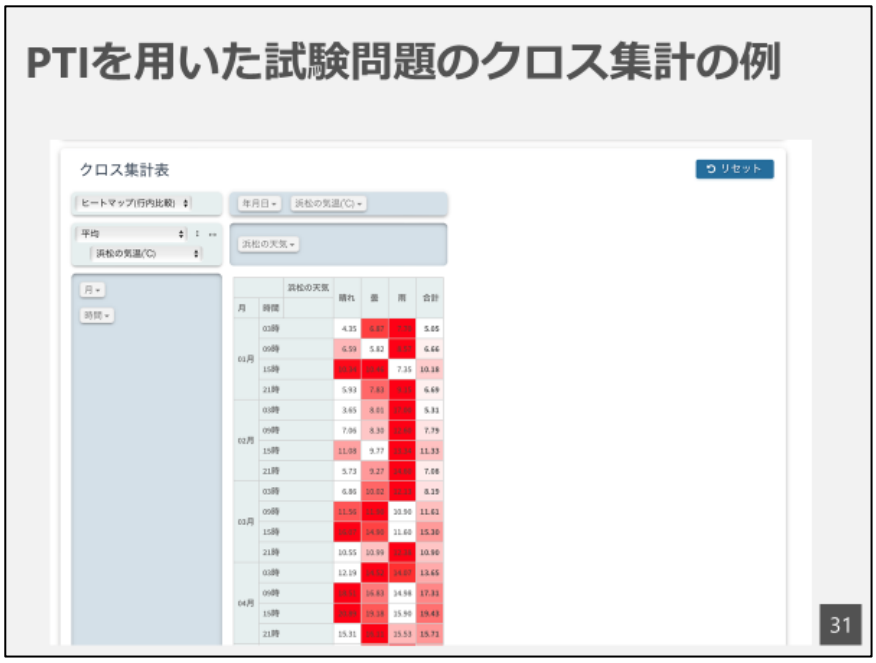
ここからは，クロス集計についてです。従来のマークシート方式ではさまざまなクロス集計表を表示しなければなりませんでした。



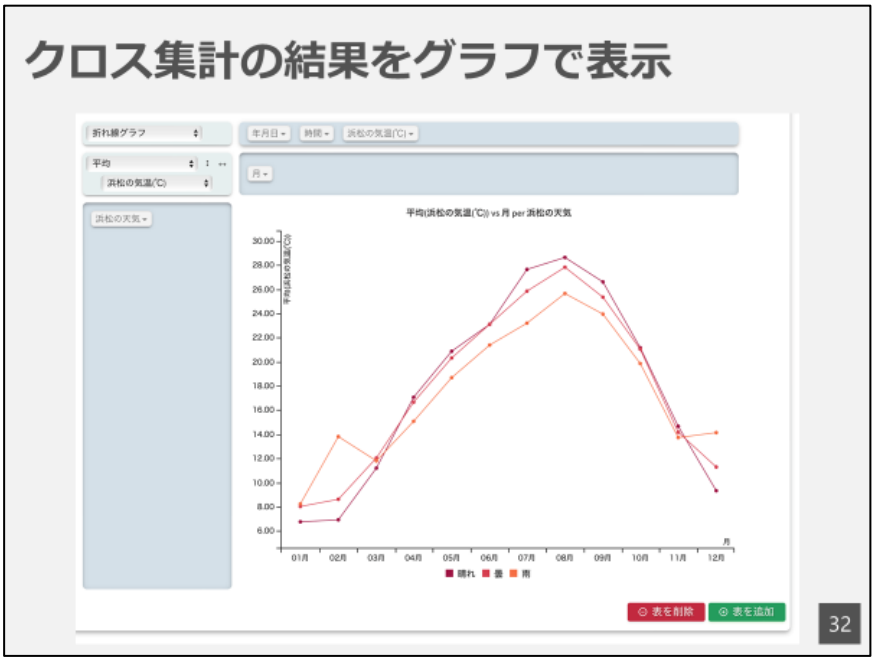
PTI では，受験者がクロス集計の分析軸等を設定し，その集計結果やグラフを踏まえて試験問題に解答できます。なお，集計値には，件数合計，平均最大・最小を設定でき，グラフには表形式やヒートマップ，折れ線グラフ，棒グラフ，積み上げ棒グラフ，積み上げ折れ線グラフを表示できます。



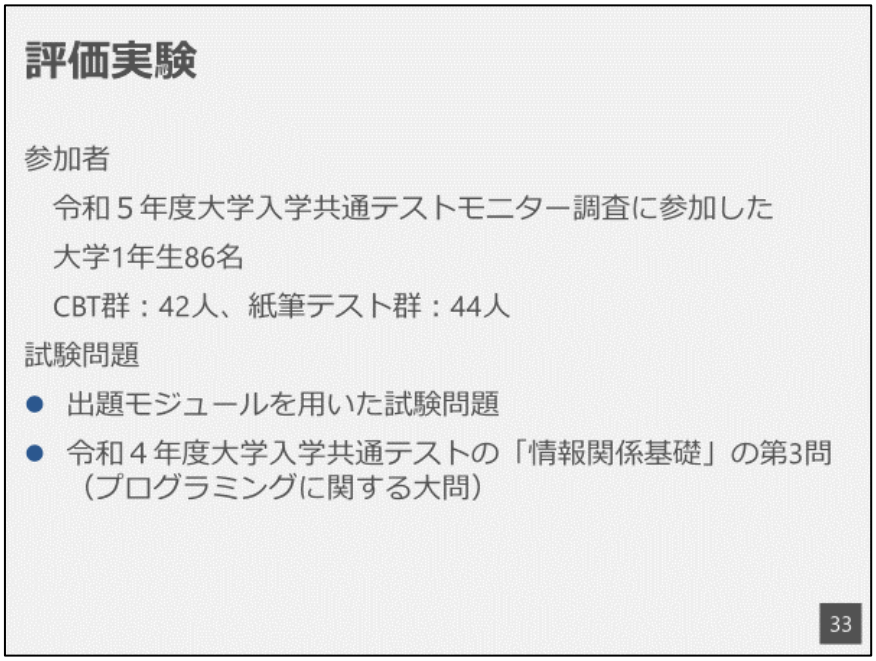
PTI を用いた試験問題の例です。SPI と同様，PTI では，データの分析結果を踏まえて選択肢から解答を選択します。



受験者は，縦軸と横軸を設定してクロス集計表を作成できます。



また，クロス集計の結果をグラフで表示することができます。



調査研究では，モジュールの操作性を評価するために評価実験を実施しました。評価実験は，参加者は令和 5 年度大学入学共通テストモニター調査に参加した大学 1 年生 102 名，2023 年 1 月 15 日の総合領域と呼ばれるところで統計・情報の時間枠で実施しました。参加者は，欠席者を除き，CBT 群は 42 名，そのうち文系 22 名，理系 20 名でした。紙筆テスト群は 44 名，そのうち文系が 21 名，理系が 23 名でした。

テストには，センターの CBT の情報 I の出題に関する調査研究で作成された試験問題を用いています。また，従来の試験問題の形式としてセンターの問題バンク構築に関する調査研究で作成された試験問題の一部，及び令和 4 年度大学入額共通テストの情報関

係基礎のプログラミングに関する大問を利用しました。

SPI と PTI では，散布図やクロス集計表の縦軸・横軸を受験者が設定し，その結果を踏まえて設問文に解答する出題形式を実現できます。紙筆テスト群では，事前に幾つかの散布図やクロス集計表を提示し，その図表を踏まえて解答する試験問題を参加者に出題しました。なお，紙筆テスト群のテストは，CBT 群と同様な試験問題になるよう作問されています。



実験結果

問題番号	内容	正答率		I-T相関	
		CBT	P&P	CBT	P&P
第1問	擬似乱数のプログラミング穴埋め問題	0.38	0.30	0.27	0.35
第2問	素因数分解のプログラミング穴埋め問題	0.07	0.09	0.45	0.50
第3問	バブルソート （CBTではCBPを用いた試験問題を出題）	0.24	0.20	0.54	0.52
第4問	シーザー暗号 （CBTではCBPを用いた試験問題を出題）	0.14	0.05	0.64	0.29
	～～～（中略）～～～				
第7問ア	データ活用問題 （CBTではSPIとPTIを用いた試験問題を出題）	0.64	0.59	-	-
第7問イ		0.48	0.80	-	-
第7問ウ		-	0.55	-	-
第8問		0.14	-	-	-

34

実験結果には，CBT 群と紙筆テスト群の正答率と I-T 相関係数を示しています。なお，配点は 1 点としています。

第 3 問と第 4 問は，CBT では CBP を用いた試験問題であり，紙筆テスト群と比較して正答率が高いことが分かります。CBP では，プログラムの結果を参加者にフィードバックしています。このため，このフィードバックが試験問題のヒントとなり，正答率が向上したことが予想されます。

一方，プログラミングの穴埋め問題では，CBT と紙筆テストの正答率の差は小さいことが分かります。

データ活用問題については，紙筆テスト群の正答率が高い傾向があります。紙筆テスト群では事前に散布図やクロス集計表が掲載されています。一方，SPI と PTI を用いた試験問題では，散布図やクロス集計表を各自作問する必要があるため正答率が低くなったと考えられます。

I-T 相関性については，CBT を用いた試験問題の値が高いことが示唆されました。このことから，この試験問題は十分な識別力のある項目であるということが示唆されています。

実験結果（理系）

問題番号	内容	正答率		I-T相関	
		CBT	P&P	CBT	P&P
第1問	擬似乱数のプログラミング穴埋め問題	0.50	0.43	0.43	0.24
第2問	素因数分解のプログラミング穴埋め問題	0.15	0.17	0.42	0.47
第3問	バブルソート （CBTではCBPを用いた試験問題を出題）	0.50	0.35	0.45	0.52
第4問	シーザー暗号 （CBTではCBPを用いた試験問題を出題）	0.30	0.09	0.62	0.25
	～～～（中略）～～～				
第7問ア	データ活用問題 （CBTではSPIとPTIを用いた試験問題を出題）	0.55	0.74	-	-
第7問イ		0.50	0.91	-	-
第7問ウ		-	0.70	-	-
第8問		0.15	-	-	-

35

理系学生の結果についてです。CBT を用いた試験問題は，紙筆テストと比較して文系を含めたものよりも正答率が高く，理系参加者の正答率の差，紙媒体と CBT との差が大きいことが分かります。

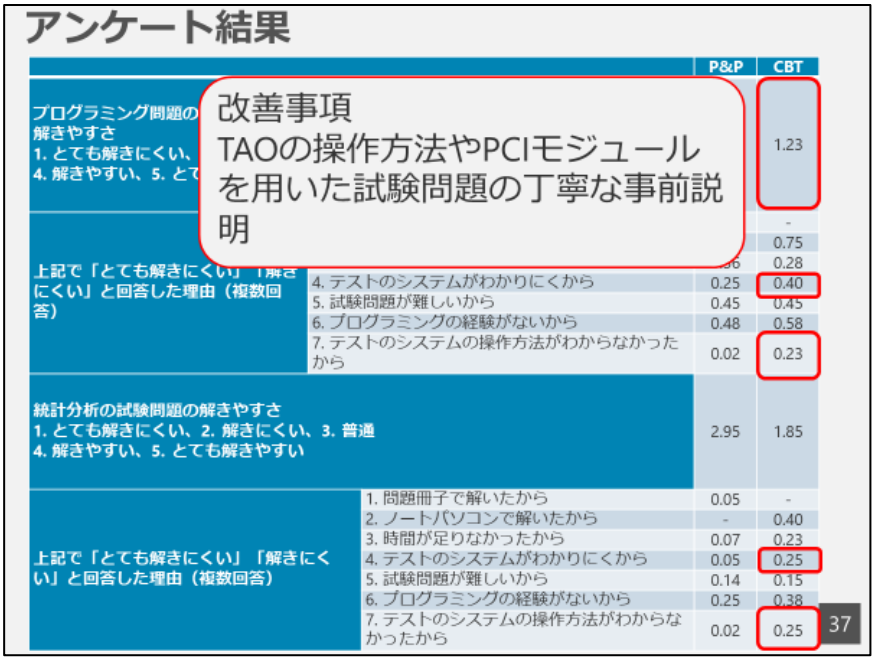
アンケート結果

		P&P	CBT
プログラミング問題の試験問題の解きやすさ 1. とても解きにくい、2. 解きにくい、3. 普通 4. 解きやすい、5. とても解きやすい		1.27	1.23
上記で「とても解きにくい」「解きにくい」と回答した理由（複数回答）	1. 問題冊子で解いたから	0.16	-
	2. ノートパソコンで解いたから	-	0.75
	3. 時間が足りなかったから	0.36	0.28
	4. テストのシステムがわかりにくから	0.25	0.40
	5. 試験問題が難しいから	0.45	0.45
	6. プログラミングの経験がないから	0.48	0.58
	7. テストのシステムの操作方法がわからなかったから	0.02	0.23
統計分析の試験問題の解きやすさ 1. とても解きにくい、2. 解きにくい、3. 普通 4. 解きやすい、5. とても解きやすい		2.95	1.85
上記で「とても解きにくい」「解きにくい」と回答した理由（複数回答）	1. 問題冊子で解いたから	0.05	-
	2. ノートパソコンで解いたから	-	0.40
	3. 時間が足りなかったから	0.07	0.23
	4. テストのシステムがわかりにくから	0.05	0.25
	5. 試験問題が難しいから	0.14	0.15
	6. プログラミングの経験がないから	0.25	0.38
	7. テストのシステムの操作方法がわからなかったから	0.02	0.25

36

最後にアンケート結果です。本実験の試験問題は CBP と紙筆テストの両方で解きにくいということが分かっています。紙筆テストでは，その解きにくさがプログラミング経験と試験問題の難易差によるものであることが分かります。

しかし，CBT では，「ノートパソコンで解いたから」が最も回答が多かったです。ここでは小型のノートパソコンを用いていて，試験問題の内容を全て画面に表示することができず，しばしば画面をスクロールする必要がありました。また，CBT には，メモ用紙を配布しましたが，設問に直接書き込むことができないという問題もあります。



改善事項としましては，TAO の操作方法で PCI モジュールを用いた試験問題の丁寧な事前説明が必要であると考えています。



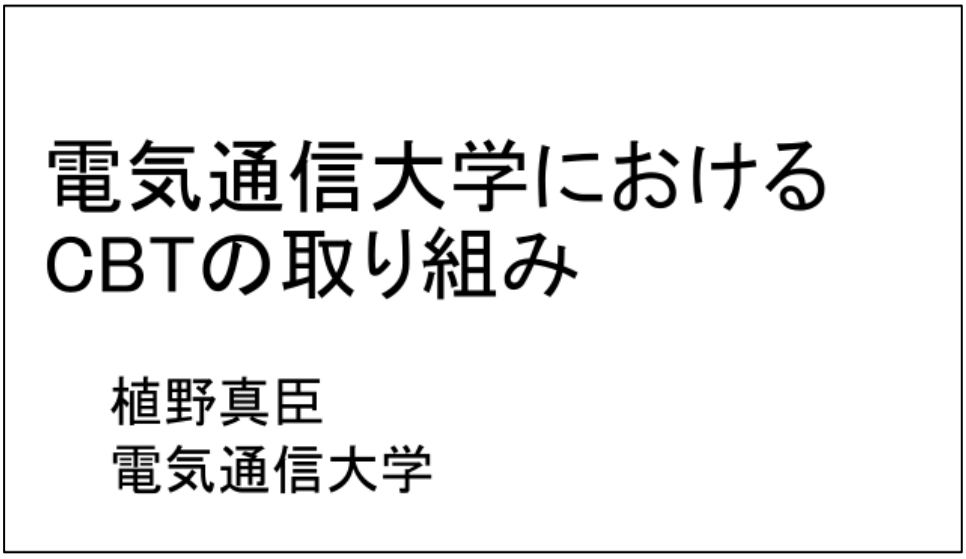
PCI モジュールは，GitHub 上で公開しており，各自でダウンロードし，自分の手元で実際に試してみることができます。ご興味がある方は実際にこちらからダウンロードしみてください。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 報告 6

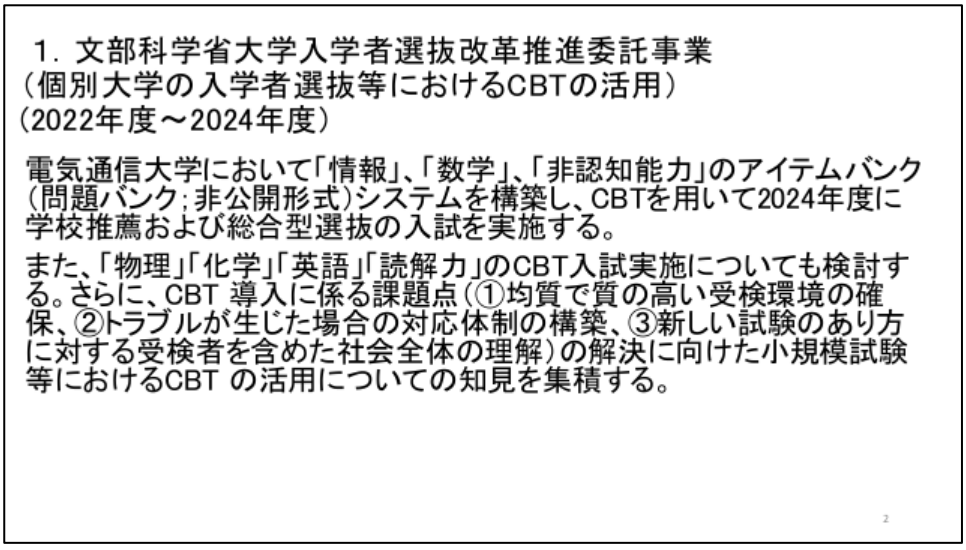
電気通信大学における CBT の取り組み

■植野　真臣（電気通信大学大学院情報理工学研究科教授）

電通大の植野と申します。よろしくお願いします。

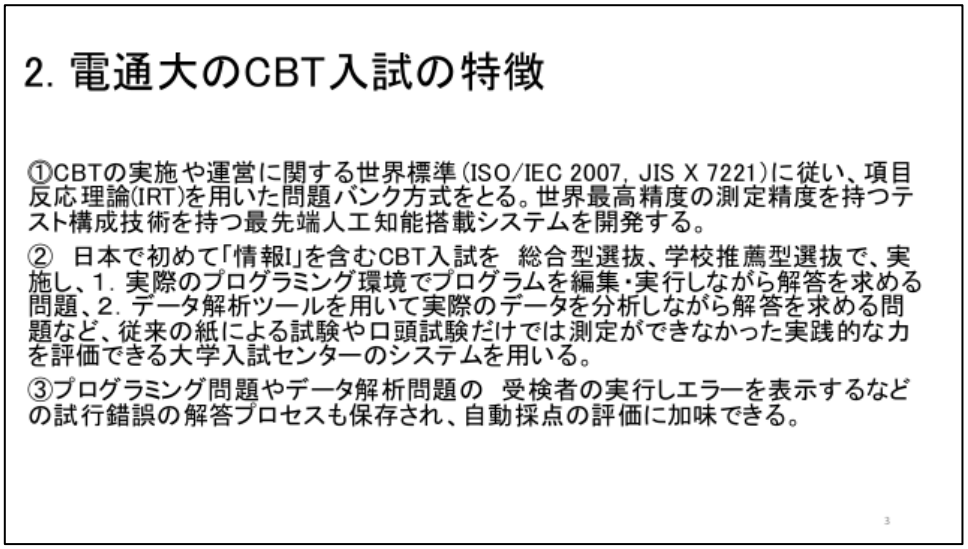


それでは，電通大における CBT の取り組みについてお話しさせていただきます。

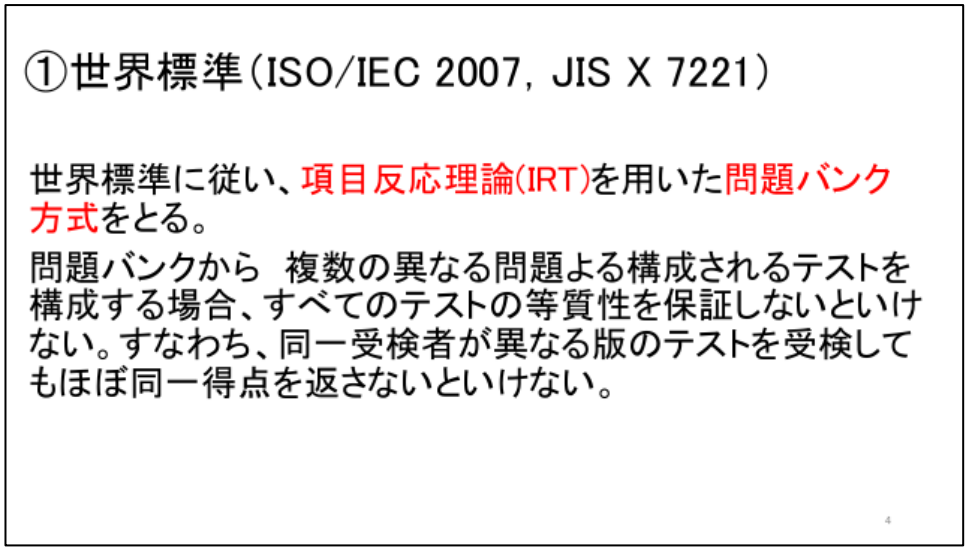


2022 年度から文科省の委託事業として CBT による入試を 2024 年度に行いました。事業内容は，情報，数学，非認知能力のアイテムバンクシステムを構築して学校推薦および総合型選抜の入試を実施すること，それから，物理，化学などの他教科についても検討してほしいということでした。特に委託の研究調査として大事なのは，冒頭に寺尾先

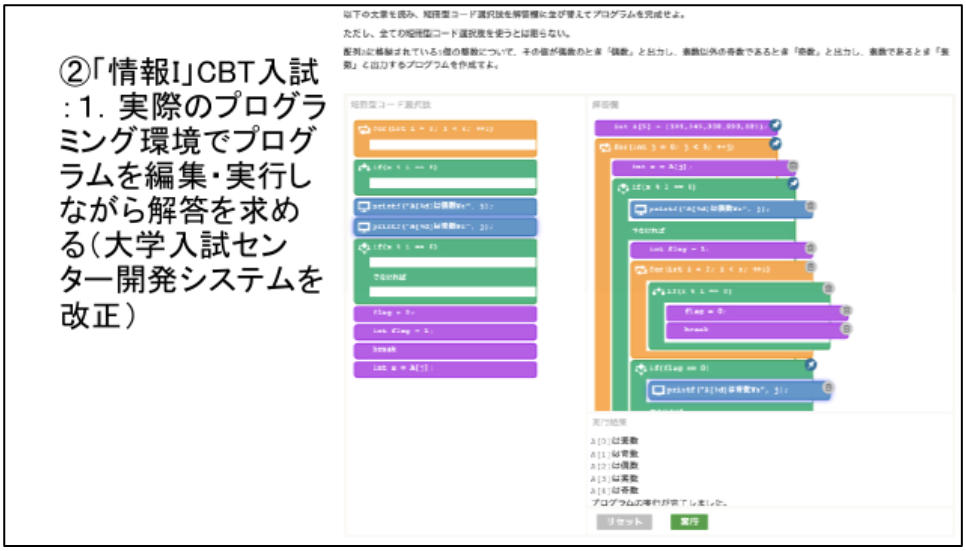
生からご解説があったように，均質で質の高い受験環境の確保，トラブルが生じた場合の対応体制の構築，新しい試験のあり方に対する受験者を含めた社会全体の理解であり，この 3 つに対して調査することがミッションです。



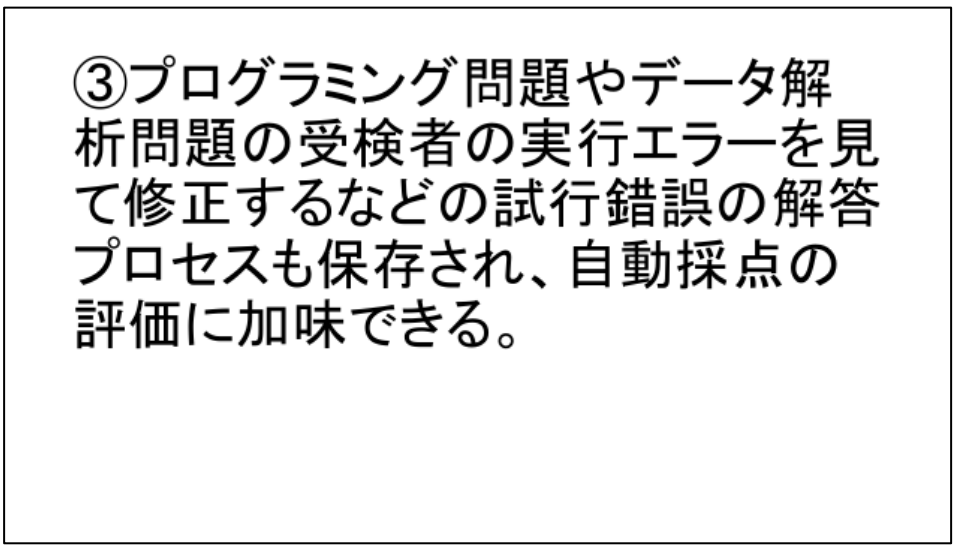
電通大の CBT の特色を簡単にご紹介しておきます。まず，先ほど宮澤先生からお話があったように，世界標準のシステムに対応すること，CBT の運用に対する世界標準にも対応することがミッションとしてありましたので，これを入れるようにしています。この中で何度か話に出てきました IRT という数理モデルを使わないといけません。それから，情報 I を含むような，先ほどの宮澤先生たちがご発表された PC 対応のものを用いて，実際にプログラミングをしながらデータ解析ツールを用いて問題を解くことができる入試を行います。それからその試行錯誤の解答プロセスを評価し，採点に入れていくということを考えています。



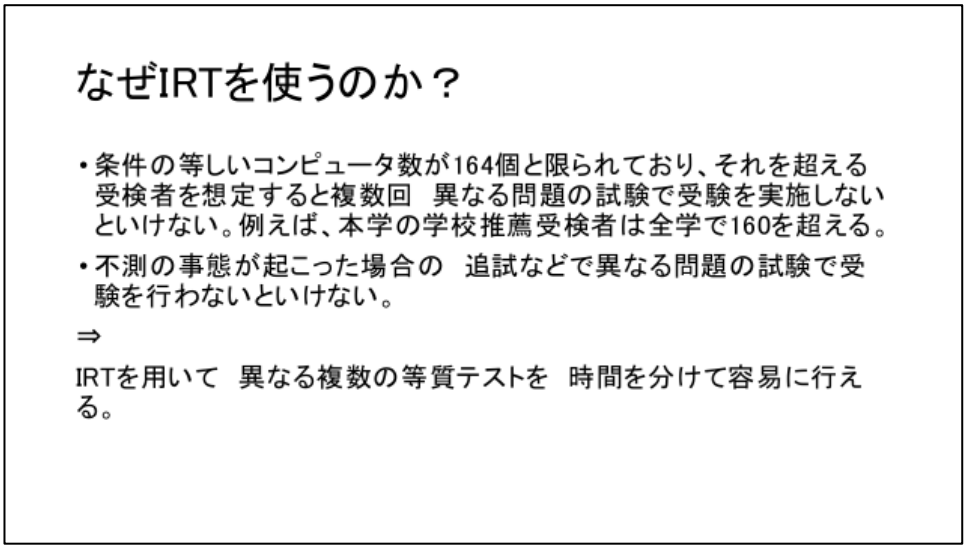
これらを一つずつ見ていきますと，世界標準に従うということはこの項目反応理論，IRT を使うということです。問題バンク方式を採用し，問題のデータベースを使います。このメリットは，西郡先生のご発表でもあったように，複数の異なる問題によって構成されたテストを用いてテストを行っても，全てのテストで等質性が保証される点です。すなわち，違う日に行っても等質なテストを実施することができます。



それから，先ほど宮澤先生たちからご発表のあった，大学入試センターが開発したプログラミング環境のシステムを電通大用に改変しています。どのような改変かといいますと，萩原先生のご発表でもあったように，このプログラムでは，一つのプログラムしか正解にはなりません。しかし複雑な課題を出すといろいろなパターンでプログラムが書けます。そのようなものは全て自動採点できます。それから，最後だけ間違えてしまった，そのような非常に惜しい場合も途中過程を見て部分採点ができる仕組みをつくっています。



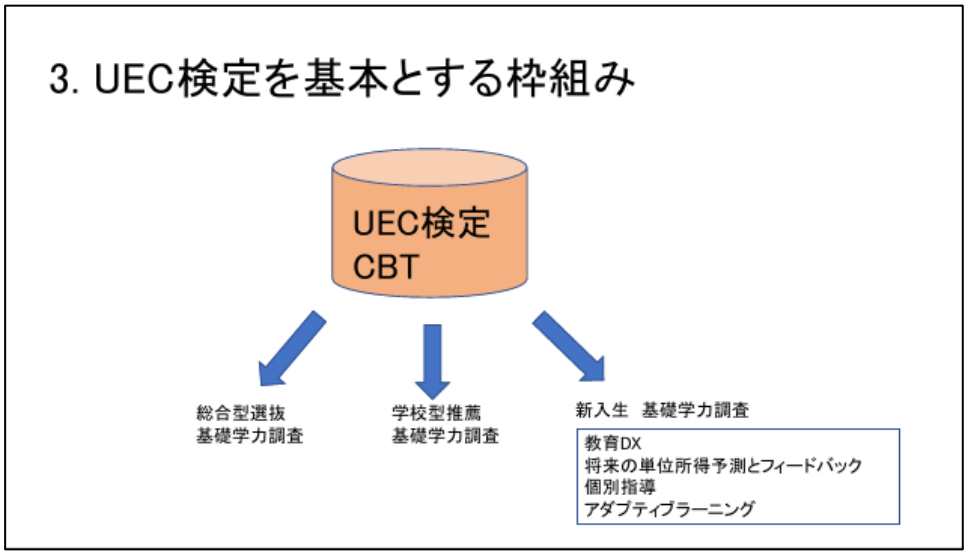
それをもう少し拡張しますと，プログラム問題やデータ解析問題において，受験者が修正するプロセスも全部含めて残していけるわけです。それも含めて自動採点し評価できる，そのような仕組みを開発中です。



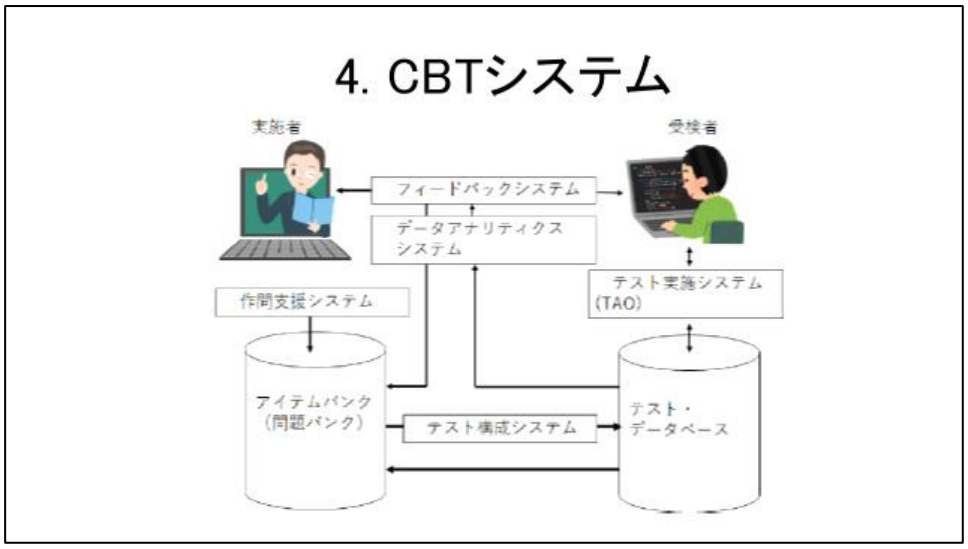
なぜ IRT を使うかといいますと，本学では IRT を使わないと実施できないためです。タブレットであれば数を揃えられますが，コンピュータの場合，条件の等しいものが本学では現在 164 個と限られています。それを超える受験者が来た場合複数回に分けてテストを行わなければいけません。

例えば，本学の学校推薦では受験者が 160 名を超えていますので，その時点で複数回のテストを行わなければいけません。また，不測の事態が起こった場合の追試などのために，異なる問題の試験を準備する必要があります。

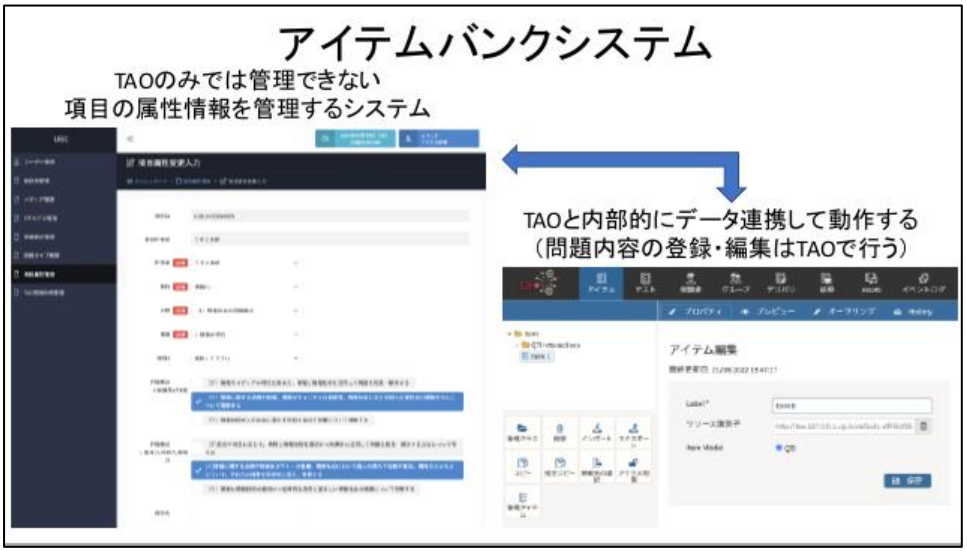
なぜコンピュータでやらないといけないのかといいますと，世界標準に従った仕様のソフトウェアによる実行のためには，パーソナルコンピュータを使わなければならないためです。今，われわれが頂いているミッションの中では，このような環境でやらざるを得ないということなのです。



われわれは UEC 検定という基礎学力調査を開発しました。本学が開発した,一般的な数学検定，英語検定のようなものだと思ってください。本学の入試にも耐えられるようなものとして行っています。これを入学時や，総合型・学校推薦型選抜時に受けさせることで，基礎学力を見るという使い方をします。英検を入試にも使うとか，そのような感覚だと思っていただければいいと思います。

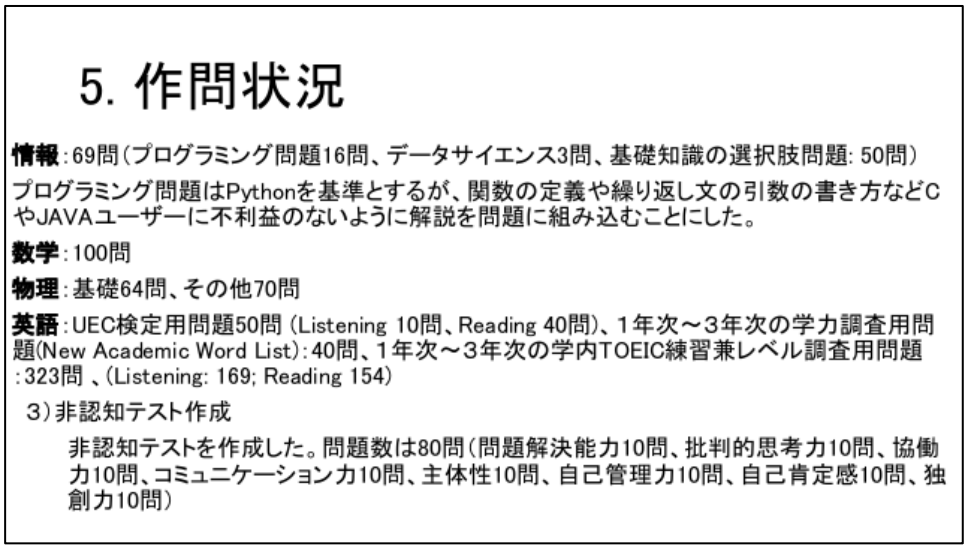


CBT システムを作っています。アイテムバンクとは問題のデータベースのことで，テスト構成システムができますと，AI を使って自動的に複数の等質のテストを即座につくることができます。実施システムは世界標準のシステムがありますのでそれを使います。それから，データアナリティクスや自動採点のシステムをつくっています。



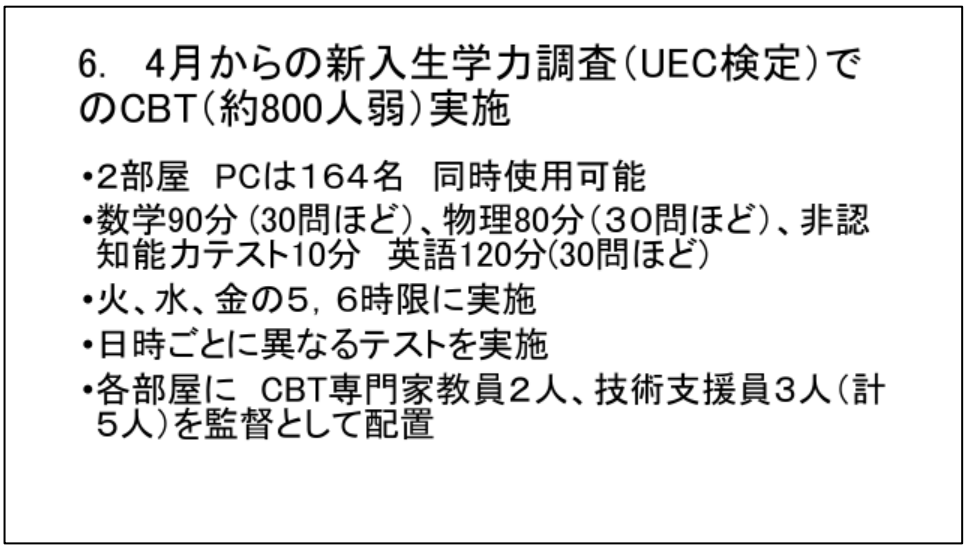
現在，このようなアイテムバンクのシステムができています。問題の内容だけではなく，IRT のデータや領域などを設定することができます。ユーザーがこういう領域からも何本ずつ出してくださいとか，誤差がこれぐらいになるようなテストをつくってくださいと指示することで，AI がテストをパラメータから等質になるようにつくってくれる，

そのような仕組みです。

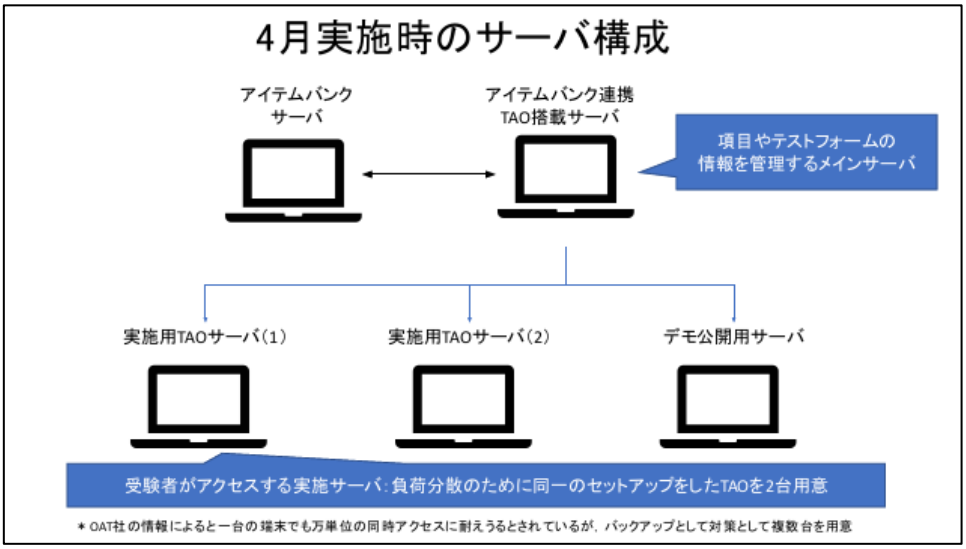


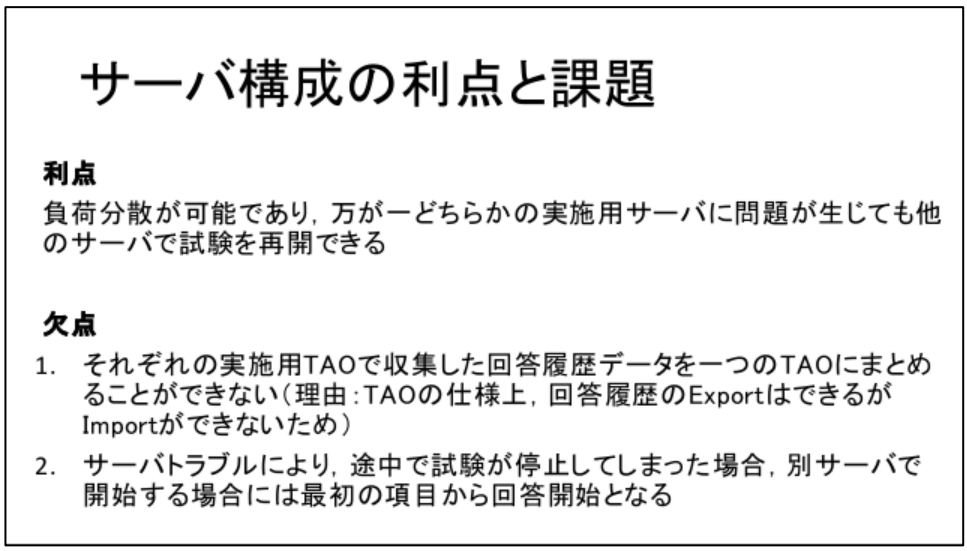
今，事業が始まってまだ半年ぐらいですが，情報では情報部会の先生が頑張ってくれていて，先ほどのプログラムをつくる問題が 16 問，データサイエンスの問題が 3 問，それから，基礎知識の選択肢問題が 50 問できています。プログラミングの問題は Python を基準にしています。

それから，数学は 100 問，物理は 134 問，また，英語は CBT に慣れていらっしゃるみたいで，すでにかなりの数ができています。それから，非認知テストは既にできています。問題解決の批判能力やコミュニケーション力を測るテストであり，既に実施しています。

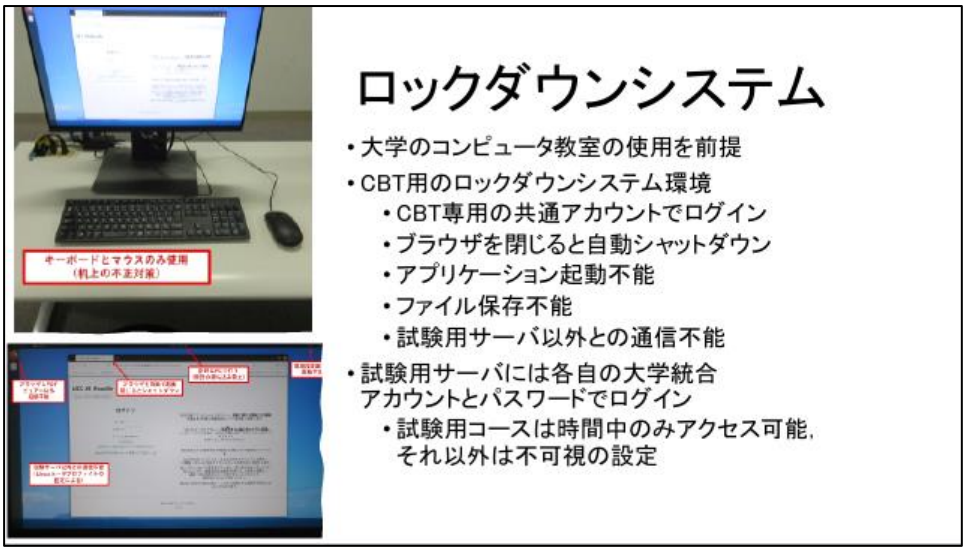


4 月からは新入生を対象に基礎学力調査を行っています。数学，物理，英語と非認知能力テストを大学として行います。これが数年後の CBT 入試の練習にもなっています。各部屋に CBT の専門家教員を 1 人，技術支援員が 2 人を監督として配置し，計 3 人体制で実施します。

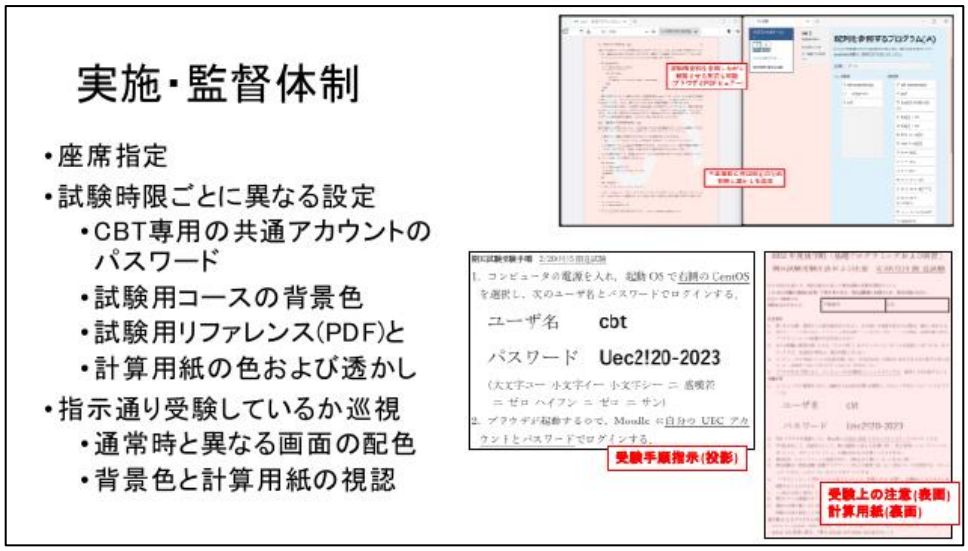


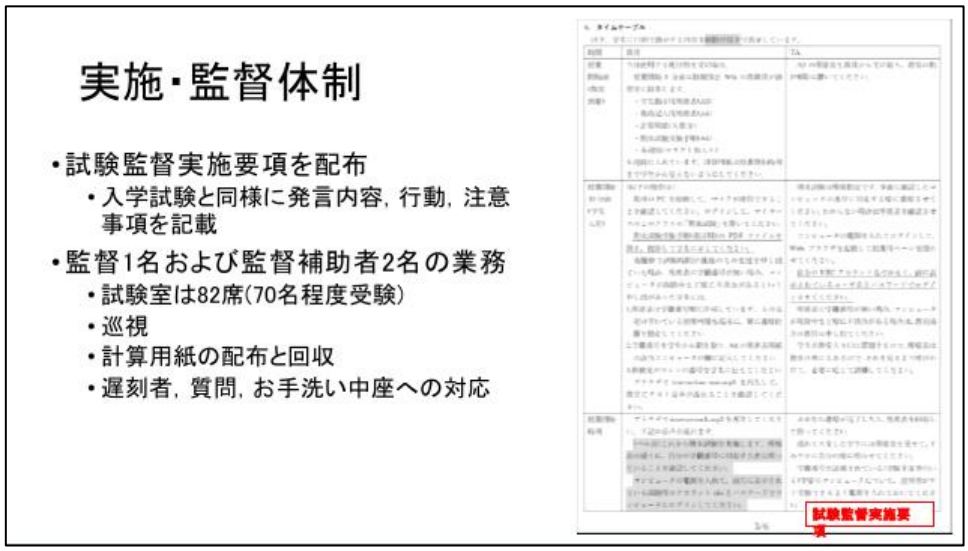


サーバー構成については，TAO という CBT サーバーを 2 台用意しています。安全のために分散して 2 台で行っています。事前の負荷テストにおいて特段問題がなかったため，このような設定にしました。

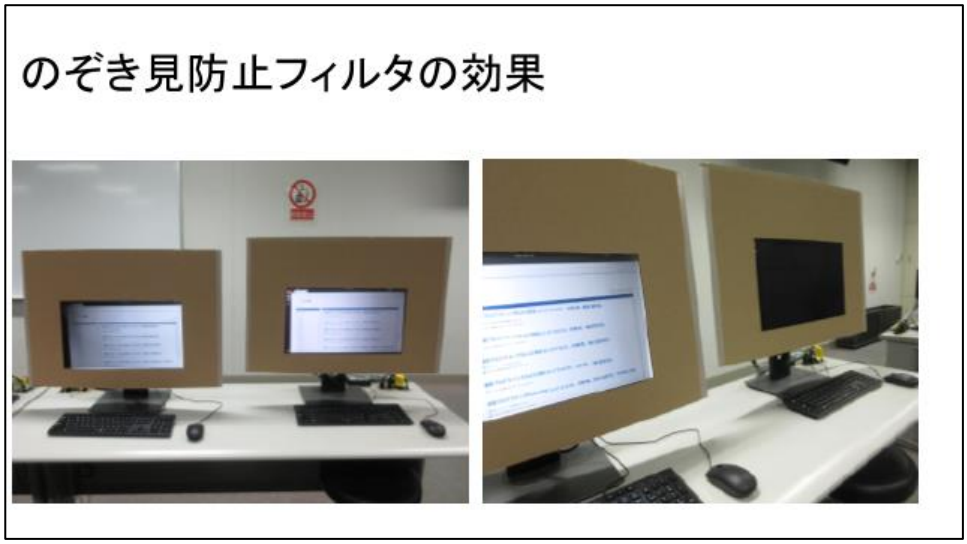


それから，ロックダウンシステムです。これは海外の CBT だと必ず使われているものなのですが，いろいろな会社が作っています。ネットワークは完全に遮断されますし，CBT を行う時に不審な操作をするとすぐ動かなくなるというようなセキュリティシステムを使っています。学生さんは全員違うテストを受けていますので，一人一人にこのような違う CBT のパスワード等が与えられることになります。

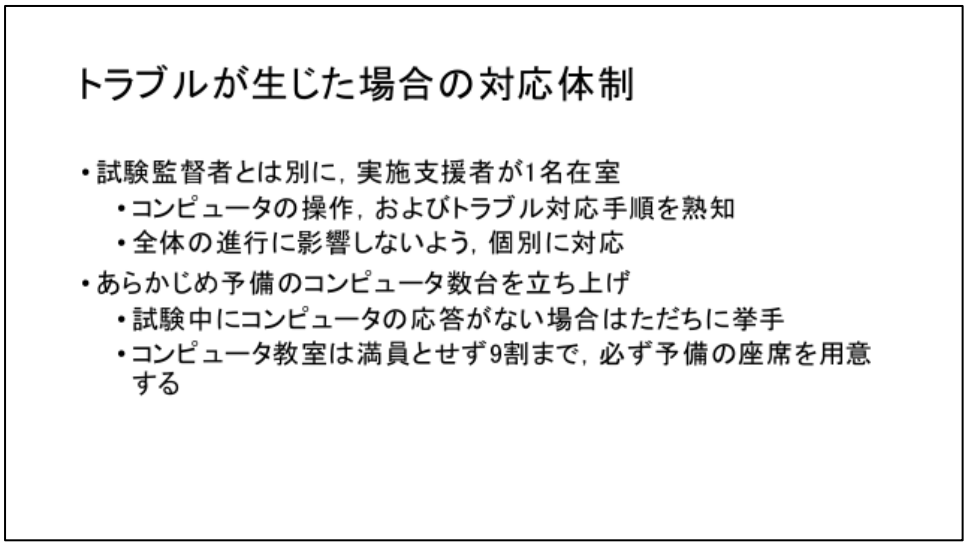




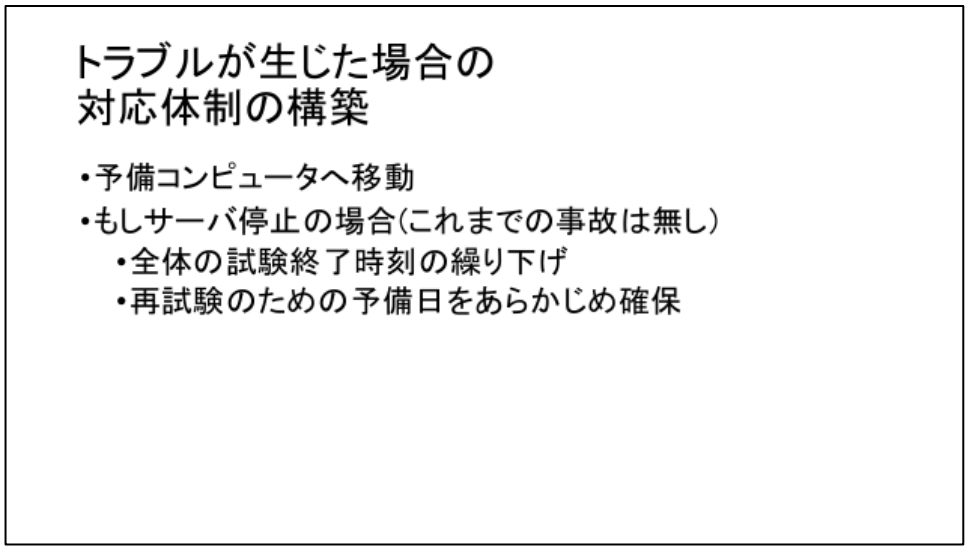
このような試験監督実施要項も作成していただきまして，これに従ってやっておけば実施できるということです。



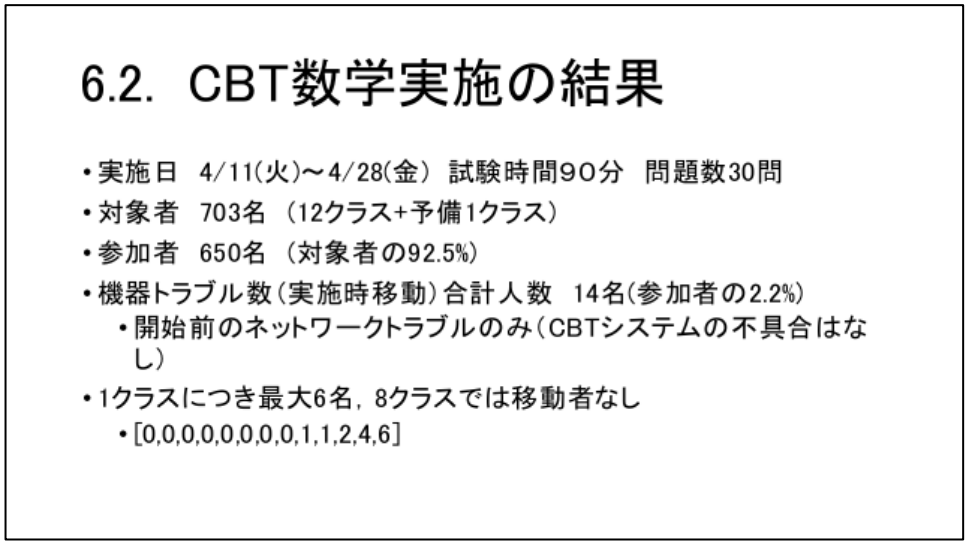
受験者ごとに問題は異なりますが，念のためフィルターを付けて横が見えないようにしています。斜めから見ると真っ黒に見えますが，正面から見るときちんと見えています。これは実験していた時のものです。



それから，試験監督者及び監督補助者のほかに実施支援者を１名配置し，トラブル対応をお願いしています。また，予備のコンピュータが 1 割あり，トラブル時にはそちらに移ってもらいます。



今回はありませんでしたが，もしもサーバーが停止した場合は試験日を変えて実施することになります。



4 月から始め，今も実施しているところですが，数学は完全に終わりました。対象は 703 名，そのうち受けていただいたのが 650 名です。約 50 名は欠席しました。650 名中 14 名が席を移動しました。ただ，これは開始前のネットワークトラブルがあったようで，CBT システムが悪いとか故障があったということではありませんでした。

問題の平均正答率は 0.7，標準偏差が 0.2 です。平均所要時間 3 分程度の問題が出て，標準偏差が 104 ですので 1 分から 5 分ぐらいの問題が出ています。90 分で 30 問です。大体，平均時間は 3 分ですのでうまくいっていると思います。

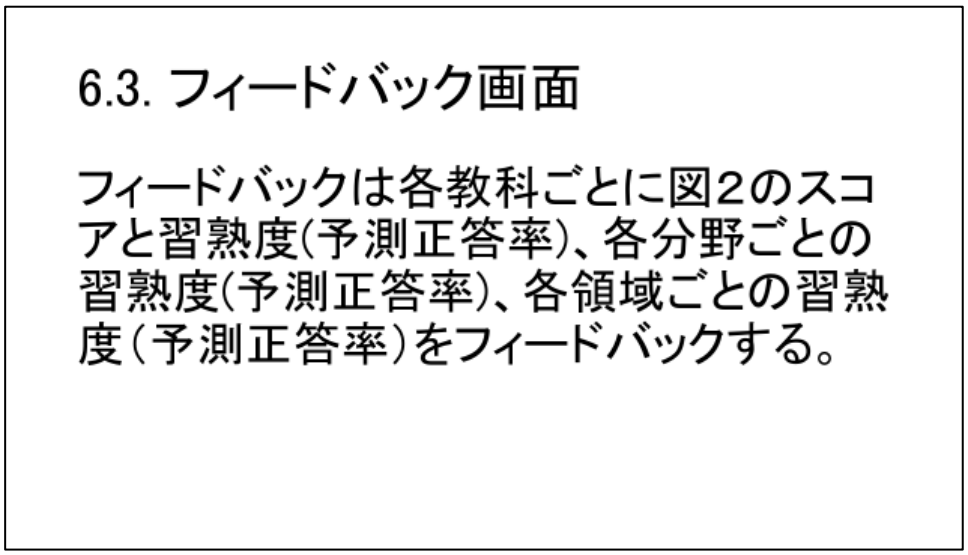
初期値はアイテムバンクにデータがありませんので，専門家がこれぐらいの問題でこのようなものでしょうと大体の推定値を決めてテストを作成しています。横軸が点数で，縦軸が誤差です。軌道に乗ってきて良いアイテムバンクになると 2 点以下の誤差になります。

他の値から大きく外れている人が点在していますが，すごく誤差が大きいので，6〜7点ほど実力より高く又は低く出てしまいます。アイテムバンクの利用を重ねていくうちに，このような誤差が段々となくなってきて，この幅も一致していくはずです。今までの経験では，問題数が増えてデータ数が増えてきますとそのようになってまいります。

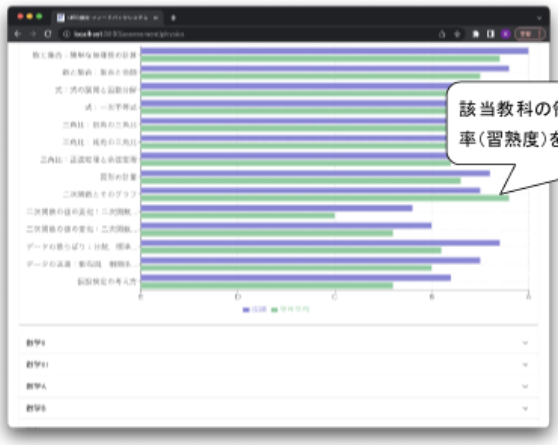
今，初期状態ですので良いほうだと思っています。これは大体，誤差が 3 点程度です。実施状況として毎日 150 名程度が受けていただいたということです。



問題が非公開であることと，データの使用についての同意書を取ります。それを承諾した人だけがテストを受けます。実際のテストはこのような形でほぼ単答式，半角で入れていく問題が多いです。非認知だけはアンケート的な感じのものになります。

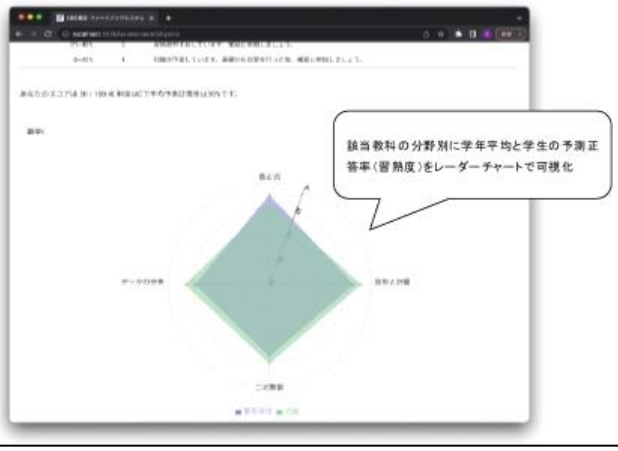


領域別フィードバック



25

分野別フィードバック



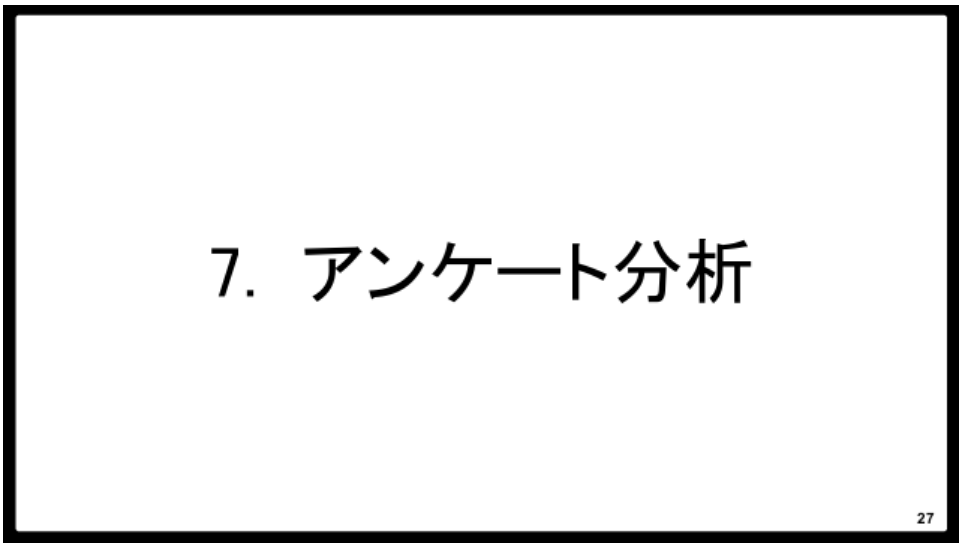
非認知能力調査のフィードバック

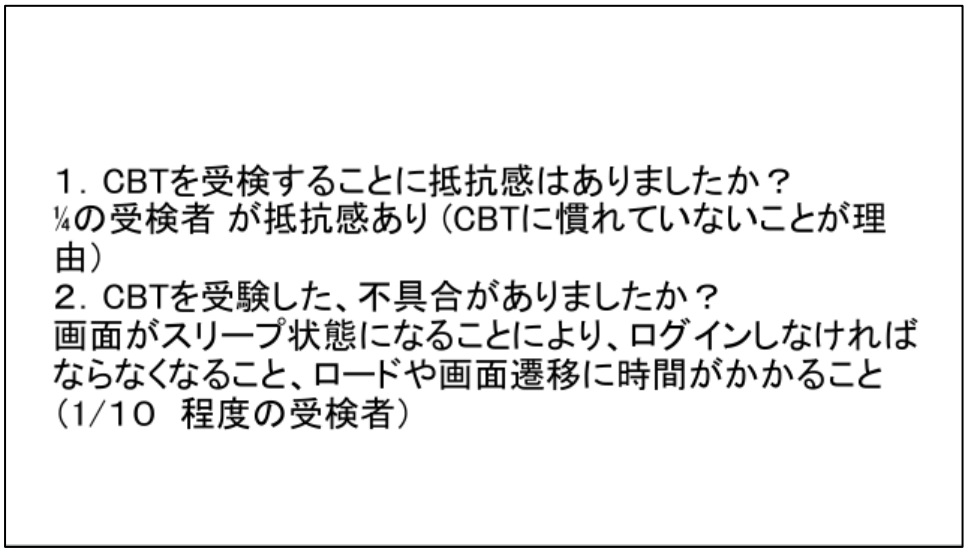


26

学生さんへのフィードバックですが，これが項目反応理論での能力値の分布です。全30 問のうちどの分野ができていないか，またその人がその問題を解いていたらどれぐらいできるかを AI が予測していきます。これは Knowledge Tracing という AI 技術です。9割程度の精度で予測できます。どの分野がどれぐらい正答できるのか，平均と比べてどうかを出していきます。さらにこれを詳しく各教科の領域ごとに出すことで，苦手な領域や，平均よりできていない領域が分かります。

将来的にはこれと単位や授業を紐付けて，この授業を取るためにはこれぐらい解いてほしいということをフィードバックに書くことができます。それも入試にも関係してきます。本学の授業についていけるのかを予測できるということになります。

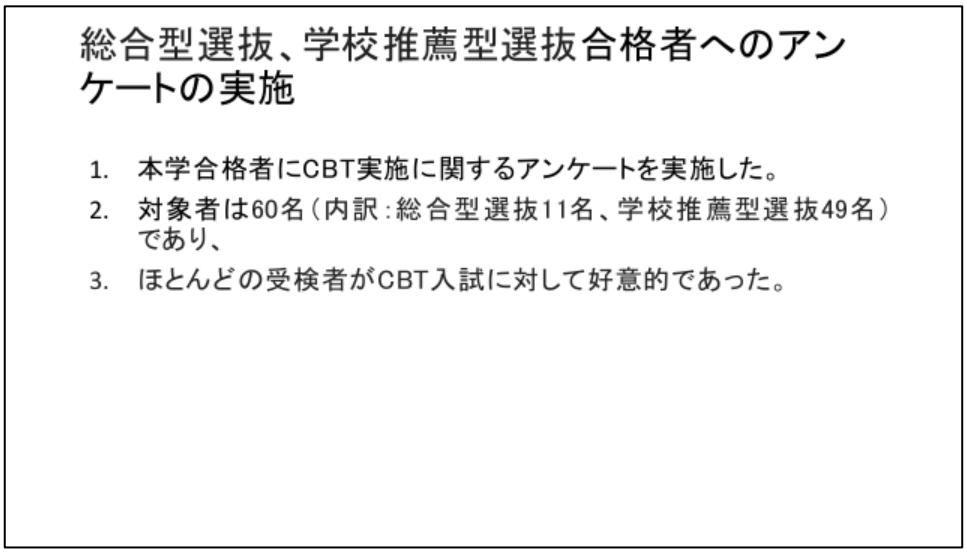




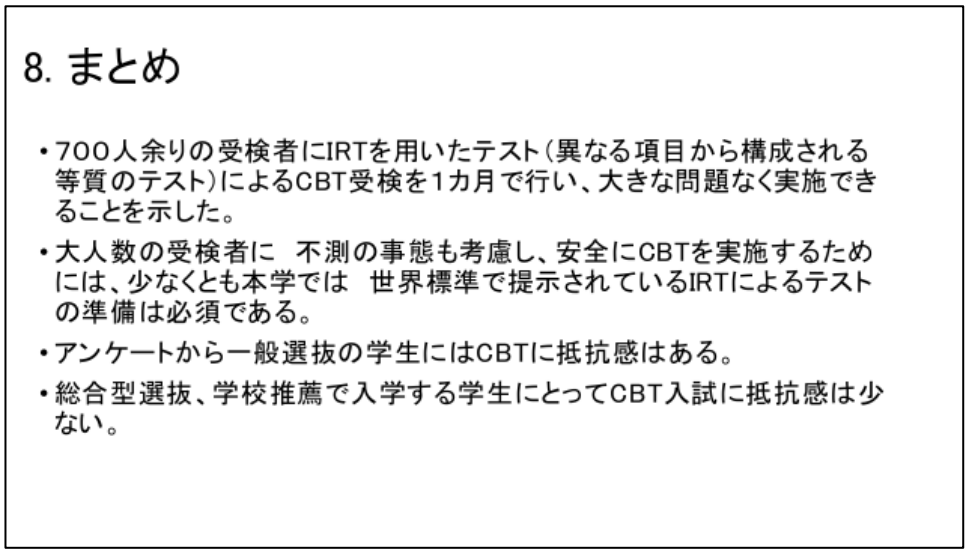
アンケートはあまり詳しくは出せませんが,「CBT を受験することに抵抗はありましたか」について，全学生に聞きました。「全くなかった」という回答がかなり多かったですが,「かなりあった」という回答も一部ありました。「不具合がありましたか」という質問については,「あった」という回答が少し見られました。

自由記述部分における不具合の内容を ChatGPT でまとめたものです。授業の途中であ

り，スリープになる仕組みがまだ残ったままで，15 分ごとログインしなければならず，それが面倒だということです。それから，たまに押してから反応が遅いという指摘もされています。



この試験は総合型選抜と学校推薦型選抜だけで用いるつもりです。その人たちだけへのアンケートをお見せしますと「大学入試において CBT を進めてよいか」では 90%以上が「進めてよい」,「自分は CBT 入試を受けてもよいか」では少し減って 73%でした。これは物理系や機械系の学生も入っているのですが，情報系の学生に絞りますとご本人たちは情報処理資格試験などを受けてこられていますので，90%以上がポジティブな反応を取っていました。



今回，700 人余りの受験者に IRT での CBT を実施しました。IRT を使わないと，追試等の不測の事態への対応ができず，安心感がないことが分かりました。そしてアンケート結果から，一般学生は CBT に抵抗があることが分かりました。先ほどのとおり，単位等との関係も見ていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。■

全体会 1（センターセミナー）◉ 全体討論

CBT(Computer Based Testing)における大学等機関の有機的な連携に向けて

■**西郡　大**（佐賀大学アドミッションセンター長）/**播磨　良輔**（九州工業大学情報基盤課長）/**堀越　健一郎**（大学入試センター事業部事業第一課試験実施第三係長）/**萩原　兼一**（大阪大学 名誉教授／大学院情報科学研究科招へい教授）/**宮澤　芳光**（大学入試センター研究開発部准教授）/**水野　修治**（大学入試センター試験問題調査官）/**植野　真臣**（電気通信大学大学院情報理工学研究科教授）/**寺尾　尚大**（大学入試センター研究開発部准教授■司会）

【寺尾・司会】　それでは，総合討論を始めたいと思います。まずは，いくつかご質問をいただいています。「Zoom のフォーカスモードについて具体的にはどのようなものでしょうか」というご質問です。堀越さん，お願いできますでしょうか。

【堀越】　フォーカスモードというのは，ホストや共同ホストからは参加者の顔が見られるが，参加者同士は見られないという機能です。これはアカウント設定時にフォーカスモードを有効にしておいて，ミーティング開始時に設定で「フォーカスモードを開始する」とすれば簡単にできる機能となっています。

【寺尾・司会】　どうもありがとうございます。これは事前知識としてお伺いしておきたいのですが，開発費あるいは導入費用について，はっきりとお答えいただけるものを冒頭に頂きたいと思うのですが，西郡先生，いかがでしょうか。

【西郡】　やはり何もないところからはかなり開発にかかりましたが，そこは文科省からの，国立大学でいうと第 3 期の中期目標計画の時に支援していただいた財源でやりました。結構かかります。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。播磨課長はいかがでしょうか。

【播磨】　総合型選抜を新たに導入するということで，ある程度お金がかかることは承知

して学内予算申請をして今やっているところです。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。QTI と TAO のところに補足説明が必要かなと思いましたので，私から一言申し上げたいと思います。

QTI は宮澤先生，植野先生のご発表で出てきましたが，試験問題とテストの書き方に関する文法あるいは相互運用できるようにするための決まり事のことです。TAO は，Open Assessment Technologies 社がつくっているオープンソースの，無料でどなたでもダウンロードできる CBT のプラットフォームです。QTI の書き方で試験問題を書くと，TAO でももちろんそうですし，TAO ではない QTI 準拠のシステムにおいても同様の表示形式あるいは解答データの蓄積の仕方で相互運用できるというところが大きなメリットであると。これは一言添えておきたいと思います。

では，総合討論へ移りたいと思います。進め方としては，まず第 1 グループを深める質問，次に第 2 グループを深める質問，最後にグループ間での論点ということで，大学間連携に向けて必要なものは何だろうかというところへ行きたいと思います。

ご登壇者の先生方のご発表を聞いていただいても分かるとおり，CBT と一口に言っても大変多様な CBT の姿があるということはよくご理解いただけたのではないかなと思います。入試業務を支える CBT もありますし，採点の即時性，あるいは，入試課の皆さんや入試に関わる教員の先生方の効率性というところもあります。より出題や測定できる能力にフォーカスした CBT もあるでしょう。また電通大の例で言えば，初年次教育での必要なスキルセットあるいは資質・能力というところから入試を考えていくという発想もあります。大変多様で，登壇者間でも意見が違うところもあることと思います。

まず，第 1 グループに問いかけたいこととして私が用意したことは，九工大と佐賀大とセンターの間で有機的な連携が既にできている状況だと見受けられました。互いの取り組みをどのように見ているのか気になるなと思っています。

例えば，西郡先生は九工大の取り組みをどのようにご覧になっているか，あるいは，佐賀大，九工大からご覧になってセンターの試行調査の実施方法はどのようにご覧になったか，お伺いできますでしょうか。まず西郡先生からお願いします。

【西郡】　九工大さんとは以前から，CBT に限らず共に試行錯誤しながらやってきていますので，ある意味同志のような感じです。九工大さんで検討された，試験終了後にデータを一気に吸い上げる機能など，新しい機能については，同じ基盤を使っているため，すぐに取り入れることができます。佐賀大学・九工大で出たアイデアをうまく共有して自分のところで使えるものはどんどん使っていきたいと思っています。

センターとのやりとりに関しましては，九工大さんからいろいろとコロナ時の運用については聞いていたのですが，かなり大変だっただろうなという印象を持っていましたので，ちょっとここには手を出せないなというところが私の個人的な印象としてはありました。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。播磨課長はいかがでしょうか。佐賀大の取り組みあるいはセンターの試行調査の実施方法をご覧になっていかがでしょうか。

【播磨】　佐賀大学さんとは，今，西郡先生がおっしゃったようにかなりいろいろと連携はしていますので，お互いに良いところを取り合ってより良いものをつくっていければいいなと思っています。

センターの試行調査は，本学もオンラインでやりましたので非常に大変だったろうなと思っています。実際にコロナ対応で行いましたが，やはり緊急的なものでしたので，それを恒常的にやるにはハードルがまだまだ残っているなというのが正直な感想です。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。佐賀大と九工大の連携でメリットになっている部分もたくさんあるということですね。やはり一大学ではなかなか難しいことも，連携すればいろいろなアイデアが出てきたり，あるいはリソースをシェアできたりするということですかね。ありがとうございます。

堀越さんから，例えば九工大の取り組み，あるいは佐賀大の取り組みを聞かれて参考になった点は，ご発表の中でもおっしゃっていたと思いますが，改めていかがでしょうか。

【堀越】　九工大さんからはいろいろと資料を頂き，参考にさせていただく中で，スライドでも示したのですが，やはりオンライン独特の実施方法の仕方は，やはり対面にはないいろいろな難しさがあるなとすごく感じました。

特に佐賀大学の西郡先生のご発表にもあったとおり，問題訂正があった時や，あとは，試験時間延長があった時など，対面でもなかなか難しい対応を強いられる中で，CBT でもそれをやっていくというところは非常に難しいだろうなと。いろいろな課題があるなと感じていました。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。佐賀大と九工大にお伺いしたいのは，何カ年か運用されていくつもの課題も乗り越えてきた中で，今もなお課題になっていることは何だろうかということです。播磨課長のご発表で，入試課の職員の方で手分けして事前準備に臨まれているというお話があり，佐賀大でもそういった体制を組まれていて，佐賀大の場合は解答データの吸い上げも，現状，手作業だということだと思うのですが，いま課題になっていることがあれば，差し支えない範囲で率直にシェアしていただければと思います。いかがでしょうか。

【西郡】　課題としては 2 点あります。まずは試験問題をしっかりと管理してそれをブラッシュアップしていく。例えば，学習指導要領が変わったらまた問題設定を更新しなければいけないとか，そういったところを考えなければいけないというところが 1 つ。ず

っと考えなければいけない課題です。

学部教員の負担は恐らく軽くなっているはずですが，アドミッションセンターや入試課の職員など，問題を管理する側の負担が過重になっている点がもう１つの課題としてあります。単独の大学でのやり方だけではなく，大学間で分散して効率化できる仕組みがあるといいのかなと感じています。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。播磨課長，いかがでしょうか。

【播磨】　本学でも同じような課題があります。あともう 1 点言うとすれば，機器の管理と維持です。機械には耐用年数がありますので，ある時期では入れ替えないといけません。使わなくても定期的な管理・保守が必要であり，手間が少しかかっています。これをどこまで自動化できるのかというのは今検討中です。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。ご質問の中にもバッテリー等の経年変化があるものもたくさんある中で「五月雨的に交換が発生する」「長期運用に不安を感じる」というご質問もあるのですが，やはりそういうところが現状も課題ですし，管理という面でも課題があるということでしょうか。

【播磨】　そうですね。あとは OS のサポート問題があります。今の使用頻度であれば，バッテリーよりも OS のサポートが切れる可能性を考えています。タブレットの機能としてはそこまで OS が新しくならなくてもいいのですが，OS がアップデートされますので，それについていかないといけないということが問題ではあります。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。これも多様な考え方があるかなと思っています。OS をどこかのバージョンで固定しておくということもできるでしょうし，最新のものにキャッチアップしていくということもあるのかなと感じました。

続いて第 2 グループへ行きたいと思います。第 2 グループの大きなテーマは，情報という題材と国際技術標準だと思うのですが，例えば，センターで新しく TAO に載せることのできる出題モジュールをつくったわけですが，新たな出題モジュール，それは情報に絞ってもいいですし，情報以外の他教科への派生というところも考えてもいいのかもしれません。

萩原先生にお伺いしたいのは，例えば，情報の先生方でこういった PCI モジュールがもっと欲しい，いろいろな種類が欲しいと思った時に開発の可能性にどれほどの魅力があるものなのかというところです。

【萩原】　開発の可能性というのは。できるのはできますが。必ずしもご関心はなくても各大学がやりたいことができればよいので，必ずしもご関心があるとか国際標準でなければならないということはないかなと。

【寺尾・司会】　なるほど。

【萩原】　先ほども質問をしたかったのですが，佐賀大さんと九工大さんがこの TAO に移管するような気はお持ちですかと。それは大変だなと勝手に思っているのですが，そういう点はいかがでしょうか。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。西郡先生，播磨課長，いかがでしょうか。

【西郡】　やはりそこはどれだけ試験問題を利用できるかとか，あとは，オンライン環境で実施できるかどうか，そこら辺を考慮して実装できそうだったら検討に進めるかなとは思っています。

【播磨】　令和 3 年度のオンラインで，CBT は TAO を使いましたので，一応，TAO を使った経験はあるのですが，インフラなどの受験環境について，どのように確実なものを準備できるのかという目途が立てば，そういうことも考えられるかなとは思っています。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。端末もそうですし，インターネット環境をどのように接続するか，速さや帯域はということもやはり問題にはなってくるということなのでしょうか。

他教科への派生という点で，他教科にどのようにこの PCI モジュールの開発が派生できそうか，ご意見をお伺いできますでしょうか。

【水野】　情報を担当する試験問題調査官の水野と申します。「情報Ｉ」の CBT ならではの問題ということで今回ご紹介した三つの PCI のモジュールを開発したわけですが，恐らくそれぞれの教科・科目において，その特性に応じた CBT ならではの問題形式があるのではないかなと思います。

これまでの大学入試では，CBT を利用した試験はあまりなされていませんでしたので，今後は，CBT を利用した問題形式などの知見が大学間で共有されていくことで，ますます CBT の活用が広がるのではないかと思います。

新しい学習指導要領のもとでは主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善が図られ，学校での学びも大きく変わってきています。また，GIGA 端末も整備され，授業では当たり前のようにパソコンやタブレットを使うようになってきているわけですから，そういう授業で学んだ生徒の資質・能力を測る試験もこれからどんどんと変わってくるのではないかと思います。学校でどのような授業が実践されているかを注意深く見ていき，それぞれの教科・科目の特性に応じた CBT の問題形式を考えていく必要があると思います。

【寺尾】　どうもありがとうございます。

【萩原】　どのように流用できるかというのは，例えば，今は PCI ではありませんが，シミュレーションの PCI のようなものができたとして，シミュレーションというのはいわゆる理科，それから社会学で実際によく使われるものです。ですから，物理とか化学とか生物とか，それから，社会は分かりませんが，そういう分野でそのようなシミュレーションを使った出題をされるかもしれません。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。社会科学でも，例えば，経済学とかにおいては投資シミュレーションなどもあり得るとは思います。

植野先生にお伺いしたいのは TAO の利用可能性についてです。国際技術標準に準拠しているため，試験問題の流通や共有，蓄積というところには大きな利点があると思います。大学同士を巻き込んだ場合の TAO の利用可能性について，TAO というよりは国際技術標準準拠のプラットフォームということだと思うのですが，その辺りのご意見を頂けますでしょうか。

【植野】　私は以前から世界標準に従うべきであると思っています。文科省が関わる入試ではないところでは，もう既に世界標準のプラットフォームを用いて試験が実施されています。ハイステークスではないテストかもしれませんが，データの数もかなり増えてきています。実はそのようなデータも活用の可能性がありますし，ありとあらゆるところに世界標準の形式で問題が存在していて，これを集めてくるとそれなりの財産になります。使うのにお金もそこまでかかりませんし，他業者を雇わなくてはいけないとかそのようなこともありませんでした。リーズナブルですし，良いところは多いのではないかなと考えています。

ただ，コンピュータがある部屋が必要です。コンピュータの数が足らなくなるので，アイテムバンク方式を採らないと困ってしまうことがあるかもしれません。その辺は全体でアイテムバンクをつくっていけばそういう心配はなくなるのかなと思っています。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。ちなみに，電通大で BYOD，受験生が自分で端末を持ち込んで制御された状況にした上での試験実施については今のところは考えておられますか。その写真を見る限りにはコンピュータルームのようにお見受けしました。

【植野】　文部科学省の委託事業では完全に公平な環境をつくるという条件がありましたので，そのために CBT のルームが必要だということでコンピュータルームを残しています。

【寺尾・司会】　分かりました。受験者の端末の多様性というよりは，公平性のためにある程度，統制されたコンピュータルームを残したということですね。大学においてはコ

ンピュータルームをなくしていくという動向もありますので，なかなか世知辛い状況だと思います。

例えば，大学間でアイテムバンクを何かシェアするとか，あるいは，試験問題のファイルを共有したり，受験生には見せない上で関係者だけで流通させたりするということはあり得る展開の一つかなと思います。例えば，電通大では作題も TAO のオーサリングシステム，作題に使えるシステムを使って TAO 上でやられているということなのか，そこはちょっとまた別口なのか，いかがでしょうか。

【植野】　TAO のオーサリングシステムを使っています。普段あまり使わない形式の作題でも大抵フリーで開発されてオープンソースで公開されていることが多いので，インターネットで調べると見つけてこられるという良さもありますね。すごく流通していますので。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。やはり作題というトピックでは作題者の負担がとても大事な観点だと思います。電通大では作題の先生がかなり充実されているようにお見受けしましたが，特にその作題の先生からのアイテムバンクを開発する中での意見，あるいは課題だというご指摘などがあれば幾つかご紹介いただきたいのですが，いかがでしょうか。

【植野】　作題の先生にはボランティアでやっていただいていて，本当に頭が下がる思いです。ただ，皆さんがご興味を持っていらしていて，特に情報では，コンピュータサイエンスが専門の業績のある先生方が，自分たちの分野でこういう問題を出さなければいけないという強い思いがあり，モチベーションをもって一生懸命やってくださっています。その意味では今のところはすごく良いのですが，やはり作問は，僕自身も作問しているのですが，かなり負担になっています。また，作問の後の問題チェックがわれわれの負担になってきているのは事実です。この辺をもう少し電通大以外の先生方と分担したり，共有したりしていくことができるとかなり楽になるのではないかなと思っています。

あとは，試験中に問題の間違いが発覚した時に，その場で紙のテストのように「問題を間違えていましたのでこのように直してください」とやられると言われていましたが，われわれの大学はそれを諦めてしまっています。もし間違いがあった時，発覚した時は，そこは採点に入りませんということでその場では対応をしないようにしています。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。そういったところもやはり紙のテストとは少し違った考え方だが，納得していただけるロジックをつくらなければいけないということかなと拝聴しました。

【植野】　問題数を増やしておけば，1 問ぐらいなくしても全体で信頼性がカバーできると

いう考え方です。

【寺尾・司会】　なるほど。ありがとうございます。まとめに入っていきたいと思います。
　今回の全体会１のタイトル「大学等間連携に向けて」。もちろん大学入試センターも重要なエージェントの一人だと思いますが，複数の大学が力を合わせて解決できそうなものは何かがやはり気になるところです。現状では，大学はそれぞれ総合型選抜や学校推薦型選抜のアドミッション・ポリシーに沿って選抜方法を考えておられるということで，単独でやられていると。佐賀大や九工大のように連携しましょうと手を結んだところもあるのだと思うのですが，たくさんの大学が集まった時のパワーがどういうものなのかというところはご意見をお伺いしておきたいです。
　西郡先生のご発表の中ではノウハウの共有等も重要な財産だというご意見が最後のほうにありました。その辺りはいかがでしょうか。

【西郡】　やはり複数の大学が集まることで，負担の分散というメリットももちろんありますが，いろいろなアイデアが出てきて発展につながるということが非常に重要だと考えています。
　関心を持つ大学がどの程度ありそうかというところにも関わるのかもしれませんが，関心は持っていても，CBT のメリットは何なのだというところが，多くの大学が一番感じるところです。CBT を導入するメリットが共有できない限りなかなか進まないのかなと思います。複数の大学が力を合わせてアイデアを共有することで，メリットについて具体的なものが出てくるとまた違うのかもしれません。
　今は私自身に具体的なアイデアはありませんが，少なくとも大学間で連携して，例えば試験問題などを共有して，それぞれ個別の大学が問題を作成する負担を分担して，全体でみればコスト減といったところに行き着けばいいのかなと思っています。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。この発表の中でも多様に幾つかのメリットが出てきたと思いますが，それぞれの大学にメリットだと思われるところが一つでも引っかかればいいなとは思う次第でして，別のいろいろなやり方の CBT があると思いますので，必要なものを探って関心を持っていただきたいと思います。
　萩原先生は入試に直接携わられているというお立場ではないかもしれませんが，複数の大学の連携に関して力を合わせられそうなところというのはどのような点だとお考えでしょうか。

【萩原】　個人の意見を申し上げますが，IRT のようにある程度レベルを評価することに使いたいのであれば，問題をたくさんシェアしていくことができると思いますが，大学のいわゆる個別入試で，自分の行っていた大阪大学で考えると，問題をシェアするということはおおよそ考えられません。しかし，問題のシェアは難しくてもシステムとかノウハウは当然シェアできると思います。シェアしたほうが，皆さん，ありがたいと思いま

す。ただ，IRT のような問題のシェアをよしとするところもあれば，試験問題は難しいというところもあると思っています。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。試験問題とは誰のものかというところで，各大学の独自性の部分だと考えるのであれば，やはりシェアはできないですよね。ただ，みんなに使ってもらっても構わないというものであれば，みんなでシェアして，他の大学のものも入れて，自分の大学のところも提供してというところで，そこはやはり合意というところと試験問題に対する所有権の考え方なのかなという気はしています。PBT とは全く違った考え方でいくのか，同じ考え方でいくのか，そこも分水嶺なのだろうなとは思います。

【萩原】　システムなどはきっとシェアしたほうがいいと思います。各教科で必要な機能が違うと思うので，それをまずリストアップして見比べてみると。中心になるところはシェアできるところがきっとありますので，例えば，セキュリティの問題をどうしようかとか，採点のセキュリティをどのようなにキープしておこうとか，そういうやり方の部分はシェアできますし，できたらありがたいなと。いい方法が出てきたら。

【寺尾・司会】　ありがとうございます。現状，大学入試の関係者の間でもほとんどと言っていいほど流通されていないと思いますので，秘密にしたい部分もあるでしょうし，共有できる部分は積極的に共有して他のアイデアも取り入れてということなのだろうなと。

デジタル庁には協調領域と競争領域という考え方がありますが，大学間で協調・協力すべきものは協力するし，入学者の獲得という点では各大学はライバル同士ですので競争領域というところもあると思います。そこはやはり CBT においても明確に考えていかないといけないだろうなと先生方のお話を聞いていて思いました。

議論が足りないというのが私の正直な印象ですが，お時間が参りました。たくさんのご質問をお寄せいただきありがとうございました。

入試関係者の方々の中には，このトピックは初めてという方もいらっしゃると思いますが，CBT にご関心を持つきっかけが一つでもあればいいと思いますし，うちの大学でも CBT をやってみようかな, あるいは興味があるなと思っていただければ大変幸いです。長期的には大学等間の連携というところを模索していければと思いますし，センターもそのお手伝いができたらなと願っています。

登壇者の先生方，本日はありがとうございました。いろいろなお話をお伺いできてよかったです。大変充実した会になったかと思います。どうもありがとうございました。

【一同】ありがとうございました。■

全体会２

「国際入試の現状と展望」

司　　会：　池田　文人（北海道大学教授）・岩間　徳兼（北海道大学准教授）

報 告 ①　APU における国際入試～留学生リクルート事情とポスト・コロナの日本留学～　..... 106
大嶋　名生（立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス課長）

報 告 ②　公立大学における国際入試への取り組み　..... 124
中島　範行（富山県立大学教授）

報 告 ③　北海道大学における国際入試の改革と今後の展望　..... 136
飯田　直弘（北海道大学高等教育推進機構准教授）

報 告 ④　IB 校である札幌開成中等教育学校のキャリア教育はなぜ大きな挑戦なのか？　..... 155
西村　里史（市立札幌開成中等教育学校副校長）

全体討論　..... 170

内　　容：

大学進学率の向上により大学の大衆化が進む一方で，急激な少子化の影響で定員割れを起こす大学も出てきている。また，政府は大学のグローバル化を進め，研究・教育における国際競争力の強化を推進する一方で，国際バカロレア（IB）の教育プログラムを導入する高校を増やそうとしている。このような状況の中で，日本の教育の国際的通用性を確保するために，海外の優秀な留学生や帰国子女，IBのディプロマプログラムの修了者に対して適切な選抜を行うことが重要となる。

そこで本全体会では，国公私立大学のそれぞれの立場において，国際入試を中心とした国際化への取り組みと展望について話題提供するとともに，高校の側からIB校における国際入試への対応の現状と課題について話題提供する。国際入試の対象としては，留学生のみならず，帰国子女や，国内のIB等の国際的な教育の修了者なども含む。

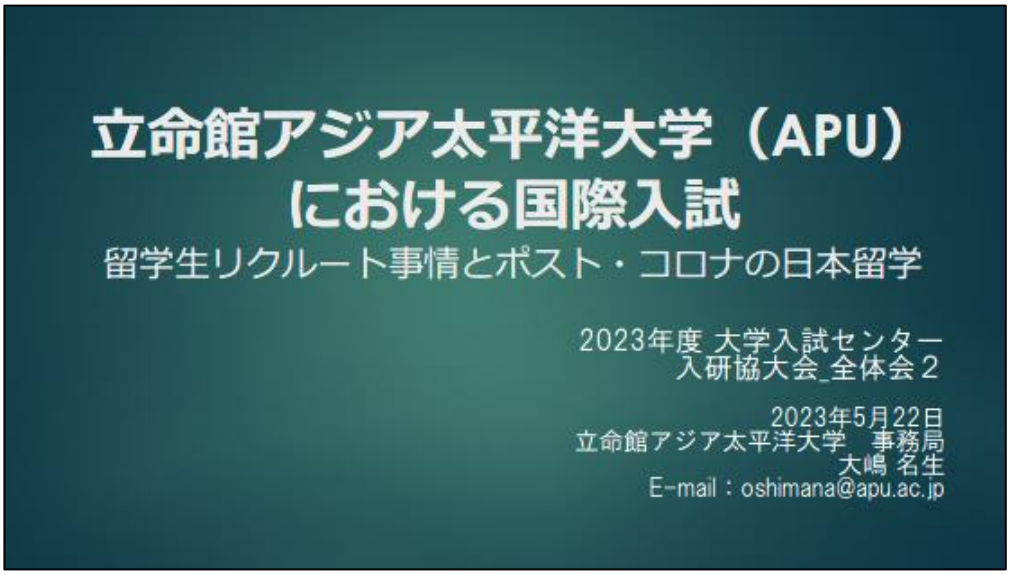
話題提供の後，参加者からの質問に基づき，話題提供者を交えてパネルディスカッションを行い，国際入試の現状について理解を深めるとともに，今後の国際入試に関する各大学の取り組みの課題とその解決策について議論する。

全体会２ ◉ 報告１

APUにおける国際入試～留学生リクルート事情とポスト・コロナの日本留学～

■大嶋　名生（立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス課長）

大嶋です，おはようございます。今日はよろしくお願いします。



本日私は，大分県別府市にある立命館アジア太平洋大学（APU）キャンパスから参加しています。





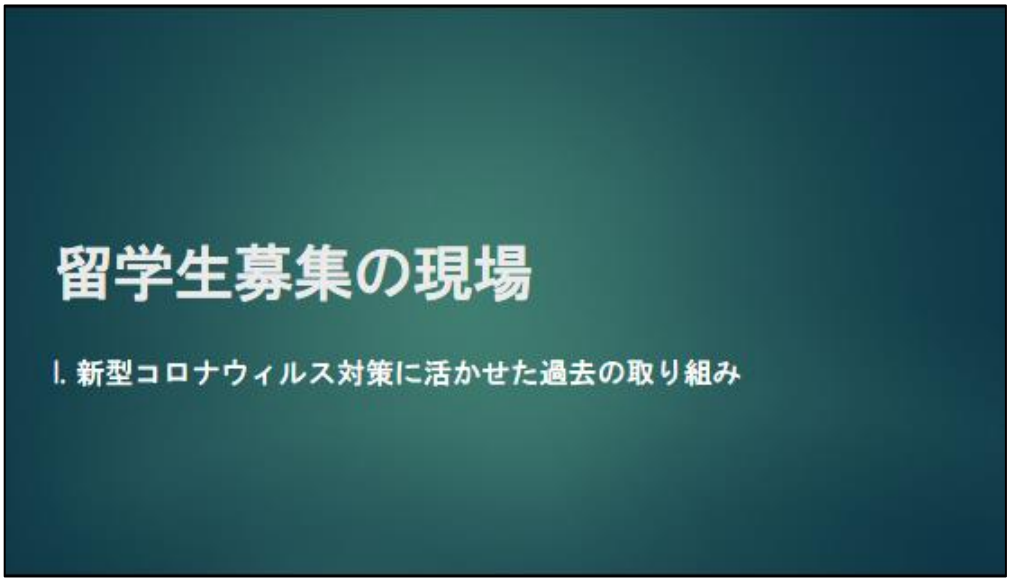
立命館アジア太平洋大学（APU）は，大分県別府市にあります。大分県と別府市からの多大な支援を得て，「公設民営型大学」として 2000 年に開学しました。この写真は今のキャンパスで，別府湾を臨む高台にあります。



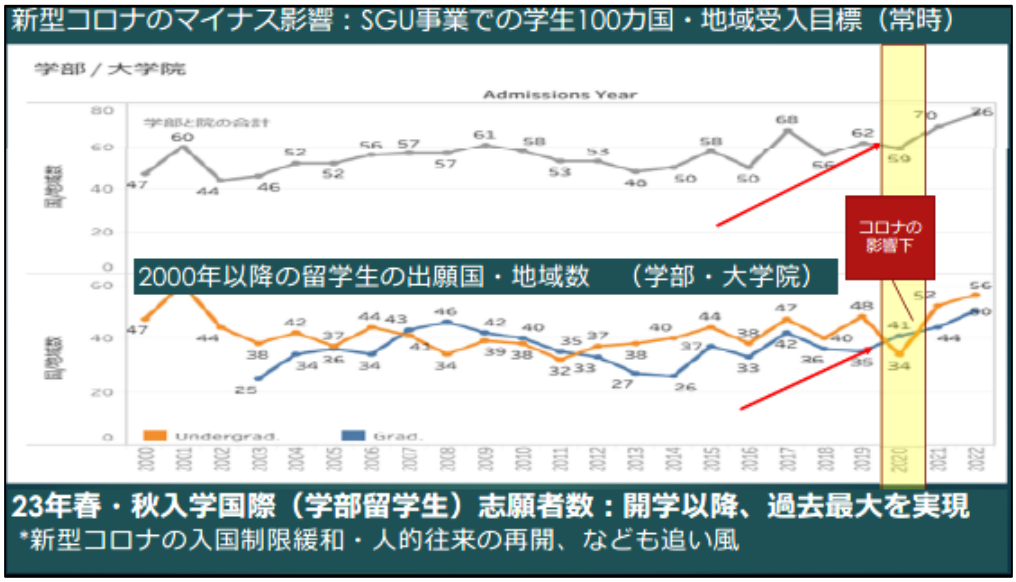
コロナ禍のために，学生募集に苦労された大学は多いと思います。とりわけ留学生入試ですね。APU では，開学時から，全学生の半数が留学生で構成される大学を志向しています。そのため，学生の半数が海外からの留学生ということになりますので，立命館アジア太平洋大学（APU）は，コロナ禍による入国制限などで，もっともネガティブな影響を受けた大学の一つであることは，間違いないと思っているところです。



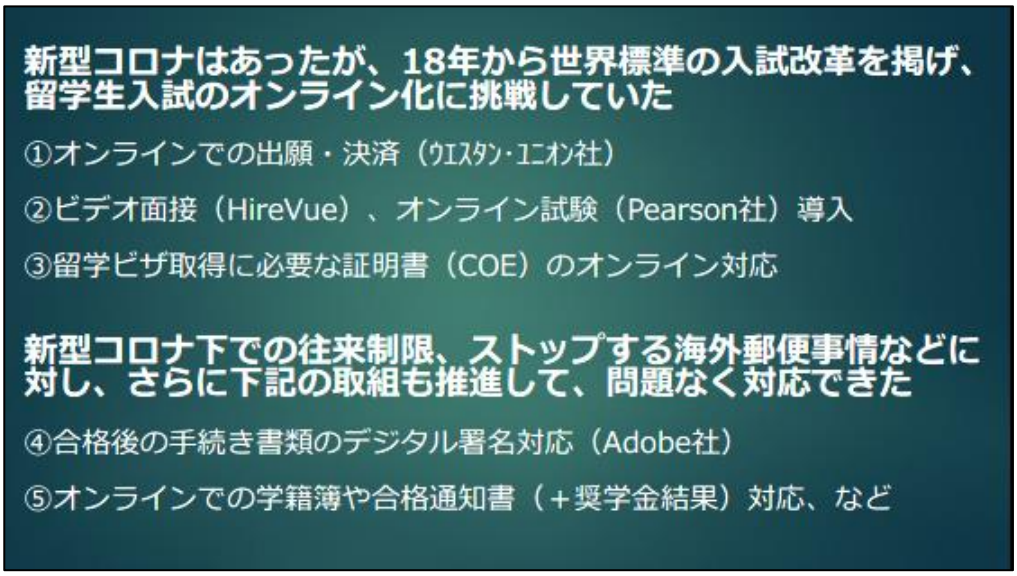
今日はコロナ禍の話と，ポスト・コロナの話ということで話題提供をします。今，APU キャンパスには世界 106 カ国から学生が集まってきています。朝，キャンパスを歩いていますと，学生たちがほぼマスクを外して授業に向かっている様子やグループでいろいろな取り組みをしている場面を見るにつけて，学生が対面で学ぶ環境で，ポスト・コロナが動き始めてきていると感じているところです。



さて国際入試・留学生募集の現場の話題提供ということで，コロナ禍の振り返りですが，APU は，常に世界 100 カ国・地域からの学生がいることを目指しています。その前提として，APU は日本の大学の中では先駆的に学生募集の DX 化を進め，2016 年以降，留学生の出願国・地域数は大きく増加していました。しかし，2020 年以降は，コロナ禍のため大きく減少し，国・地域のバラエティーが相当削がれてしまったと思っています。

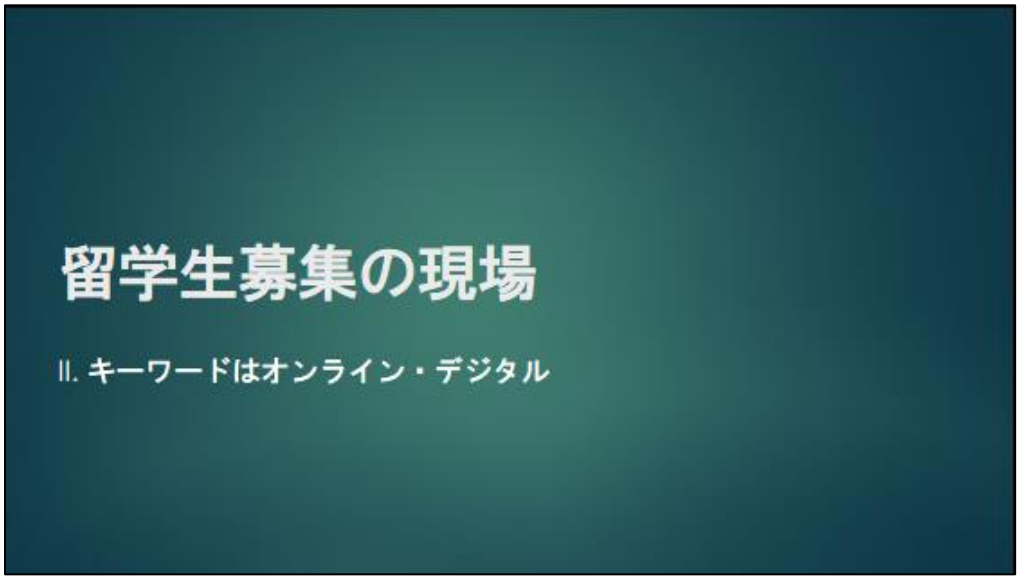


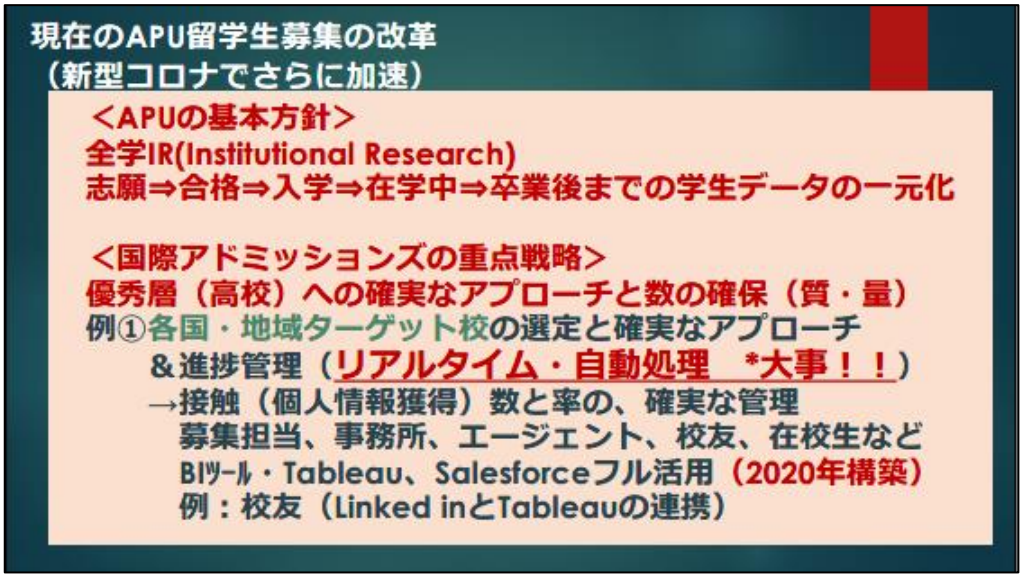
しかし今は他の大学も同様に，留学生募集面では，かなり追い風が吹いているのではないかと思います。APU は，開学時から春・秋入学制度を導入しており，年間を通して留学生入試を運用しています。世界各国の学生を受け入れるためには春入学のみでは到底足りず，現在は大半の留学生を秋入学で受け入れています。この秋入試の出願が，先日完了し，大変うれしいニュースですが，学部の留学生の志願者数は，2000 年の開学以降，過去最大数を更新しました。コロナ禍の入国制限等の施策がマイナス要因として働いていたと思いますが，2022 年春からの人的往来の再開等が，大きな追い風になっています。



APU では，留学生向けの国際入試の DX 化を，2018 年から本格的にスタートしていました。こういった取り組みを先駆的に進めていなければ，コロナ禍での 2020 年からの留学生入試は，全く機能しなかった，乗り越えられなかったと，今でも背筋が寒くなる思いです。学生の半数が留学生となりますので，APU として，どのように世界中から優秀

な留学生を集めてくるのかというポリシーや哲学は，開学以降から脈々と続き，高度化してきています。組織に根付くかたちで，どのような改善プロセスをつくるかは，世界の大学の先進例に，常に学んできました。

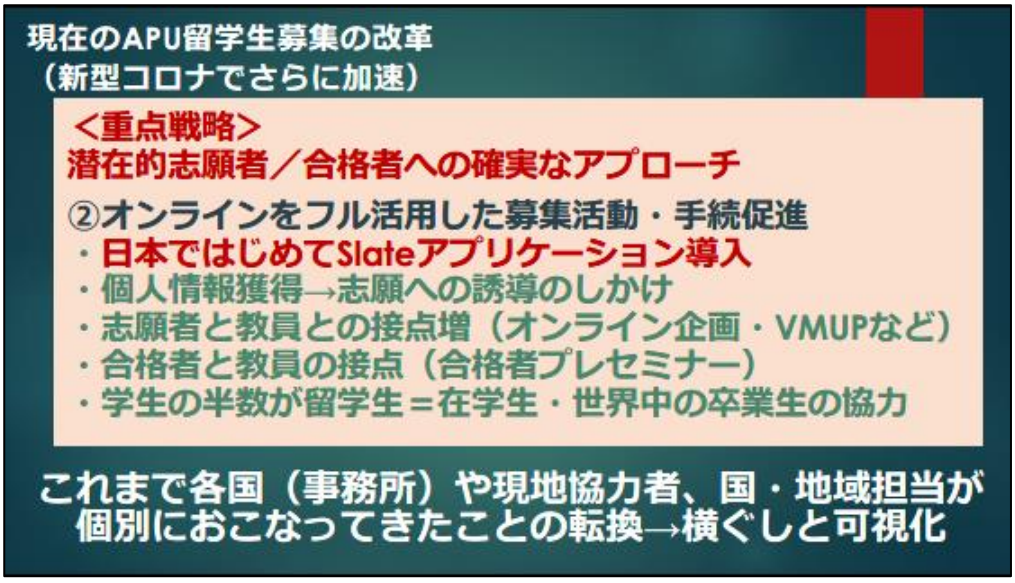




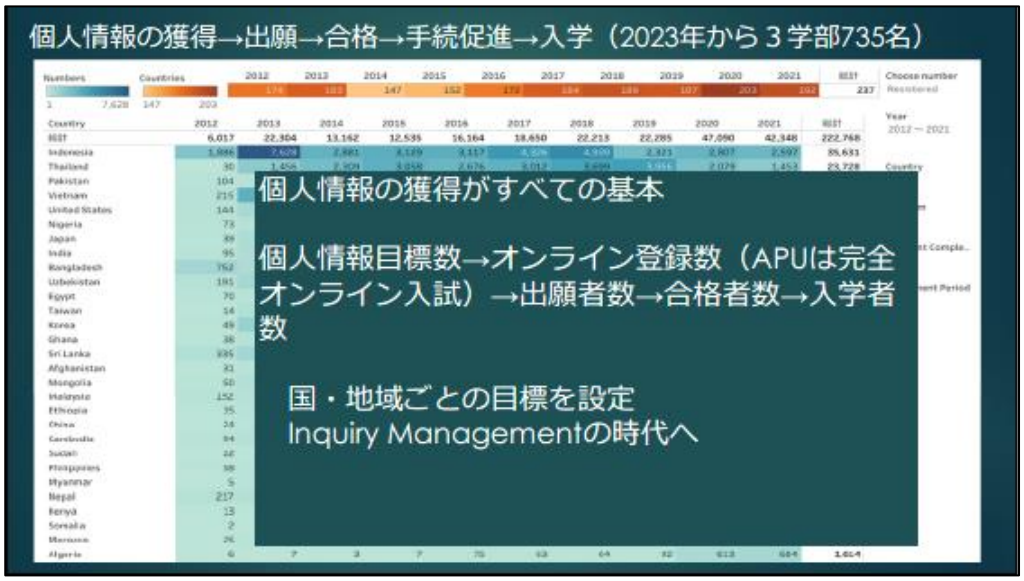
その一つです。APU では基本，全ての留学生入試をオンラインで行っています。前提として APU はたかだか学生数 6,000 名の私立大学です。ただし，他大学と違う点は学生構成の多様性であり，学生の半数が海外の留学生ということが一つの指標になっています。その点では学生の多様性をどのように評価していくのか，様々な国から来ている学生のデータをどのように組織的に取り込み，分析・可視化したうえで，大学経営に活かしていくのかという観点で，2010 年頃から全学 IR（Institutional Research）に取り組んでいます。

その全学 IR の一つとして国際アドミッションズの重点課題をデータ化し，それに基づいて学生募集戦略を立てることを脈々としてきました。重要なのは，リアルタイムで様々なデータを確認できること，そしてそれを国・地域ごとの数値の受け入れ目標や入学者

目標に落とし込んでいるということです。

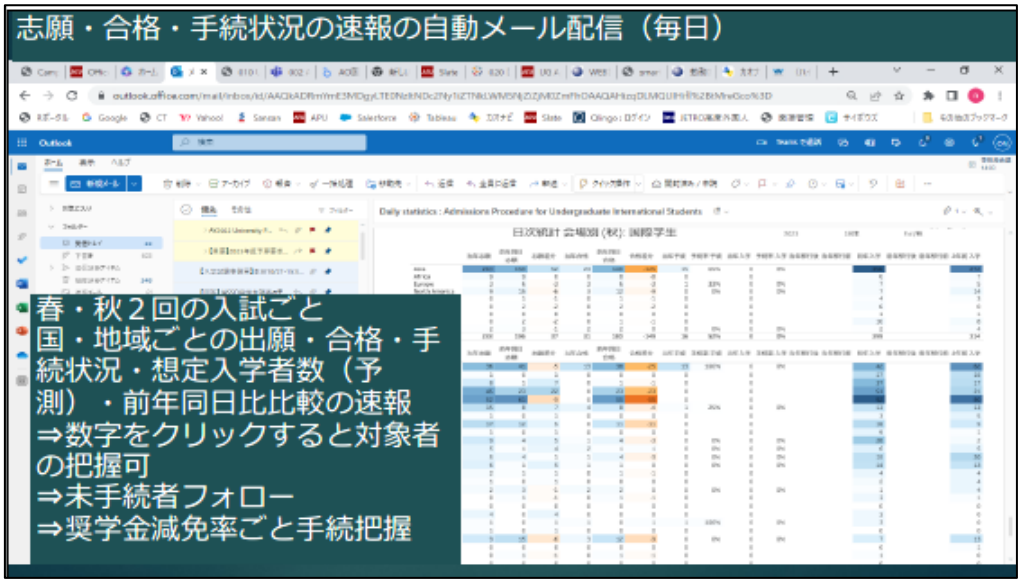


また, 日本で初めて Slate という入試･出願･広報アプリケーションを導入しています。検索エンジンで「APU　Slate」と検索していただくと，プレスリリース等の情報が出てきますので，関心がある方はご覧いただければと思います。



多くの大学では日本人学生の受け入れ戦略を立てていらっしゃると思います。APU の国際アドミッションズの戦略も，それと大きな違いはありません。アドミッションズ戦略を国際学生･留学生という軸で設定しているということですね。基本的な考えですが，世界中からの学生の個人情報，問合せ・Inquiry を適切にマネジメントします。海外では「Inquiry Management」はどのアドミッションズ・オフィスでも普通にやっていることですが，それと同じです。基本的に獲得すべき個人情報の目標数を立てて，個人情報を獲得し，その人（潜在的志願者）たちと関係づくり（ナーチャリング）をして出願者の

情報を管理し，合格後には手続きの促進・マネジメントをして，最終的な目標である国・地域ごと，学部ごとの入学者確保につなげていくというプロセスで回しています。



上の図は，私のある日の Outlook メールをコピペしたものです。APU は年間を通して入試をしますので，国・地域，学部ごとに，例年と比較した，現在の出願件数が自動メールの日報で入ってきます。入試を統括する副学長，学部長，研究科長，入試担当の役員，アドミッションズ・オフィスの全関係者に自動的に届きます。「うちの学部がこれぐらい伸びてきているがどうだ」とか，「今日一日で一気に出願が増えているのだが，それはどの国・地域の傾向からなのか」といったことも可視化でき，6 月 1 日の入試開始日から翌 5 月まで，毎日このメールが届く仕組みとなっています。



次に Slate システムでのリアルタイム管理ですが，基本的に，国・地域別に全ての最新の出願状況のデータを，リアルタイムで見ることができます。データは 1 分単位で自動更新されます。あとは，イベントの管理やイベント参加者のデータ，合格後の手続き状況がクリック一つで分かるような設定になっています。

さらに APU では，世界の高校ごとにユニークなコード番号を付けており，国・地域ごとにどの高校からいつ志願があり何名入学したか，2000 年の開学から 2023 年の入試を通して，高校単位で把握できるようになっています。

例えば，〇〇国××シティにある▽▽高校コードを持った□□学校から，▼▼年に何名出願があったか，またその学生の合否，そして入学に至った学生については入学時期や奨学金の有無，メールアドレス，在学中の GPA，それから卒業後の活動状況が分かります。卒業後の情報は Linkedin に紐付け，その高校にアプローチをする際に，これまで入学した学生のバックグラウンドをあらかじめ確認できるようデータを整備しています。

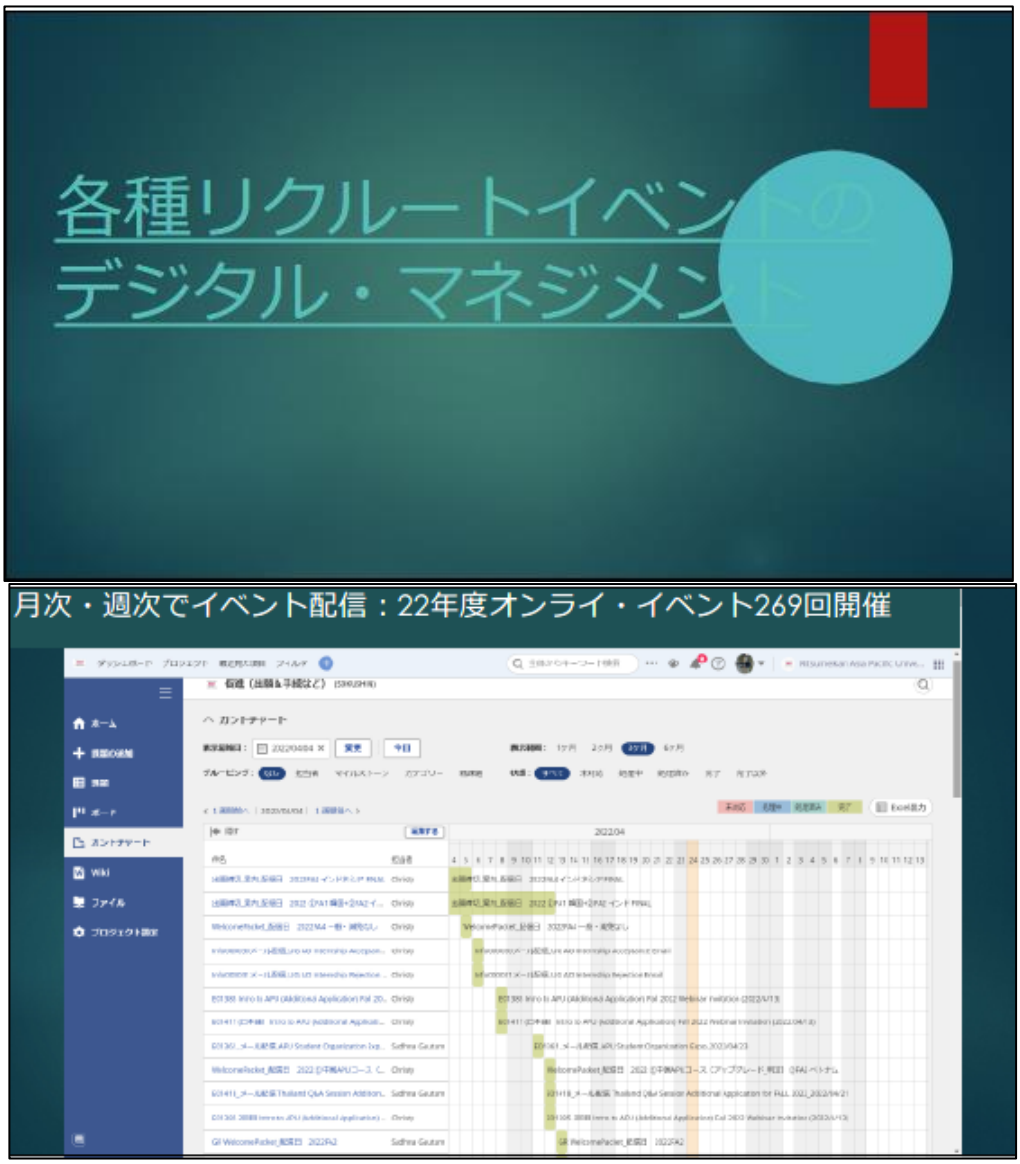




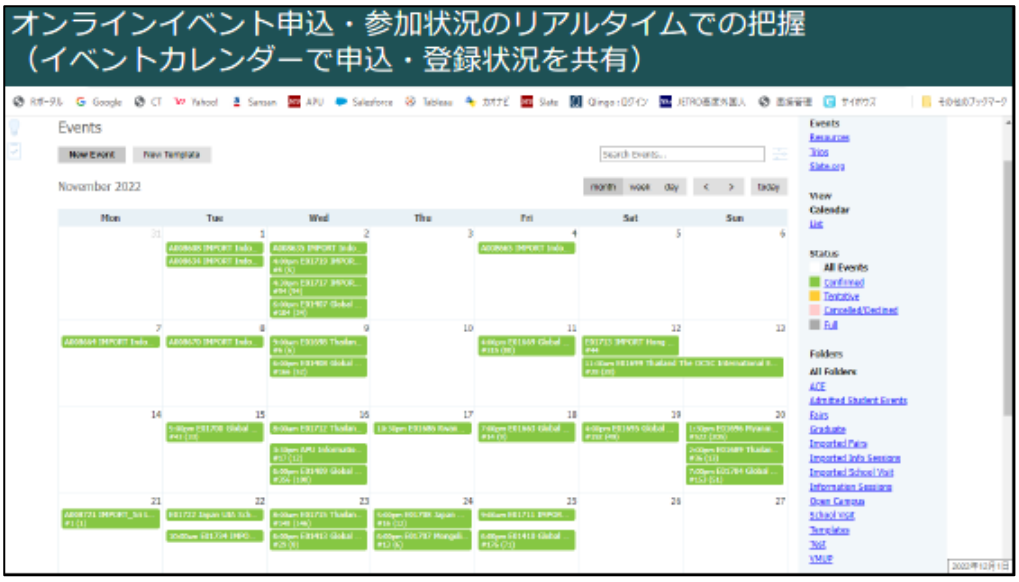
さて次は国際入試・留学生募集における卒業生のかかわりです。APU は，半数が海外の学生ですから，卒業後は再び世界に拡散していきます。日本国内で働く場合もありますし，自国ではなく第三国に行くケースもあります。学生の在学時の満足度を少しでも上げることで，世界中にひろがった卒業生と，卒業後もつながることができます。そのような卒業生が主体的に，あるいはこちらからお願いをすることも含みますが，「アドミッションズ・アンバサダー」というタイトルをもって，または APU の一校友という形で，学生募集に協力をしてくれています。



APU の留学生の多くはアジアなどから来ており，アジアでの留学生募集では，現地語でいろいろな展開ができています。実はこの 2 年ぐらい，意識的にミャンマー学生受け入れ戦略プロジェクトを立てて，実行しています。その成果として，ミャンマーの志願者が増えているのですが，戦略プロジェクトのなかで，在学生や卒業生たちとわれわれアドミッションズ・オフィスの担当者が，ミャンマー語での活動を行い，学生募集を強化することで，優秀な学生のリクルートが成功しています。留学生や卒業生との対応・調整力，スピード感をもった企画の具体化など，APU 担当者の高い力量に，上長として，いつも感服をしていました。



さて APU では 2022 年度, オンラインで学生募集のイベントを 269 回行いました。APU のマーケットは世界であり，国・地域単位での対面でのリアルなイベント・経験は当然大事なのですが，一方デジタルでできることもありますので，様々な取り組みを行ってきました。先日，2023 年春・秋入試が終わりましたので，今度は 24 年の春入学，24 年の秋入学に向けて，うまく出願につながったオンラインイベントの内容，出席率といったデータを見ながら，卒業生が関わる企画を増やす，学部イベントでの教員構成を見直すなど，オンラインイベントのコンテンツの見直しをしています。



これはある月のイベント情報です。毎日何かしらのイベントをしていることがよくわかります。このイベントをクリックすると，即座に，国・地域ごとの登録者数，出席率，その後他の APU のイベントに参加をしているかどうか，出願に至ったかどうか等を可視化でき，それらのデータを管理し，他のデータとも紐付けています。

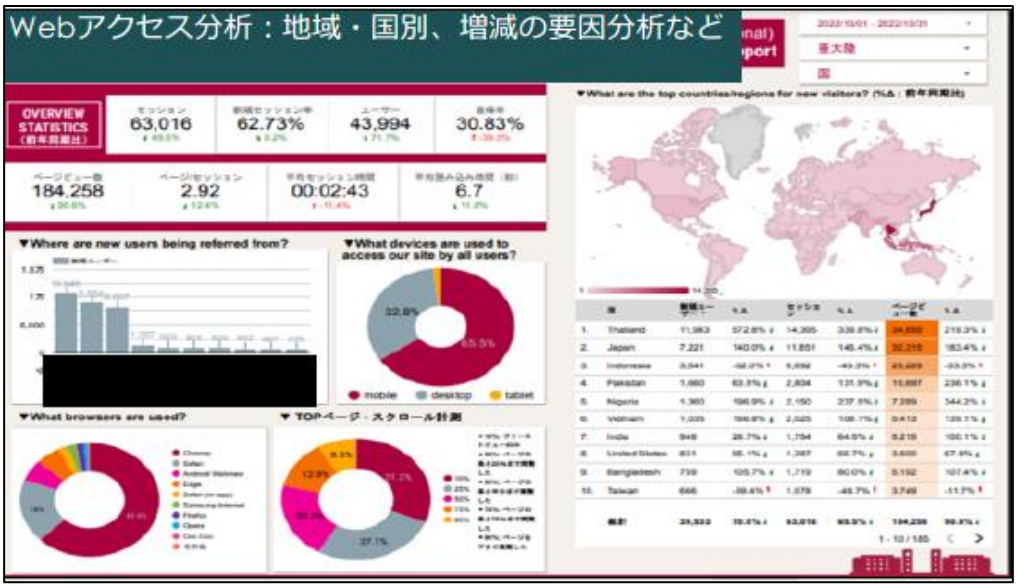




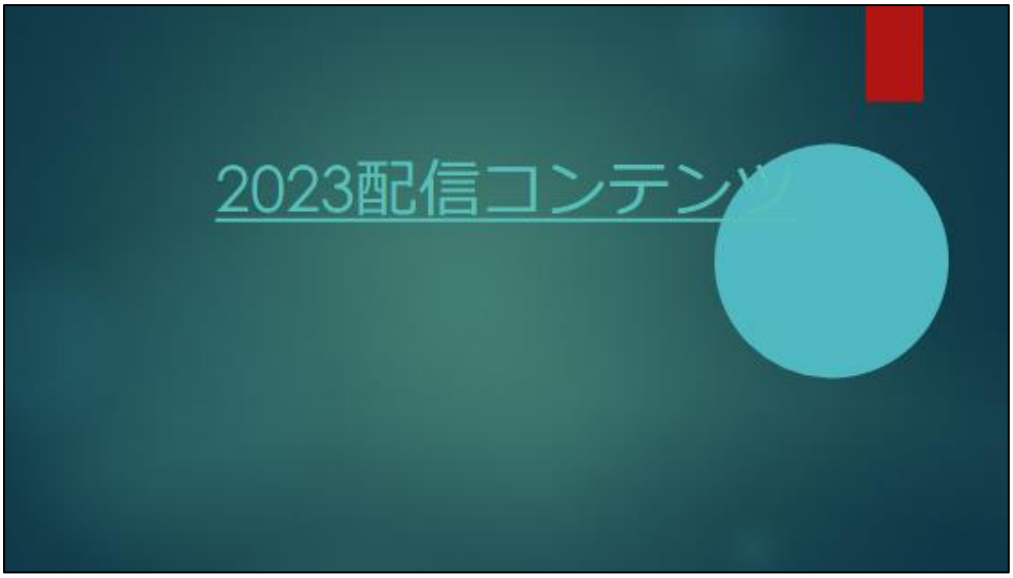
現地語でのローカライズ配信企画については，対象者に対して，自動（オート）メールによる情報提供をしています。APU では，例えば，ベトナムでは，ベトナムからの潜在的志願者に対して，英語の情報だけではなく，ベトナム語でローカライズされた情報を挟むことで，様々なイベント等の回答率や出席率を上げるなどを意図的にしています。一番左上はベトナムの企画，右の下と右側はタイ語での企画の情報提供です。

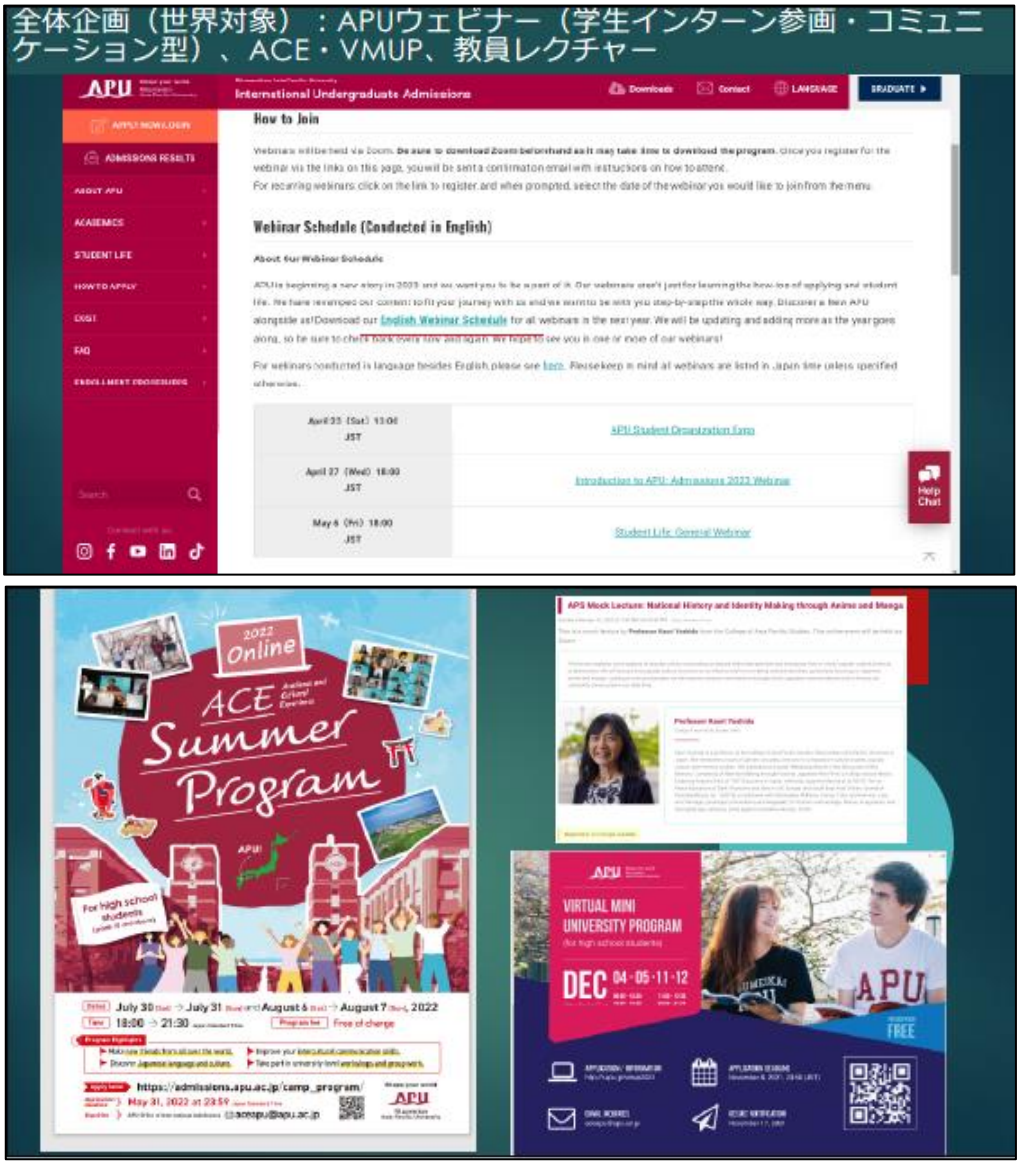
また，インフルエンサー，各国の大使館や諸団体との連携はとても重要です。APU は 6,000 名規模の小さな大学で，一大学でできることは限られます。その点で優秀な留学生を受け入れていきたいという志をもつ他大学との連携も重要だと思っています。オールジャパンで日本への留学を進めている「日本留学海外拠点連携推進事業」の海外 6 拠点とは密に連携しており，共同企画やプロジェクトなども非常に有効に機能しています。また拠点事業の現地担当者からも適切に助言を頂き，大変助かっています。





DX 化の進展により，多くの大学がオンライン入試やオンライン出願に挑んでいると思います。実は APU でも完全オンラインで入試を行っていますが，完全オンラインということはすなわち，APU のウェブサイトにアクセスができないとそもそも出願が開始できないわけです。これについて，Google Analytics を使って，国や地域ごとにどのような広告を打つか，広告を打ったことによるウェブサイトへのアクセス数の変化等を分析しています。国・地域ごとのユーザー数の変動，新規のユーザーの流入はどの広告・企画に起因するのか，といったことも毎月細かく分析しています。





23 年春・秋入学者向けの配信コンテンツについては，多くの大学が行っていることと大きく変わりはありません。大学の魅力をどのように伝えていくのかという点で，一番力を入れていたことは，オンライン・ウェビナー形式での学生主体の企画の実施です。また文化交流（カルチュラル・エクスチェンジ）の企画をオンラインでやってみたり，教員によってアカデミックな魅力を伝える「バーチャルミニユニバーシティプログラム（VMUP)」というレクチャーシリーズをオンラインで実施したりしています。

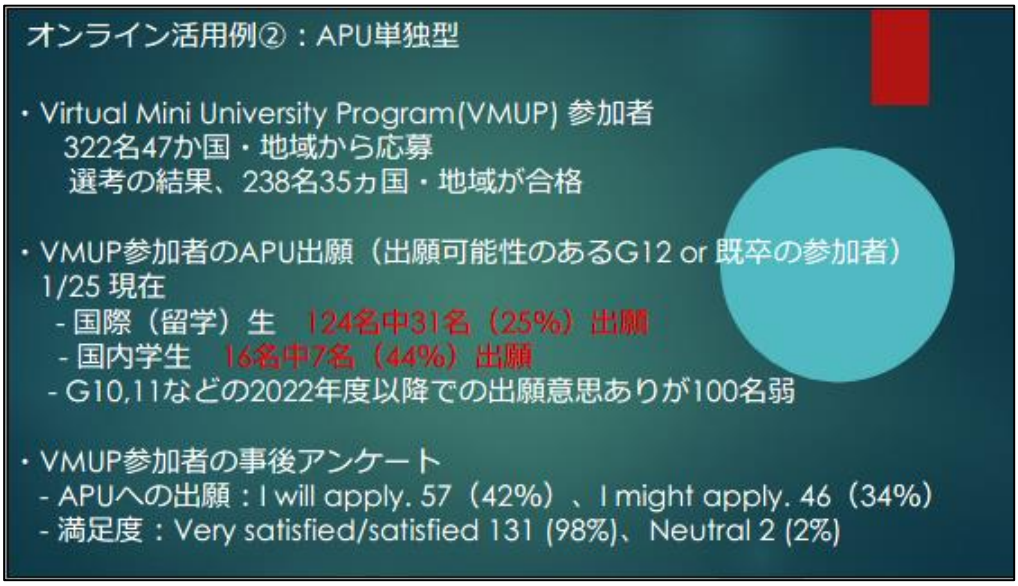


先ほど申し上げたとおり，国際入試・留学生募集において，一大学でできることには限りがあります。その点で，APU 自体の認知獲得は後回しにして，他大学と連携して，「Study in Japan」や日本への留学を促すような企画を，コロナ禍で大きく進めてきました。例えばタイの学生に対して，大阪大学と連携して「Japan University Joint Online」というイベントを行ったり，ベトナムの学生に対し，長岡技術科学大学と連携してウェビナーをしたり，複数大学と共同で「STUDY IN JAPAN MINI FAIR」というウェビナーをしています。

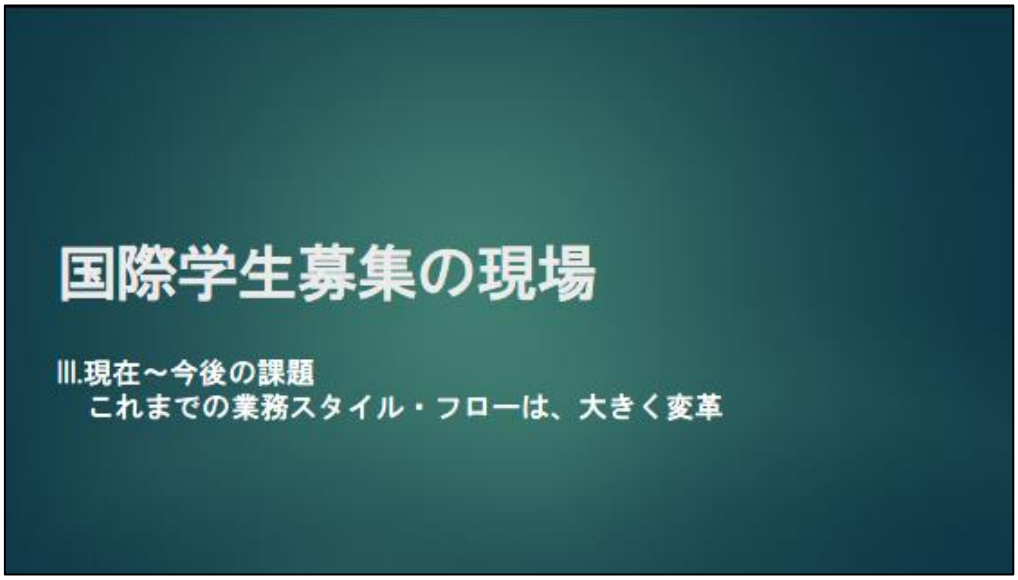


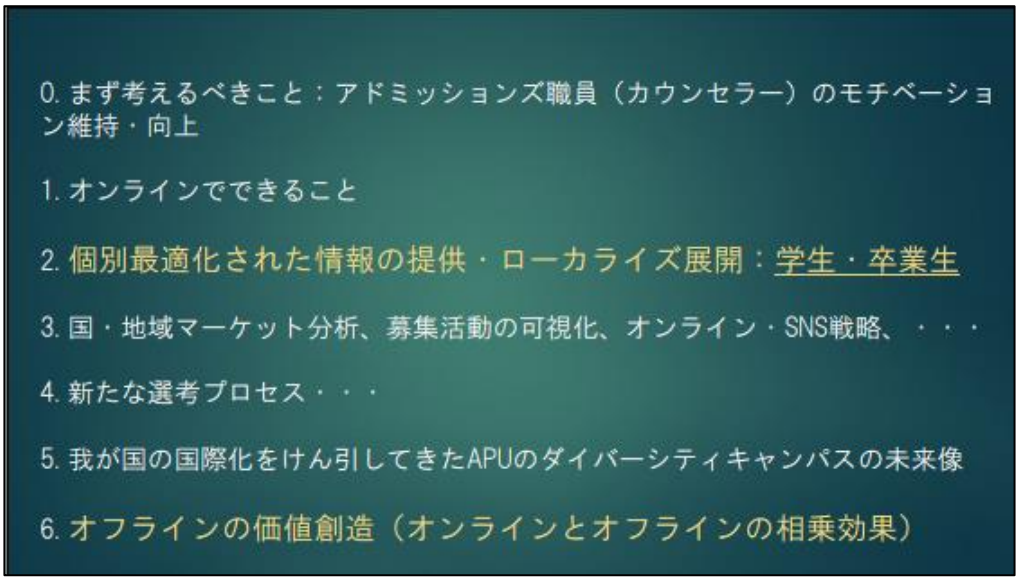


一方で，APU 単独でのオンライン企画も当然やっています。われわれはアドミッションズですから，企画終了後，世界中の参加学生たちが，その後どういった形で APU とつながっていき，またリピーターとして他の企画に参加をして，最終的に APU への出願に至ったかどうか，そして合格したのかどうか，さらには合格後に APU へ入学してくれたかどうか，こういったことを全部フォローしなければなりません。その中で企画内容の見直しを常に進めていきます。



この VMUP は先ほどお伝えした，オンラインでのアカデミック・レクチャーシリーズですが，APU 教員のレクチャー内容もよく，速報ベースですが参加者の 25%が，最終的に APU への出願に至りました。こうした振り返りをしながら，入学者目標の達成を目指しています。





さて，まとめとなります。われわれアドミッションズのスタッフは，最終的に APU の理念に，そして学部のポリシーにあった優秀な入学者を確保することが重要なミッションですよね。その中で大事なことは，留学生と直接対峙する，アドミッションズの職員やカウンセラーのモチベーションの維持・向上です。コロナ禍においては，自分の国にも帰れない，あるいは当たり前だった海外出張にも行けない，コロナでの働き方やキャリアの見直しなど，モチベーションダウンにつながることが多かったですし，デジタル対応など，新しいことに取り組むことは負担にもなります。そうした際に，職員やカウンセラーがアイディアを出しやすい雰囲気づくりや，成果をポジティブに評価していくことは，とても大事なことだと思っています。また振り返ると，周りの同僚のアイディアや迅速な企画・対応力などに，いつも助けられていました。

それらを前提として，やはり国際入試・留学生募集現場で必要なことは，オンラインでできることと，対面でやっていくことを整理するということです。また，個別最適化された情報を，適切に提供することです。国・地域によってローカライズされた情報も

ありますし，国・地域によって，求められる情報は異なります。そこで，APU で学ぶ世界中からの学生や，世界中に散らばった卒業生という稀有なネットワークを頼り，様々な形で協力を得ながら取り組みをしていくことが，アドミッションの高度化には必須ではないかと思っています。

次に，国・地域マーケットの分析の重要性です。APU は，手前みそですが，国・地域の最新情報に大変敏感です。募集活動を可視化していく際に，その国・地域が今どうなっているのか，その国の高校生たちは何を考えているのか，その国の大学ではどのような学びや留学のトレンドがあるのか，そのようなことに関心を持てると，業務の幅も広がっていくのではないかと思っています。

そしてやはりオンラインとオフラインの価値創造のため，アドミッションズに関わるスタッフが率先して新たなチャレンジをすることで，大学の戦略もさらに高度化されていくのではないかと考えています。



【池田・司会】　非常に先進的な取り組みをご発表いただきましてありがとうございます。後ほどまたパネルディスカッションで深く伺わせていただければと思います。ありがとうございました。■

全体会２ ◉ 報告２

公立大学における国際入試への取り組み

■中島　範行（富山県立大学教授）

富山県立大学の中島です。今日は，よろしくお願いします。本報告にあたり，公立大学に対し，公立大学協会（公大協）を通じて国際入試に関するアンケートを実施させていただきました。この場を借りて，アンケートにご協力いただいた公立大学の関係する皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

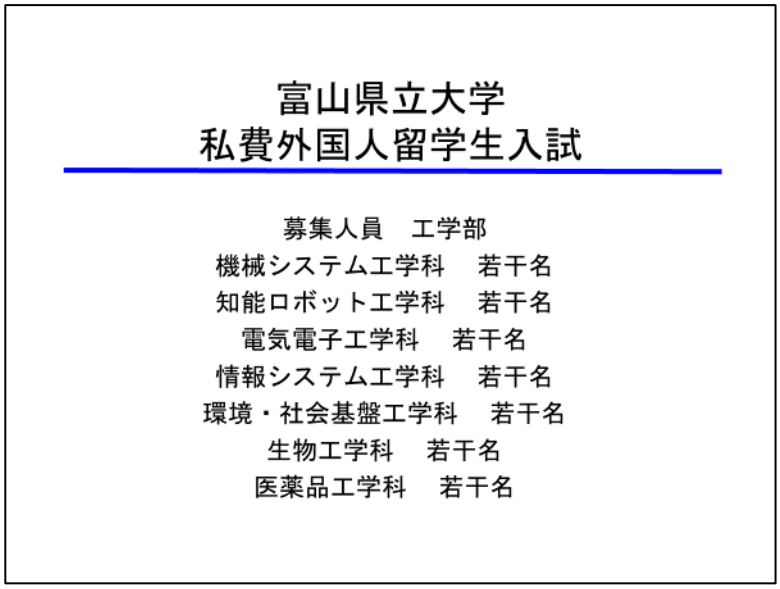
前半では特に日本留学試験を踏まえた本学の入試の話をさせていただいて，その後，公立大学のアンケートとその結果についてお話をさせていただきたいと思っています。

よろしくお願いします。





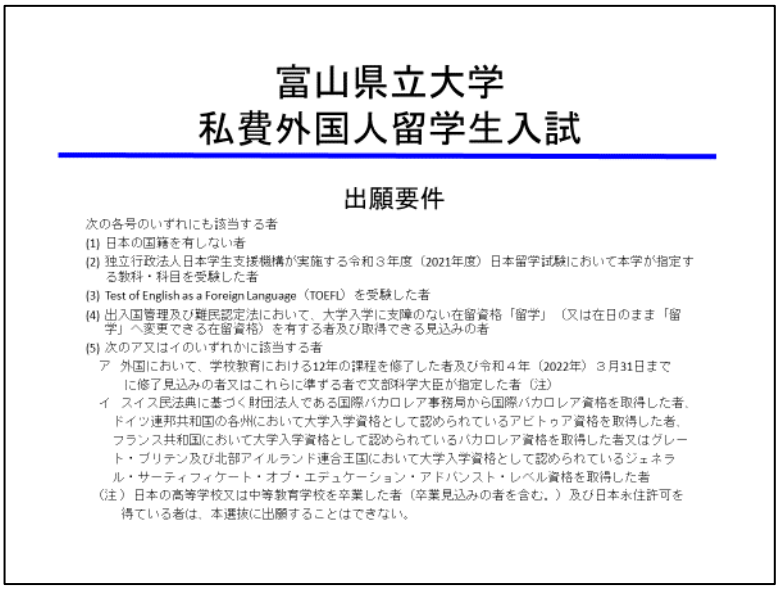
本学は平成元年に日本海側で初の工学部の大学として設立し，現在 30 年を超えています。最初は 160 名の定員でしたが，現在は看護学部もできまして定員は 460 名です。今回は工学部のみの話とさせていただきますので，その点はご容赦いただければと思います。



工学部では，私費外国人留学生試験を行っています。学校推薦型選抜，選抜の前期及び後期が定員を決めた入試です。私費外国人の留学生試験は，この図のとおり定員を若干名として実施しています。この入試を始めて以来 20 年間で志願者数が 86 名，受験者数が 75 名，合格者が 39 名，入学者が 16 名です。志願者は毎年 4～5 人いますが，受験者はそこから 1 名減り，合格者がおよそ半分，入学者は 1 名いるかいないかというのが現状です。

当初は中国からの私費外国人が多かったのですが，近年はアフリカのガボン，マレーシア，オランダ出身者が在籍するなど様々です。定員枠を設定している他の大学ではど

のように人を集めているのか，どのような活動を行っているのかというのは非常に興味深いことと考えています。



富山県立大学
私費外国人留学生入試

出願要件

次の各号のいずれにも該当する者
(1) 日本の国籍を有しない者
(2) 独立行政法人日本学生支援機構が実施する令和３年度（2021年度）日本留学試験において本学が指定する教科・科目を受験した者
(3) Test of English as a Foreign Language（TOEFL）を受験した者
(4) 出入国管理及び難民認定法において、大学入学に支障のない在留資格「留学」（又は在日のまま「留学」へ変更できる在留資格）を有する者及び取得できる見込みの者
(5) 次のア又はイのいずれかに該当する者
ア 外国において、学校教育における12年の課程を修了した者及び令和４年（2022年）３月31日までに修了見込みの者又はこれらに準ずる者で文部科学大臣が指定した者（注）
イ スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局から国際バカロレア資格を取得した者、ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格を取得した者、フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格を取得した者又はグレート・ブリテン及び北部アイルランド連合王国において大学入学資格として認められているジェネラル・サーティフィケート・オブ・エデュケーション・アドバンスト・レベル資格を取得した者
（注）日本の高等学校又は中等教育学校を卒業した者（卒業見込みの者を含む。）及び日本永住許可を得ている者は、本選抜に出願することはできない。



富山県立大学
私費外国人留学生入試

入試方法（1月末の実施）

1) 入学者の選抜は、大学入学共通テストを免除し、次に示す学力検査等の結果、その他出願書類審査の結果学力検査等の配点を総合して行う。

日本留学試験			本学が実施する学力検査等
受験を要する教科・科目	主題言語の指定	実施時期の指定	
日本語 理科（物理、化学、生物から２科目選択） 数学（コース２）	日本語、英語 どちらでも可	６月・11月 どちらでも可	面接 （英語能力の試問を含む。）

2) 学力検査等の配点

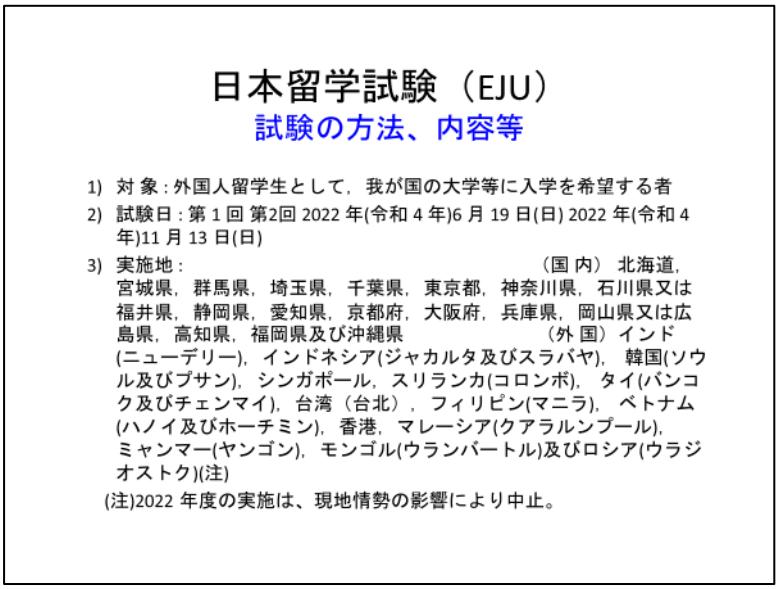
日本留学試験の成績			面接	計
日本語	理科	数学		
400点	200点	200点	400点	1,200点

本学では 1 月末に試験を実施しており，主に日本留学試験を活用しています。配点については，日本語・理科・数学で 800 点，本学で対面にて行う面接点を 400 点とし，計 1,200 点です。日本留学試験での主題言語は日本語・英語のどちらでも可能ですが，多くの受験生が日本語を選択するため，面接で英語の能力を問うことにしています。

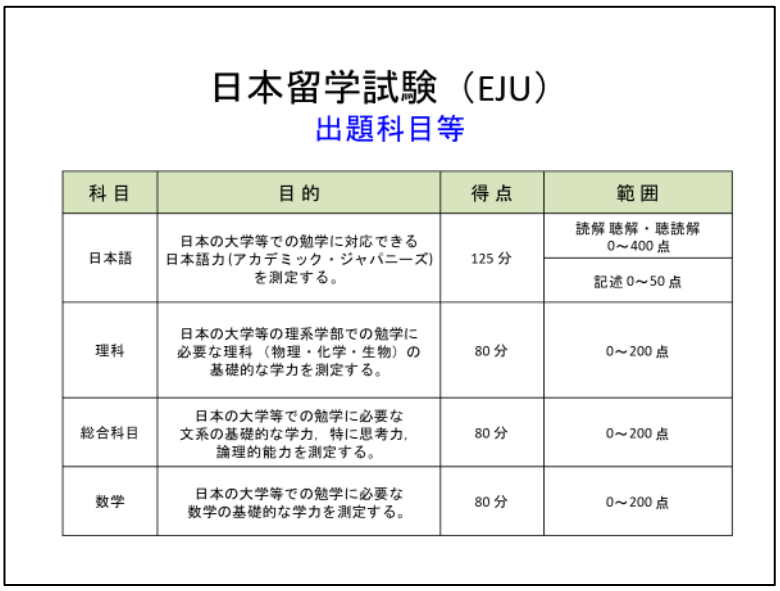
現在在籍しているマレーシアとガボン，オランダの留学生の英語能力は非常に高いです。日本語もぺらぺらで母国語が話せますので，日本の学生からすると僕らより優秀だという印象を抱いているのではないかと個人的には思っています。



日本留学試験は JASSO（日本学生支援機構）が行っている試験です。この点について最初にご紹介します。

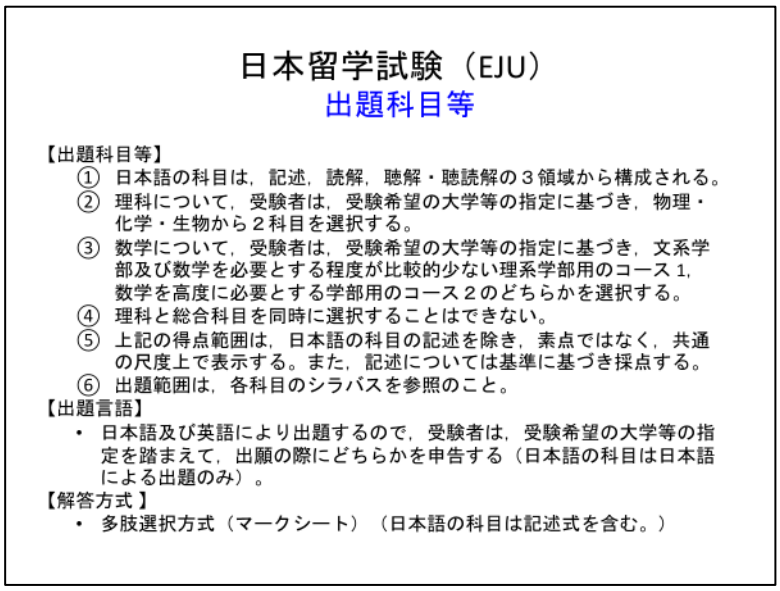


昨年は 6 月と 11 月に 2 回行われていて，実施地は国内と国外だそうです。



日本留学試験（EJU）
出題科目等

科 目	目 的	得 点	範 囲
日本語	日本の大学等での勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)を測定する。	125 分	読解 聴解・聴読解 0～400 点 記述 0～50 点
理科	日本の大学等の理系学部での勉学に必要な理科（物理・化学・生物）の基礎的な学力を測定する。	80 分	0～200 点
総合科目	日本の大学等での勉学に必要な文系の基礎的な学力，特に思考力，論理的能力を測定する。	80 分	0～200 点
数学	日本の大学等での勉学に必要な数学の基礎的な学力を測定する。	80 分	0～200 点



日本留学試験（EJU）
出題科目等

【出題科目等】
① 日本語の科目は，記述，読解，聴解・聴読解の３領域から構成される。
② 理科について，受験者は，受験希望の大学等の指定に基づき，物理・化学・生物から２科目を選択する。
③ 数学について，受験者は，受験希望の大学等の指定に基づき，文系学部及び数学を必要とする程度が比較的少ない理系学部用のコース 1，数学を高度に必要とする学部用のコース２のどちらかを選択する。
④ 理科と総合科目を同時に選択することはできない。
⑤ 上記の得点範囲は，日本語の科目の記述を除き，素点ではなく，共通の尺度上で表示する。また，記述については基準に基づき採点する。
⑥ 出題範囲は，各科目のシラバスを参照のこと。

【出題言語】
- 日本語及び英語により出題するので，受験者は，受験希望の大学等の指定を踏まえて，出願の際にどちらかを申告する（日本語の科目は日本語による出題のみ）。

【解答方式】
- 多肢選択方式（マークシート）（日本語の科目は記述式を含む。）

先ほどの繰り返しになりますが，日本語，理科，総合科目，数学という科目の中から各大学が対象科目，得点範囲，配点を決めて利用します。日本語は 125 分，理科あるいは総合科目のどちらかを選択して 80 分，数学を 80 分ということで，本学は先ほどお示しした配点で実施させていただいています。本学では面接しか実施していませんが，これは日本留学試験に対する本学の評価がある程度高いためにこのような形とさせていただいているということです。

日本語の科目は，記述，読解，聴解・聴読解の 3 領域から出題されています。理科については，進学する学部や学科により大体決まってきますが，物理，化学，生物からの 2 科目。数学は「数学を高度に必要とする学部用のコース２」を使用しています。

2022年度日本留学試験（第２回）

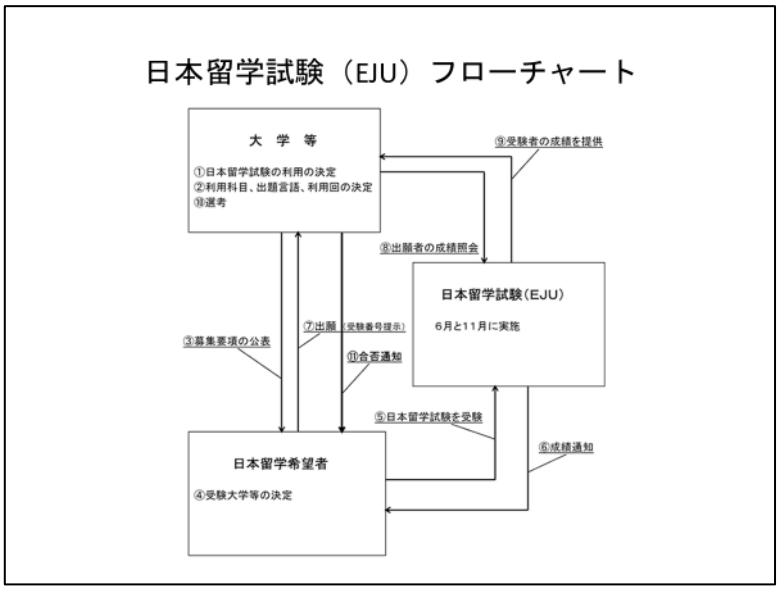
実施地			応募者数(人)	受験者数(人)
国内	北海道		65	42
	東北	宮城	170	123
	関東	群馬	53	43
		埼玉	365	298
		千葉	215	165
		東京	12,143	9,679
		神奈川	301	234
	中部	福井	13	13
		静岡	96	69
		愛知	217	194
	近畿	京都	991	865
		大阪	1,459	1,209
		兵庫	224	184
	中国	広島	216	184
	四国	高知	53	39
	九州	福岡	744	637
	沖縄		17	12
	国内小計		17,342	13,990

昨年度の実施形態を見ますと，国内では応募者，受験者ともに実施域は東京が非常に多く，次が大阪という順になっています。海外から直接本学を受験する学生は年々減っており，東京や大阪にある専門学校等を経由して試験を受けるケースが増えていますので，やはり東京が一番多いのかなと感じています。

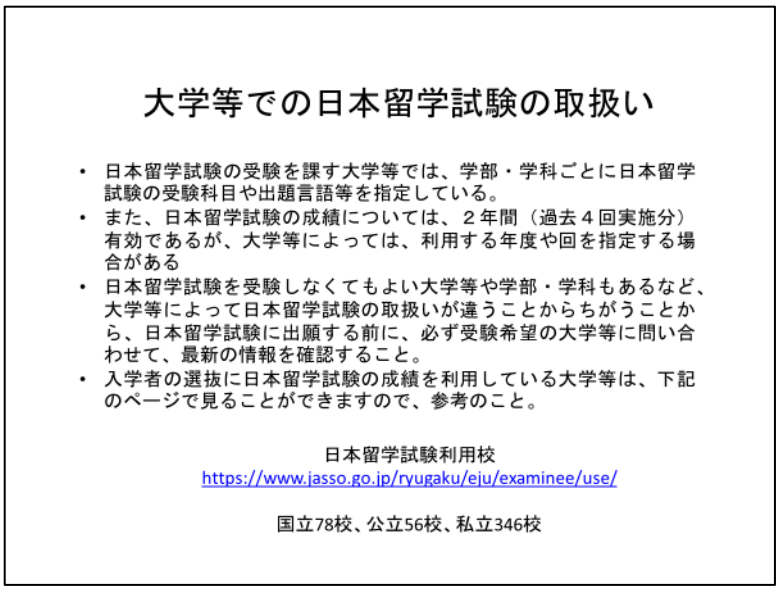
2022年度日本留学試験（第２回）

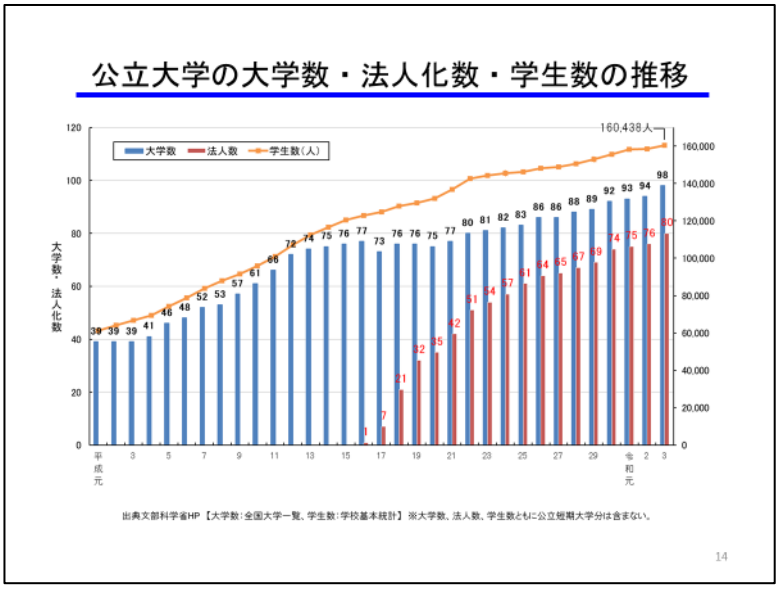
実施地			応募者数(人)	受験者数(人)
国外	インド	ニューデリー	137	65
	インドネシア	ジャカルタ	150	123
		スラバヤ	84	63
	韓国	ソウル	2,376	1,807
		プサン	505	400
	シンガポール		8	7
	スリランカ	コロンボ	5	3
	タイ	バンコク	122	83
		チェンマイ	14	12
	台湾	台北	254	199
	フィリピン	マニラ	20	14
	ベトナム	ハノイ	112	83
		ホーチミン	47	29
	香港		293	149
	マレーシア	ｸｱﾗﾙﾝﾌﾟｰﾙ	151	145
	ミャンマー	ヤンゴン	189	122
	モンゴル	ｳﾗﾝﾊﾞｰﾄﾙ	144	103
	ロシア	ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ（注）	---	---
	国外小計		4,611	3,407
	合計		21,953	17,397

海外では，韓国が一番多く，次が東南アジア圏です。昨年はロシアでは実施できませんでしたが，総受験者数は約 17,000 人，そのうち約 14,000 人が国内で受験しているとのことです。



こちらは大学，日本留学希望者と日本留学試験の関係性を示したフローチャートです。それぞれがどのように使うかを考慮して利用しているというのが現状かなと思います。







地方公共団体の区分別の大学設置状況

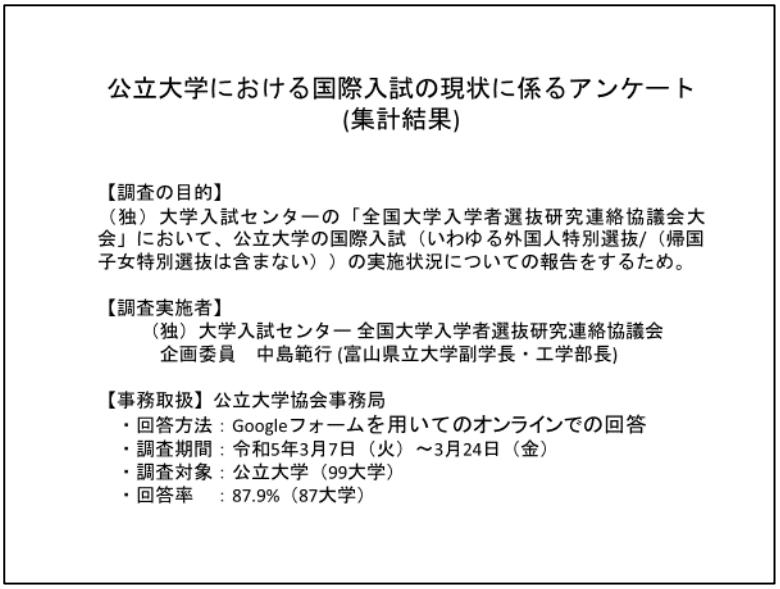
青字＝医歯学部を有する 緑字＝直営型大学 赤字＝学校法人からの設置者変更

		都道府県 43／47	政令市 8／20	中核市等 12／84	一般市 15／686
総合大学	5学部・学生5,000名以上（それに相当する規模の大学を含む）	首都大学東京、大阪府立、兵庫県立	横浜市立、名古屋市立、大阪市立、北九州市立	（含：施行時特例市）	
	複数分野の学部を有する大学	岩手県立、秋田県立、宮城、新潟県立、山梨県立、長野県立、富山県立、福井県立、静岡県立、静岡文化芸術、愛知県立、滋賀県立、京都府立、島根県立、岡山県立、県立広島、山口県立、高知県立、高知工科、福岡女子、長崎県立、熊本県立（22大学）	札幌市立、広島市立	高崎経済、福山市立	長野、公立諏訪東京理科（組合立・3市）、公立小松、尾道市立、名桜（組合立）
単科大学	看護系以外 同一分野の複数学部を持つ大学を含む	札幌医科、国際教養、山形県立米沢栄養、福島県立医科、会津、群馬県立女子、産業技術大学院、石川県立、情報科学芸術大学院、愛知県立芸術、京都府立医科、奈良県立医科、奈良県立、和歌山県立医科、公立鳥取環境（県・市共同設置）、九州歯科、福岡県立、沖縄県立芸術（18大学）	京都市立芸術、神戸市外国語	公立はこだて未来（広域連合立）青森公立、秋田公立美術、前橋工科、長岡造形、金沢美術工芸、岐阜薬科、公立鳥取環境（県・市共同設置）、下関市立、宮崎公立（10大学）	釧路公立（組合立）、公立千歳科学技術、都留文科、福知山公立、山陽小野田市立山口東京理科（5大学）
	看護系 看護医療系の単科大学	青森県立保健、山形県立保健医療、茨城県立医療、群馬県立県民健康科学、埼玉県立、千葉県立保健医療、神奈川県立保健福祉、新潟県立看護、長野県看護、石川県立看護、岐阜県立看護、三重県立看護、香川県立保健医療、愛媛県立医療技術、大分県立看護科学、宮崎県立看護、沖縄県立看護（17大学）	神戸市看護		名寄市立、敦賀市立看護、新見公立

大学の区分はあくまでも参考。事務組合等については、組合を構成する町、村も関与する自治体となるが本表では表現されていない。 15

これも繰り返しになりますが，われわれは定員制ではなく，若干名を取る形ですので，先ほどの APU さんのような募集活動を系統立てては行っていません。国際化ということを考えますと，留学生入試をどのように運用していくかがこれからの課題なのだろうと感じています。

JASSO のホームページによると，国立では 78 校，公立では 56 校，私立では 346 校で，合わせて 500 まではいきませんが，数多くの大学がこの試験を利用していることになろうかと思います。この辺に関しては JASSO さんにどういうことでやっているのか，国の政策や施策を伺う機会があればいいなと個人的には思っています。



公立大学における国際入試の現状に係るアンケート (集計結果)

【調査の目的】
（独）大学入試センターの「全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会」において、公立大学の国際入試（いわゆる外国人特別選抜/（帰国子女特別選抜は含まない））の実施状況についての報告をするため。

【調査実施者】
（独）大学入試センター 全国大学入学者選抜研究連絡協議会
企画委員　中島範行 (富山県立大学副学長・工学部長)

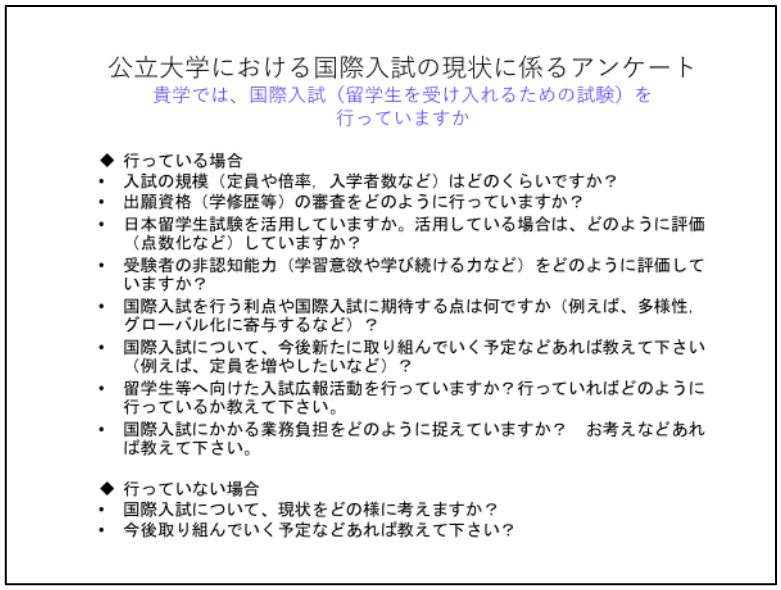
【事務取扱】公立大学協会事務局
・回答方法：Googleフォームを用いてのオンラインでの回答
・調査期間：令和5年3月7日（火）～3月24日（金）
・調査対象：公立大学（99大学）
・回答率　：87.9%（87大学）

次に，公立大学におけるアンケート結果についてお話しさせていただきます。これは一昨年の表です。令和 4 年時点では公立大学数は 99 校になりました。学生数が多くなっていますが，国立大学に比べ急激に学校数が増加し，学生数も 16 万人になってきたということになります。

設置形態別で見ますと，単科大学が非常に多く，そのうち看護系あるいは芸術系が非常に多くなっています。昔からあった皆さんがよくご存じの大学は総合大学が多いですが，このような大きな大学の他は小さい大学が多いのが現状ですので，なかなかまとまった取り組みができないことが課題になろうかと思います。

公立大学協会に国際入試に関する取り組みについて，これまでアンケートを取ったことがあるか，講習会とか講演会で何か話をしたことがあるかを伺ったところ，実績はないということでしたので，アンケートを取らせていただきました。Google フォームを用いて，2 週間程度の期間を設けてオンラインで回答していただきました。対象校は 99 大学，このうち 87 大学から回答が得られました。回答率は約 88％です。

この結果については以下に述べますが，大学ごとの個別の回答内容の提示は致しませんのでご容赦ください。


公立大学における国際入試の現状に係るアンケート

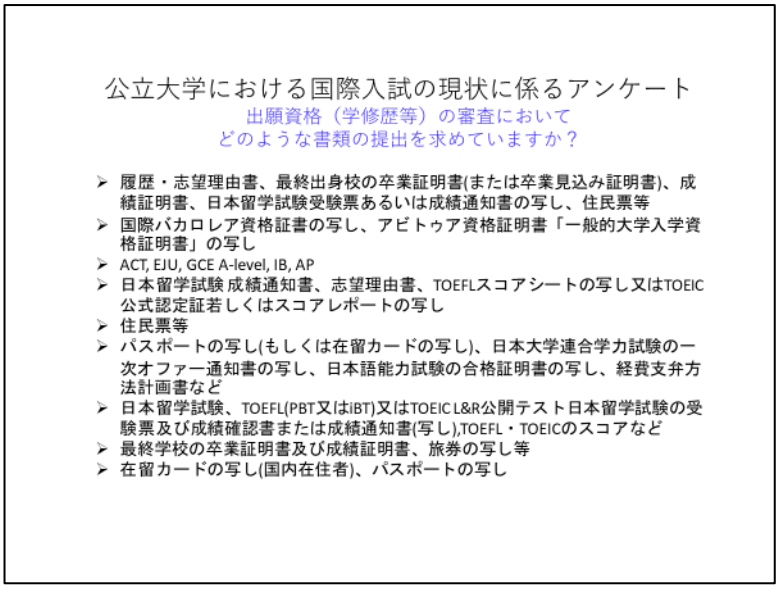
貴学では、国際入試（留学生を受け入れるための試験）を行っていますか

◆ 行っている場合
- 入試の規模（定員や倍率，入学者数など）はどのくらいですか？
- 出願資格（学修歴等）の審査をどのように行っていますか？
- 日本留学生試験を活用していますか。活用している場合は、どのように評価（点数化など）していますか？
- 受験者の非認知能力（学習意欲や学び続ける力など）をどのように評価していますか？
- 国際入試を行う利点や国際入試に期待する点は何ですか（例えば、多様性，グローバル化に寄与するなど）？
- 国際入試について、今後新たに取り組んでいく予定などあれば教えて下さい（例えば、定員を増やしたいなど）？
- 留学生等へ向けた入試広報活動を行っていますか？行っていればどのように行っているか教えて下さい。
- 国際入試にかかる業務負担をどのように捉えていますか？　お考えなどあれば教えて下さい。

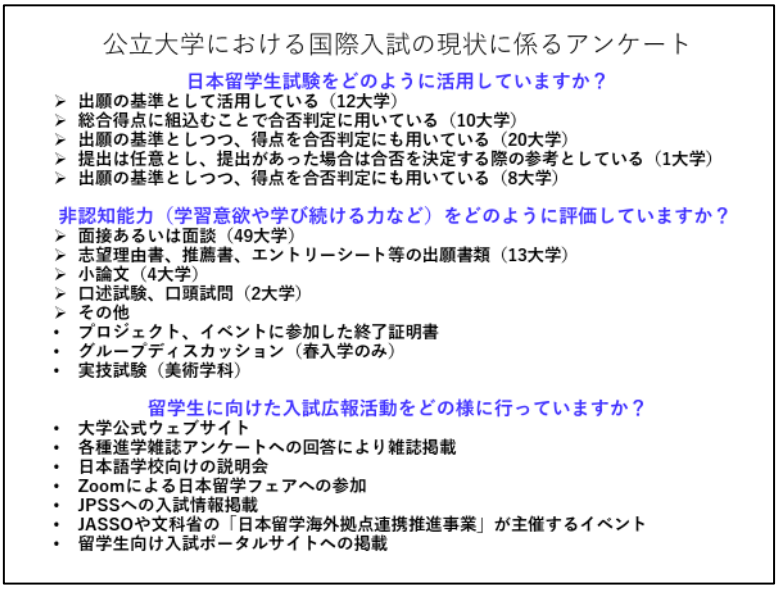
◆ 行っていない場合
- 国際入試について、現状をどの様に考えますか？
- 今後取り組んでいく予定などあれば教えて下さい？

国際入試を「留学生を受け入れるための入試」と定義し，国際入試の実施について質問したところ，実施している大学が 56 大学で，実施していない大学が 31 大学でした。およそ 3 分の 2 の大学で国際入試を実施していることがわかりました。実施している大学には，詳細についてのアンケートをお願いしました。

なお，このアンケートの質問内容については，共催大学であります北海道大学の先生ともお話をさせていただいた上で決定した経緯があります。



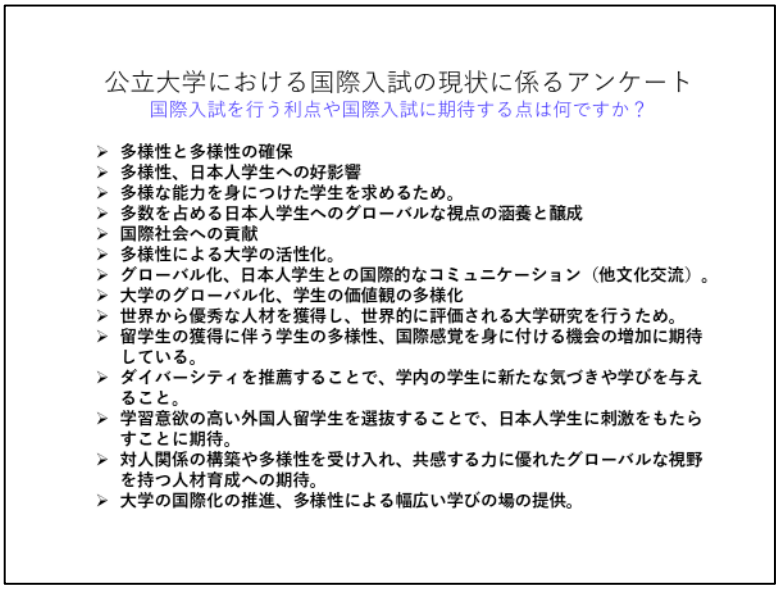
「出願資格審査においてどのような書類の提出を求めているか」という質問に対し，履歴書，志願理由書，卒業証明書，先ほども出てきました日本留学試験の受験票あるいは成績表の写し，あるいは日本にいる人は住民票が挙げられました。国際バカロレアの試験を別にやっている大学ではその資格書の提出を求めているようです。他に住民票，パスポートの写しといった回答がありました。



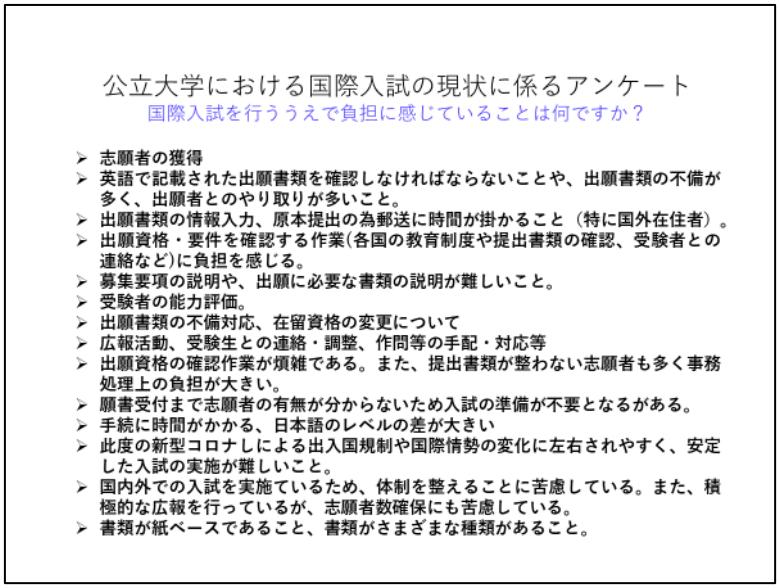
日本留学生試験の活用方法は 5 つのタイプに分けられました。出願基準として使う，合否判定に使う，両方というところがスライドに示す割合です。また，非認知能力については，ほとんどの大学が面接や面談といった，実際に対面することで評価しているようです。他には小論文や口述試験，口頭試問がありました。これらは面接あるいは面談に含まれるのかもしれませんが，このように使っているということになります。

留学生確保のための広報活動については，大学の公式ウェブサイトや関係雑誌への掲

載，現地の大学で開催される日本留学フェアへのオンライン参加，JASSO が主催するイベントへの参加が挙げられ，大学独自の取組みについてはアンケートから拾い上げることができませんでしたので，後日このようなことをやっているよとお知らせいただければありがたいと思います。



国際入試に期待する点については，「多様性」という言葉が非常に多く見受けられました。日本人以外の学生が入ってくることで多様な価値観に触れ，日本人学生に良い影響を及ぼす，大学の活性化，国際化への貢献等を期待する回答が多くありました。優秀な人材獲得という目的から「研究の面で活性化したい」という回答もありました。



それから，ある意味でこれが一番気になっているところなのかもしれません。国際入試における実施上の負担についてです。定員を定めている大学にとっては，志願者の獲得が大きいと思います。アンケートにお答えになったのは事務職員の方が多いと思いますので，出願書類の確認や不備への対応，郵送等に係る作業時間の多さが問題点にあげ

られていました。また。受験者の能力評価の困難さも挙げられました。
　私からの報告は以上です。

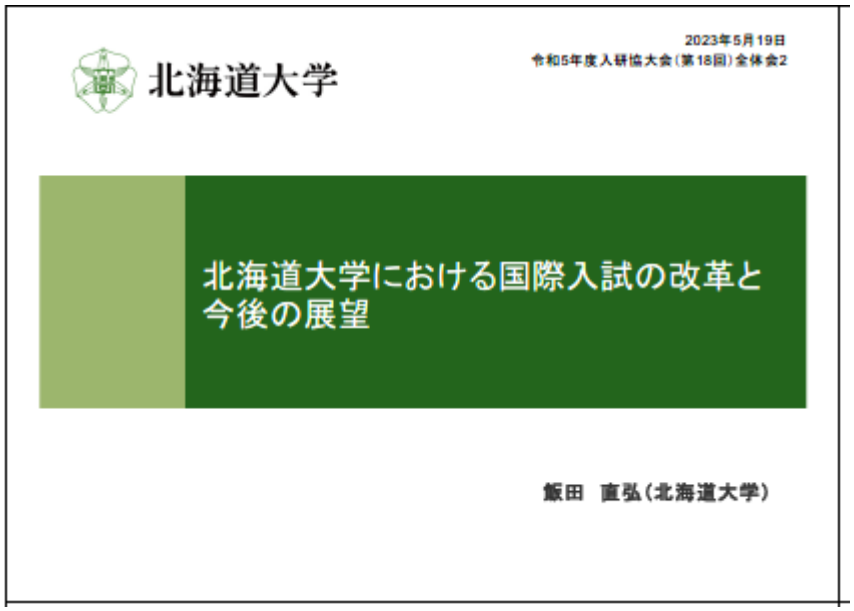
【池田・司会】　今回，アンケートまで取っていただきありがとうございました。なかなか公立大学というところは見えづらいところもあったのですが，一口に公立大学といっても非常に多様だなということもよく分かりましたし，入試の目的や選抜方法も非常に多様性があるということを感じました。また，後ほどパネルディスカッションの際に深く聞かせていただければと思います。■

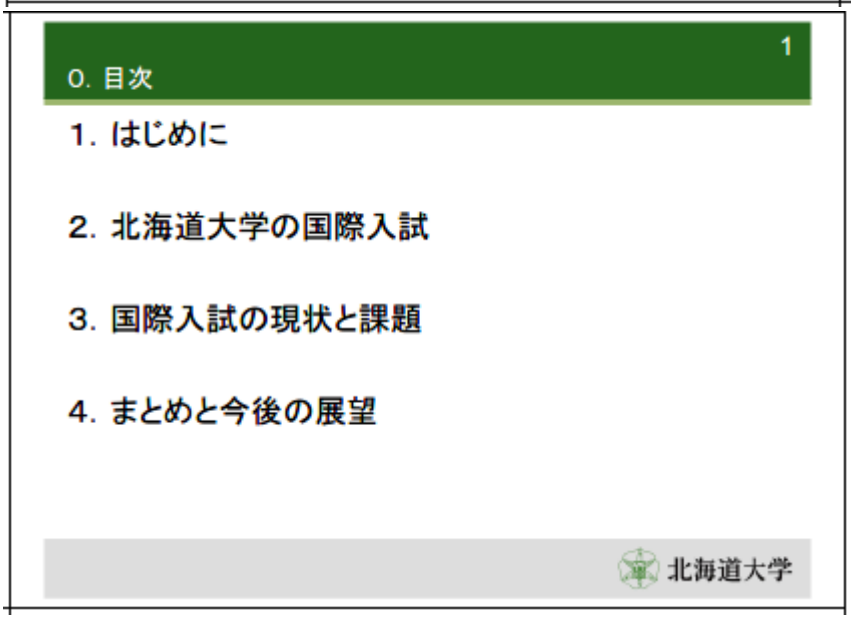
全体会２ ◉ 報告３

北海道大学における国際入試の改革と今後の展望

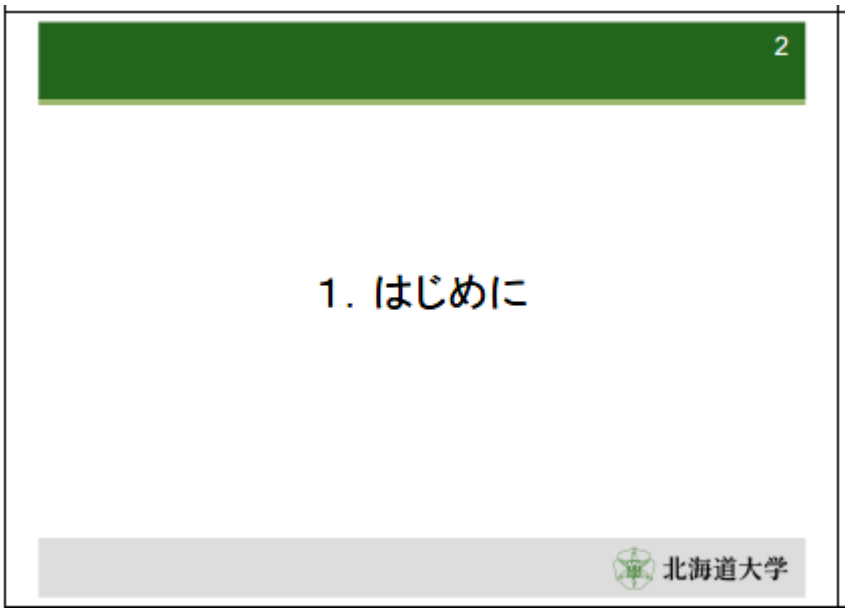
■飯田　直弘（北海道大学高等教育推進機構准教授）

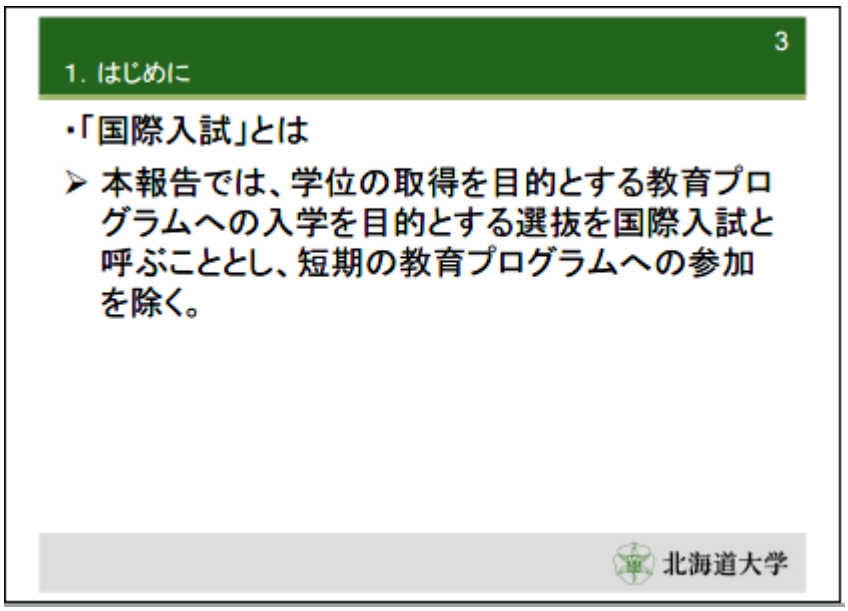
北海道大学の国際入試について報告させていただきます。北海道大学の飯田と申します。本日はよろしくお願いします。



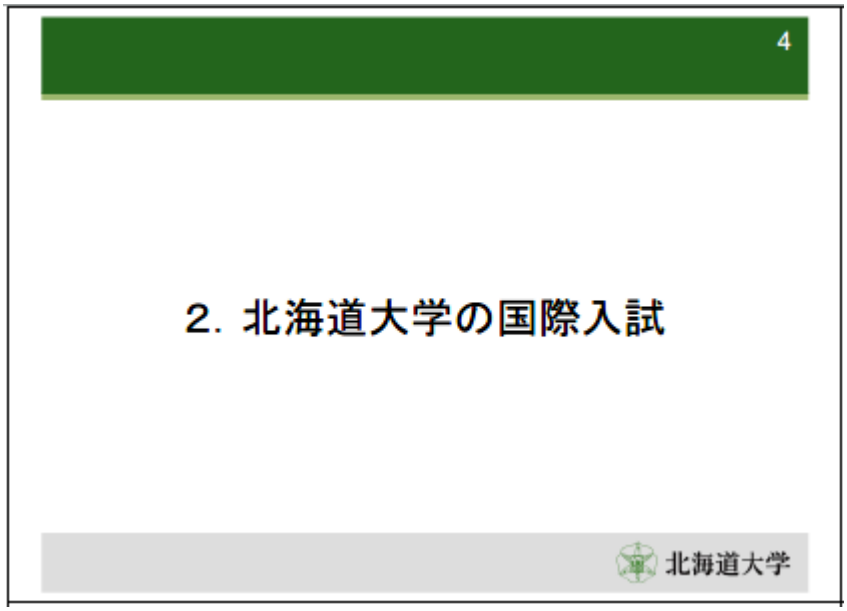


本報告はこちらの４つのパートに分かれています。



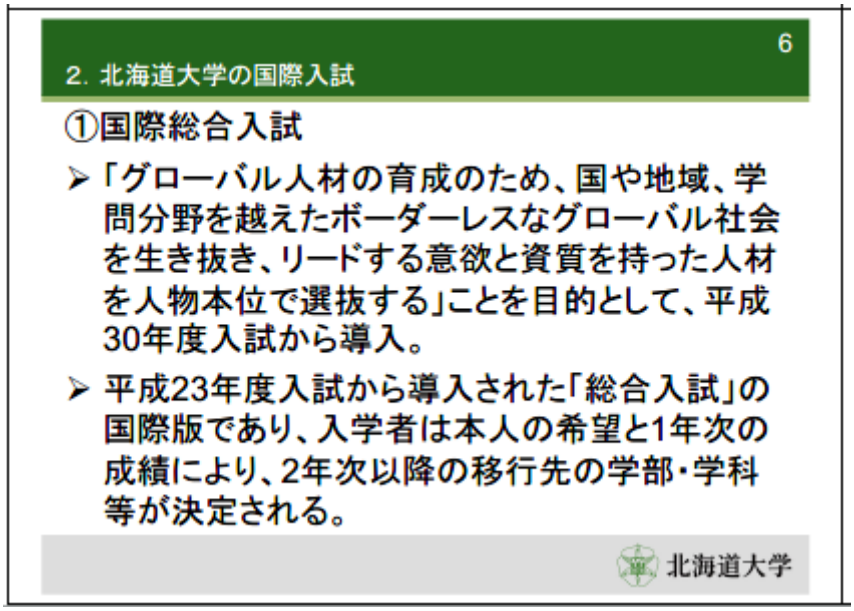


まず，本報告では，学位の取得を目的とする教育プログラムへの入学の際に行われる選抜を国際入試と呼ぶこととし，短期の教育プログラムへの参加等を除くこととさせていただきます。

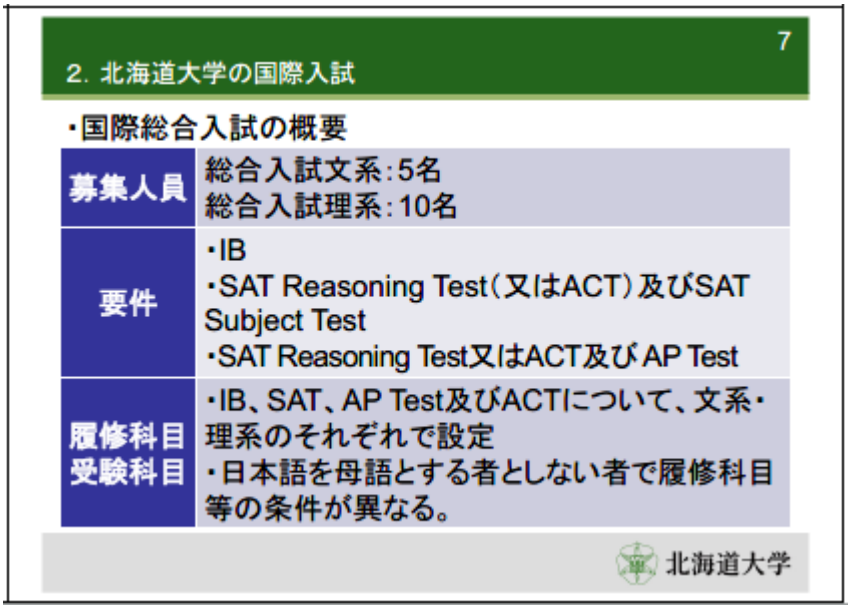




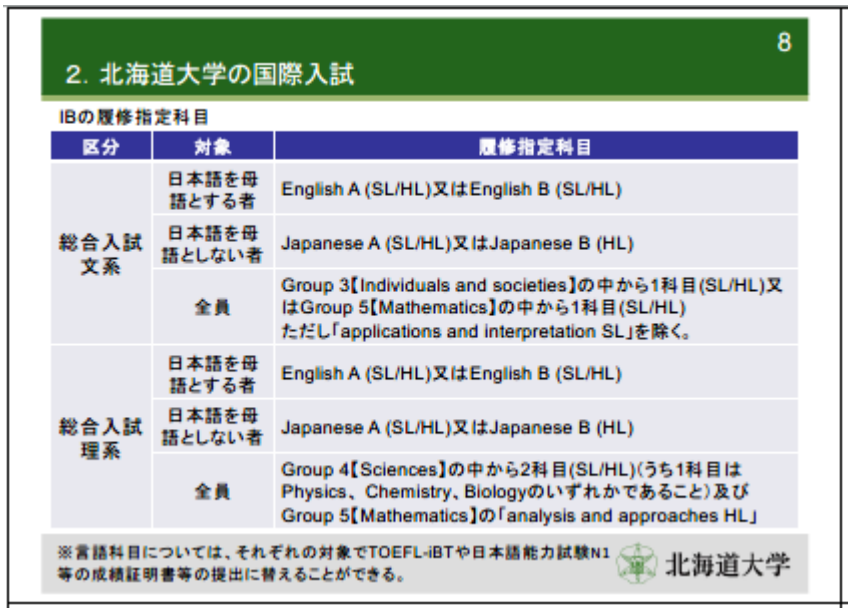
北海道大学の 5 つの国際入試について，趣旨や目的，概要，選抜方法等について順を追ってご説明します。



1 つ目は，国際総合入試です。本入試の目的は，「グローバル人材の育成のため，国や地域，学問分野を越えたボーダーレスなグローバル社会を生き抜き，リードする意欲と資質を持った人材を人物本位で選抜する」ことで，平成 30 年度入試で導入されました。平成 23 年度入試に導入された総合入試の国際版であり，入学時には学部・学科等の所属は決まっておらず，本人の希望と 1 年次の成績により，2 年次以降の学部・学科等が決定されることになっています。



国際入試の募集人員，要件，履修科目等については，こちらの表にあるとおりです。募集人員は文系・理系合わせて 15 名で，要件として IB，SAT または ACT，AP Test が設定されており，それぞれ履修科目・受験科目が指定されています。



8

2. 北海道大学の国際入試

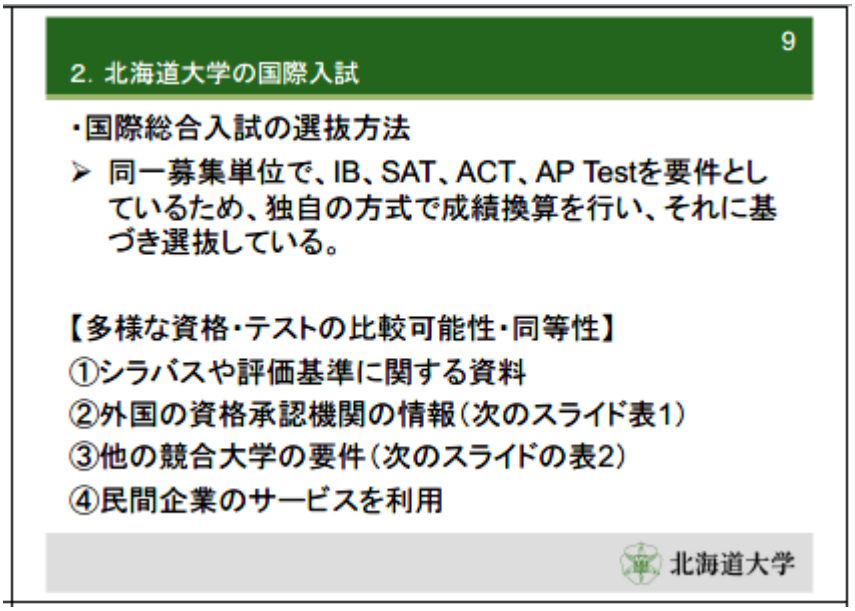
IBの履修指定科目

区分	対象	履修指定科目
総合入試文系	日本語を母語とする者	English A (SL/HL)又はEnglish B (SL/HL)
	日本語を母語としない者	Japanese A (SL/HL)又はJapanese B (HL)
	全員	Group 3【Individuals and societies】の中から1科目(SL/HL)又はGroup 5【Mathematics】の中から1科目(SL/HL) ただし「applications and interpretation SL」を除く。
総合入試理系	日本語を母語とする者	English A (SL/HL)又はEnglish B (SL/HL)
	日本語を母語としない者	Japanese A (SL/HL)又はJapanese B (HL)
	全員	Group 4【Sciences】の中から2科目(SL/HL)(うち1科目はPhysics、Chemistry、Biologyのいずれかであること)及びGroup 5【Mathematics】の「analysis and approaches HL」

※言語科目については、それぞれの対象でTOEFL-iBTや日本語能力試験N1等の成績証明書等の提出に替えることができる。

北海道大学

ここでは，時間の都合上，IB，つまり国際バカロレアの履修指定科目のみをご紹介します。IB は文系・理系のそれぞれで全員共通で履修しなければならない科目が指定されており，また，日本語を母語とする者としない者で指定科目が異なります。



9

2. 北海道大学の国際入試

・国際総合入試の選抜方法

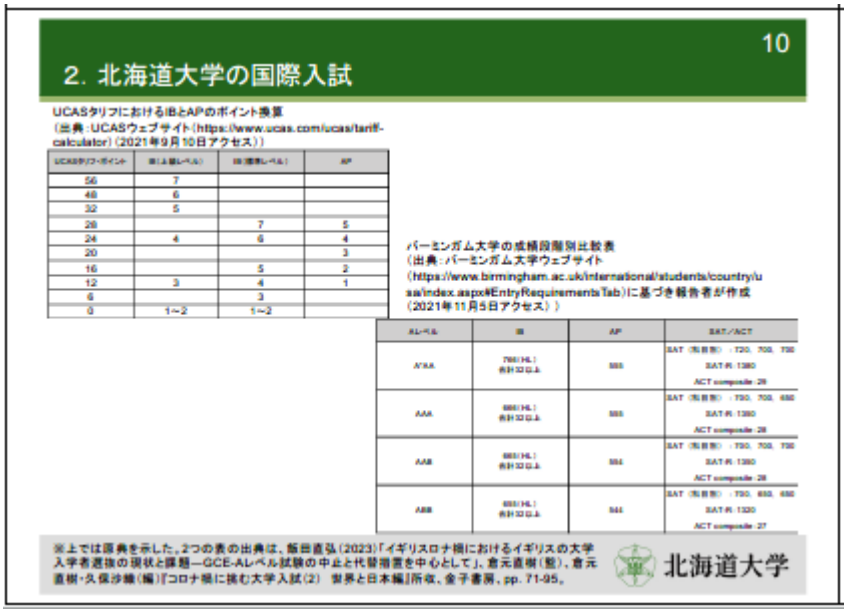
- 同一募集単位で、IB、SAT、ACT、AP Testを要件としているため、独自の方式で成績換算を行い、それに基づき選抜している。

【多様な資格・テストの比較可能性・同等性】

①シラバスや評価基準に関する資料
②外国の資格承認機関の情報（次のスライド表1）
③他の競合大学の要件（次のスライドの表2）
④民間企業のサービスを利用

北海道大学

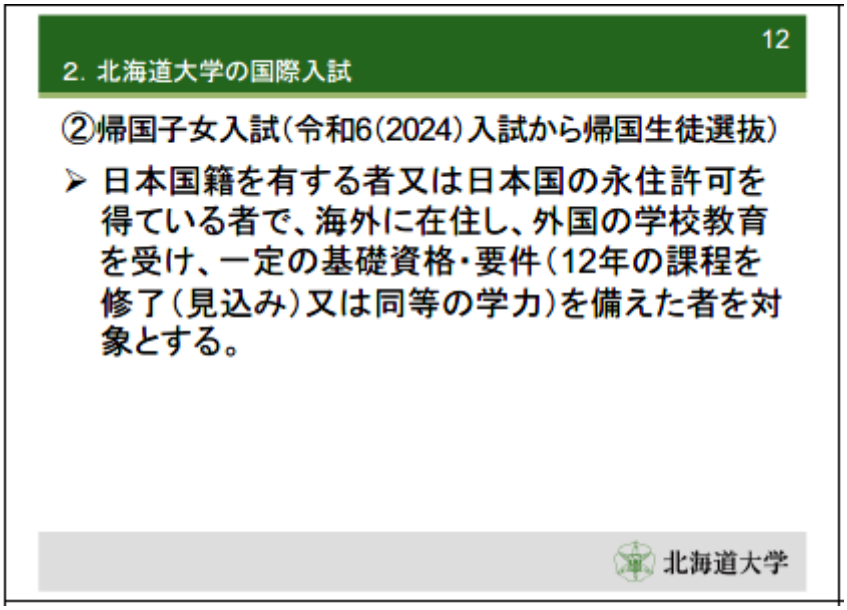
国際総合入試の選抜方法の特徴として，同一募集単位で IB，SAT，ACT，AP Test を要件としているため，独自の方式で成績換算を行い，それに基づき選抜している点が挙げられます。これは他大学の国際入試ではあまり見られない特徴であるかと思います。これらの多様な資格，テストの比較可能性もしくは同等性を確保する方法としては，①シラバスや評価基準に関する資料の検討，②外国の資格承認機関の情報の参照，③競合大学の要件の参照，④民間企業のサービスの利用といった方法が挙げられます。また，これらに加えて，入学後の成績について追跡調査し，それに基づき成績換算表を再調整することも重要な点になります。

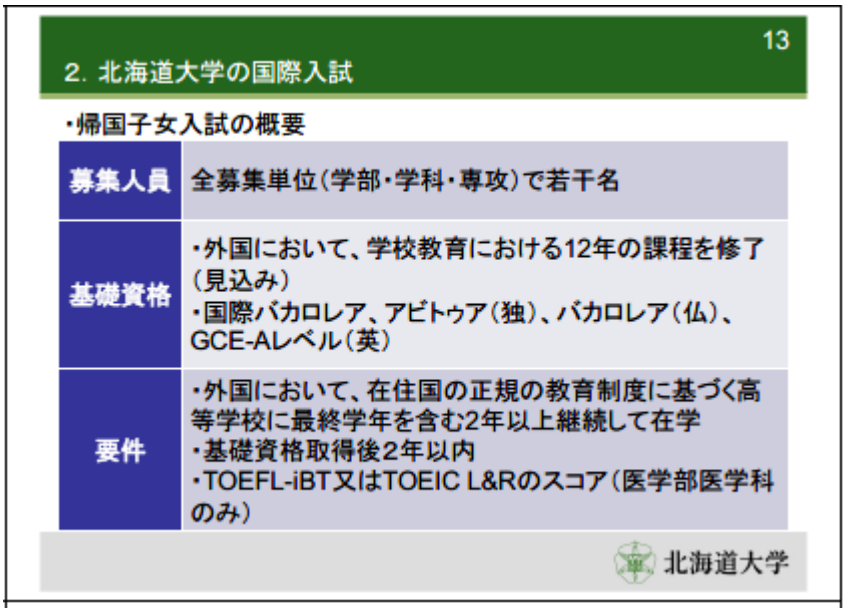


②外国の資格承認機関の情報については左上の表に示しました。また，③競合大学の要件については，右下の表に例を示しました。これらを参照することにより，IB，AP，SAT の成績が相互にどのように対応しているのかが分かります。



国際総合入試の選抜は 2 段階で行われています。第 1 次選考では成績評価証明書，調査書，志望理由書・自己推薦書等に基づき選考を行います。第 2 次選考は面接と成績評価証明書等に基づき総合的に判定することになっており，面接は課題論文を含む出願書類の内容に基づき実施します。それぞれの配点については，表に示したとおりです。





２つ目の国際入試である帰国子女入試の説明に移りたいと思います。出願資格に関するこちらのスライドの説明は，他の大学と共通する部分になるかと思いますので割愛させていただきます。帰国子女入試の募集人員は若干名であり，基礎資格として，12 年の課程の終了の他に，IB，ドイツのアビトゥア，フランスのバカロレア，イギリスの GCE-A レベルが設定されています。また，要件として，医学部医学科のみ英語資格のスコアを課しているのが特徴といえます。

14

2. 北海道大学の国際入試

・帰国子女入試の選抜方法

【第1次選考】

- 出願書類により選考を行う。

【第2次選考】

- 課題論文・総合問題・適性試験及び面接により選考を行う。

北海道大学

第1次選考の配点

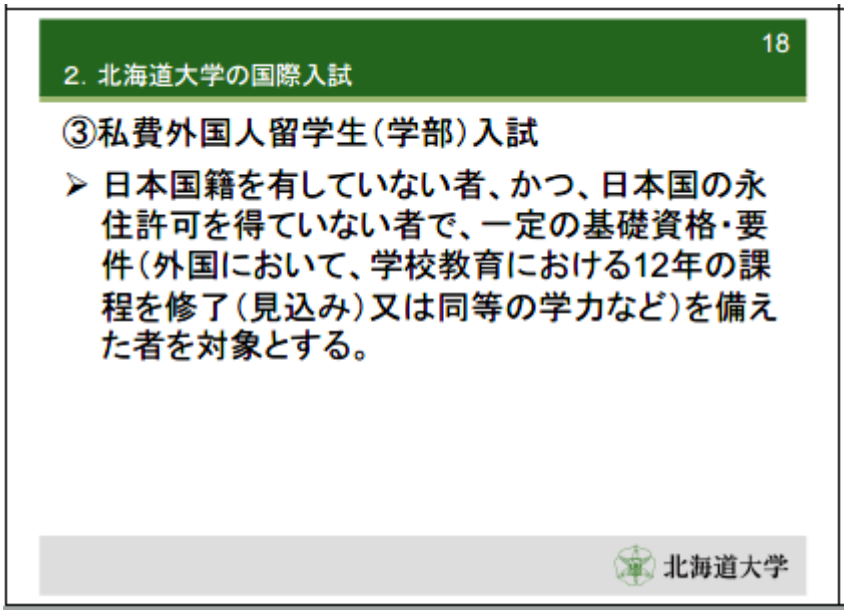
学部・学科等	出願書類	配点
文学部	資格・成績証明書等	50
	推薦書 自己推薦書 諸活動の記録	50
教育学部	資格・成績証明書等	50
	推薦書 自己推薦書	50
法学部	資格・成績証明書等 推薦書	60
	自己推薦書 諸活動の記録	40
経済学部	資格・成績証明書等	60
	推薦書 自己推薦書 諸活動の記録	40
理学部 数学科	資格・成績証明書等	60
	推薦書 自己推薦書	40
理学部 物理学科	資格・成績証明書等 諸活動の記録	40
	推薦書 自己推薦書	60
理学部 化学科	資格・成績証明書等	60
	推薦書 自己推薦書	40
理学部 生物科学科（生物学系分野）	資格・成績証明書等	40
	推薦書 自己推薦書	60
理学部 生物科学科（高分子機能学等分野）	資格・成績証明書等	40
	推薦書 自己推薦書	60
理学部 地球惑星科学科	資格・成績証明書等	50
	推薦書 自己推薦書	50

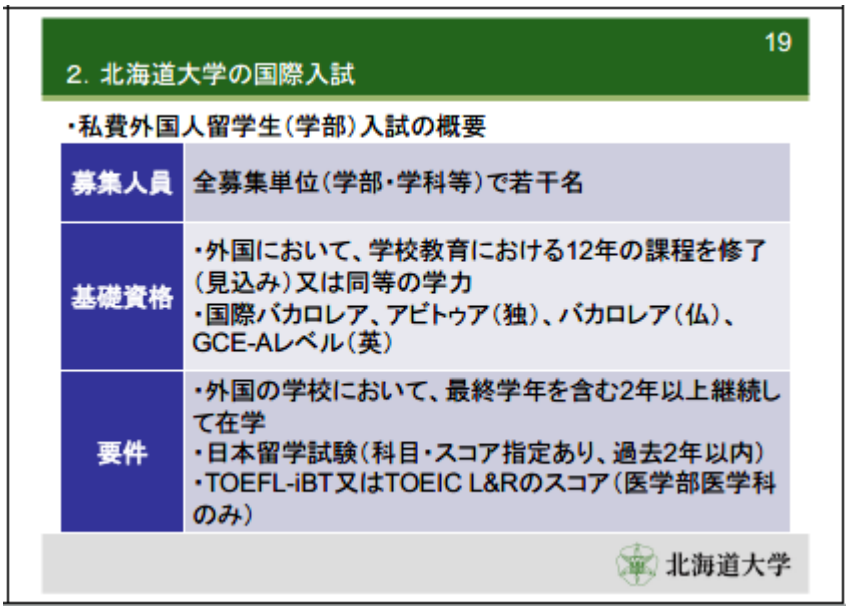
学部・学科等	出願書類	配点
医学部 医学科	資格・成績証明書等	50
	推薦書 自己推薦書 諸活動の記録	50
歯学部	資格・成績証明書等 推薦書	50
	自己推薦書 諸活動の記録	50
薬学部	資格・成績証明書等	50
	推薦書 自己推薦書	50
工学部	資格・成績証明書等	60
	自己推薦書	40
農学部	資格・成績証明書等	50
	推薦書 自己推薦書 諸活動の記録	50
獣医学部	資格・成績証明書等	50
	自己推薦書 諸活動の記録	50
水産学部	資格・成績証明書等	40
	自己推薦書	60

第2次選考の配点

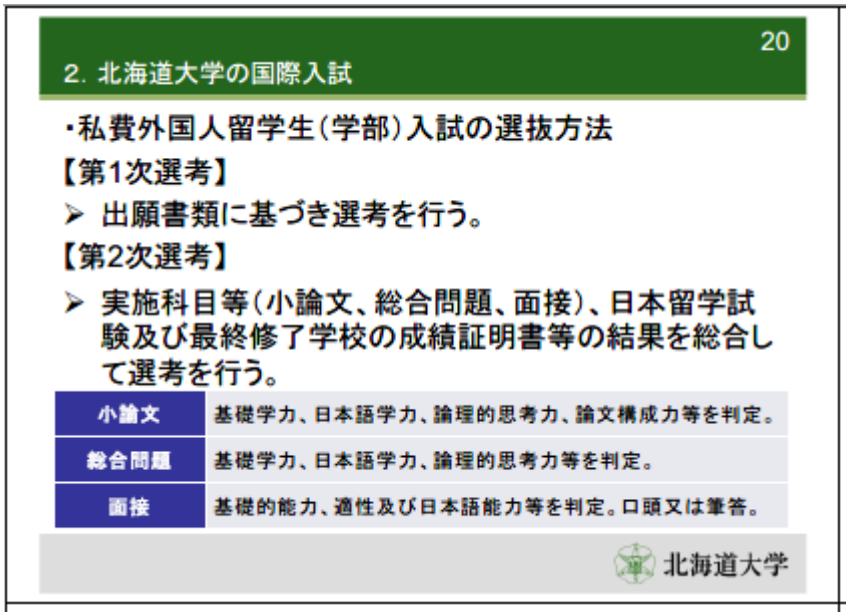
学部・学科等	配点	内容
文学部	課題論文	50	資料の、論理的思考力、問題発見能力、表現力等を問う。
	面接	40	入国や入学の社会・文化・歴史に関する知的関心の確認や、学ぶ上に必要な基礎的素養、意欲、思考力等を問う。
教育学部	課題論文	60	資料の、論理的思考力、表現力及び日本語能力等を総合的に問う。
	面接	40	日常的話題、意欲、論理的思考力、表現力等を問う。
法学部	課題論文	60	資料の、問題発見能力、論理的思考力、表現力等を問う。
	面接	40	日常的話題、意欲、基礎学力等を問う。
経済学部	課題論文	100	論理的思考力、問題発見能力、表現力等を総合的に問う。
	面接	50	個性、意欲、価値、適性、基礎学力のなどを問う。
理学部 数学科	適性試験	120	基礎的な知識及び技能の他、思考力及び判断力などを評価する。数学100分（7問程度）と「数学の基本問題」数学120分（7問程度）の論述問題を課す。出題範囲は以下のとおりとする。 <共通問題> ・数学Ⅰ・Ⅱ・B・A・B（100点） （数学Aは「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」、数学Bは「数列」、「ベクトル」とする） <選択問題> ・数学Ⅰ・Ⅱ・B・A・B（200点） （数学Aは「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」、数学Bは「数列」、「ベクトル」とする）
	面接	180	数学に関する基礎による基礎学力・論理的思考力及び数学への興味・関心を問う。
理学部 物理学科	適性試験	120	基礎的な知識及び技能の他、思考力及び判断力などを評価する。数学100分（7問程度）と「数学の基本問題」数学120分（7問程度）および「物理」左記への論述問題を課す。出題範囲は以下のとおりとする。 <共通問題> ・数学Ⅰ・Ⅱ・B・A・B（100点） （数学Aは「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」、数学Bは「数列」、「ベクトル」とする） <選択問題> ・数学Ⅰ・Ⅱ・B・A・B（100点） （数学Aは「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」、数学Bは「数列」、「ベクトル」とする） ・物理基礎・物理（100点） （「力学」、「波動」、「熱」、「電磁気」から、電磁気を含む1つ）
	面接	250	物理学に対する興味、意欲、適性、そして学習に耐えうる学習能力を問う。
理学部 化学科	適性試験	120	基礎的な知識及び技能の他、思考力及び判断力などを評価する。数学100分（7問程度）と「数学の基本問題」数学120分（7問程度）および「物理・化学」への論述問題を課す。出題範囲は以下のとおりとする。 <共通問題> ・数学Ⅰ・Ⅱ・B・A・B（100点） （数学Aは「場合の数と確率」、「整数の性質」、「図形の性質」、数学Bは「数列」、「ベクトル」とする） <選択問題> ・物理基礎・物理（100点） （「力学」、「波動」、「熱」、「電磁気」から、電磁気を含む1つ） ・化学基礎・化学（100点）
	面接	180	意欲、自然現象、化学に対する興味、適性等を問う。

帰国子女入試の選抜は２段階であり，第１次選考では出願書類により選考を行い，第２次選考では課題論文，総合問題，適性試験および面接により選考を行うことになっています。参考までに，各募集単位の第１次選考と第２次選考の配点を示しましたが，時間の都合上，こちらの説明は割愛させていただきます。後ほど各自でご参照いただければ幸いです。





３つ目の国際入試である私費外国人留学生入試についてご説明します。こちらに出願資格を示しましたが，先ほどの帰国子女入試と同様に，他大学と共通する部分になるかと思います。私費外国人留学生入試の募集人員，基礎資格および要件については，日本留学試験の科目とスコアが要件として設定されている点以外は，帰国子女入試と共通する部分が大きいです。

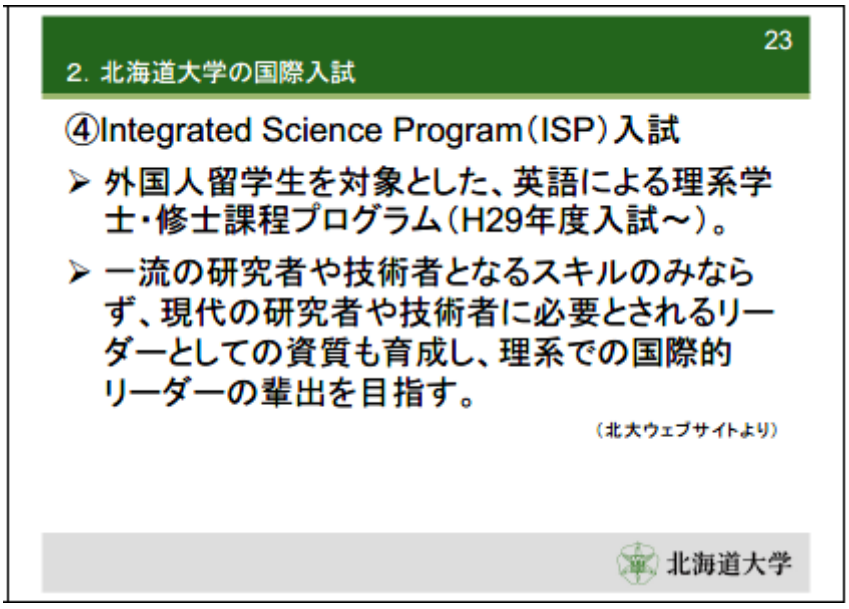


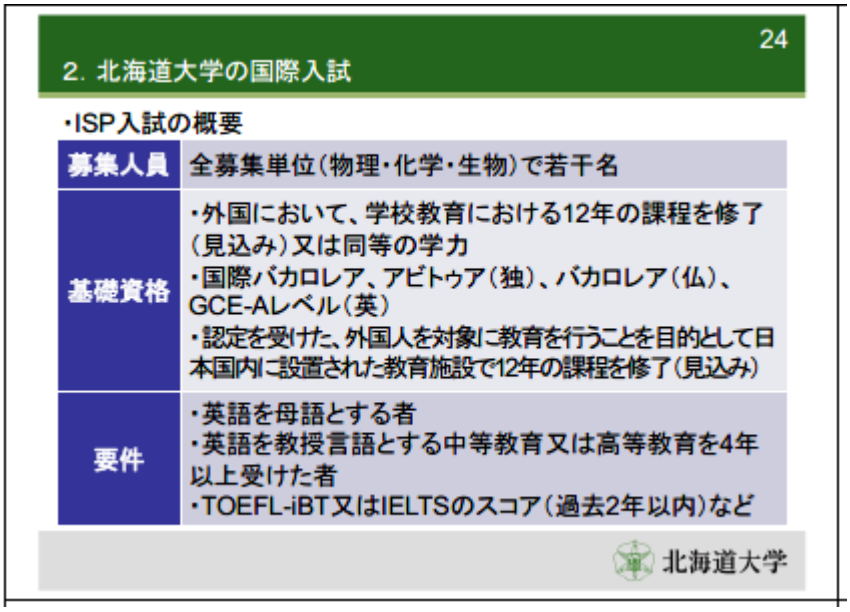
選抜は 2 段階であり，第 1 次選考では出願書類に基づき選考を行い，第 2 次選考では小論文，総合問題，面接，日本留学試験および最終修了学校の成績証明書等の結果を総合して選考を行うことになっています。小論文，総合問題，面接で問われる能力は下の表に示したとおりです。





見にくくて恐縮ですが，こちらの表は実施科目等の一覧になります。帰国子女入試の配点と同様に，後ほどご参照ください。

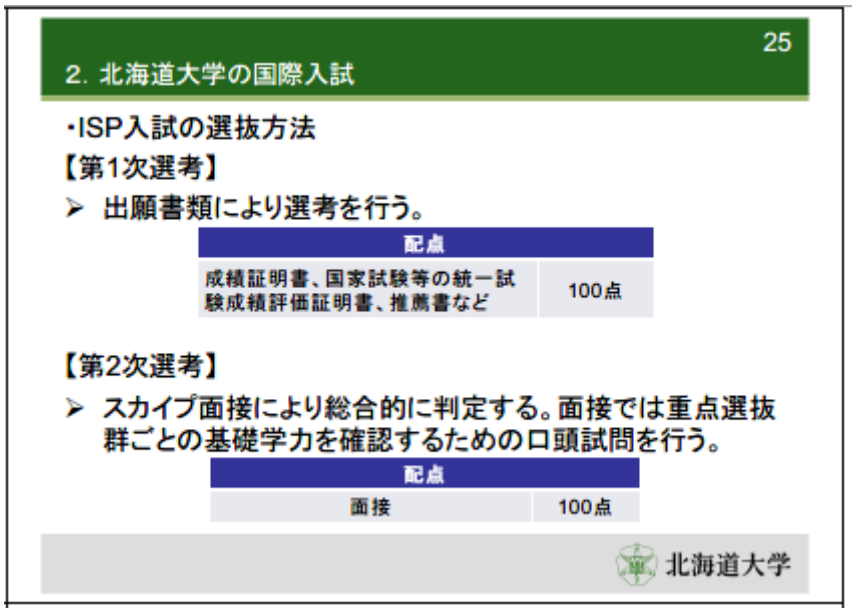




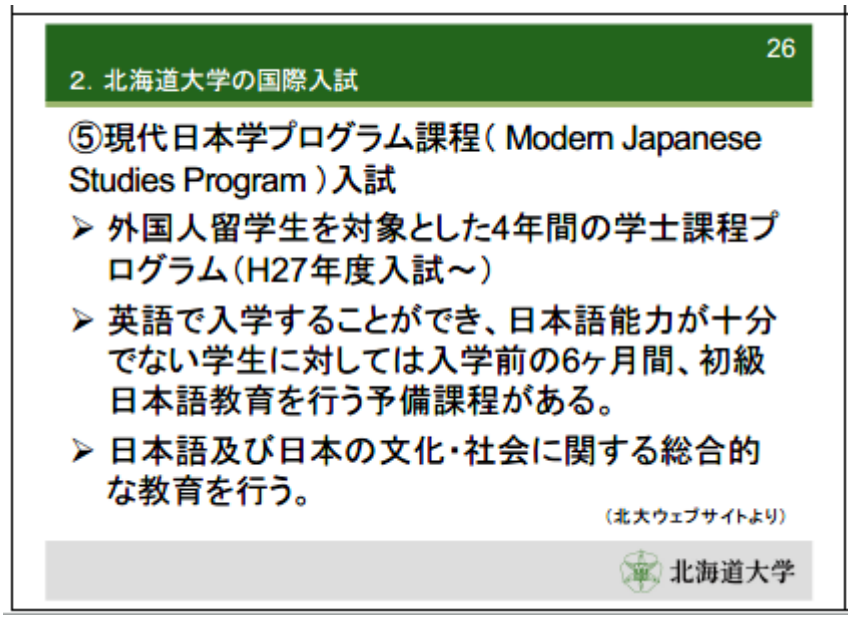
４つ目の国際入試である Integrated Science Program 入試の説明に移りたいと思います。本入試は，外国人留学生を対象とした英語による理系の学士・修士課程プログラムであり，平成 29 年度入試で導入されました。一流の研究者や技術者となるためのスキルのみならず，現代の研究者や技術者に必要とされるリーダーとしての資質も育成し，理系での国際的リーダーの輩出を目指しています。

スライドには示していませんが，本入試は理学部が実施しており，学部卒業後は理系の大学院への進学が可能となっています。また，募集区分として，物理重点選抜群，化学重点選抜群，生物重点選抜群があり，各選抜群単位で募集を行っています。所属学科の決定は，本人の希望および成績に基づき 1 年次の第 1 学期終了時に行います。

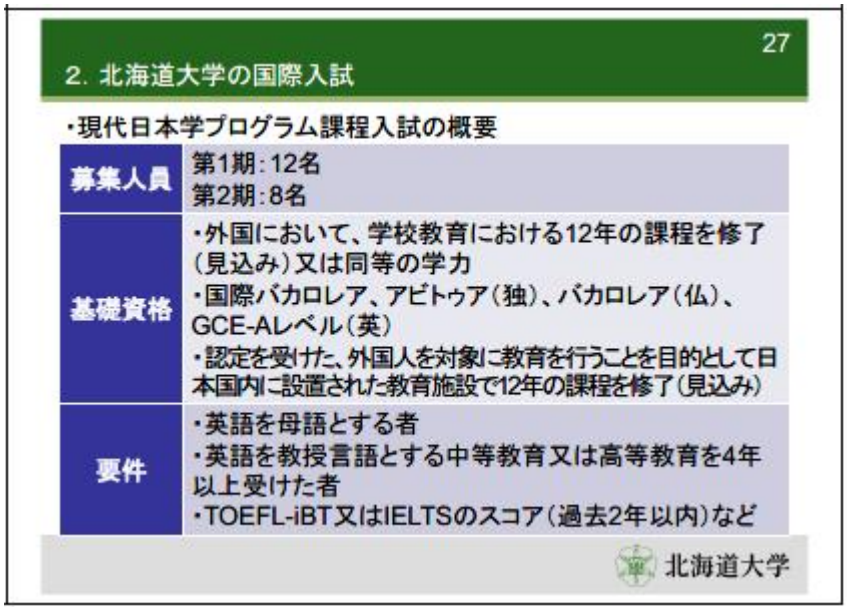
Integrated Science Program，ISP の募集人員は若干名となっています。基礎資格については，帰国子女入試や私費外国人留学生入試と同様に，12 年の課程の修了や IB，アビトゥア，バカロレア，そして，GCE-A レベルが設定されています。また，英語に関する要件があります。



選抜は 2 段階で実施しています。第 1 次選考では成績証明書，国家試験等の統一試験成績評価証明書，推薦書などの出願書類により選考を行い，第 2 次選考では Skype 面接により総合的に判定することになっています。なお，面接では，重点選抜群ごとの基礎学力を確認するための口頭試問を行うことになっています。



最後の 5 つ目の国際入試である現代日本学プログラム課程入試についてご説明します。本入試は，外国人留学生を対象とした 4 年間の学士課程プログラムであり，平成 27 年度入試で導入されました。英語で入学することが可能で，日本語能力が十分でない学生に対して，入学前の 6 か月間，初級日本語教育を行う予備課程があります。カリキュラムの特徴は，日本語および日本の文化・社会に関する総合的な教育を行う点にあります。



現代日本学プログラム課程入試の募集人員は，10 月に募集が開始され 2 月に合格発表がある第 1 期が 12 名，2 月に募集が開始され 5 月に合格発表がある第 2 期が 8 名となっています。基礎資格と要件については，先ほどご説明した ISP とほとんど同じものになりますので，説明は割愛させていただきます。

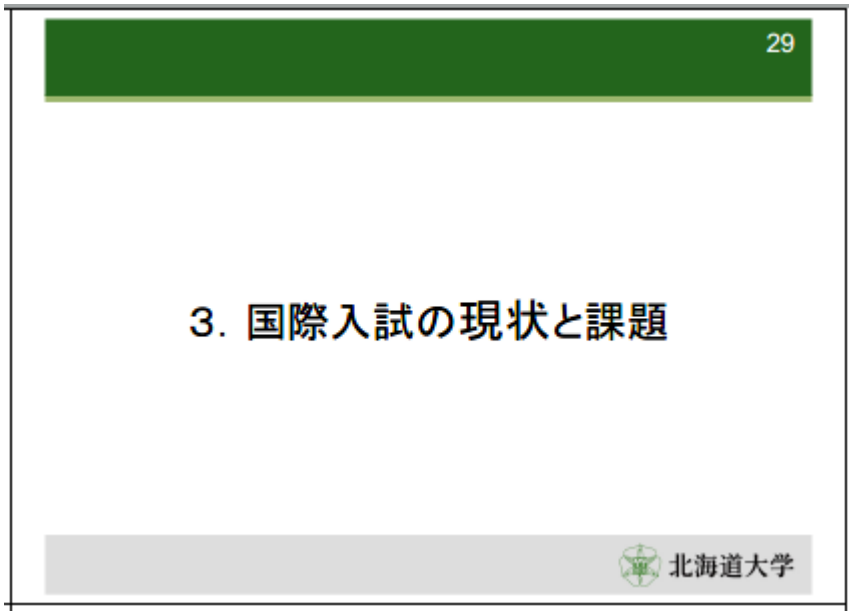
選抜方法については，成績証明書や personal statement などの出願書類の審査および面接の結果を総合的に評価して選考を行うことになっています。面接では Skype を利用し，基礎的能力および適性を判定します。

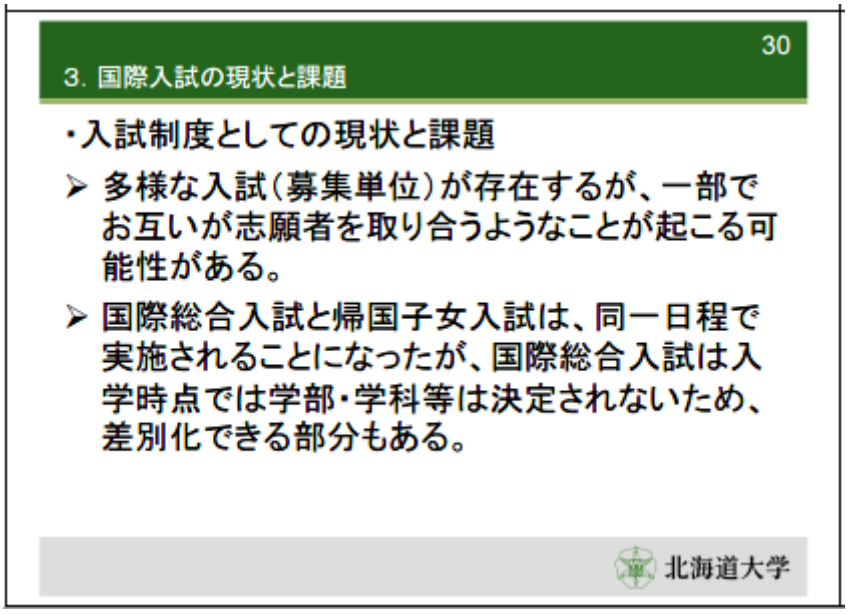
以上で，5 つの国際入試の説明は終わりです。こちらに示したデータは配付資料にはありませんが，国際入試の志願者数の過去 5 年間の変化を示したものです。この 5 年間では，私費と帰国が減少傾向にあるのに対し，ISP は増加傾向にあります。令和 5 年度の合格者数については，国際総合が 36 名中 14 名，帰国が 52 名中 8 名，私費が 109 名中 4 名，ISP が 145 名中 12 名，現プロ（現代日本学プログラム課程入試）が 91 名中 23 名となっています。

こちらの円グラフは，令和 5 年度の ISP の国別志願者数の割合を示したものです。タイが最も多く，フィリピン，インドネシア，中国がそれに続きます。

一方で，こちらは同じく令和 5 年度の現代日本学プログラム課程入試の国別志願者数の割合を示したものです。ISP と同じくタイが最も多く，それにアメリカ，中国を含めた上位 3 カ国が全体の 6 割を占める状況です。また，アメリカの志願者が 20%と多いのが ISP と異なる特徴だといえます。

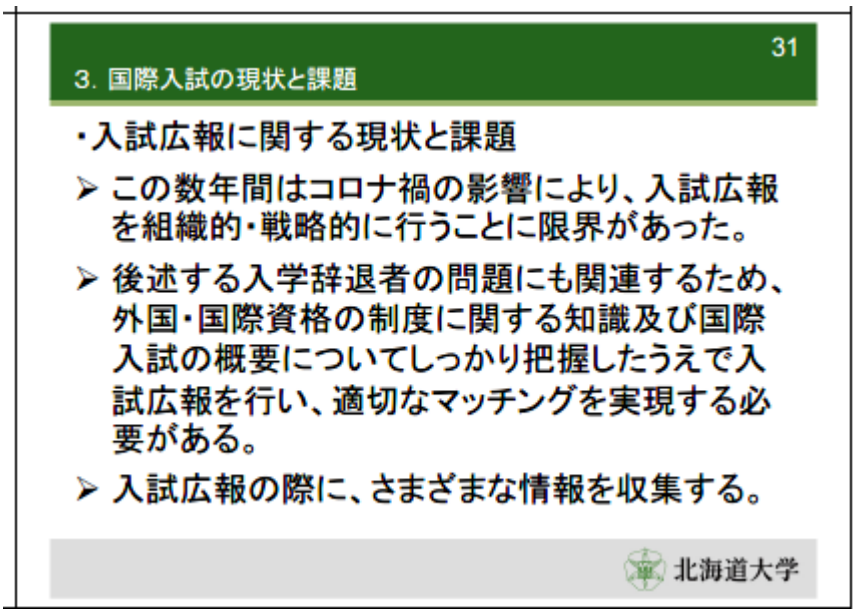
北大の国際入試の制度に関する説明は，以上です。



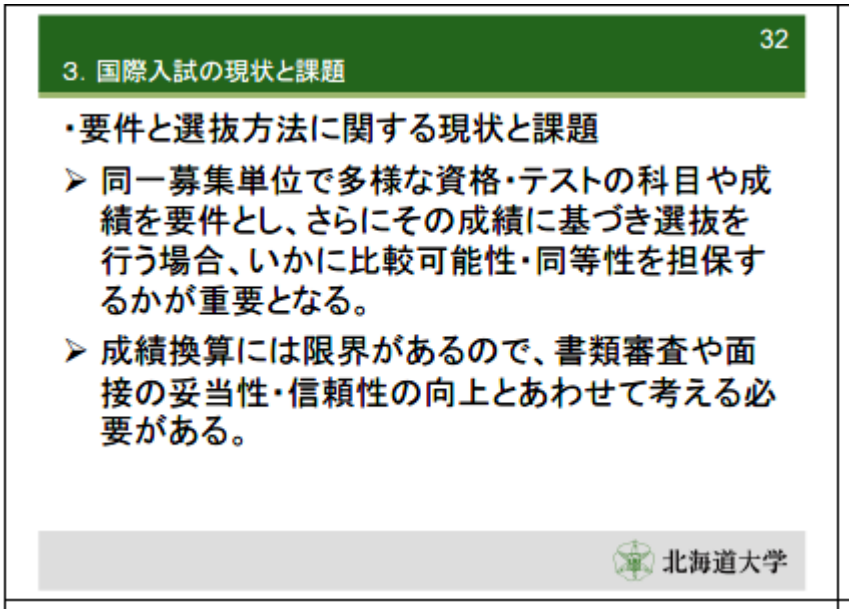


続いて，国際入試の現状と課題について４つの視点からまとめたいと思います。

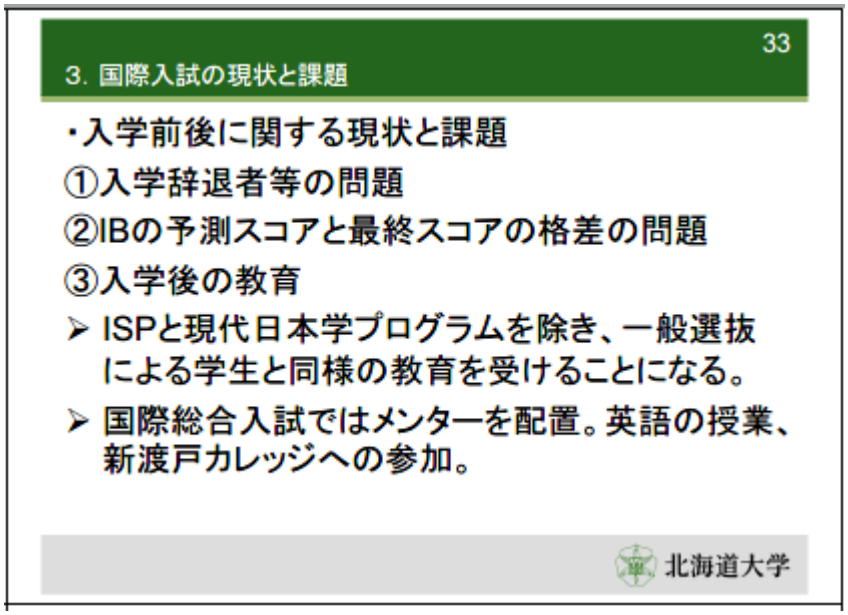
１つ目の視点は入試制度に関するものです。国際総合入試と帰国子女入試は以前から同一日程で実施されていますが，令和 6 年度入試から，国際総合，帰国，私費はすべて同一日程で実施されることになっています。また，国際総合入試については総合型選抜の影響も受けます。そのため，一部で志願者を取り合うようなことが起こる可能性があります。その一方で，国際総合入試は入学時点では学部・学科等が決定されないため，その他の入試と差別化できる部分もあります。



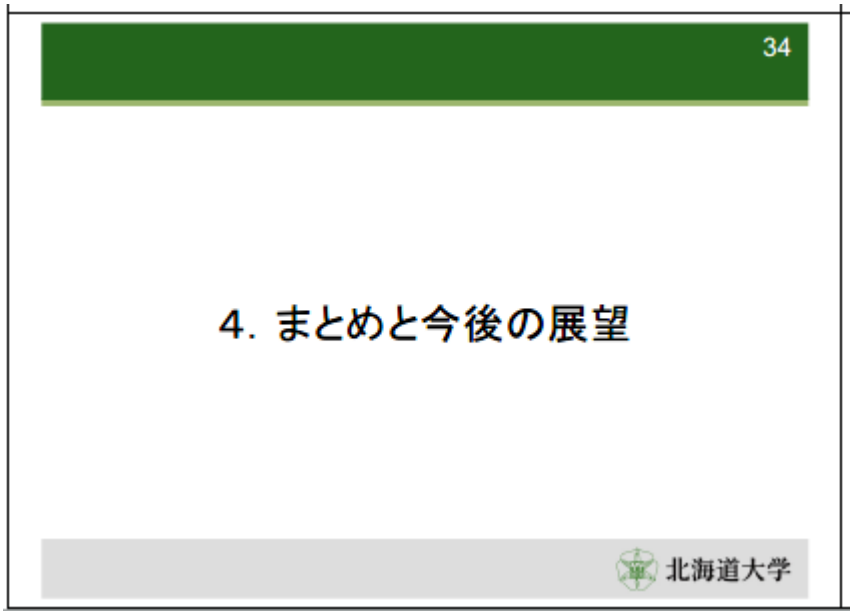
２つ目の視点は，入試広報に関するものです。この数年間はコロナ禍の影響により，入試広報を組織的・戦略的に行うことに限界がありました。後述する入学辞退者の問題にも関連するため，外国・国際資格の制度に関する情報および国際入試の概要についてしっかり把握した上で入試広報を行い，適切なマッチングを実現する必要があります。また，入試広報の際に，各学校のカリキュラムや進路指導の実態に関する情報を適宜収集することも重要な点になります。



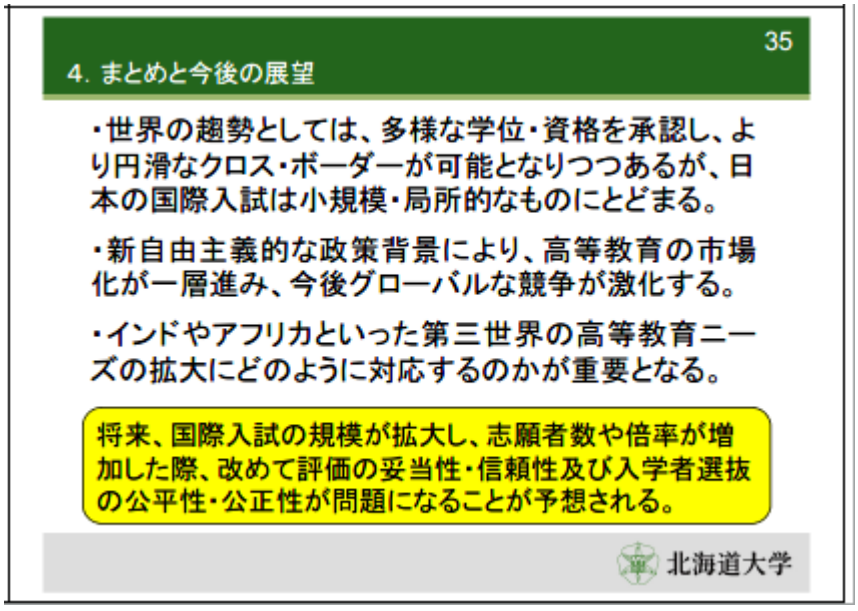
３つ目の視点は要件と選抜方法に関するものです。国際総合入試の部分でご説明したとおり，同一募集単位で多様な資格もしくはテストの科目を要件とし，さらにその成績に基づき選抜を行う場合，いかに比較可能性・同等性を担保するかが重要となります。成績換算には限界があるので，書類審査や面接の妥当性・信頼性の向上と併せて考えていく必要があります。



4 つ目の視点は，入学前後の手続きや教育に関するものです。具体的には，入学辞退者や中途退学者などの問題，IB の予測スコアと最終スコアの格差の問題，入学後の教育の問題が存在します。特に 3 番目の入学後の教育については，ISP と現代日本学プログラム課程を除き，国際入試の入学者は一般選抜による学生と同じ教育を受けることになるため，ミスマッチを引き起こす可能性があります。その一方で，国際総合入試では，メンターの配置やグローバル人材育成プログラムである新渡戸カレッジへの入校など，入学者のニーズに応えるための取り組みが存在します。



最後にまとめと今後の展望について私見を述べさせていただきます。



第 1 に，世界の趨勢としては，多様な学位・資格を承認し，より円滑なクロス・ボーダーが可能となりつつありますが，日本の国際入試は小規模・局所的なものにとどまるといえます。第 2 に，新自由主義的な政策背景により，高等教育の市場化が一層進み，今後グローバルな競争が激化することが予想されます。第 3 に，第 2 の点と関連して，インドやアフリカといった第三世界の高等教育ニーズの拡大にどのように対応するのかが重要になると考えられます。最後に，以上の点が大学入学者選抜に与える影響として，将来，国際入試の規模が拡大し，志願者数や倍率が増加した際，改めて評価の妥当性・信頼性および入学者選抜の公平性・公正性が問題になることが予想されます。





北海道大学の報告は以上となります。なお，本報告資料の作成にあたって，本学入試課の国際入試担当である山田係長にさまざまなご助言をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。ご清聴いただきありがとうございました。

【司会・池田】　本学国際入試ということでいろいろなタイプをやっていますが，特に国際総合入試において国が進める IB だけではなく，SAT や ACT でも受験できるというところが特徴なのかなと思います。また後ほどパネルディスカッションで詳しくお話を聞かせてください。■

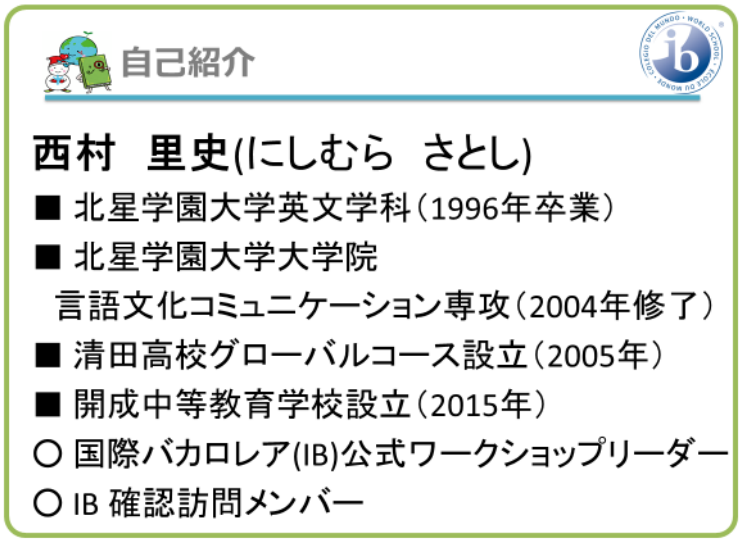
全体会２ ◎ 報告４

IB 校である札幌開成中等教育学校のキャリア教育はなぜ大きな挑戦なのか？

■西村　里史（市立札幌開成中等教育学校副校長）

市立札幌学校開成中等教育学校の西村と申します。どうぞ今日はよろしくお願いします。

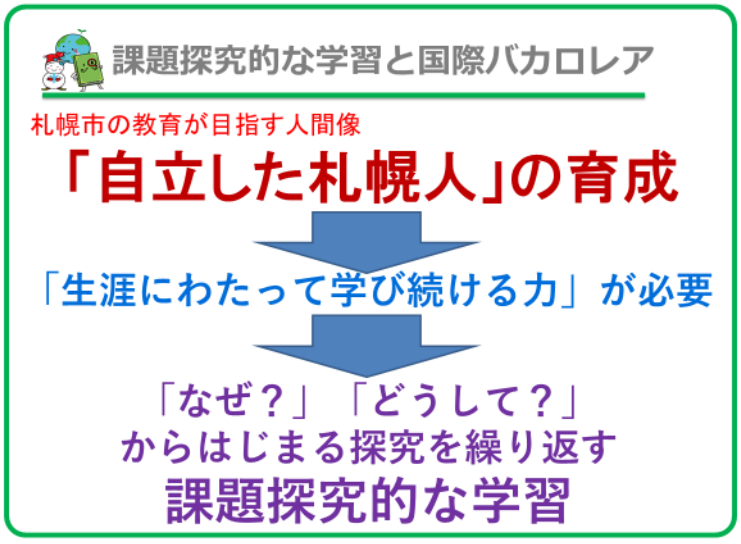




こういった場面でお話をさせていただく機会を頂戴しまして，私としては本当にうれしく思っています。実態として私たちの学校の取り組みなどをお話しさせていただきながら何か参考になることが少しでもあればと思っています。

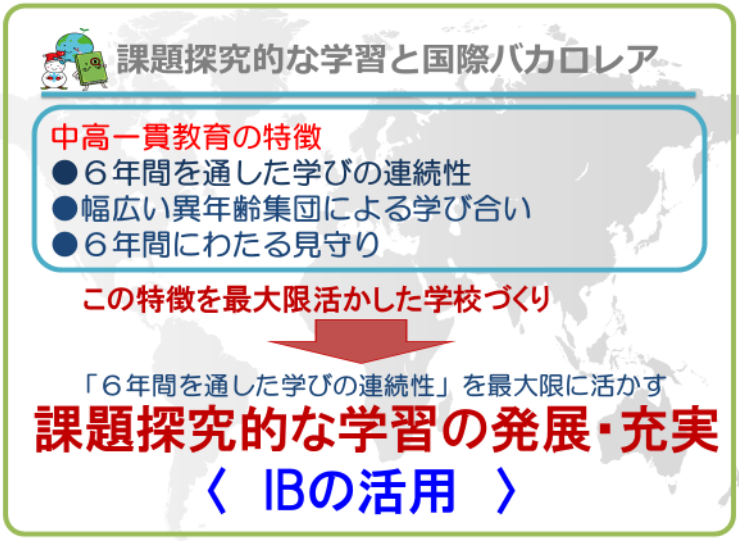
開成中等学校の開校が 2015 年になりますが，私はその時からこちらに赴任をしています。これまでの流れを含めながら，この学校で育っていった生徒，学生たちについてもお話しできればと思っています。

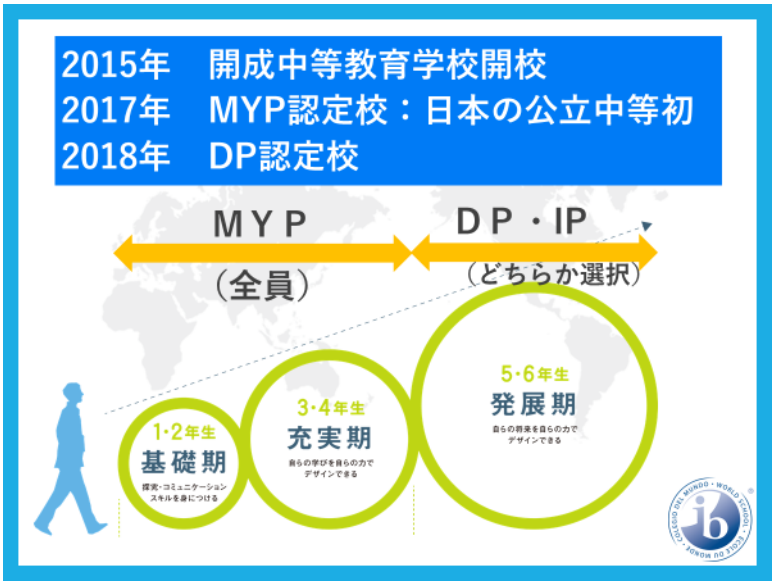




札幌市内には 300 校の公立の学校があります。小学校が 200 校，中学校が 100 校，そして高等学校，本校の中等教育学校を含めて 8 つあり，それでほぼ 300 校ということになります。札幌市教育委員会としては，この開成中等教育学校をつくる上でどういった学校づくりをしていこうかということで，自立した札幌人，つまりは生涯にわたって学び続ける力を持った人として成長していくことにより，その中でふるさと札幌に思いを持ちながらさまざまな場所で活躍し，平和的に生きていく，そういった人を育成していこうということを掲げています。そのためには，課題探究的な学習にしっかりと取り組

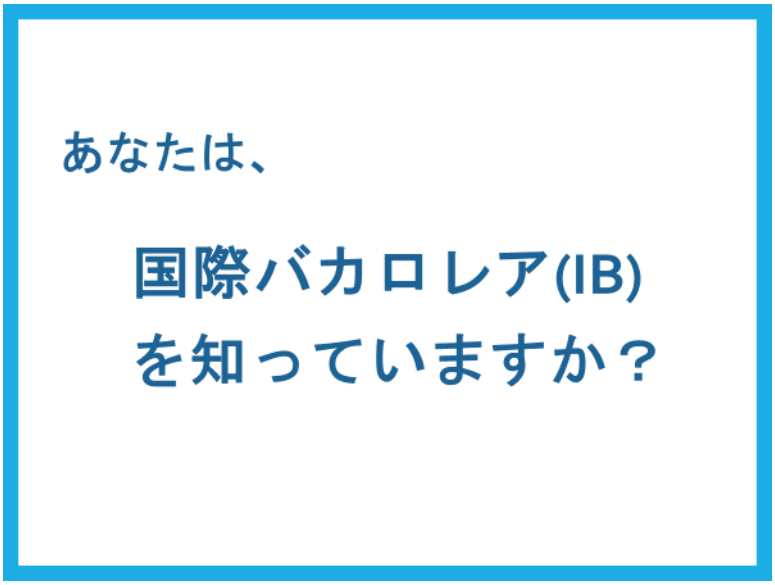
んでいくことが強く望まれているし，これこそが人として成長していく，育っていくことにつながると考えた経緯があります。

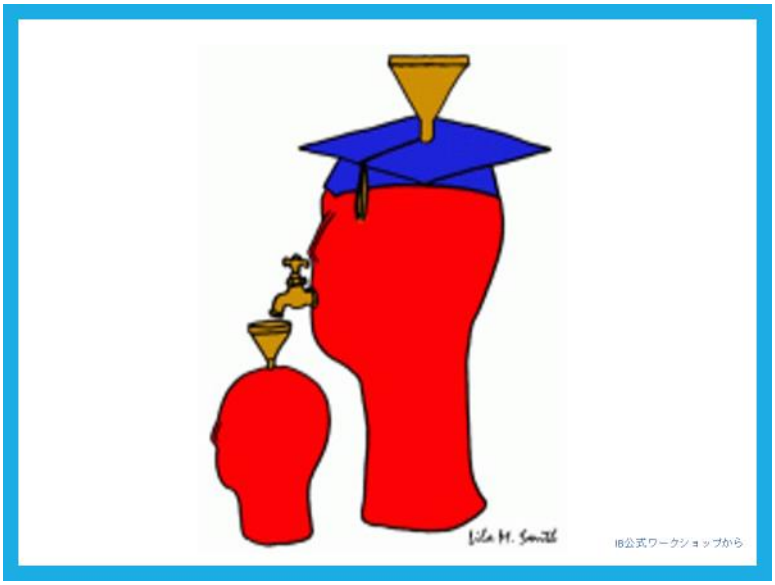




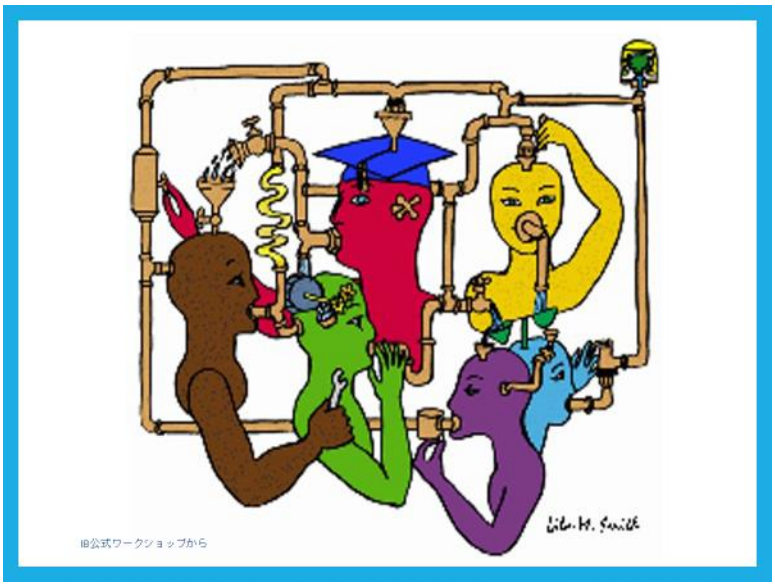
こうして，中等教育学校の 6 年間にわたってこのような特色，特徴を持たせた学校づくりをしていくことになりました。その際，いかにして課題探究的な学習を実践するかが議論になり，IB の活用によって実践・達成していけるのではないかと考えました。

基礎期・充実期・発展期と 2 年ごとに区分を設定する形が決まり，2015 年に開校しました。その後 MYP の認定を受けて現在に至っています。2018 年度までに日本国内で IB の学校を 200 校つくろうという文部科学省のプロモーションと開校時期が重なったため，多くの注目を浴びることになりました。

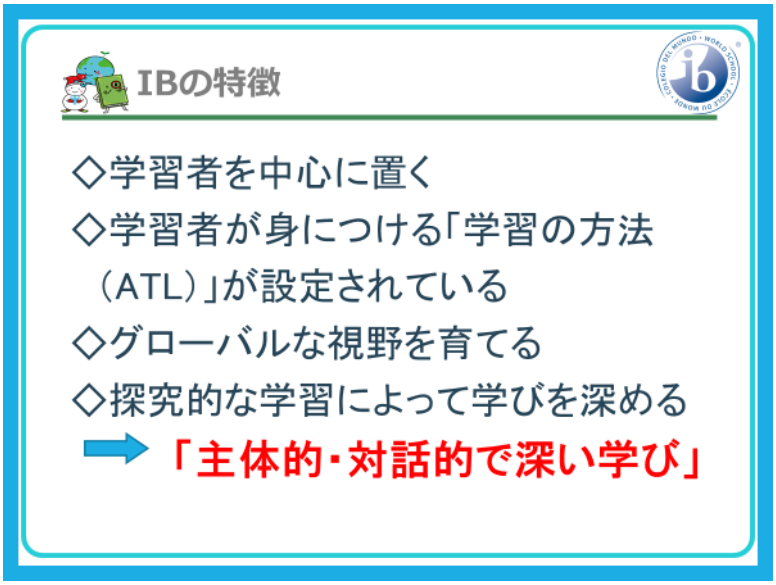




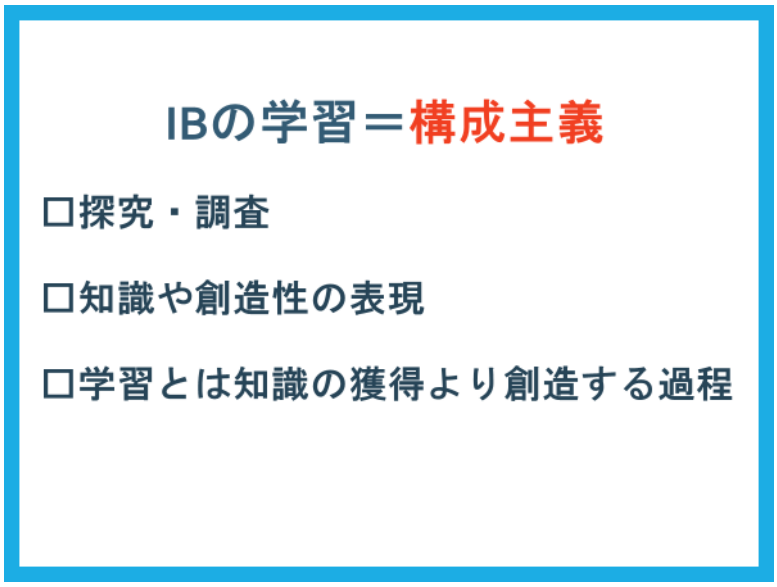
簡単ではありますが，少し IB についてもお話をさせていただきたいと思います。これが一つの教育のイメージです。



もう一つがこのようなイメージです。皆さまが携わっている教育，もしくは教育現場，学校，大学ではどのようなイメージをお持ちでしょうか。どちらのイメージに近いでしょうか。

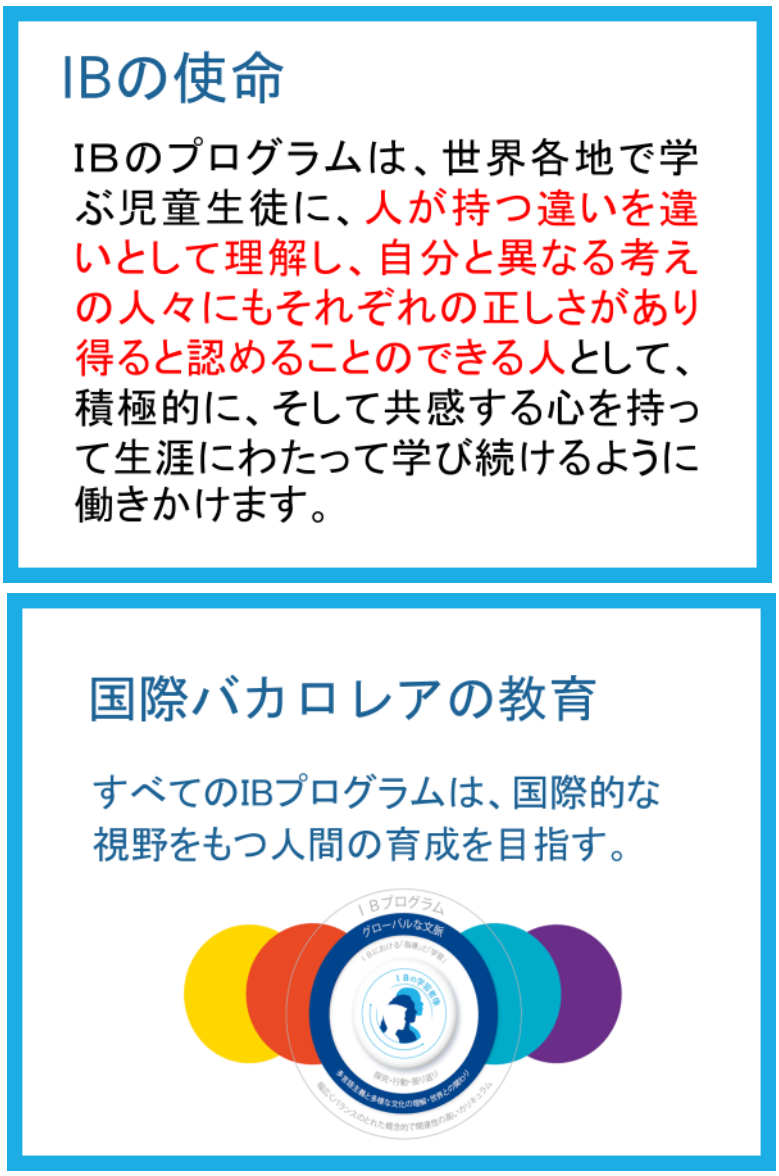


IB は後者が学びであり教育であるという考えを持っています。学習者が中心であり，学習者が学習の方法を身に付けていくということです。グローバルな視野を育て，探究学習によって学びを深めることが柱として置かれている教育プログラムになっています。

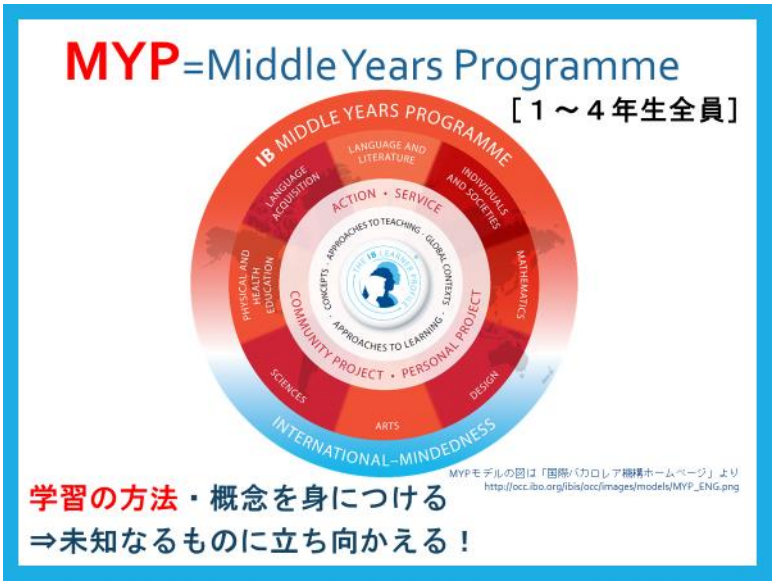


この構成主義的な考え方が土台になっており，私たち教職員もこの考えを踏まえて授業づくりや授業以外での教育活動に取り組んでいます。

とりわけ，私たちが授業づくりにおいて重視しているのは ATL（学習の方法）と呼ばれている 10 項目です。こういった力を育み，伸ばすことが非常に大事だとして，IB のプログラムとして規定されているものです。



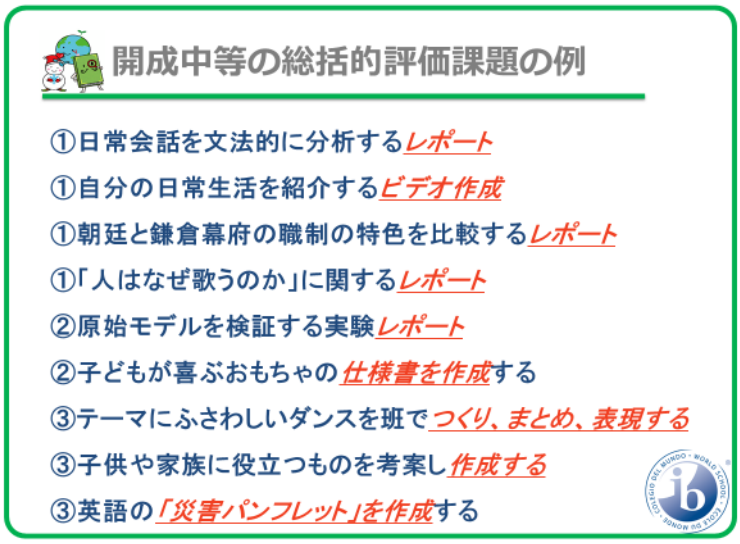
このような IB の使命を持ちながらそれぞれのプログラムが進んでいるところです。特に，人が持つ違いを違いとして理解し，自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人。国際入試，それからこれからのグローバル社会においてとても大事な視点となってくるのではないかと思っています。



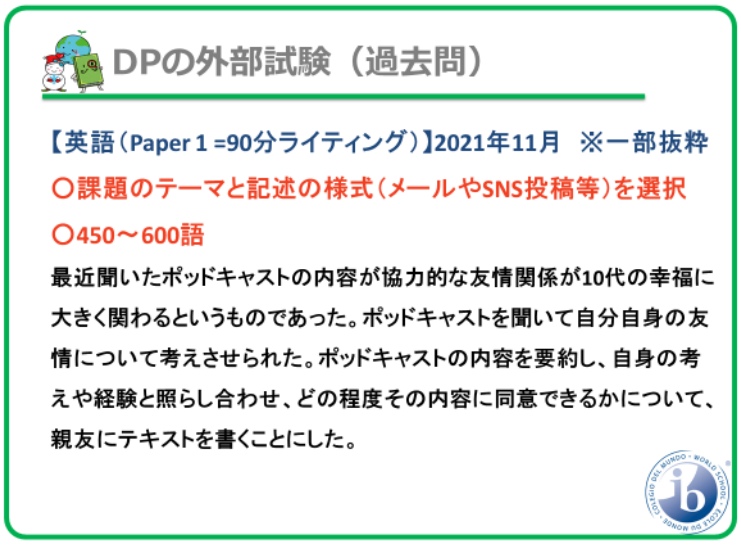
本校ではこの IB のプログラム MYP（Middle Years Programme）に全員が取り組んでいます。これは IB が作成したプログラムモデルです。中心に学習者の像が書かれています。外側の白枠には学習の方法，概念としての CONCEPTS があります。



本校で行っているもう一つのプログラムは DP（ディプロマプログラム）と呼ばれているもので，大学受験，大学進学の資格のためのプログラムです。本校では 5 年生，6 年生，つまり高 2，高 3 に当たる生徒たちが選択して取り組んでいます。学年 160 名のうち，DP を選択するのが 10 名前後ぐらい，1 割もいかないくらいです。

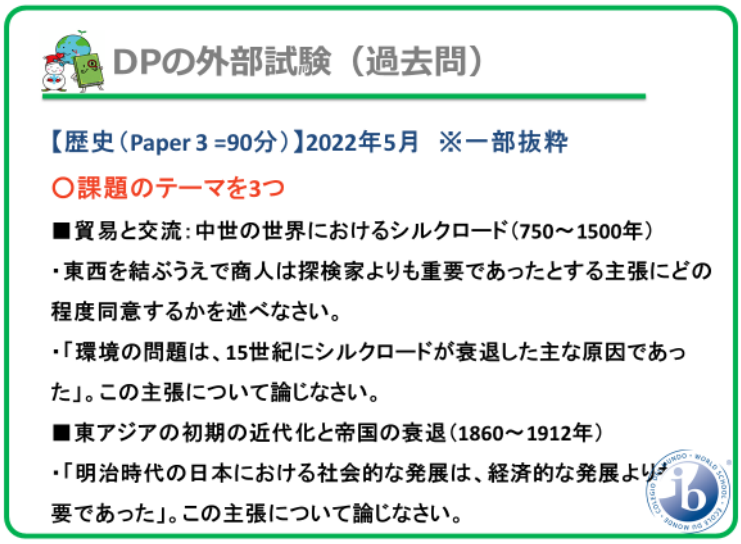


MYP における課題の一部をお示ししています。朝廷と鎌倉幕府の職制の特色を比較するレポートや人はなぜ歌うのかに関するレポートを書く，テーマにふさわしいダンスを班でつくり，表現するといったことに中学校１年生から取り組んでいます。「総括的評価課題」というのは，これで成績をつけているということです。

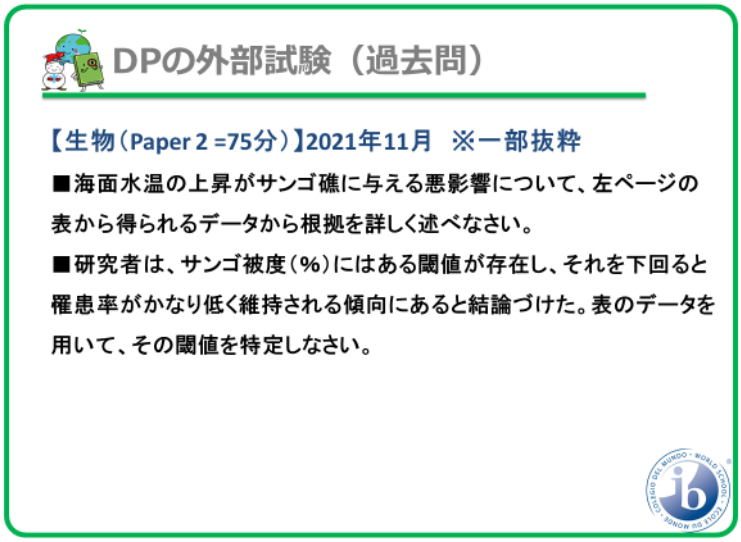


DP を選択した生徒たちはどのような学問的な取り組みをしているのかといいますと，せっかくですので DP の実際の試験を一部ご紹介します。これは英語，Language B のテストですが，こういった問題が出されています。

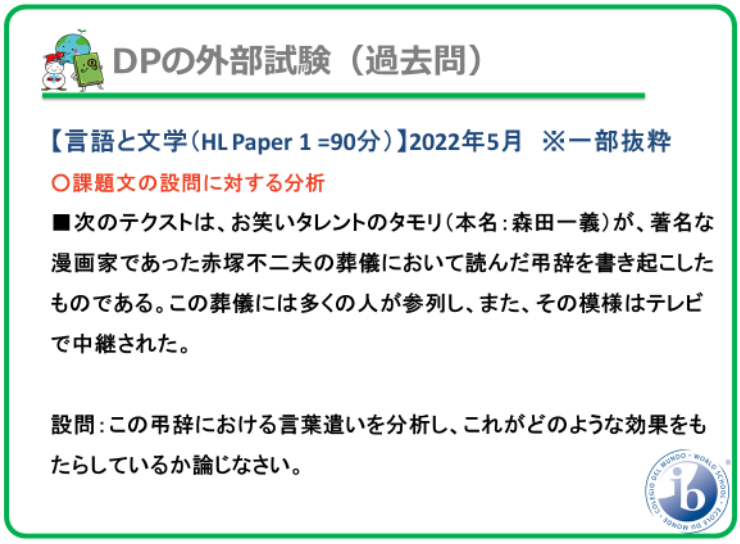
IB 入試を導入している大学の中には，TOEFL や TOEIC の点数の提出を求める大学もありますが，本校の生徒たちの様子を見ていますと非常に英語のレベルが高いです。大体, 英語の準１級は持っていないと DP の英語, もしくは DP の学習は非常に難しいです。DP へ進んだ生徒たちはそういったような英語のレベルのイメージを持って学習しています。



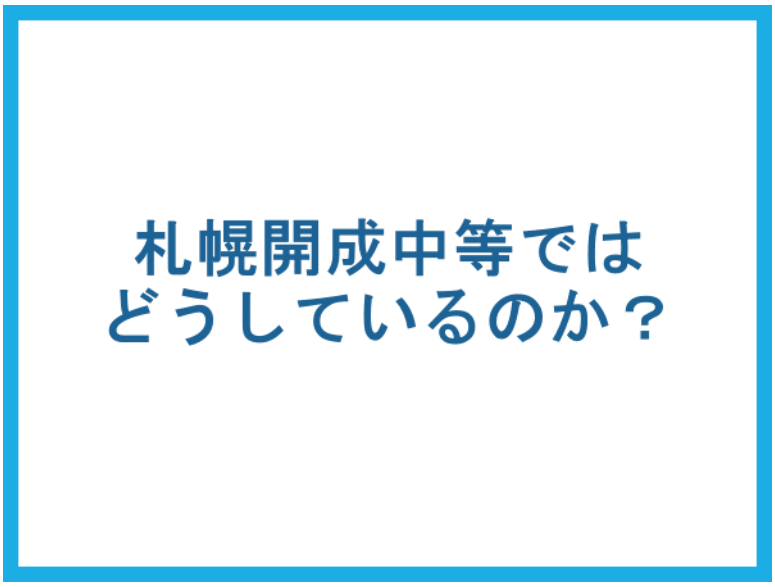
これは History の試験の一部です。ある主張について論じる問題がほとんどです。



これは Biology の試験の一部です。表は省略していますが，こういった表を読み解く，あるいは実際の実験手順を確認した上で問題に取り組んでいます。



Language and Literature という外部試験は非常にユニークです。この問題ではこの弔辞における言葉遣いを分析し，どのような効果をもたらしているかを論じる問題が出題されました。DP の 45 点満点で採点されます。



「なぜ大きな挑戦なのか？」とタイトルをつけさせていただきましたが，日本の多くの中学校や高校であまりやっていない取り組みをこの IB を活用することによって実践しているということがあろうかと思います。

開成中等の特徴（IB校として）

1．評価基準を生徒に提示

☑目標・ゴールがわかる
☑自己評価ができる
☑評価が公正・公平である



開成中等の特徴

2．2時間連続の100分授業



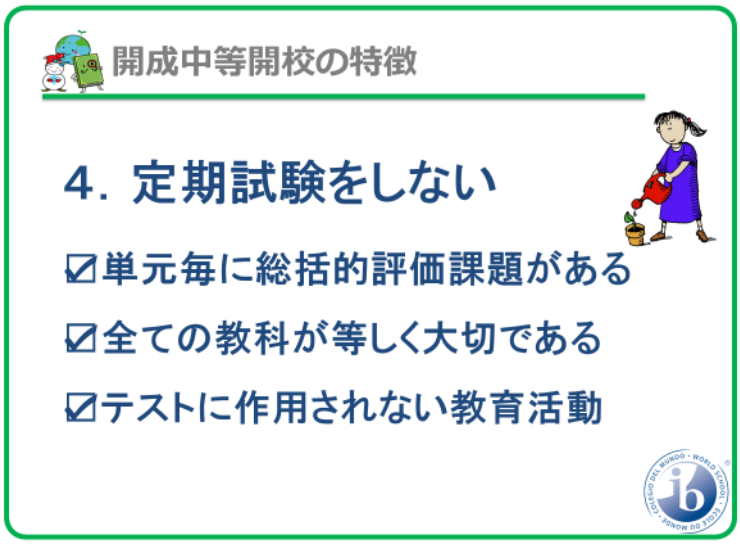
☑じっくり探究ができる
☑協働の学びの場面を設定しやすい
☑まとめ・発表・振り返りができる

開成中等の特徴

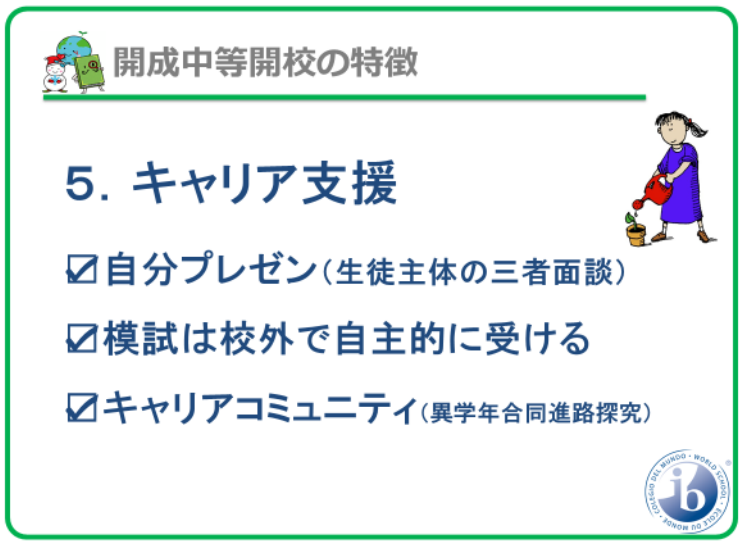
3．宿題を出さない



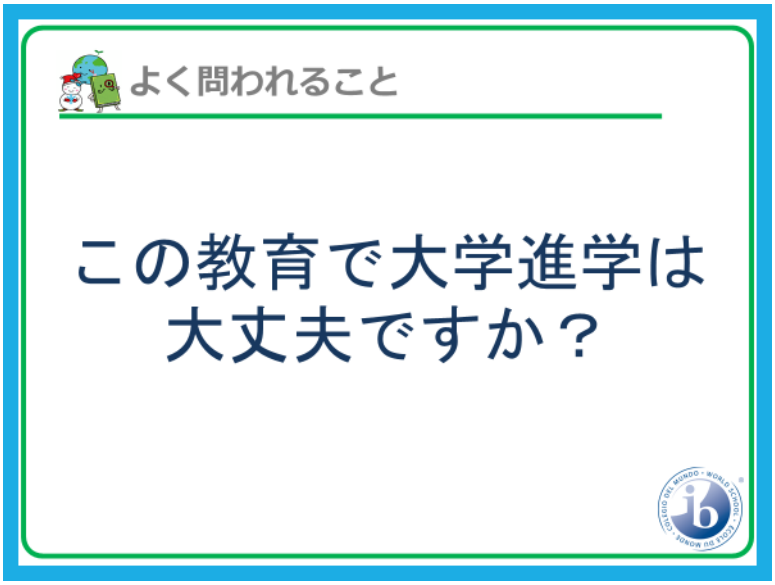
☑勉強は「するもの」
☑自分の「？」を大切にする学び
☑自己管理スキルの育成

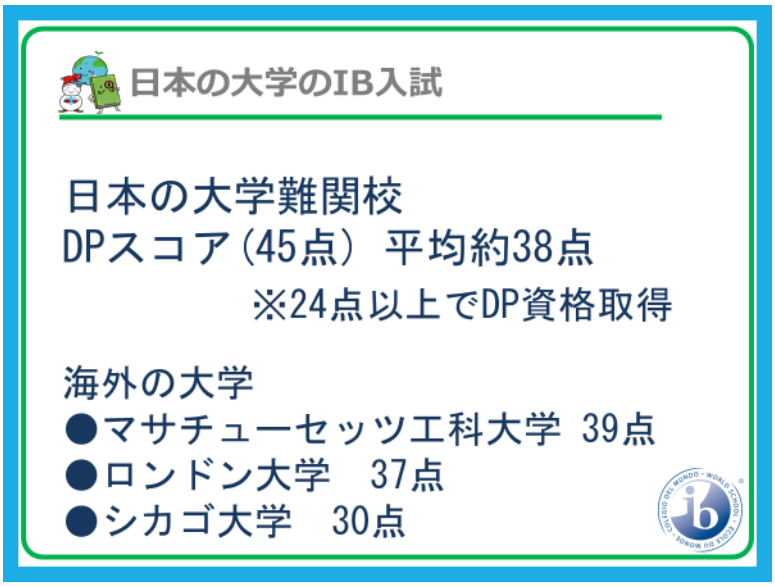


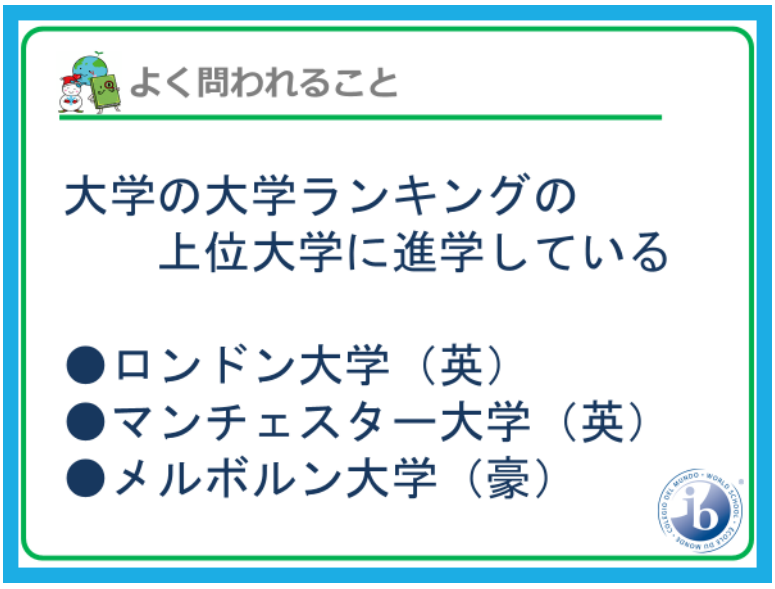
その特色の一つとしては 2 時間連続の 100 分授業を行っており，中学校 1 年生からじっくりと探究しながら取り組んでいます。宿題は出していないというのもユニークかもしれません。先ほどお話ししたように，レポート，動画作成，プレゼンテーションで評価していますので，定期試験は行っていません。



それから，キャリア支援については，多くの学校では，教員がある程度主導する進路指導が行われていると思いますが，本校では違うやり方を採っています。

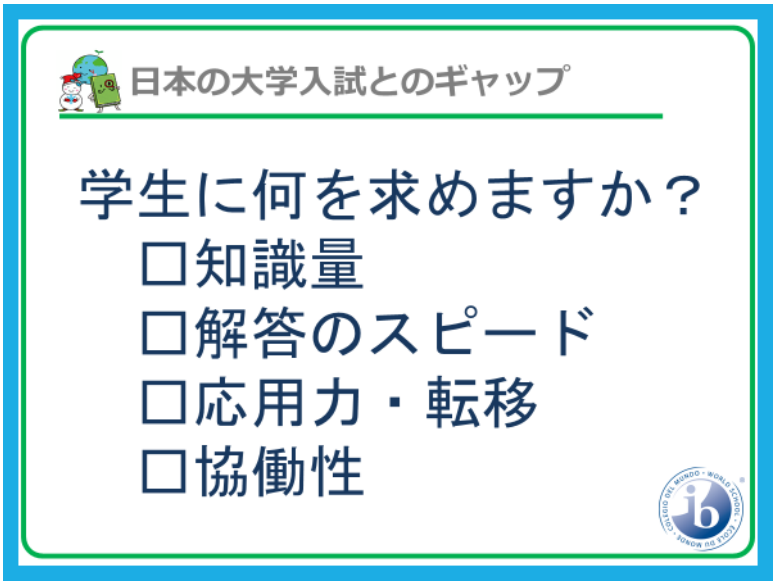

よく問われること
この教育で大学進学は
大丈夫ですか？


日本の大学のIB入試
日本の大学難関校
DPスコア(45点) 平均約38点
※24点以上でDP資格取得
海外の大学
●マサチューセッツ工科大学 39点
●ロンドン大学 37点
●シカゴ大学 30点


よく問われること
大学の大学ランキングの
上位大学に進学している
●ロンドン大学（英）
●マンチェスター大学（英）
●メルボルン大学（豪）

本校を訪れる方から「大学進学は大丈夫でしょうか」と聞かれることがあります。ただ，探究の学びを通じ，自分たちの将来について非常にクリティカルに，建設的に，プロダクティブに考えることができる生徒たちが多いです。世界ランキングの上位大学に進学している生徒もいます。この部分はあまり表立った言い方はしないですが，そういった生徒が育っていることをお話ししています。

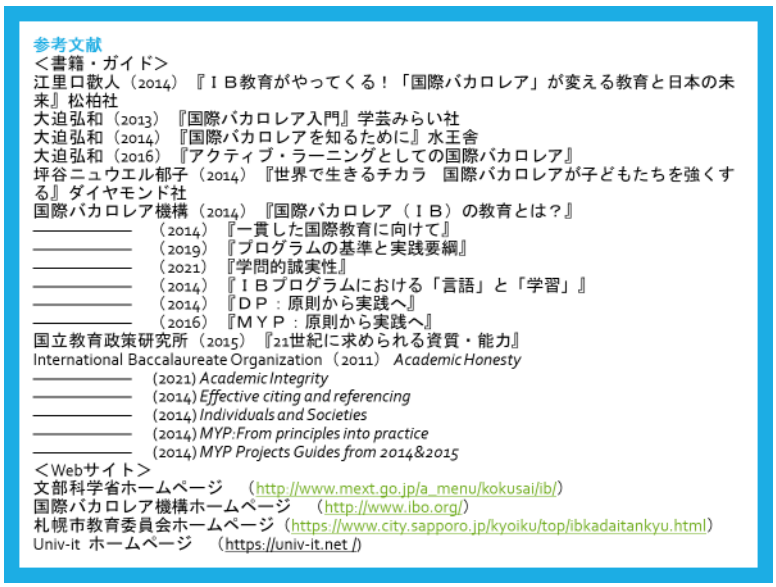
DP のフルスコアは 45 点ですが，日本の大学進学に求められる平均点数は 38 点程度です。海外の大学ではこのようなスコアが求められます。

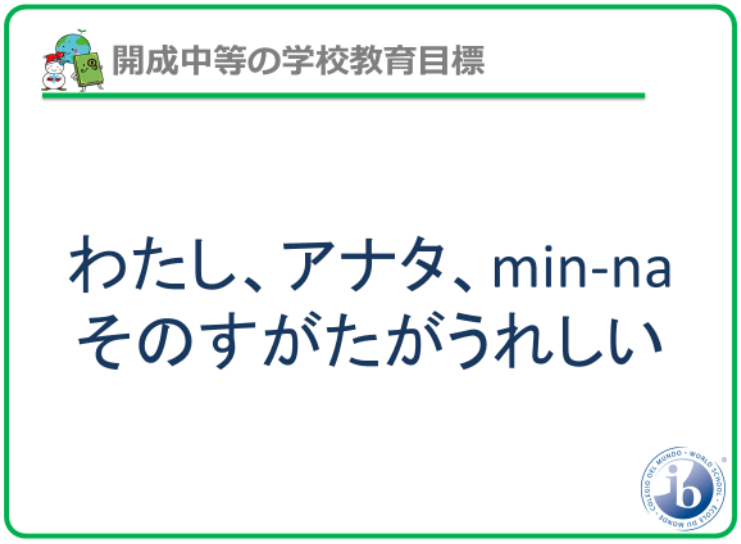




大学としてどういった学生を求めているのかというところを思いつつ，実際に本校で行われている学びは，大学でもかなり活用できるのではないかと思います。

改めて，こういった力を育む学びのあり方を，大学入試の中においても見取っていただきながら，DP を選択する生徒たち，探究の学びをしている生徒たちが進んでいけるとうれしいと思っています。こういった取り組みをしている中等教育学校があるということを知っていただけるととてもうれしく思います。


参考文献
＜書籍・ガイド＞
江里口歓人（2014）『ＩＢ教育がやってくる！「国際バカロレア」が変える教育と日本の未来』松柏社
大迫弘和（2013）『国際バカロレア入門』学芸みらい社
大迫弘和（2014）『国際バカロレアを知るために』水王舎
大迫弘和（2016）『アクティブ・ラーニングとしての国際バカロレア』
坪谷ニュウエル郁子（2014）『世界で生きるチカラ　国際バカロレアが子どもたちを強くする』ダイヤモンド社
国際バカロレア機構（2014）『国際バカロレア（ＩＢ）の教育とは？』
――――――（2014）『一貫した国際教育に向けて』
――――――（2019）『プログラムの基準と実践要綱』
――――――（2021）『学問的誠実性』
――――――（2014）『ＩＢプログラムにおける「言語」と「学習」』
――――――（2014）『ＤＰ：原則から実践へ』
――――――（2016）『ＭＹＰ：原則から実践へ』
国立教育政策研究所（2015）『21世紀に求められる資質・能力』
International Baccalaureate Organization（2011）*Academic Honesty*
――――――（2021）*Academic Integrity*
――――――（2014）*Effective citing and referencing*
――――――（2014）*Individuals and Societies*
――――――（2014）*MYP:From principles into practice*
――――――（2014）*MYP Projects Guides from 2014&2015*
＜Webサイト＞
文部科学省ホームページ　（http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/）
国際バカロレア機構ホームページ　（http://www.ibo.org/）
札幌市教育委員会ホームページ（https://www.city.sapporo.jp/kyoiku/top/ibkadaitankyu.html）
Univ-it ホームページ　（https://univ-it.net /）



以上で私からの話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

【池田・司会】　社会に出てから本当に役に立つ能力，資質といったものを育てているように感じました。ただ，現状の日本の大学入試の中ではなかなか評価することが難しいのかなとも思いますので，そういった課題についてもパネルディスカッションで伺えるかと思います。ありがとうございました。■

全体会 2 ◉ 全体討論

国際入試の現状と展望

■大嶋　名生（立命館アジア太平洋大学アカデミック・オフィス課長）/
中島　範行（富山県立大学教授）/**飯田　直弘**（北海道大学高等教育推進機構准教授）/**西村　里史**（市立札幌開成中等教育学校副校長）/
池田　文人（北海道大学教授■司会）/**岩間　徳兼**（北海道大学准教授■司会）

【岩間・司会】　ここからは全体討論ということで，司会を担当します，北海道大学の岩間と申します。どうぞよろしくお願いします。

パネリストの 4 名の先生方，ご報告をどうもありがとうございました。少し簡単な資料を用意しましたので，まずは，それを使って 4 名の先生方のご報告を振り返っていきたいと思います。その上で，すでに頂いている質問が，回答済みのものも含めて，10 個ほどありますので，各先生に回答していただきます。最後に幾つかの論点を提示させていただきますのでそれについて討議をするという形で考えています。

まずは，大嶋先生のご報告についてです。APU は私立大学でありリソースが多く，人員配置や実際の企画などといった面でも柔軟性があるという特徴はあるかと思います。また，大学として国際学生の割合が半数に近く，非常に比率が高い点，英語の授業が多い点も特徴かと思います。

今日のご報告の中では，IT・デジタル技術をフル活用するという点，具体的には，広報，選抜，修学状況の把握など個人のデータを利用して最適化を図っていくという点が非常に魅力的な話だったと思います。また，卒業生に協力を仰ぐことで，入試もしくはその前のリクルートなど全部を含めて好循環を生んでいました。今後の展開としては，そういったデータを活用して個人へのアプローチを考えているというお話だったかと思います。

それでは，大嶋先生に届いている Q＆A にご回答いただこうと思います。「入試をオンラインで完結」という内容を拝見しました。実際の試験は面接が主となりますでしょうか。それから，筆記試験も行う場合，それらの具体的な手法について。例えば，不正行為の対策などといった部分はどのように実施されているのか。というご質問です。選抜に当たっての実務的な部分は答えづらい部分もあるかもしれませんが，可能な範囲で回答をお願いします。

【大嶋】　ある日時にどこかの入試会場に行って何時間か拘束をされて，ペーパーのベースの試験を受けるというよくある入試がありますよね。APU の国際学生入試はそのような入試ではありません。世界の高校においては，高校時代の学びを積み重ねたアカデミックなトランスクリプトを持って卒業するケースもありますし，卒業試験という形で証明（サーティフィケート）を得るケースもあります。例えば GCE-A レベルなどですね。

APU の国際入試，一発の試験でかなりのウエートを占めるという入試ではなく，アメリカの大学などと同様に，むしろ高校の生活やアカデミックな内容により重点を置いて評価したいという哲学に基づいています。

入試の現場でわれわれが大事にしているのは学校のそういった書類，情報ですね。アカデミックトランスクリプト，IB や SAT のスコア，国ごとの卒業試験という形で出てくるものです。

そしてオンラインテストも一部には課していますが，全体の割合としてはごく一部です。面接もオンラインで実施していますが，面接だけで合否が決まるというような制度ではありません。

それから不正行為の観点からお話ししますと，完璧な対策とは思っていませんが，オンラインテストの際には SEB（Safe Exam Browser）を PC に入れさせて，不正行為をなくすという取り組みはしています。

実はオンラインで不正を防止する仕組みは他にもあり，海外大学ではかなり進んでいますので，どのように担保するかというのは，世界の事例も見ながら引き続き検討が必要な課題と思っています。

面接の本人確認については，かなり細かな願書をオンラインで出させています。願書の中で回答いただいた様々な質問について，細かく Zoom で確認しています。

【岩間・司会】　ありがとうございます。続いての質問です。留学生の獲得には大学間の協力が重要だという話がご発表の中でありましたが，協力した大学との留学生の奪い合いの観点からは留学生の獲得についてどうお考えでしょうか。昨日の全体会において，協調領域と競争領域の話がありましたが，学生獲得については競争という側面が強いのではないか，という質問です。

【大嶋】　考え方・とらえ方ではないかという気がします。学生の獲得競争という点は当然あると思いますね。ただ，長期的なトレンドでいくと，私はそこについてはかなり悲観的です。つまり，海外の大学に行きたい学生にとって，日本は本当に魅力的なのかという点において，長期的なダウントレンドが極めて深刻であると受け止めています。その点では，他大学・機関と協調して，日本の魅力をより大きな視点で打ち出し，他の国への留学を希望する学生を日本に呼び込むことが必要ではないでしょうか。その意味での協調と見ていただければと思っています。

また，本学の学生の専攻分野で見ても，APU は社会学（ソーシャルサイエンス）がベースになります。現在理系の学部はありません。そういうことを考えていくと，大学の

分野によっては適切に他大学と協調できるところもあると思いますし，仮に APU と日本の他大学を併願した結果，他大学に行かれたとしても，なぜ APU が選ばれなかったのかということは考えたらよいと思います。

ただし，競争領域がまったくないのかと言われると，一部にはあるような気もしますので，立ち位置や考え方，マインドセットによって，協調と競争は両方見られるのではないかなと思います。

【岩間・司会】　続いての質問です。グルーヴノーツ社と連携して機械学習，AI を駆使してエッセイを分析しているという点について，具体的に，どのような内容のエッセイをどのように分析・評価されているのか，可能な範囲でご紹介いただければありがたいとのことです。

【大嶋】　オンライン願書には，志望理由など本人が記載しなければならない項目が結構あります。それらを AI で読んでデータを蓄積し，過年度の志願情報と比較して，過去に類似したエッセイや志望理由がないか，願書内の個別の質問内容について剽窃（ひょうせつ）に近いものがないかなど，AI で見ているということです。今後のアドミッション戦略面で，願書の情報にある学生の学習履歴を蓄積したり，国・地域ごとの特性を分析するかどうかということにも関わってくる面もあるかなと思っているところです。

しかし ChatGPT も出てきましたし，今後，エッセイというものをどのように考えていくのかについて，すでに様々な大学が考え方を公表しています。APU（立命館アジア太平洋大学）でもかなり議論をしたうえで，先日声明を出していますが，このような状況を踏まえると，過去のデータとの比較がどのような意味を持つのか，限界も出てきているかなという気もしています。

【岩間・司会】　ありがとうございます。続いての質問は合格手続き後の在留資格の認定申請についてです。①在留手続き担当は入試の部署か，それとも専門部署か。②認定申請に係る入管への提出書類もデジタルなのかどうか，③その他，在留資格の手続きに係る工夫はありますかという質問です。

【大嶋】　在留資格については，国際入試・留学生募集を行う大学の部局はどこも悩みどころだと思います。APU は，開学時から留学生が半数というコンセプトですので，早々に在留資格の手続きについて行き詰まりました。多様な国・地域からの入国に関わるやりとりは，やはり非常に大変です。われわれは私立大学ですので，人的リソースも限られます。その中で，職員がやるべき業務は何かということを議論していく中で，学内で全部やり続けることは無理があるのではないか，むしろ，職員はより高度な業務に特化し，業務の一部について専門的な力がある方々の力を借りようということになりました。そしてかなり前から，在留資格にかかる学生の対応，督促，やりとりも含めて委託をして，力を借りながら迅速対応を実現しています。リクルート戦略，学生の評価の仕組み

や関係性づくり，そして入学手続率の強化等，本当に必要な部分に，教職員のリソースを使っていることとして，ご理解いただければと思います。

なお入管でも去年からオンライン申請の導入が進みつつありますが，APU ではかなり早くからオンライン申請の準備をしてきていましたので，現在入管申請はオンラインで対応しています。各地域の入管のオフィスに行って申請することは基本ありません。

【岩間・司会】　ありがとうございました。それでは，次のご報告を振り返りたいと思います。

中島先生のご報告については，APU と比べるとコントラストがはっきりする部分がありました。富山県立大学は公立大学ということで，リソースなど，難しい部分が多々あるかと思います。公立大学も国立大学も似たようなところかなとは思いますが，国際学生は割合としてはさほど多くはないと。例外的な学校もありますが，そのような状況かなと思います。また，英語の授業もあまり展開されていないのが実情かなと思います。

公立大学へ行ったアンケートでは，多くの出願書類を取り扱うこと，面接による評価を実施することがなかなかの負担になってくること。また広報の機会も限られており，既にある機会に相乗りをする形で広報していくとか，規模も自分たちで大きなものを選べるわけでもないという実情があると思います。

その一方で，国際入試をやる意味，期待する部分としては，学生の多様性，大学自体の多様性，それからグローバル化，そのようなことを求めているという結果が出ています。

ただ，これもまた国立大学と重複する部分がありますが，業務の負担はかなり大きく，志願者の確保，出願書類をペーパーで頻繁にやりとりし確認する必要があること，不備が出た際の志願者の対応といった点に難しさがあるというお話でした。

飯田先生からのご報告について，国立大学，北大の場合には総合大学としてという話にはなりますが，公立大学と似たような状況かなと思います。報告の中では，業務の複雑な部分について，選抜日程を共通化することで少し省力化を図ったということが工夫として挙げられていました。

その一方で，多様な入試をやっているため，それぞれの選抜をどのように差別化するのか，どのような意味を持たせるのかという課題が生じているということでした。

また，広報に関しては，組織的・戦略的な広報活動というのが必要だということです。選抜に係る様々な資格や試験プログラムの比較可能性を求めることは難しいかもしれませんが，そうした選抜に携わる者においては，さまざまな試験プログラム，教育プログラムについて理解することが重要であるという話がありました。

それでは，これら 2 件の報告に関して，Q&A に回答いただきます。

中島先生へのご質問です。①渡日前の入学許可について，日本留学試験受験のための日本入国手続きにかかる期間はどのくらいか，②入国手続きについての大学側の関与の

範囲を合理化されると留学生の入試も活性化するのではないかということで，お分かりの範囲で教えてくださいということです。

【中島】　日本国内にいる学生が受験した記録しか残っておらず，基本的にはうちの試験のために来日するという手続きを取った学生がいません。そのためお答えができないというのが実情です。

それから，大学側の関与に関しては，入学が決まった学生に対しては，できるだけ早く必要書類を発行するようにしています。これに関しては本学では事務局の方が県の職員ですので，様々な部署と連携しながらやっていただいているというのが現状で，教員がそこに携わるということは一切ありません。

面接準備など，試験に関しては教員が行いますが，報告の中でも述べたとおり，地方大学だからというのが大きいのか，入学を辞退されることが何回も続くと，ちょっとなという気持ちが教員の中にはあります。

ただし，本学の授業のカリキュラムがやはり海外の人向けになっていませんので，この辺を充実させないと海外からの留学生というのは増えないだろうなとは思っているところです。

【岩間・司会】　そうですね。①の点などは，実際には日本学校とかにいったん入ってという流れがありそうな気がしますが。

【中島】　今はそういったケースが非常に多く，日本語に関してはほとんど問題ないという学生が多いです。

【岩間・司会】　ありがとうございます。続いて，飯田先生へのご質問です。出願要件の確認について，留学生等の入試における事務作業のネックとして世界各国の学校教育制度，資格確認，入学資格の確認があると認識しています。この点について北海道大学での工夫があれば，教えてくださいとのことです。

【飯田】　直接の担当ではないため，今現在の取り組みの詳細についてこの場でお話をすることはなかなか難しいです。質問の意図としては，私費や ISP，MJSP など，アフリカも含め世界中から留学生が来ているような状況にあって，GCE-A レベルといったメジャーな資格を持っている生徒ではなくて，日本ではあまりなじみのない資格についてどのように認めるのか，そのような意図でご質問を頂いたのだと思います。

それについては，恐らく北大で何か独自の取り組みをやっているという可能性は低いのではないかと思います。インターネットで情報を調べたり，本人や学校，もしくは文科省のホームページにあるとおり大使館に聞いたり，そのような他大学でもやられているような取り組みを北大でもやっているのではないかと思います。

ただ，東京規約というものがありますが，それに基づき令和元年度に大学改革支援・

学位授与機構に高等教育資格承認情報センターが設置されました。外国資格に関する情報については，同センターのウェブサイトに，外国で取得された学歴・学位を証明する書類の紹介，ベリフィケーション（verification）ができる外国の公的機関のウェブサイトやサービスに関するページがあります。世界中の国を網羅しているわけではありませんが，ウクライナ，韓国，台湾，中国，ベトナムといった国や地域の情報はある程度そこで得られるようになっています。

今後，高等教育資格承認情報センターが様々な国・地域の詳しい情報を提供するようになれば，われわれはこういったウェブサイトを活用して，志願者のもつ資格の背景や，その真偽も含めて，様々な情報を収集・確認できるようになるかもしれません。

【岩間・司会】　ありがとうございました。続いて，4 件目の報告について振り返ります。

西村先生には日本語 DP の IB 校としてご報告していただきました。教育プログラムを通して国際的な視野を持つ人間の育成を目指しており，自立を促す教育に基づいて大学での学習や研究への準備がされているというお話でした。

ただ，国内の大学の入試，IB を利用した入試を考えてみますと学校で育成される能力・資質と入試で求められるものにミスマッチが生じていると考えられるとのことでした。要求される学力水準が高すぎる，求められる能力や資質を入試の場面では発揮できないなど，大学入学後はある程度重複する部分もあるのではないかという話でしたが，入試においてはそのような課題があるということでした。

それでは，本報告に関して，Q&A に回答いただきます。ATL のオーガナイゼーションは習得事項間の関連をつける，体制化という意味だと理解をしていましたので，整理整頓という言葉が使われていたところで違和感を持ちましたということで，この点について確認させてください。

【西村】　ATL（学習の方法）のオーガナイゼーションという言葉の捉え方はご指摘のとおり，幾つかあります。IB の ATL というスキルの部分でいいますと，このオーガナイゼーションは，例えば，タイムマネジメント，プランニング，あとは学習に必要なものをしっかりと関係づくるというところに視点を置いた言葉です。そのため，整理整頓が完全に正しいものかといいますとそれが全てを網羅しているものということにはならないのですが，とりわけ中学校の段階の子どもたちがある程度そこを理解していけるようにということで大きな言葉としてつけていたところです。

なお，例えば，学びを紐付けていく，その学びを転化させていく，結び付けていくようなものを transfer というスキルとして置いています。IB のプログラムでは，そういったような言葉の使い方をしています。

【岩間・司会】　ありがとうございます。続いてのご質問です。IB の特徴として主体的，対話的，深い学びとありますが，学力の 3 要素にも通じると思います。一般の大学入試でどのように評価する方法があるとお考えでしょうかということです。

【西村】　この部分が一つの課題としてあるのかなと感じています。つまり，様々な大学でユニークな入試，選抜方法を採用されていますが，知識の量や，スピード感を持ってその問題を解き，答えを導くというところが求められがちなのかなと感じています。

そういった意味で，実際に生徒たちが学習して身に付けたものや，高校段階もしくは中学校段階も含め実際に生徒たちがどういった学びをしていたかという，学びの学習のポートレートで選抜を行う総合型選抜や推薦入試で評価されて，進学につながっている現状なのかなと思っています。

実際に大学関係の方など，様々な方が本校の視察に来られますが，実際にご覧になっていただいて，「このような学生が欲しい」「こういった学びがまさに必要なのではないか」という言葉を頂くことがよくあります。

本校のように探究的な学習を全ての授業で行っている学校としては，ChatGPT の登場により，難しい状況がこれから出てくるかなとは感じています。ただし，本校では中学校 1 年生の段階から年間 20～30 のレポートを書きますが，コピー＆ペーストをするようなことを防止するために，Turnitin を活用しています。そういった工夫の中で進めていますが，大学入試の中で見取っていただけるような状況は非常に限られています。今後少子化が進んでいく中で，各大学がアドミッション・ポリシーをどのように展開していくのかという点を非常に注目しているところです。

一方，懸念していますのは，本校において非常にアカデミックなものに興味関心が強い生徒は，国内というよりも，国外の大学に目を向けることが増えてきているのではないかと感じています。そういった点も今後の動向を注視する必要があると考えています。

【岩間・司会】　続いての質問です。①貴校の入試のアドミッション・ポリシーはどのようになっていますか，②SSH との両立はうまくいきますか，どのように工夫されていますかということです。

【西村】　アドミッション・ポリシーについて，本校は高校からの入学はできないため，よりシンプルに伝えてはいるのですが，探究的な課題解決にしっかりと向き合って協働的に楽しんで取り組める生徒を求めていると伝えています。そういったところをベースとして小学校 6 年生を受験生の対象としているところです。

それから，SSH は本校では 3 期目の 2 年目を迎えているところです。SSH がどのように IB と絡んでいるのかといいますと，大きな部分ではやはり探究活動をどのようにしていくのかといった点です。探究活動のポイントは仮説を設定するというところですが，仮説を設定するためには，やはり批判的思考力，クリティカルなものの見方が重要になります。中学校 1 年生段階から全教科でクリティカルなものの見方を育むための取り組みをしています。例えば，実際にデータ分析や実験を通して仮説の検証をするという取り組みを進めています。

一方で，SSH 自体が高校段階の教育課程開発の大きな柱になっていますので，実際に

DP を取っている生徒向けというよりは，DP コースを選択していない生徒たちがサイエンスの分野での課題探究的な活動を進めていく際に活用するプログラムという位置付けになっています。

【岩間・司会】　それでは，いったんここで個別の Q＆A は終わりにして，私が用意した論点についてご回答いただければと思います。

まず，今日の 4 名の先生方のご報告の中で非常にはっきりとしていたのは，IT・デジタル技術の活用という点です。大嶋先生には導入に向けて苦労をした部分，現在さらに残っている課題についてお聞かせいただければと思います。

また，中島先生からは，公立大学のアンケートから事務的な手続きに難しさがあるというお話がありましたが，IT・デジタル技術を活用することによってそのような点が解決されるのか教えていただきたいと思います。

中島先生と飯田先生については，国公立大学での現状，IT・デジタル技術の活用の現状と導入の可能性について，私立と国公立では状況が異なりますので，そういった状況の中でどれぐらい導入の可能性があるのかというところを伺ってみたいと思います。

西村先生には，われわれには実際に大学に志願する学生が IT・デジタル技術に慣れているのかどうか，大学として見えていない部分もあるということで，学習場面での IT・デジタル技術の活用状況や，出願の場面でそのようなことを求められた際の指導の難しさのようなものがあれば教えていただきたいと考えています。

【大嶋】　総論ですが，デジタル化によって，相当解決するものがあるのではないでしょうか。その上で，大学のミッションと，いわゆる留学生入試として海外から留学生を入れたいのか入れたくないのか，入れるのであれば何名ぐらいを入れたいのか。それによってかける投資コストと人的リソースをどれだけ使うかに尽きるのではないかと思っています。

個別に入試に関する相談を受ける際にいつもお答えしているのは，APU は世界中から留学生が集い，学生の半数を留学生が占めるという特色型の大学をつくることを，開学前に構想し，宣言してしまったということです。その維持，発展のために色々な見直しやデジタル展開にエネルギーをかけてバージョンアップしてきたという経緯があります。在籍する学生の多くが日本で学んだ高校生であれば，ここまでエネルギーをかけるか，そこまで投資をする必要があるのかという疑問はよく分かります。

ですから，どの部分からやっていくのかは国の方針やさまざまなオンライン化の動きなどを見て一つずつ，つぶしていくのがよいのではないかと思っているところです。

APU には本当に多様な学生が留学生として来ています。IB を取ってきた世界の高校生もいますし，西村先生がおっしゃるとおり，新たな探究型の学びをしてきた生徒も入学しています。それを考えた時に，学習内容やキャンパスでの生活について，日本人学生や留学生が満足できる，さらに成長できる教育を，全ての大学でちゃんと提供できるかということが，一方で問われていると思います。この点は APU も同じ課題があると思っ

ています。

【岩間・司会】　そうですね。前提が大学ごとにかなり違っているという部分，公立大学での教育の現状を踏まえ，IT・デジタルの技術の利用の可能性についてコメントがあれば中島先生お願いします。

【中島】　なかなか難しい話なのですが，本学においては学内で持っている情報をデジタル化しましょうという話が 1 つ課題に挙がっていて，教員と事務局でどうやったら効率的にできるかといった話が立ち上がったところです。何年か前に入試の手続きに関しても，デジタル化といったら少し語弊があるのですが，今までの事務局の方などが手作業でやっているものをオンライン化できないかという話が出てきたところです。なかなか難しいだろうなというのが現状ですが，やっていかないともうどうしようもなくなるだろうなと考えています。

大嶋先生が言われたことがもっともで，この国際入試に関しては目的が何なのかとか，海外の，日本人と価値観が違うような人をどのくらい大学に受け入れたいのか，受け入れるべきなのかということの議論をきちんとしないといけないのではないかなと思っています。やはり小さいところが多いので，そこだけにお金をかけるというのはなかなか難しいだろうなというのが，今，率直に思うことです。

ただ，最後のスライドにありましたアンケートは書類から変えなければいけないだろうなというのが思っているところです。

【飯田】　北大では，オンライン出願を行っていたり，面接を Skype で実施している募集単位もあったりするのですが，全体としてはやはり小規模・局所的といえるかと思います。局所的というのは，ISP や MJSP は相対的に多くの志願者を確保できています，その一方で，私費や帰国子女は規模が小さいということです。そのため，国際入試に限っていえば，それだけ予算をかけてインフラを構築する意味があるのかという議論になるのではないかなと思います。

予算については，競争資金の獲得が条件になりますので，例えば，ISP や MJSP の 2 つについては，スーパーグローバル大学創生支援事業の予算から奨学金の費用などを捻出していました。そういう意味では，インフラも含めて何か新しいことを，他にはないことをやるのであれば，大きな資金が獲得できているのかが非常に重要な問題となるのではないかと思います。

教育については，他の大学においても，LMS（学習管理システム），もしくはコロナ禍以降であれば Zoom などのサービスを授業で活用されているかと思います。私は高大連携講座を担当している関係で，第 2 学期（後期）5 講時の授業のシラバスをチェックする機会があるのですが，以前よりそういった IT・デジタル技術を活用する授業が増えている印象があります。

今後は，フローニンゲン宣言などの影響から，資格証明や学修歴のデジタル化が世界

規模で進み，日本でもそれに関連する取り組みが進められていくのではないかと思います。

しかし，北大ではあくまでも一般選抜がメインであって，国際入試については一部で推進されているものの，やはり小規模・局所的なところがあり，なかなか積極的に予算をつけて改革するという流れにはなっていないのが現状だと思います。

【岩間・司会】　ありがとうございます。西村先生に関しては，高校側から見た場合，中等教育学校側から見た場合の ，IT・デジタル技術の活用について教えていただけますでしょうか。

【西村】　現場としては，国内では GIGA スクールがスタートしており，生徒たちのタブレット端末を使う技術は非常にたけていると思います。とりわけ，本校においては 1 人 1 台学習道具として使っていて，私の感覚で言うと教員よりも生徒のほうが活用の技術としてはたけている状況かなと思っています。

それから，オンライン出願が導入された場合には，技術的な，テクニカルな部分ではできるかと思います。ただ，高校，中学校においては色々なものがまだデジタル化されていないという現状があります。ですので，例えば，証明書の提出時に一人ずつ用意するといったことも難しい場面が出てくるのではないのかなと感じています。

あとは，生徒本人の出願ということになるとは思いますが，保護者がそういったやり方についてあまり理解されていないことが多いかなと思いますので，その辺りの難しさが出てくるのではないかなとも思います。

【岩間・司会】　ありがとうございました。時間も迫ってきましたので，論点がまだ 2 つあるのですが，そのうちの 1 つ，先ほど大嶋先生からもありましたが，IT 技術を使うにしても目的を明確にする必要があるというところで，そのベースにある教育に焦点を当てて話を伺いたいなと思っています。

まず，引き続き，西村先生に伺いたいのですが，IB の教育プログラムを受けた生徒たちの大学教育に対する期待というものはどのようなところがあるのか。あとは，国内の大学での学習に対する卒業生の意見や感想をご存じであればということですね。この点については大学側も課題として認識しており，何か関連する情報を教えていただければと思っています。

【西村】　IB の特に DP を取得した子どもたちが時々言っているのは，大学に入ると試験が例えばマーク式のテストになっている，あとは知識を問う試験で成績がつけられてフィードバックがないということです。特に DP をやっていく生徒たちは常に教員からのフィードバックや共同の学びの場面がありますので，非常に思考が深くなり，広がっていきます。そのような経験を持っていますので，大学での，1 つの答えを求められるテストに対してはがっかりしたと言う学生がいます。そういった意味では，進学した生徒たち

は，大学の先生たちと対話できる環境を求めているところではないかなと感じています。

【岩間・司会】　APU が実際に取り組んでいる，入学する前の段階で先生方とやりとりできる機会が設けられることは，大変貴重な機会になりうるということなのでしょうか。

【西村】　そうですね。入学前もそうなのかもしれないのですが，入学後の一般教養において担当の先生との対話が持てない，他の学生とのディスカッションをする機会が少ないです。そこの深まりがないところへの不満というのでしょうか，そういったものはあります。

また，入学後，実際に英語を使う場面があるのかといいますと，国内大学に進学する学生たちはほとんどないと。そういった時に求められていた英語力はどこで使うのだろうかと。英語がネイティブの先生たちとの話し合いのところで使うぐらいで，英語でディスカッションという場面はなかなかありません。それが現状なのかなと思います。

【岩間・司会】　ありがとうございます。では，最後に大嶋先生に 1 件だけ伺って終わりにしたいと思います。国内教育プログラムを受けて入学してきた日本人学生の適応など，その学生たちへの国際学生の影響について教えていただければと思います。

【大嶋】　先ほどの西村先生の話で補足的に APU の立場から考えている課題を一つ述べさせてください。

実は APU は IB の生徒を世界中から多く受け入れています。国内の IB 校も同様です。海外から来た学生が言うことは，IB で高いスコアを取っている場合，そのスコアによって，アメリカなどの大学ではいわゆる初年次（100 番台）の共通系の科目は免除されます。単位認定され，速やかに次のレベルの科目を履修していくというのは当たり前です。

しかし，日本においては，文科省の大学設置基準上，College Board が行っている Advanced Placement Test の結果や IB のスコアは大学の授業ではないため，一切単位認定ができません。IB で高いスコアを取っている学生は，受け入れた大学が基準を明確に示して，例えば大学で提供する共通のこの科目については修得済みとして単位を認定してあげればよいのにできない，というつらい事例は本当にたくさんあります。海外では当然可能なことであっても，文科省の設置基準上は認められないわけですね。いまだにそういった規制はたくさんあります。この辺りは大変大きな課題だなと今も悩んでいるところです。

それから，国内の教育課程・プログラムを受けて入学した日本人学生について，冒頭申し上げましたとおり，APU は地方である大分県別府市にあります。別府市の人口は 12 万人弱です。そのようなキャンパスにありますので，ある意味，そういう地方の大学でこのようなユニークな大学に行きたいから APU を希望するという学生が大変多いです。この間の特徴として，首都圏などの出身者の入学者割合が大変高くなってきている傾向があります。入学前の段階から，決して都会ではない APU でこのようなことを勉強した

い，このように自分はネットワークをつくっていきたい，このような学部でこのように成長していきたいという具体的なイメージをもって出願してきている生徒が多いというのが，私が 2000 年から日本人学生を見て感じている印象です。

学生たちは当然いろいろな形で成長を遂げ，変容していきますが，ユニークな大学であるからこそ，どのような初年次教育をしていくのかが重要だと考えています。高校で未来を先取りした面白いプログラム，面白い教育を受けてきた世界中の学生や日本の学生が，大学に入学して「何だ？この授業」と思うことがないよう，多文化の協働学習やグループワーク，学生の海外経験の有無に応じて英語を使う機会をレベル別につくるなど，さまざまな仕掛けをつくっていく，いわゆる「隠されたカリキュラム」のようなものを適切に置いていくということが必要で，APU でも毎年改善をしています。

また，キャンパスでの寮生活について希望者は全員入寮としています。今年，キャンパスに学生寮を一つ増やしました。やはり大学の授業のみによらない学生の成長というのは当然大きいですし，授業以外での留学生と日本人学生の混ざり合いは大学生活での適応の鍵になっている確信が，私にはあります。

国内出身の学生は，海外からの留学生に比べて，勉強の仕方や，将来の最終学歴の目標も大きく異なります。最終学歴は学部卒業の学位でいいという留学生は，今は本当に少ないですね。将来のキャリアや大学の学部での学びに対する留学生の考え方が，日本人学生に対して大変いい影響を与えていることは間違いないです。

【岩間・司会】　ご丁寧にお答えいただいて，どうもありがとうございました。

私自身，国立大学の教員の立場としては，国際入試に対してまだまだ対応し切れていないというところで課題が山積しているなと感じた次第です。今回の全体会を通して，各大学が，国際入試を今後改善していく際の参考となり，またそれに向けて指導される高等学校や中等教育学校の参考になれば幸いと思います。

それでは，お時間になりましたので，この全体会を終えさせていただきます。ご発表いただいた先生方，それから，ご参加いただいた聴衆の方々も併せましてどうもありがとうございました。

【一同】　ありがとうございました。■

全体会３

「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて」

司　　会：　川嶋　太津夫（大阪大学特任教授）・荘島　宏二郎（大学入試センター教授）

趣旨説明　**総合型･学校推薦型選抜における多面的･総合的評価の充実に向けて** 185
川嶋　太津夫（大阪大学特任教授）

報 告 ①　**総合型･学校推薦型選抜における基礎学力の評価方法** 189
椎名　久美子（大学入試センター試験・研究副統括官，研究開発部教授）

報 告 ②　**基礎学力以外の意欲･関心･態度の効率的･効果的な評価方法** 206
竹内　正興（香川大学アドミッションセンター教授）

報 告 ③　**探究学習等の成果の評価方法** 235
本郷　真紹（立命館大学文学部特命教授）

全体討論 256

内　　容：

2022年の出生数は、初めて80万人を下回り、2005年の「我が国の高等教育の将来像（答申）」の予測を10年余りも上回る速さで少子化が進行している。そのため、大学・短大進学率及び入学定員が現在と変わらなければ、理論的には2040年には「大学全入」が実現する。一部の大学では「選抜」が機能するであろうが、多くの大学が志願者の希望とアドミッション・ポリシーのマッチング（相互選択）により、志願者を受け入れる、文字通りの「アドミッション」に変わっていくものと考えられる。

実際、現在でもすでに私立大学入学者の半数以上が、総合型・学校推薦型、いわゆる「年内入試」で進学している。一般選抜が中心の国公立大学も、18歳人口減に合わせて入学定員を減少させない限り、選抜性は大幅に低下するであろう。事実、2024年度入試における国立大学の総合型・学校推薦型の募集割合は19.6%、公立大学のそれは30.8%に達しており、今後その比率は増加するものと思われる。これまでも「選抜から相互選択へ」と言われてきたが、それがまもなく現実になり、従来以上に総合型・学校推薦型の比重が高まると予想される。

相互選択としての入学者「選考」に変われば、アドミッション・ポリシーをより一層明確にし、求める人材像、入学時までに備えておくべき資質・能力をより具体的に提示し、それらを適切に

評価する必要がある。加えて、入学後のミスマッチを防ぐためにも、大学の教育情報公表を充実させなければいけない。

そこで、全体会３では、総合型・学校推薦型選抜で、基礎学力、学力以外のいわゆる非認知的特性及び高等学校での探求学習の成果を適切かつ的確に評価するための課題及び方策について3名の有識者から報告を行うとともに、大学入試における多面的・総合的評価の充実に資する議論を行いたい。

全体会３ ◎ 趣旨説明

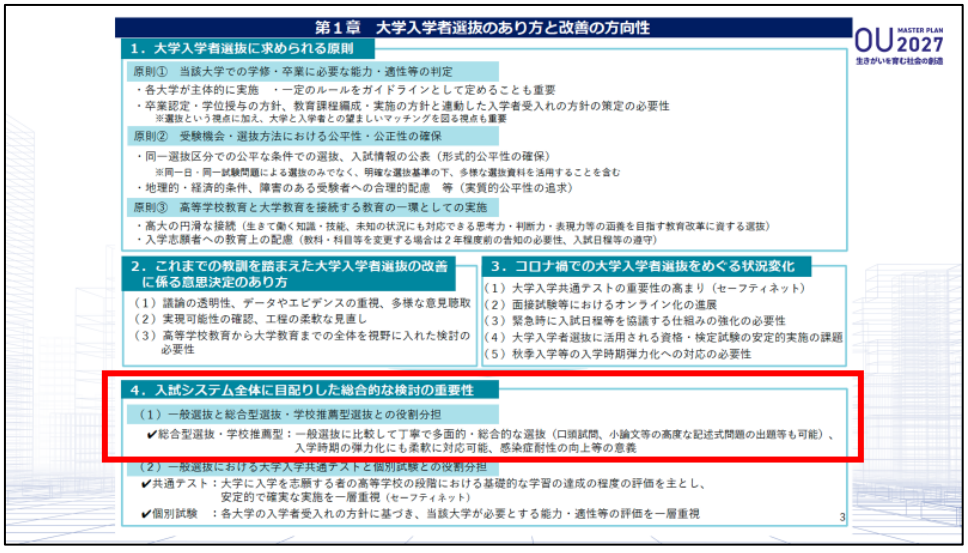
総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて

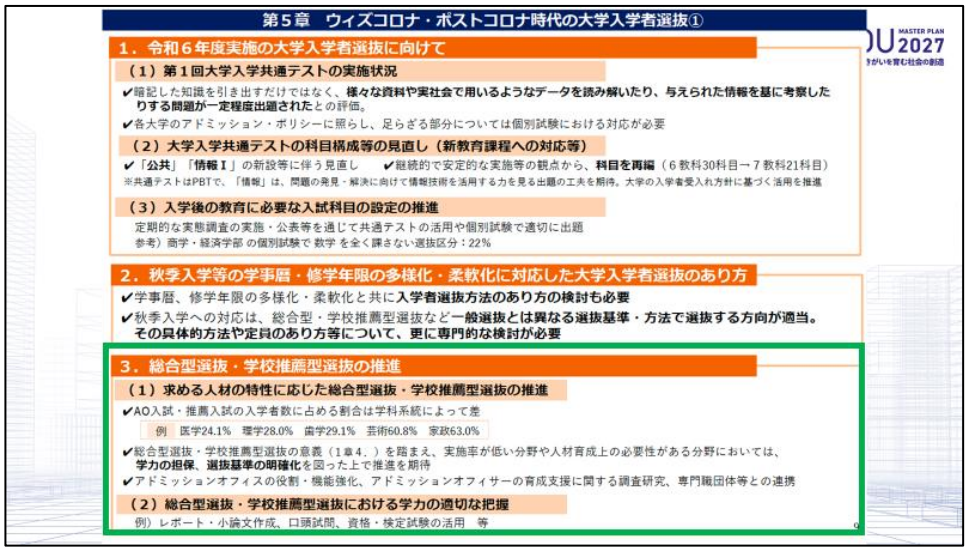
■川嶋　太津夫（大阪大学特任教授）

お時間になりましたので，全体会３「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて」を開始したいと思います。

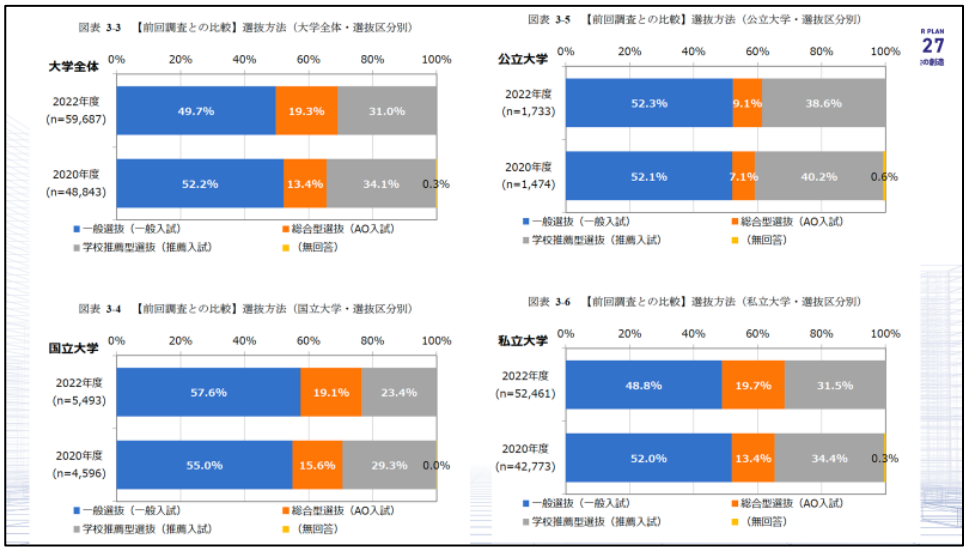


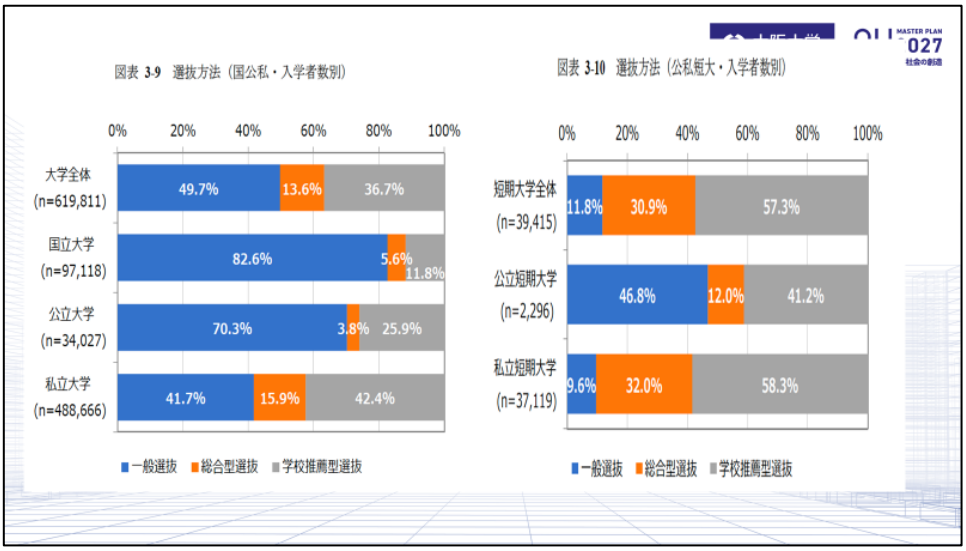
このセッションの企画の趣旨は，急速な少子化の進展に伴い，現在の大学進学率と大学の入学定員を考慮すれば，今後は現在の大学進学者よりも十数万人減ることが予想されています。一方で，既にご承知のように大学を閉めるという例も出てきています。





そういうことを考えますと，今後，大学入学者選抜は，一部の大学を除き，選抜という機能よりは，大学が求める人材像と志願者の学力やその他の特性をどのようにマッチングさせていくかという，相互選択の入学者選考に変わっていくのではないかと考えられます。



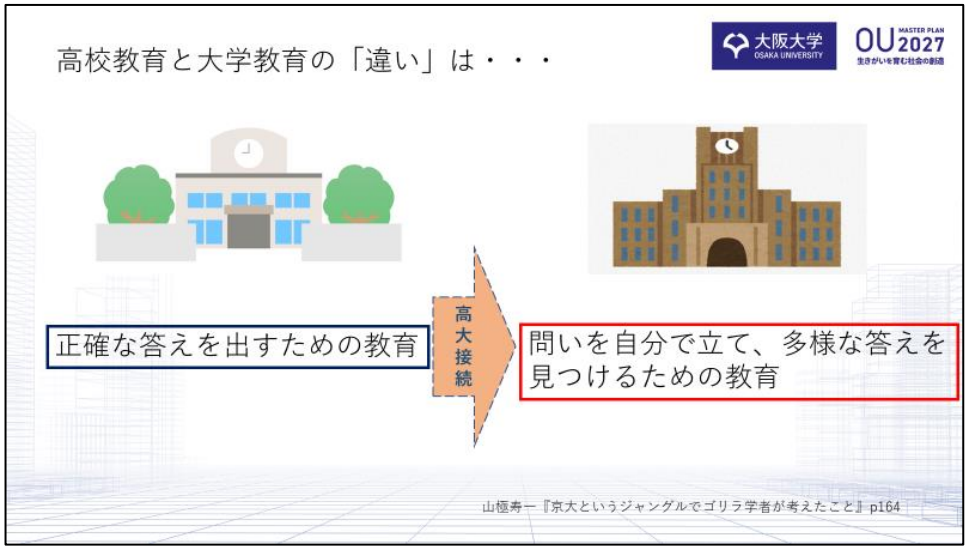


現在でも既に私立大学では学生の半数以上が学校推薦型・総合型選抜で入学していますし，国立大学でも 2 割程度，それから公立大学でも 3 割程度という状況になっていますので，今後，一般選抜よりも総合型選抜・学校推薦型選抜で大学に入学する高校生が増えてくると考えられます。そうしますと，いわゆる多面的・総合的な評価をさらに充実させなければならないのですが，現状では様々な課題があります。





例えば，基礎的な学力を把握するための大学入学共通テストが 1 月中旬に実施されるため，その時期には多くの選抜が終わってしまう私学の総合型・学校推薦型選抜での活用はなかなか難しいといった問題もありますし，基礎学力以外の非認知的特性をどうやって評価するのかということについても試行錯誤が行われています。



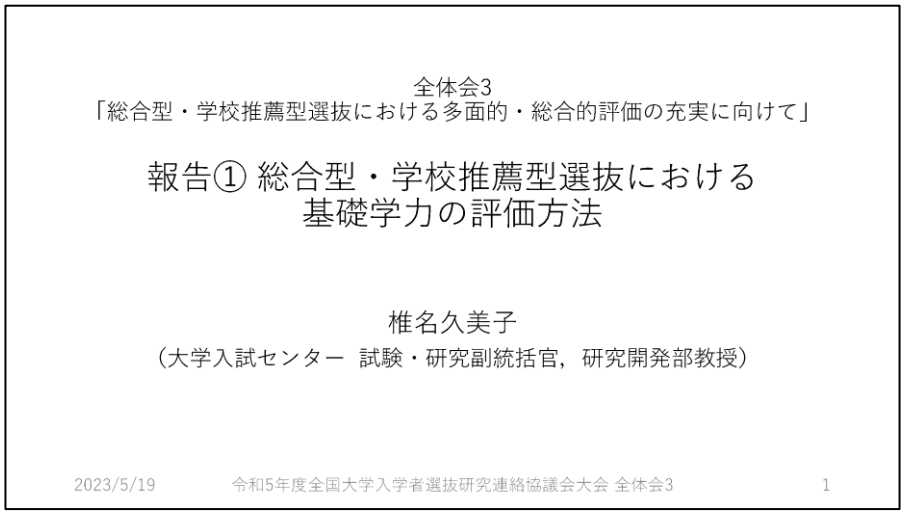
さらに，これから総合型選抜・学校推薦型選抜の志願者が増えますと非常に手間暇のかかる評価をどのように効率化・合理化していくのかという課題もわれわれの前にあるかと思います。そういう観点から今回はこのようなテーマを取り上げてみました。

全体会３ ◉ 報告１

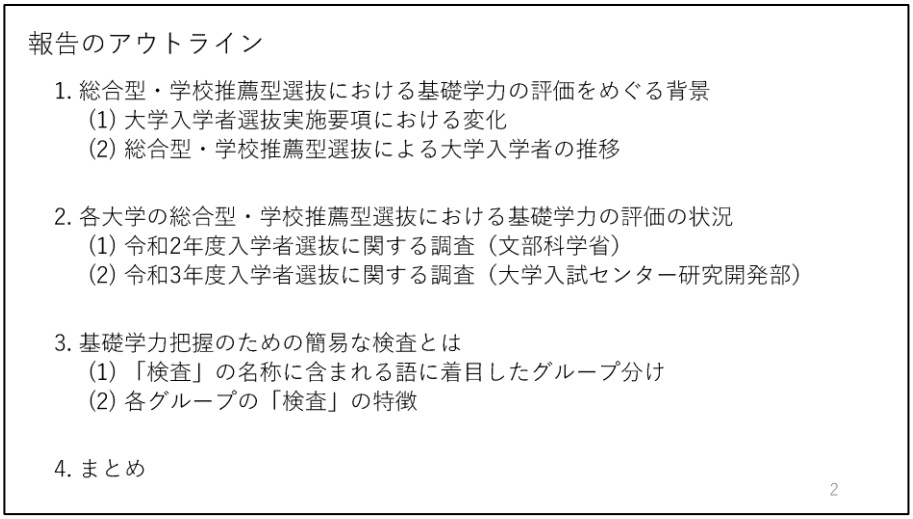
総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価方法

■椎名　久美子（大学入試センター試験・研究副統括官，研究開発部教授）

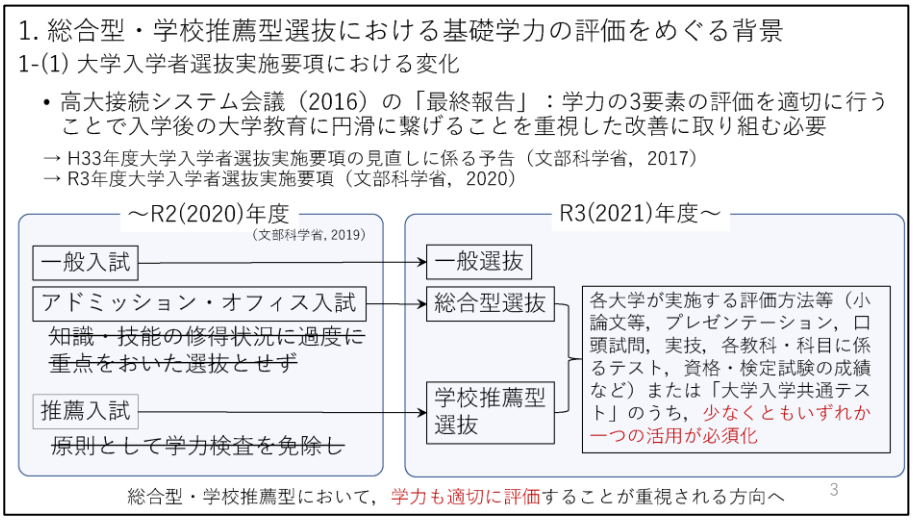
こんにちは。大学入試センターの椎名と申します。



総合型・学校推薦型選抜において多面的・総合的評価が促進される中で，基礎学力も適切に評価することが求められています。各大学の入試で基礎学力をどのように評価しているのか，現状について報告したいと思います。



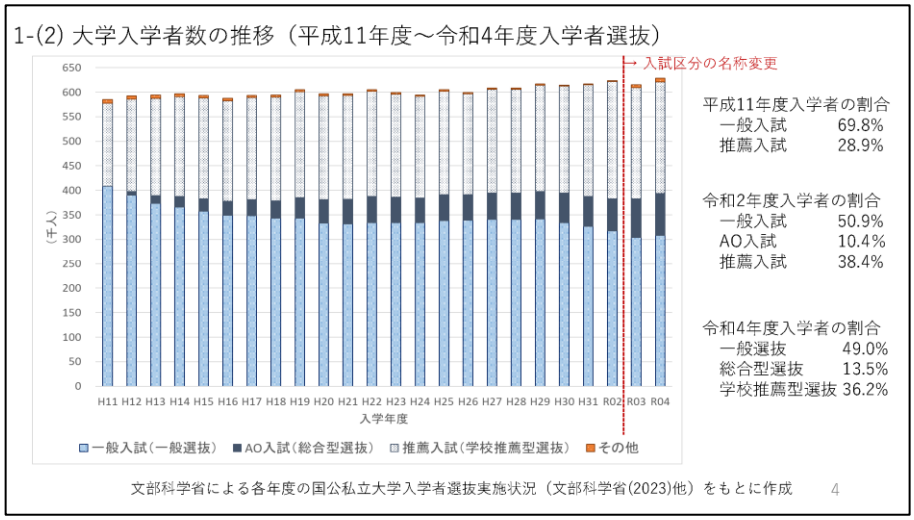
総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価を巡る背景を最初にお話しした後，令和 2 年度入試に関する文科省の調査と令和 3 年度入試に関する大学入試センターの調査の結果を基に全体的な傾向を見ていきます。その後，基礎学力把握のための簡易な検査の特徴について，大学入試センター研究開発部が行った分析をご紹介します。



総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価を巡る背景の一つは，大学入学者選抜実施要項における変化です。高大接続システム改革会議の最終報告では，学力の 3 要素の評価を適切に行うことで，入学後の大学教育に円滑につなげることを重視した改善に取り組む必要があると指摘されました。

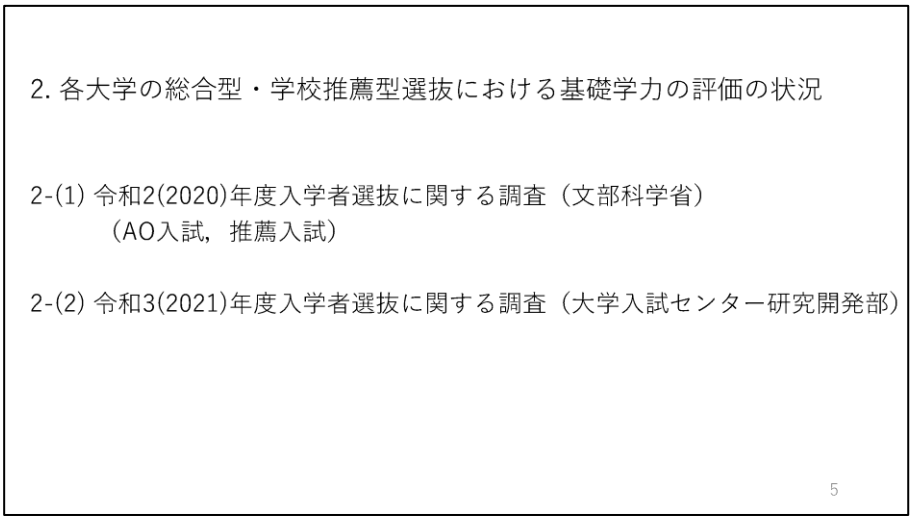
この指摘が「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」を経て，令和 3 年度大学入学者選抜実施要項に反映されました。入試区分の名称の変更だけではなく，総合型・学校推薦型において，大学教育を受けるために必要な学力も適切に評価することが重視される方向が示されています。

スライドに令和 2 年度と 3 年度の実施要項を並べて示していますが，総合型選抜に関しては，従来，アドミッション・オフィス入試に関して記載されていた「知識・技能の習得状況に過度に重点を置いた選抜とせず」という文言が実施要項から削除されました。学校推薦型選抜では，従来の推薦入試に関して記載されていた「原則として学力検査を免除し」という文言が削除されました。その代わり，総合型・学校推薦型選抜ともに，調査書等や推薦書だけではなく，各大学が実施する評価等（小論文とプレゼンテーション，口頭試問，実技，各教科・科目に関わるテスト，資格・検定試験の成績など），または大学入学共通テストのうち，いずれか一つの活用が必須化されることになりました。



このグラフは平成 11 年度以降の大学入学者数の推移を入試区分別に積み上げて示しています。ご存じのとおり，平成 11 年度は一般入試による入学者が約 7 割でしたが，令和 2 年度，すなわち選抜実施要項が変わる直前の年度では，一般入試による入学者の割合は 50.9％にまで減り，AO 入試は 10.4％，推薦入試は 38.4％でした。

このグラフで示す年度のうち，推薦入試による入学者の割合が一番高かったのが令和 2 年度です。直近の統計である令和 4 年度を見ますと，総合型と学校推薦型を合わせて 49.7％となり，一般選抜による入学者の割合とほぼ同じです。多面的・総合的評価の枠組みの中でこういった入学者が大学で学ぶための基礎学力を身に付けているかということを評価することは，高大接続から見ても重要な課題と言えると思います。



総合型や学校推薦型選抜において，どのような資料を用いて学力を評価しているのかという状況を見るために，令和 2 年度入学者選抜に関する文科省の調査と令和 3 年度の入学者選抜に関する大学入試センター研究開発部による調査の結果をお示しします。

なお，令和 2 年度については，入試区分の名称が変更になる前ですので，AO 入試・推薦入試に関する項目の調査結果となります。

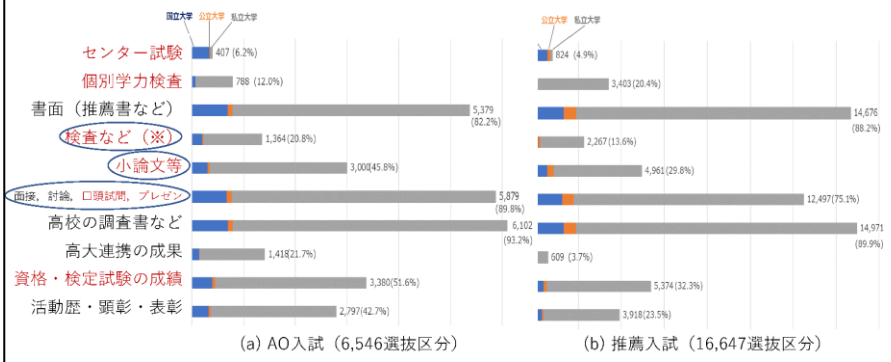
2. 各大学の総合型・学校推薦型選抜における基礎学力の評価の状況
2-(1) 令和2(2020)年度入学者選抜に関する調査

- 「大学入学者選抜における英語 4 技能評価及び記述式問題の実態調査（令和 2 年度）」（文部科学省, 2021）
  - ➢ 令和2年7月14日～9月14日：全大学（771大学）を対象に実施
  - ➢ 719大学から回答あり
  - ➢ 選抜区分ごとに回答を求めたもの
  - ➢ AO入試における学力把握措置
  - ➢ 推薦入試における学力把握措置

6

まず，令和 2 年度の入学者選抜に関する調査は，「大学入学者選抜における英語 4 技能評価および記述式問題の実態調査」として文科省が実施したものです。この調査は全大学を対象に実施され，それぞれの大学の選抜区分ごとに回答を求めたものです。様々な質問項目で構成されている結果が公表されています。

令和2年度のAO入試・推薦入試における学力把握措置（複数回答）



(a) AO入試（6,546選抜区分）　(b) 推薦入試（16,647選抜区分）

※ 基礎学力把握のための筆記による簡易な検査，適性検査，実技検査

【グラフ出典】文部科学省（2021）

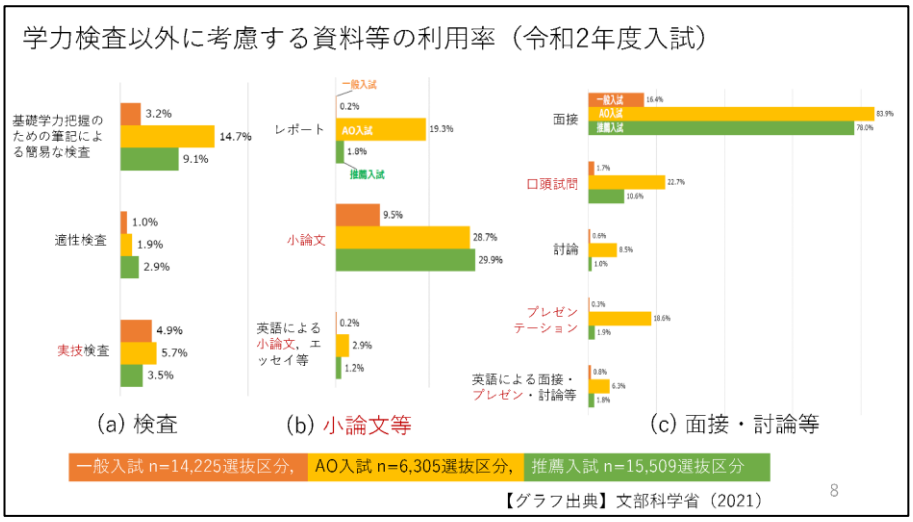
7

その中から「AO 入試及び推薦入試における学力把握措置」に関する項目に着目してみます。このグラフは文科省の調査から引用したものです。左端に示す選抜資料に関して，選抜区分ごとにどれを利用しているかということを尋ねていまして，複数回答になります。

左が AO 入試，右が推薦入試に関するグラフで，利用している選抜区分の数が国公私立ごとに色分けされて棒グラフになって積み上がっています。また，全ての選抜区分のうちで利用している選抜区分の割合もかっこ内に示されています。

左の項目のうちの一部を赤字にしたのは私ですが，これらは令和 3 年度以降の実施要項で「いずれか 1 つの活用」が必須化されたものに相当するものです。令和 2 年度入学者選抜に関する調査ですので必須化される前の年度ではありますが，着目すべき項目として赤字にしました。

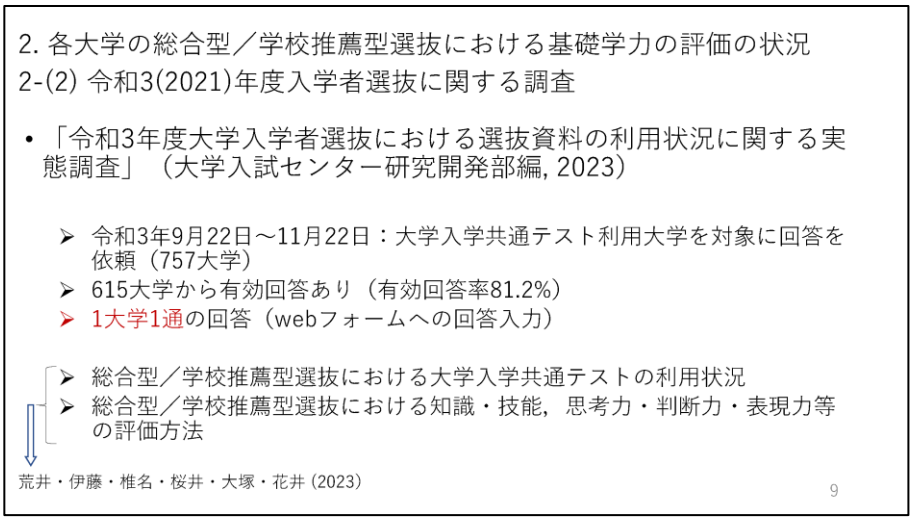
赤字にしたもののうち，利用する選抜区分の割合が最も高いのは AO 入試・推薦入試とともに「面接，討論，口頭試問，プレゼンテーション」です。「資格・検定試験の成績」や「小論文等」も比較的高い利用率となっています。「検査など」というのは具体的にはスライドの下部の赤枠内のものですが，これは AO 入試では約 2 割程度の利用率となっています。



先ほどのスライドの左端で赤字にしたもののうち 3 つの項目について，含まれる資料をもう少し細かく示したのがこのスライドです。縮尺が違っているグラフを無理やり 1 枚のスライドに収めたので見づらくて申し訳ありませんが，左が「検査」，真ん中が「小論文等」，そして，右が「面接・討論等」を細かく見たものになります。黄色い棒が AO 入試，緑が推薦入試です。

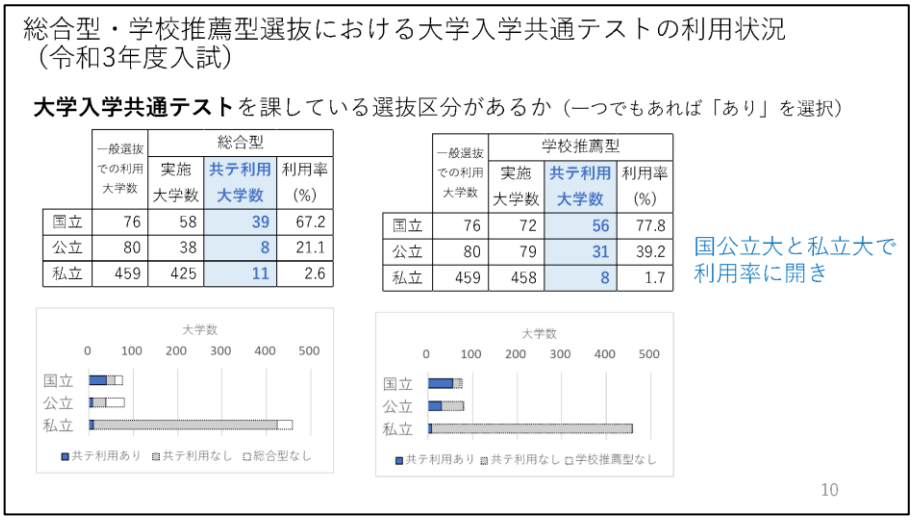
先ほどのスライドの項目分けで最も利用率が高いのは「面接，討論，口頭試問，プレゼンテーション」でしたが，このスライドで細かく見てみますと，それらの中で圧倒的に利用率が高いのは AO・推薦ともに「面接」です。令和 3 年度から活用が必須化される資料に相当する「口頭試問」や「プレゼンテーション」に関しては，AO 入試で 2 割程度となっています。

真ん中の列は「小論文等」を細かく示しているものです。グラフを見ますと「小論文」を利用する選抜区分は AO でも推薦入試でも 3 割近くになっています。「検査」については，一番上の「基礎学力把握のための筆記による簡易な検査」が AO 入試では 14.7%の利用率になっています。AO 入試では，小論文以外にもいろいろな資料が使われる傾向です。以上が令和 2 年度の状況ということでご紹介しました。



令和 3 年度の入試に関しては大学入試センター研究開発部が行った調査結果を紹介します。この調査は大学入学共通テスト利用大学を対象に回答を依頼したもので，依頼した大学の約 8 割から回答を得ました。先ほどの文科省の調査では選抜区分ごとの回答だったのですが，この調査では 1 大学 1 通とし，各大学の入試全体を把握している方に回答していただくようお願いしました。

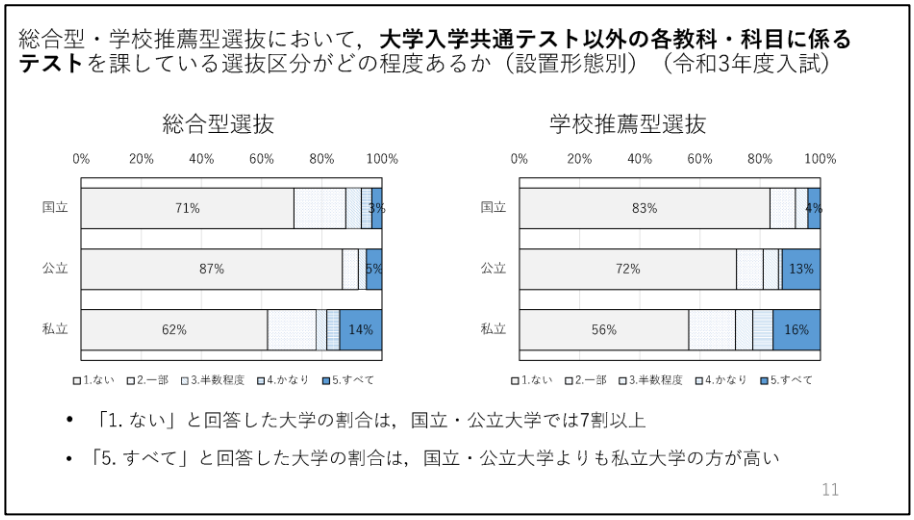
調査項目のうち,「総合型・学校推薦型選抜における共通テストの利用状況」と「知識，技能，思考力・判断力・表現力等の評価方法」に関する結果をお示しします。



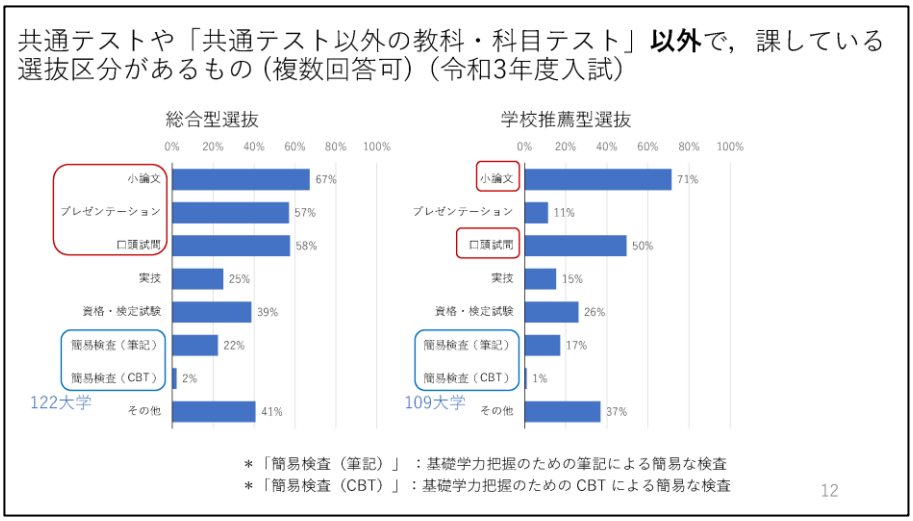
共通テスト利用大学のうち総合型選抜や学校推薦型選抜において共通テストを利用する区分があると回答した大学はどれぐらいあるかを設置形態別に示しているのがこちらの表で，左が総合型選抜，右が学校推薦型選抜です。

総合型や学校推薦型選抜を実施している大学の数，及びそれらの中で共通テストを課す選抜区分があると回答した大学の数を青字で示しています。下のグラフは，それぞれについて，共通テストを課す区分があると回答した大学の数を青で示して棒グラフで示しています。

この結果を見ますと，国立大学では共通テストを比較的利用されていますが，私立大学では総合型や学校推薦型で共通テストを利用する区分がある大学は非常に少ない状況です。利用している大学には，共通テストの実施日程や成績の提供日程の適切さや，難易度や識別力の適切さについての評定を回答してもらったのですが，日程の適切さに関する評定が低いという結果であり，共通テストを総合型や学校推薦型で利用する際の日程的な難しさが示唆されています。



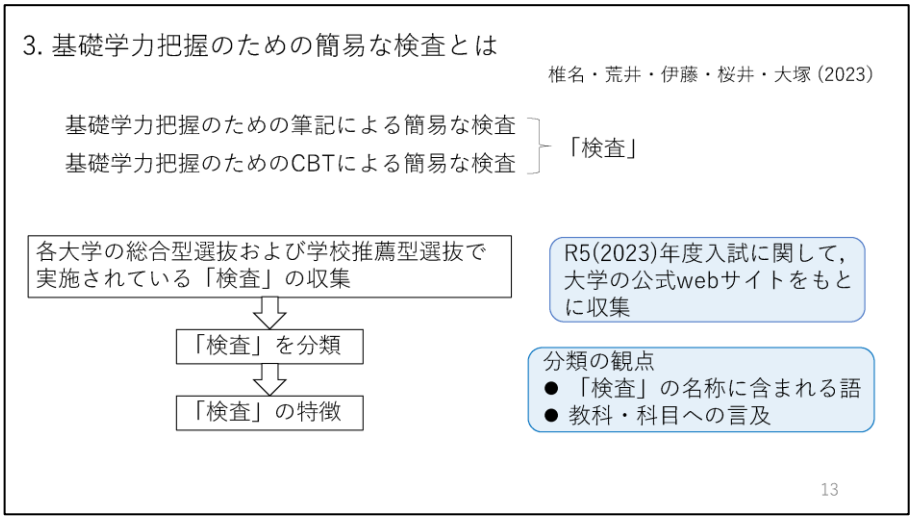
こちらのグラフは，共通テスト以外の各教科・科目を課す選抜区分がどれぐらいあるかという回答を，総合型・学校推薦型のそれぞれに関して設置形態別に示したものです。「課している選抜区分がない」と回答した大学の割合がそれぞれ一番高く，国公立では７割以上，私立でも ６ 割程度あるのですが，一方で「全ての区分が教科・科目テストを課している」と回答した大学の割合は私立大学が国公立よりも高くなっています。



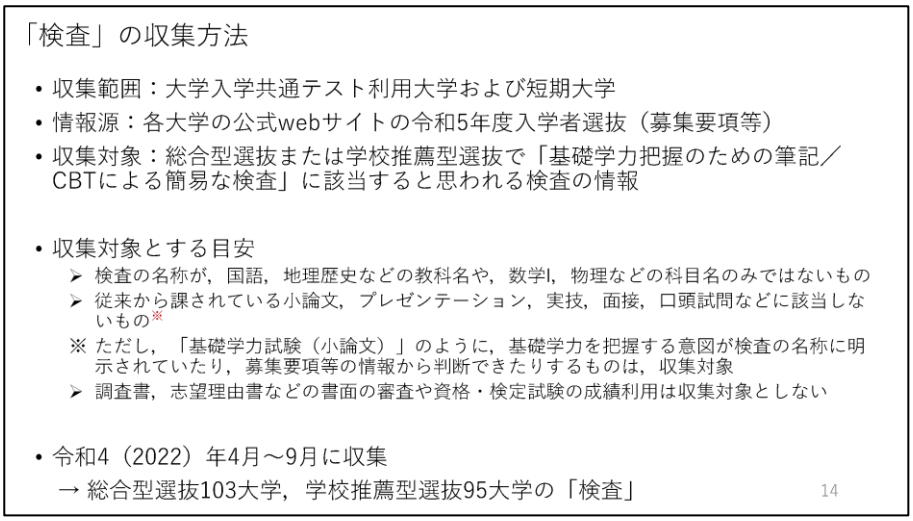
では，いわゆる教科・科目テスト以外ではどういうものを課しているのかという点について，左にある選択肢の中から「課している選抜区分がある」というものを全て選択してもらったのが左右のグラフです。左が総合型，右が学校推薦型に関する結果です。

総合型に関しては，「小論文」「プレゼンテーション」「口頭試問」を課している区分がある大学が半数を超えています。学校推薦型では「小論文」と「口頭試問」を課している区分がある大学が半数を超えています。

「基礎学力把握のための筆記による簡易な検査」を利用する区分がある大学は，総合型では 22%，学校推薦型では 17%です。「CBT による簡易な検査」については，利用する大学の割合としてはごくわずかですが，筆記と CBT による簡易な検査を合わせると，総合型では 122 大学，学校推薦型では 109 大学におきまして「基礎学力把握のための簡易な検査」を利用する選抜区分があるという結果でした。この結果から，それらの「検査」がどういうものなのかを見ておく必要があるだろうと考えました。



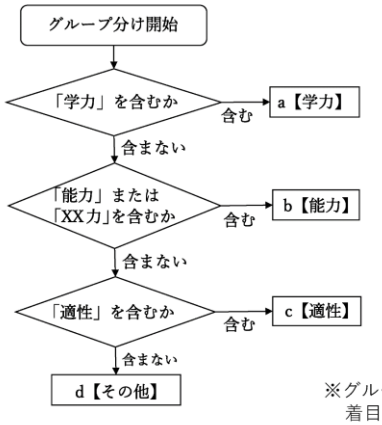
ここからお話しする「基礎学力把握のための簡易な検査」に関する分析結果は，われわれの研究グループが令和 5 年度入学者選抜に関して各大学の公式ウェブサイトから収集した情報に基づくものです。総合型や学校推薦型選抜で実施されている「検査」に該当すると思われるものを収集し，検査の名称に含まれる語に基づいて 4 つのグループに分類しました。各グループの検査の特徴を教科・科目への言及という点から分析した結果をご紹介します。



このスライドには，どういうものを収集したかという目安を書いています。名称が教科・科目名だけではないもの，つまり「基礎学力（英語）」のような名称のもの，そして，従来から実施されていた小論文，プレゼンテーション，実技，面接，口頭試問には該当しないものを目安に収集しました。

令和 4 年 4 月から 9 月にかけて，各大学の公式ウェブページで公開した令和 5 年度入学者選抜に関する情報をもとに，総合型では 103 大学，学校推薦型では 95 大学の検査を収集しました。なお，一つの大学で複数種類の検査を行っているケースがありましたので，検査の数としては大学の数よりも少し多めです。

3-(1)「検査」の名称に含まれる語に着目したグループ分け



※グループ分けには用いないが着目する語：「基礎」

15

検査の名称に含まれる語に着目したグループ分けとして，まず，検査の名称に「学力」を含むものをグループ a としました。次に，検査の名称に「学力」を含まないものの，「能力」または，「理解力」や「分析力」のような何とか力（「XX 力」）を含むものをグループ b としました。次に，グループ a やグループ b に入らないもののうち，検査の名称に「適性」という語を含むものをグループ c，含まないものをグループ d としました。また，グループ分けに用いた語以外に，「基礎」という語も含むかどうかにも着目しました。

「検査」の名称に含まれる語のパターンと各パターンの「検査」を実施する大学数

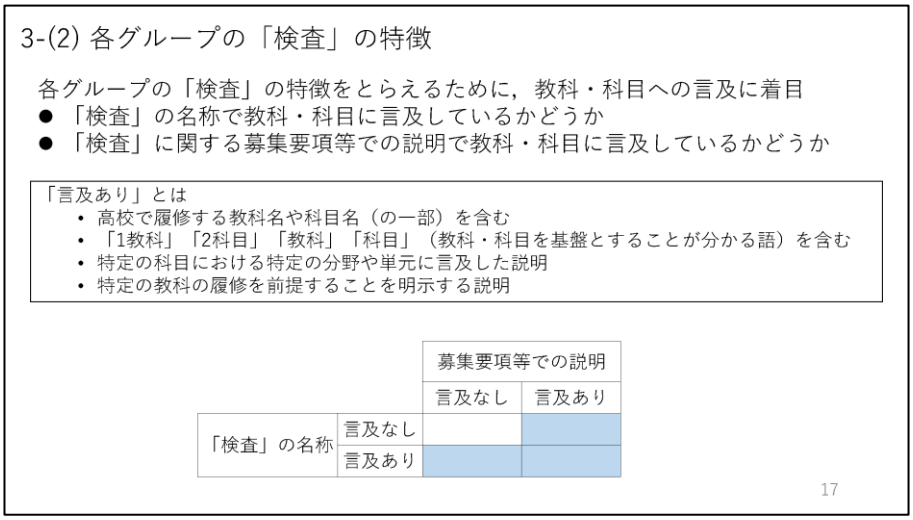
グループ		「検査」の名称に含む語					総合型選抜		学校推薦型選抜	
		学力	能力	XX力	適性	基礎	各パターンの大学数	「基礎」の有無別の計	各パターンの大学数	「基礎」の有無別の計
a	【学力】	1	0	0	0	1	33	38	42	43
		1	0	1	0	1	2		1	
		1	0	0	1	1	3		0	
		1	0	0	0	0	3	3	2	2
b	【能力】	0	1	0	0	1	2	9	5	9
		0	1	0	1	1	1		0	
		0	0	1	0	1	6		4	
		0	1	0	1	0	1	14	1	2
		0	1	0	0	0	3		0	
		0	0	1	1	0	1		0	
		0	0	1	0	0	9		1	
c	【適性】	0	0	0	1	1	1	1	1	1
		0	0	0	1	0	22	22	13	13
d	【その他】	0	0	0	0	1	7	7	8	8
		0	0	0	0	0	35	35	26	26
		計※					129		104	

※ 同じ大学が複数のパターンの「検査」を実施しているケースを重複してカウントした計

16

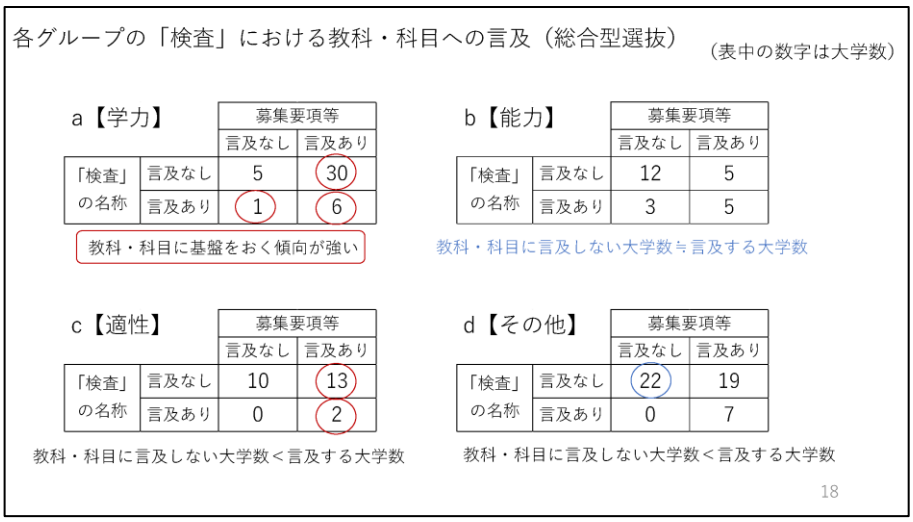
スライドの表には，グループ分けで着目した語が検査の名称に含まれるパターンを示しています。1 は「含む」，0 は「含まない」ということを示しています。着目した語を含むかどうかというパターンと，各パターンの検査を実施する大学数の集計結果を，総合型選抜と学校推薦型選抜に分けて示しています。

名称に「学力」を含むグループ a の検査は，ほとんどが「基礎」という語も検査の名称に含まれていることが分かります。「基礎」と「学力」がセットになって含まれている傾向が非常に強いということです。名称に「能力」や「XX 力」を含むグループ b の検査については，「基礎」という語を検査の名称に含むかどうかについて，特に目立つ傾向は見られません。検査の名称に「適性」という語を含むグループ c や，その他のグループ d に関しては，検査の名称に「基礎」を含まないもののほうが多い傾向です。



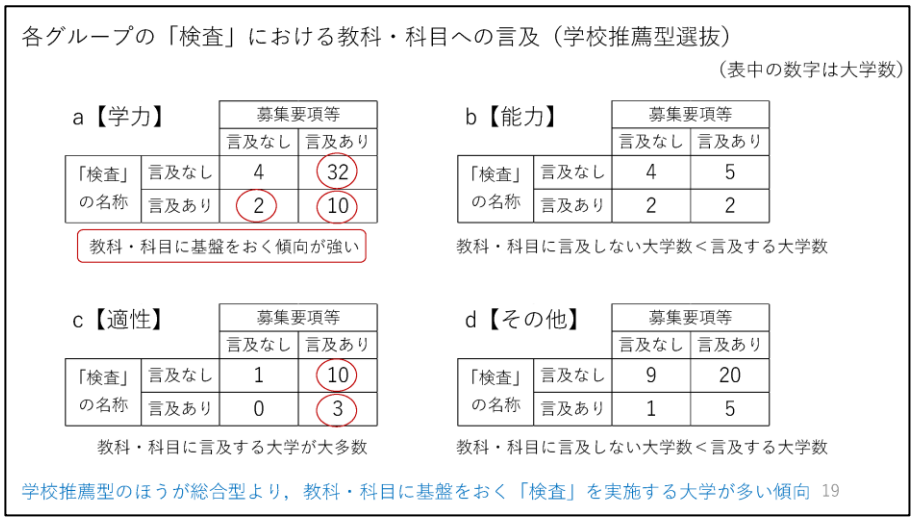
次に，各グループの検査の特徴を捉えるために，検査の名称で教科・科目に言及しているかどうかという点と，募集要項の説明の中で教科・科目に言及しているかという点に着目しました。

検査の名称と募集要項それぞれにおいて，教科・科目への言及があるかという観点から分けた場合，この表のような 4 つのセルができます。青で示した 3 つのセルが何らかの形で教科・科目に言及がある検査ということになります。



このスライドは，先ほど分類した 4 つのグループに関して，総合型選抜において，それぞれのセルの検査を実施する大学の数を示しています。ちなみに「言及あり」というのは，特定の科目の特定の分野や単元に関する説明があるとか，特定の教科の履修を前提としていることが明示されている，ような状態を指します。

左上の「学力」のグループ a の検査の表を見ると，検査の名称か募集要項の少なくとも一方で教科・科目に言及する「検査」を行う大学が多くを占めます。その傾向は左下の表に示す「適性」のグループ c に関しても同様で，教科・科目に言及する検査を実施する大学が 13 足す 2 で 15 あり，教科・科目に言及しない大学が 10 あるのに比べて，少し多くなっています。一方，右上の表に示す「能力」のグループ b に関しては，検査の名称でも募集要項でも教科・科目に言及しない検査を実施する 12 大学に対し，言及する検査を実施する大学が 13 で，ほぼ拮抗しています。右下の表に示す「その他」のグループ d については，教科・科目に「言及あり」の 2 つのセルを合わせると 26 大学になり，教科・科目に言及する大学のほうが多いのですが，4 つのセルの中で一番多いのは，検査の名称でも募集要項でも教科・科目に言及しない検査を実施する大学（22 大学）です。



このスライドに示すのは，さきほどと同じことを学校推薦型選抜で実施される「検査」に関して集計した表です。左上に示す「学力」のグループ a の検査については総合型選抜と同じ傾向で，「検査」の名称か募集要項の少なくとも一方で教科・科目に言及する検査を行う大学が多くを占めています。左下の表に示す「適性」のグループ c では，教科・科目に言及する検査を行う大学が大多数になります。そして，右上の表に示す「能力」のグループ b に関しては，教科･科目に言及する大学の数は 5 足す 2 足す 2 で 9 になり，言及しない大学の数を上回っています。グループ b の検査を実施する大学自体は少ないのですが，教科・科目に言及するかどうかで比べてみると，言及する大学数が上回っているということです。右下の表に示す「その他」のグループ d でも，教科・科目に言及する大学の数のほうが多くなっています。

すなわち，学校推薦型選抜で実施される「検査」では，「学力」だけでなく他のグループにおいても，総合型選抜で実施される「検査」に比べて，教科・科目に基盤を置いた

検査を実施する大学が多いことが分かります。

グループa【学力】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称（総合型選抜）

「検査」の名称での教科・科目への言及	募集要項等での説明における教科・科目への言及	「検査」の名称	大学数
言及なし	言及なし	・基礎学力検査 ・基礎学力検査（総合問題） ・基礎学力試験（小論文） ・高大連携授業に関連する筆記試験・基礎学力試験 ・適性検査（基礎学力）	5
	言及あり	・基礎学力試験 ・基礎学力テスト（マークシート方式） ・基礎学力テスト ・基礎学力診断 ・基礎学力審査 ・基礎学力検定 ・基礎学力調査 ・基礎学力検査 ・基礎学力確認テスト ・基礎学力確認（筆記） ・基礎学力を問う試験 ・基礎学力適性検査 ・基礎学力確認試験 ・学力検査 ・学力考査 ・総合学力テスト ・適性をみるための基礎学力試験	30
言及あり	言及なし	・基礎学力テスト（数学I）	1
	言及あり	・基礎学力テスト（英語・数学・理科より出題） ・基礎学力検査1科目 ・基礎学力検査2科目 ・基礎学力（国+英） ・基礎学力検査（英語・国語） ・基礎学力確認テスト（英語） ・基礎学力確認テスト（数学・英語） ・英語についての基礎学力審査	6

20

ここから 4 枚のスライドは参考資料としてお示しするものです。総合型選抜で実施される検査について，4 つのグループそれぞれで実際にどのような名称の検査が実施されているのかを，検査の名称と募集要項での教科・科目への言及の有無で分割した 4 つのセルに分けて示したものです。今，見ていただいているのが総合型選抜で実施される「学力」のグループ a の検査の名称を示す表です。学校推薦型選抜については割愛しますが，検査の名称は，総合型選抜と大体似たようなものが使われています。

グループb【能力】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称（総合型選抜）

「検査」の名称での教科・科目への言及	募集要項等での説明における教科・科目への言及	「検査」の名称	大学数
言及なし	言及なし	・基礎能力検査 ・共通基礎力テスト ・基礎力検査 ・思考力審査 ・読解・表現力試験 ・資料読解力・文章表現力審査 ・文章読解力考査（多肢選抜方式） ・文章読解力審査 ・日本語活用能力試験 ・講義理解力試験 ・講義等理解力試験	12
	言及あり	・基礎能力試験 ・基礎能力検査 ・基礎能力適性検査 ・基礎力評価 ・講義等理解力試験	5
言及あり	言及なし	・英語の能力を見るテスト ・英語基礎力診断 ・英語の総合力を問う問題	3
	言及あり	・数学能力検査 ・英語能力検査 ・国語・数学・英語に関する基礎力検査（2教科選択） ・国語・数学・英語に関する基礎力検査（1教科選択） ・理科に関する基礎力検査 ・理科・数学基礎力検査 ・英語力試験 ・国際適性試験（英語力） ・科学適性試験（理科系能力）	5

21

グループc【適性】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称（総合型選抜）

		募集要項等での説明における教科・科目への言及			
		言及なし		言及あり	
		「検査」の名称	大学数	「検査」の名称	大学数
「検査」の名称での教科・科目への言及	言及なし	・学部適性試験 ・学科・専攻別適性試験 ・適性テスト ・適性検査 ・適性検査（言語運用力・数理分析力） ・適性検査（面接含む） ・適性問題	10	・適性試験　・適性試験(CBT) ・適性検査　・適性試問 ・適性検査I　・適性検査II ・志望分野に関する適性検査 ・学群適性検査 ・適性をみるための基礎試験	13
	言及あり		0	・適性検査（数学，理科，英語） ・適性をみるための数学・理科試験	2

22

グループd【その他】の「検査」における教科・科目への言及と「検査」の名称（総合型選抜）

		募集要項等での説明における教科・科目への言及			
		言及なし		言及あり	
		「検査」の名称	大学数	「検査」の名称	大学数
「検査」の名称での教科・科目への言及	言及なし	・基礎テスト　・確認テスト ・リーディングスキルテスト ・ペーパーテスト・総合問題試験 ・総合考査　・講義型試験 ・総合（日本語）・探究総合問題　多様な名称 ・筆記試験　・筆答試問 ・授業のまとめ　・講義・レポート作成 ・ノートテイキング ・課題レポート，課題作成 ・AP試験　・ポートフォリオ入試	22	・基礎テスト　・基礎確認テスト ・確認テスト　・復習テスト ・講義に関する確認テスト ・総合基礎　・総合問題 ・筆記試験　・筆記審査 ・一般教養　・教養考査 ・筆答試問　・論述問題 ・実験室入試 ・グローバルコミュニケーションテスト①ライティング ・ポートフォリオ入試	19
	言及あり		0	・基礎数学　・基礎数学，英語 ・化学・生物の基礎テスト　・素養調査（数学） ・英文法の話題と英文の読解　・英文読解 ・教科1科目 ・「数学」に関するセミナーを行い，その理解度を問う筆記試験 ・「数学」および「物理」に関するセミナーを行い，その理解度を問う筆記試験	7

23

これら３枚のスライドは，総合型選抜で実施される検査に関して，「能力」のグループb,「適性」のグループc,「その他」のグループdごとに，検査の名称をまとめた表です。

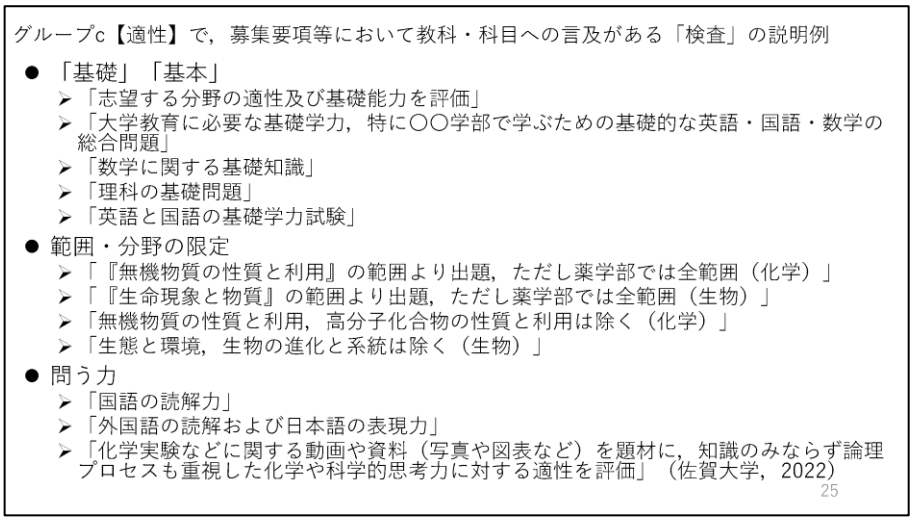
グループa【学力】で，募集要項等において教科・科目への言及がある「検査」の説明例

- 「基礎」「基本」
  - 「高校までの基礎学力の定着を審査」
  - 「入学後に必要とされる数学および英語に関する基礎学力の確認」
  - 「日本語と英語の基礎的な語彙（読み，書き，表現，読解，要約など）」
- 難易度の目安
  - 「高等学校教科書の章末問題と同じ水準の問題」
  - 「教科書程度の内容が十分理解できているか」
  - 高等学校卒業程度認定試験の過去問題
- 範囲・分野の限定
  - 「生物の特徴，遺伝子とその特徴，生物の体内環境（生物基礎）」
  - 「高分子化合物の性質と利用を除く（化学）」
- 問う力
  - 「数学（数学I・数学A）に関する基礎的な知識，理解力，考察力を評価」
  - 「文章・図表・図形などから情報を読み取り判断する論理的思考力を問う」

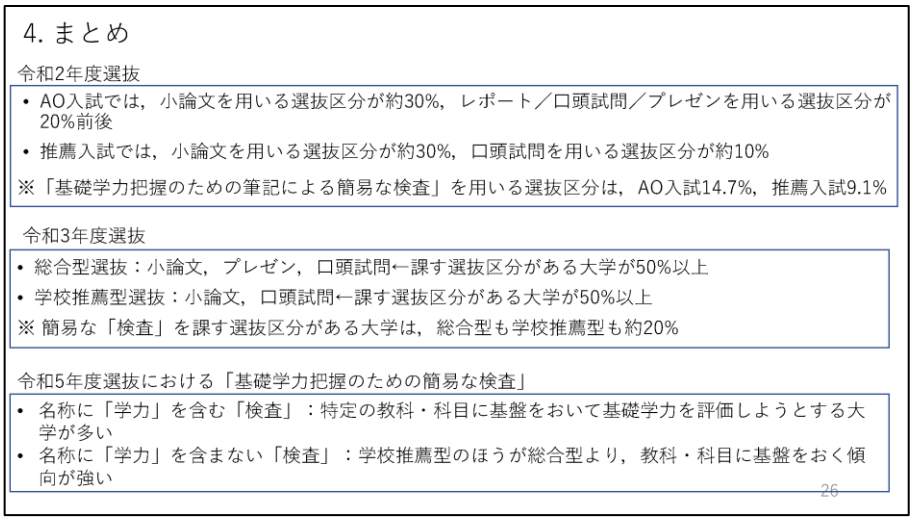
24

このスライドは，「学力」のグループ a の検査について，どのように教科や科目に言及しているのかという例の一部を示すものです。「高校までの基礎学力の定着を審査」という文言や「日本語と英語の基礎的な語彙」のように「基礎」や「基本」といった語を使った説明がなされているものが見られます。あるいは，「教科書の章末問題と同じ水準」「教科書程度の内容」のように，教科書を参照とした説明があったりします。一部の大学では，高等学校卒業程度認定試験の過去問題から数値を変えたものを出すと予告されているなど，別の試験を参照して難易度の目安を説明しているものがありました。

また，生物のこの分野から出す，あるいはこの分野は除くといった，範囲や分野の限定に関する説明も見られました。除外されているのは高校 3 年の最後のほうで学習する内容かと思われます。また，問う力については，教科や科目と絡めて，理解力や考察力あるいは情報の読み取り，判断，そして論理的，思考力などの語を使った説明がなされています。

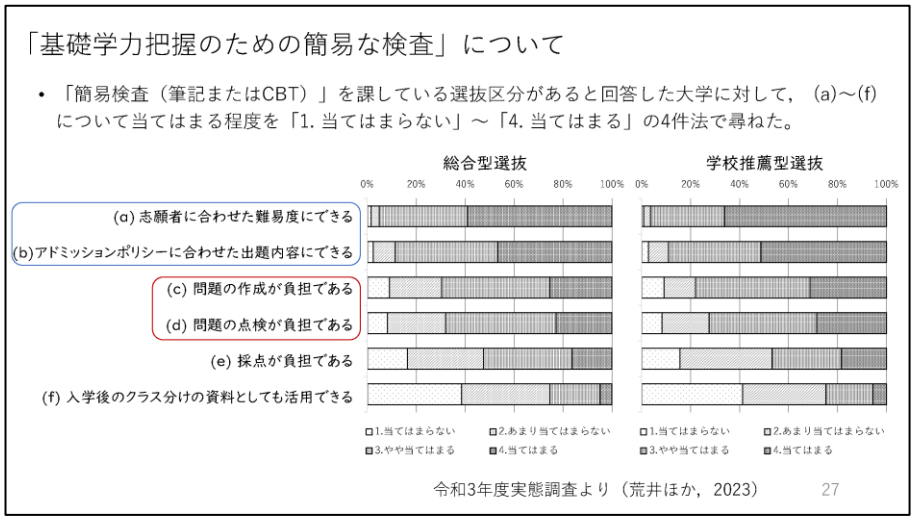


このスライドは，「適性」のグループ c の検査での教科・科目への言及の例です。「基礎」「基本」や範囲の限定については，「学力」のグループ a と同様の説明が多く見られます。問う力の説明に関しては，佐賀大学の例を挙げさせていただきましたが，化学に言及しつつも「知識のみならず論理プロセスも重視した化学や科学的思考力に対する適性を評価」といった語を使って説明しているという記述が見られます。



令和 2 年度入学者選抜，及び令和 3 年度入学者選抜の結果を見ると，総合型選抜ではプレゼンテーション，小論文，口頭試問が比較的多用される傾向があり，学校推薦型選抜では小論文や口頭試問が多用される傾向があることが分かります。

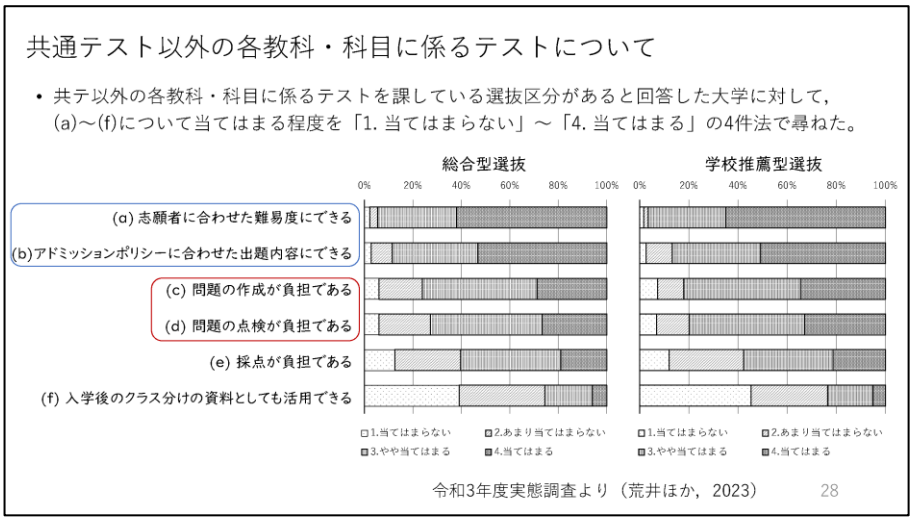
基礎学力把握のための簡易な検査については，名称に「学力」を含む検査では，特定の教科・科目に基盤を置いて基礎学力を評価しようとする大学が多い傾向があります。名称に「学力」を含まない検査についても，総合型選抜よりも学校推薦型選抜において教科・科目に基盤が置かれる傾向が示唆されます。



ここで，私たちが実施した令和 3 年度入学者選抜に関する実態調査に関して，基礎学力把握のための簡易な検査に関する大学の捉え方に関する回答の集計結果をご紹介します。

このグラフは，「基礎学力把握のための簡易な検査（筆記または CBT)」を課している選抜区分があると回答した大学に対して，(a) から(f)の 6 項目に関して当てはまる程度を 4 段階で評価してもらった結果です。「志願者に合わせた難易度にできる」「アドミッション・ポリシーに合わせた出題内容にできる」ということに関しては，「当てはまる」や「やや当てはまる」を選択した大学が非常に多いです。一方，「問題の作成が負担であ

る」「問題の点検が負担である」といった項目についても，「やや当てはまる」と「当てはまる」を選択した大学を合わせると，総合型選抜でも学校推薦型選抜でも 70%程度になります。難易度や出題内容についてのメリットがある一方，実施する負担も大きいことが示唆されています。



この傾向は，「簡易な検査」に限って見られるものではありません。共通テスト以外の各教科・科目に係るテストに関しても，課している区分があるという大学に回答してもらった結果は，先ほどの「簡易な検査」に関する結果とほぼ同様の傾向でした。志願者に合わせた難易度やアドミッション・ポリシーに合わせた内容にできるといったメリットについて肯定的な一方で，問題の作成や点検にかかる負担感がかなり大きいことが示唆されます。

各教科・科目テストであれ，先ほどご覧いただいた簡易な検査であれ，問題の作成や点検に関する大学の負担感はかなり大きいということで，この点は安定した品質のテストや検査を持続的に実施していく際に考慮しなければならない点かと思われます。

参考文献

荒井清佳，伊藤圭，椎名久美子，桜井裕仁，大塚雄作，花井渉 (2023). 令和3年度の総合型選抜・学校推薦型選抜における知識・技能，思考力・判断力・表現力等の評価資料の利用実態．大学入試研究ジャーナル, 33, 226—232.

大学入試センター研究開発部 (2023). 令和3〜5年度理事長裁量経費研究報告書「令和3年度大学入学者選抜における選抜資料の利用状況に関する実態調査」（大学入試センター研究開発部（編））.

高大接続システム改革会議(2016). 高大接続システム改革会議「最終報告」（平成28年3月31日）．文部科学省. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf

文部科学省(2017). 平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告について（通知）（平成29年7月13日）. https://www.mext.go.jp/content/20200416-mxt_daigakuc02-000006597_9.pdf

文部科学省(2019).令和2年度大学入学者選抜実施要項（令和元年6月4日）. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2019/06/05/1282953_001_1_1.pdf

文部科学省(2020). 令和3年度大学入学者選抜実施要項（令和2年6月19日）. https://www.mext.go.jp/content/20200619-mxt_daigakuc02-000010813_4.pdf

文部科学省(2021). 大学入学者選抜における英語4技能評価及び記述式問題の実態調査の結果（令和3年4月20日大学入試のあり方に関する検討会議（第25回）配布資料）https://www.mext.go.jp/content/20210419-mxt_daigakuc02-000014254_13_1.pdf

文部科学省(2023). 令和4年度国公私立大学入学者選抜実施状況（令和5年1月25日）. https://www.mext.go.jp/content/20230123-mxt_daigakuc02-000027141_03.pdf

佐賀大学(2022). 2023年度（令和5年度）佐賀大学入学者選抜要項. https://www.sao.saga-u.ac.jp/PDF/R5/sennbatuyoukou.pdf

椎名久美子・荒井清佳・伊藤圭・桜井裕仁・大塚雄作 (2023). 大学入学者選抜における基礎学力把握のための検査に関する特徴分類の試み. 日本テスト学会誌, 19 (1), 印刷中.
29

次のスライドは，お示ししたスライドで使った参考文献になります。
私からは以上になります。

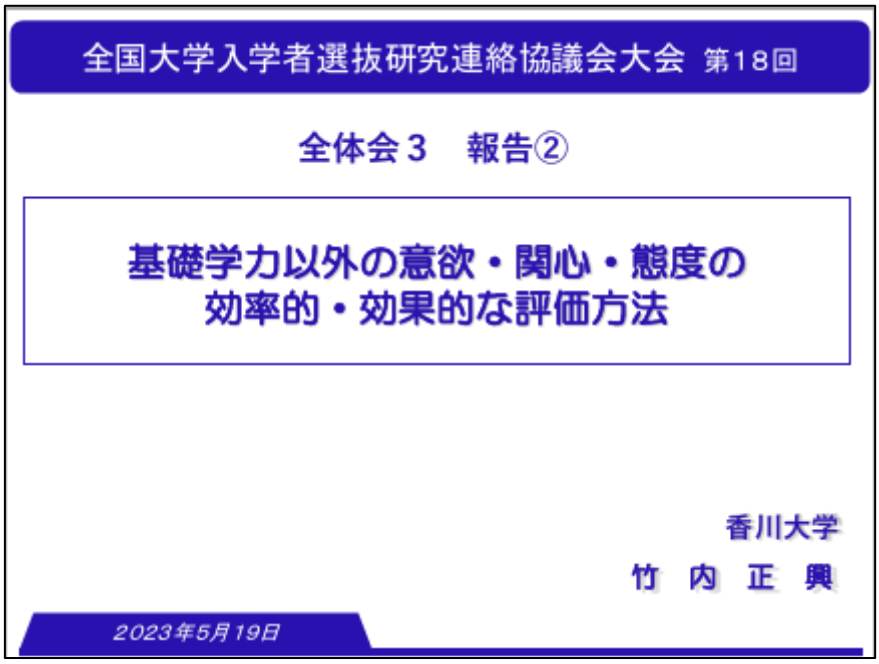
【川嶋・司会】　椎名先生，ご報告ありがとうございました。椎名先生のご報告は基礎学力をどのように把握しているかというご報告でしたが，続いての報告は，基礎学力以外のいわゆる非認知的な要素をどのように評価しているのか，あるいは，それを効率的・効果的にどのように評価しているのかという点について，竹内正興先生からご報告をお願いします。■

全体会３ ◉ 報告２

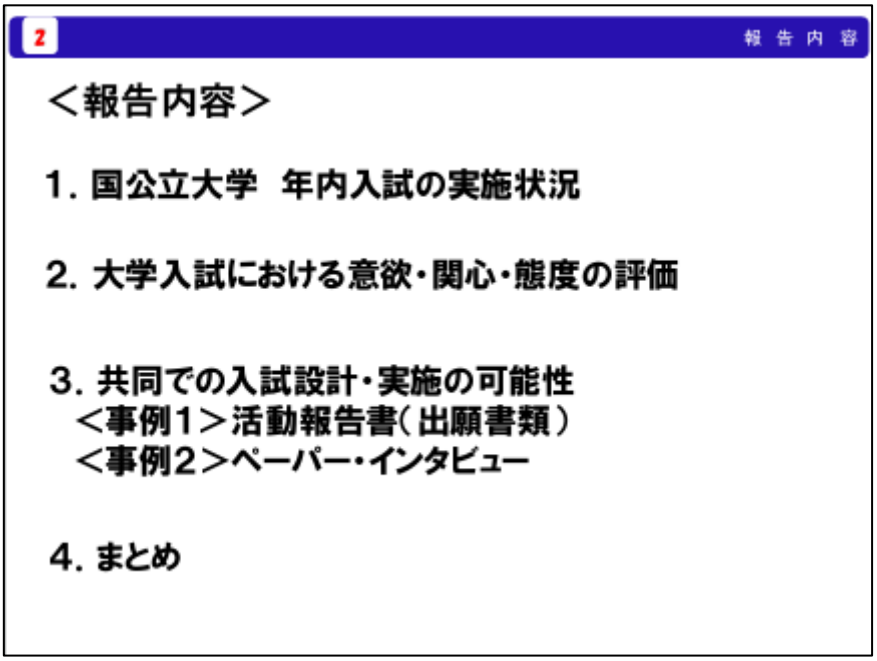
基礎学力以外の意欲・関心・態度の効率的・効果的な評価方法

■竹内　正興（香川大学アドミッションセンター教授）

香川大学アドミッションセンターの竹内と申します。今日はこのような貴重なお時間を頂きましてありがとうございます。

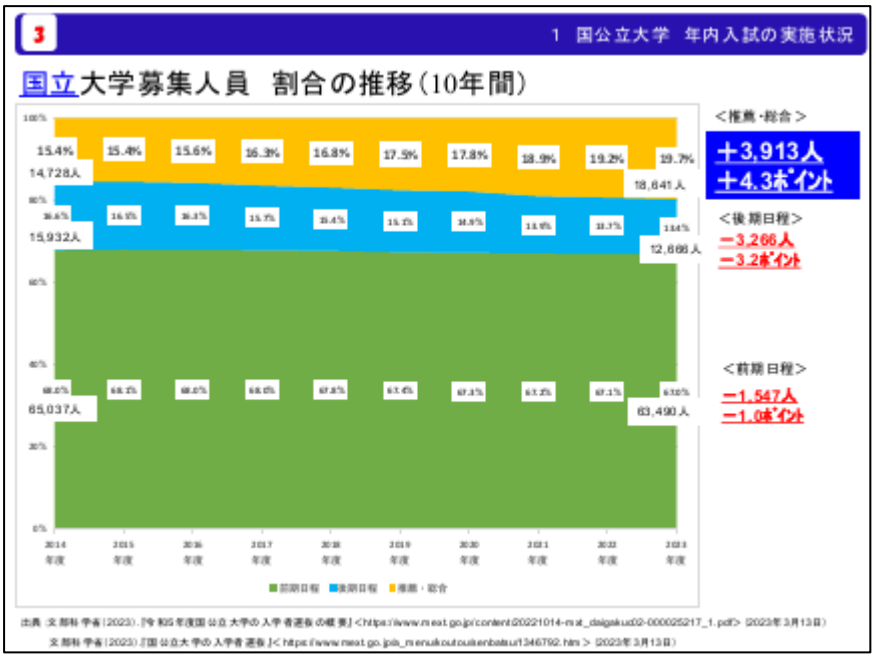


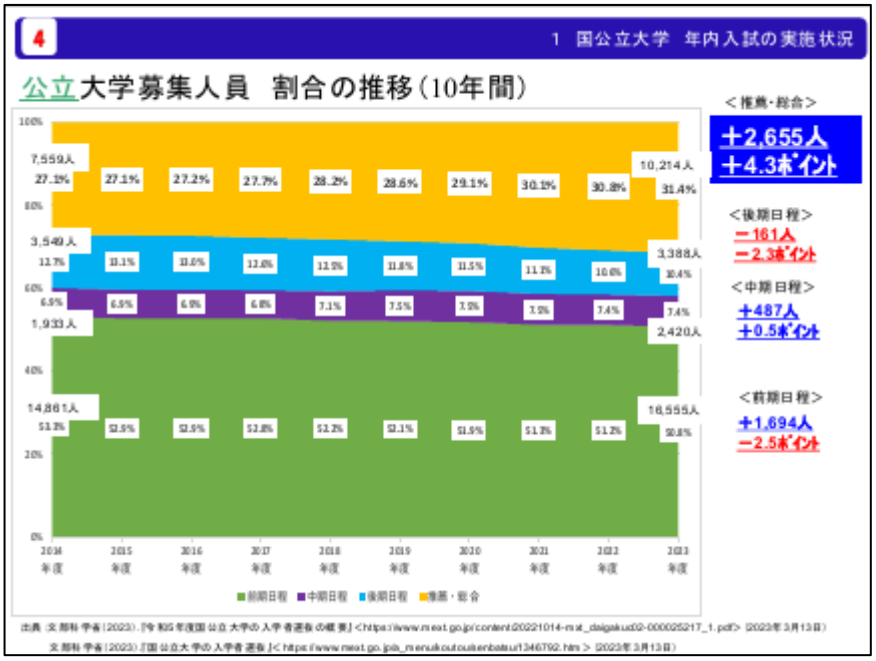
それでは，私からは，「基礎学力以外の意欲・関心・態度の効率的・効果的な評価方法」というタイトルでご報告させていただきます。



私からの報告内容はこちらの３点が中心となります。１点目は，公立大学を含めた国立大学の立場から，年内入試の実施状況についてご報告させていただきます。２点目に，大学入試における意欲・関心・態度の評価について説明させていただきます。そして，３点目では，大学間共同での入試設計・実施の可能性ということで，本日，私が最も強調させていただきたい点です。

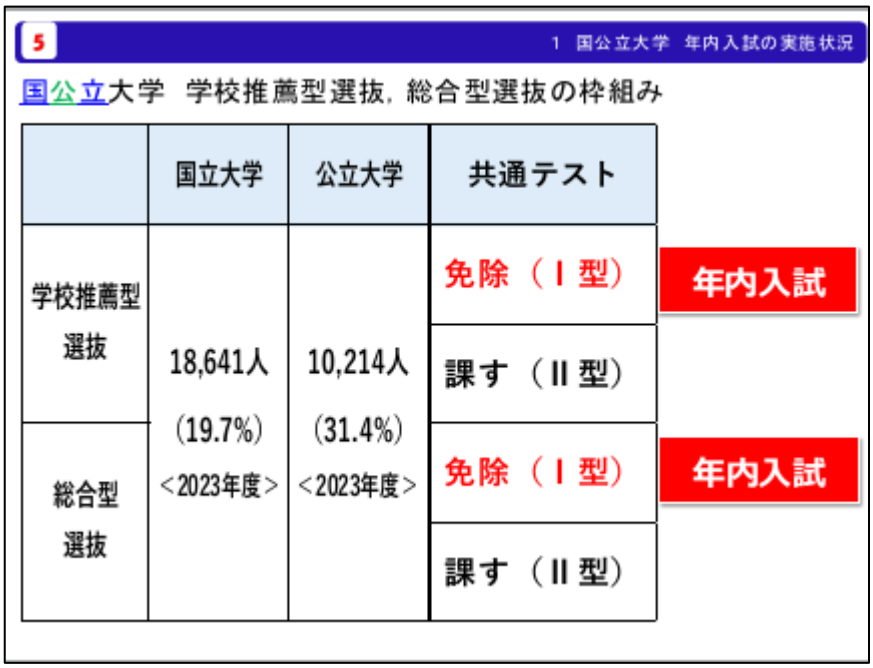
全体会１及び２でも、「共同」をキーワードとして挙げられている先生がいらっしゃいましたが，私からも「共同」の重要性や可能性について報告させていただき，ご意見を頂ければと思います。その中で，活動報告書，ペーパー・インタビューの ２ つの事例についてご報告させていただきます。ペーパー・インタビューについては，私が所属している大学ではありませんので，これまで公表されている論文等から引用させていただく形でのご紹介となります。現状と先行研究の整理，実施事例の紹介を中心とし，その上で私自身の問題意識と今後考えられることについてご報告させていただくという流れで説明させていただきます。



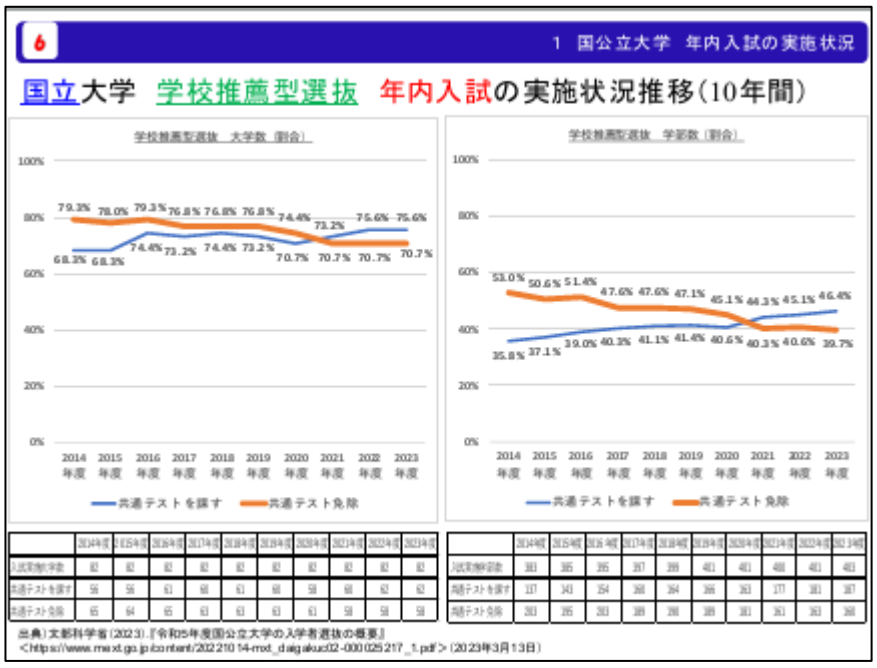


まず，1 点目の国公立大学の実施状況を整理したものです。これはよくご覧になられる数値かと思います。2014 年度から 23 年度までの 10 年間の入試区分ごとの募集人員の割合の推移ということで，本日のテーマである学校推薦型，それから総合型が一番上のオレンジ色になります。

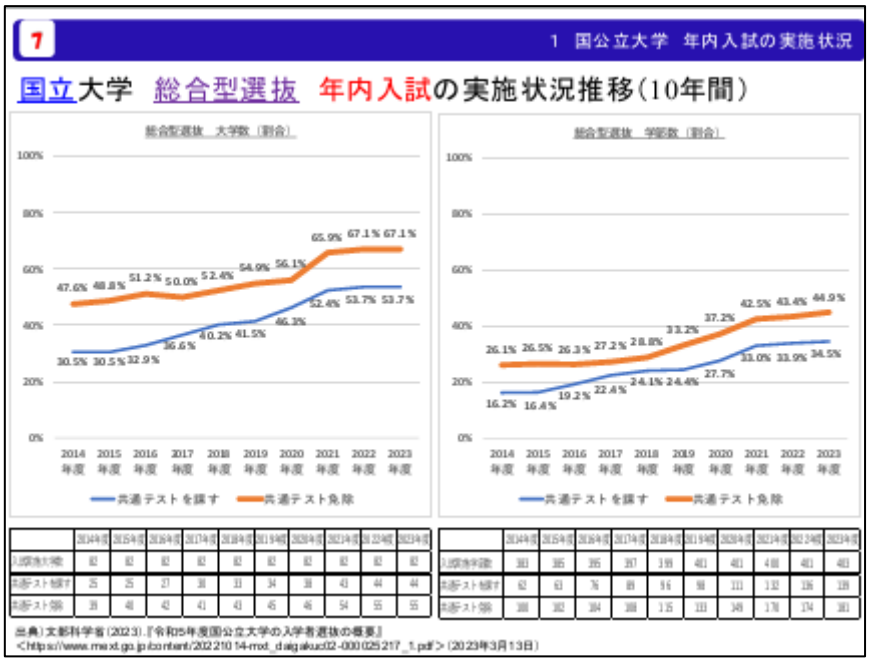
総合型，それから学校推薦型についてはこの 10 年間で募集人員が約 3,900 人，4.3 ポイント上昇しています。公立大学についても同様です。一番上のオレンジ色を見ていただきますと，推薦・総合が 2,600 人ほど，4.3 ポイント増えています。先ほど川嶋先生からもありましたとおり，国立大学で推薦・総合型の割合が約 2 割，公立大学で約 3 割ということなのですが，これをもう少し細かく見ていきたいと思います。



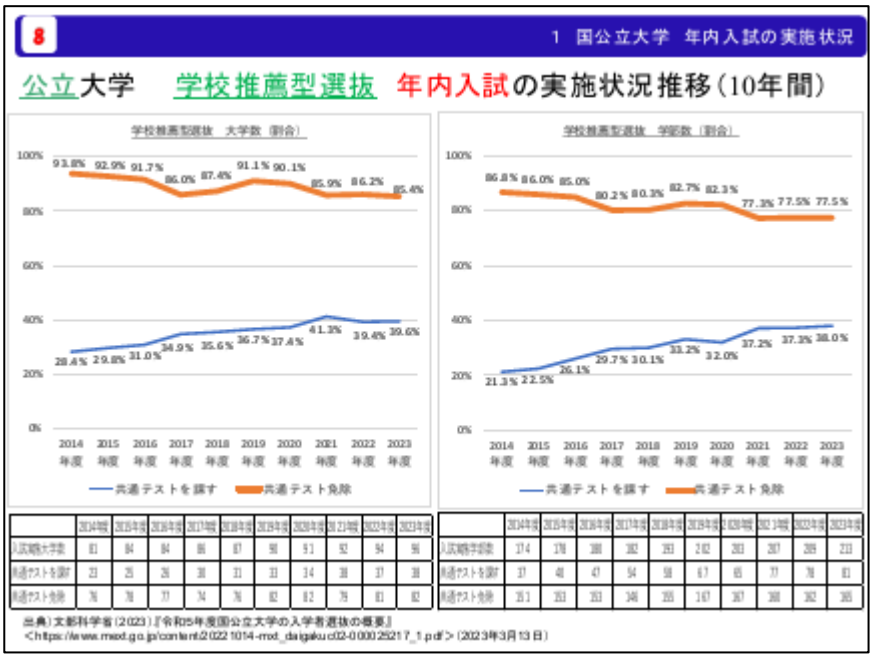
推薦・総合型には，大学入学共通テストを課すタイプⅡ型と免除するタイプⅠ型がありますが，Ⅰ型が年内入試であるため，Ⅰ型に着目し，10 年間の年内入試の実施状況を見てまいりたいと思います。



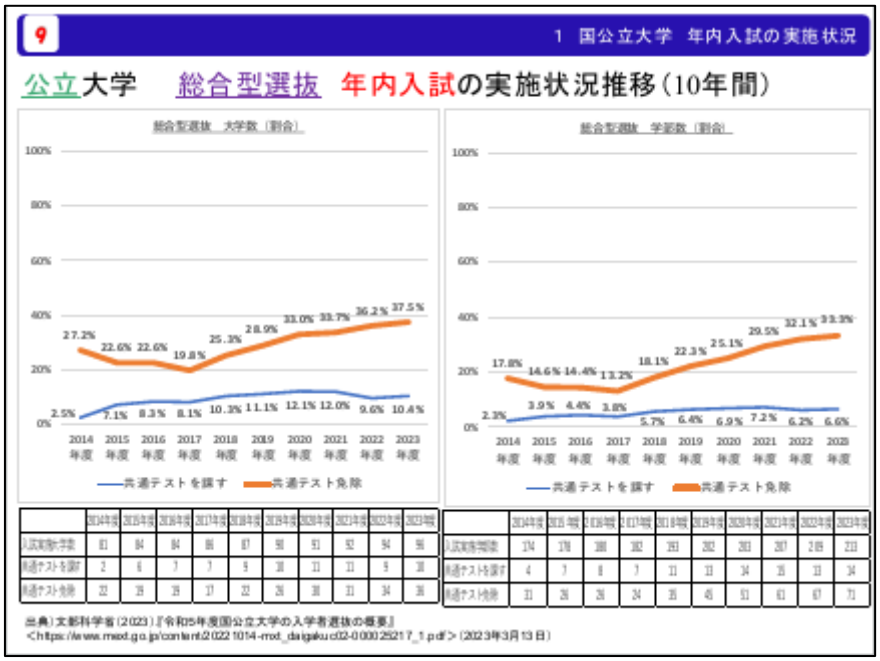
まず国立大学の学校推薦型選抜なのですが，左が大学数，右が学部数です。オレンジ色の太い折れ線グラフが共通テスト免除の年内入試型ですが，徐々に減ってきており，2021 年度入試で共通テストを課すⅡ型が少し多くなっていることが分かります。



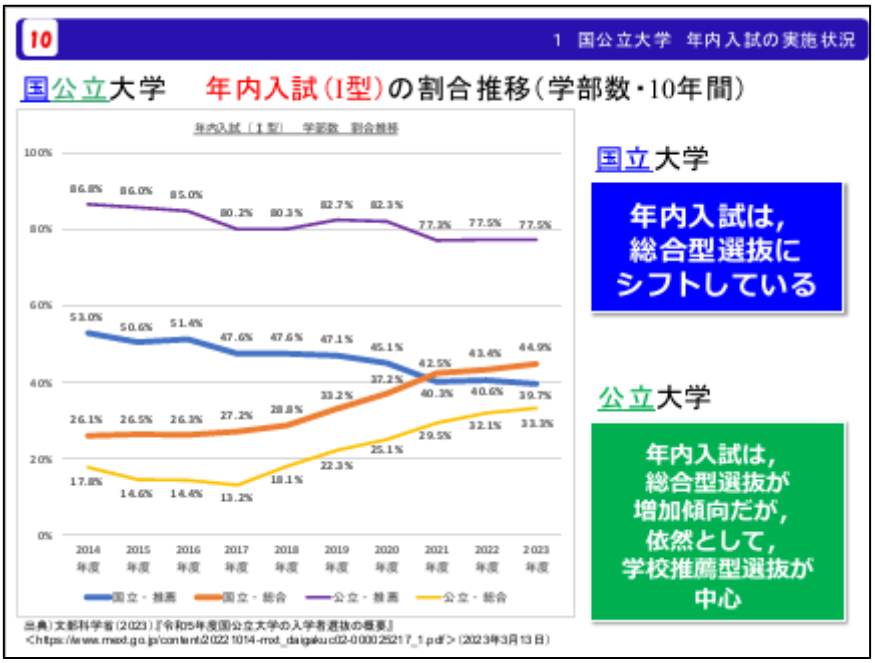
国立大学の総合型選抜については，両方が増えていますが，共通テスト免除のⅠ型が大学数・学部数ともに割合として高いです。



公立大学の学校推薦型選抜について，この 10 年間で大学数・学部数ともに少しずつ減ってきていますが，依然として共通テスト免除のⅠ型が圧倒的に多く，割合としても高いです。

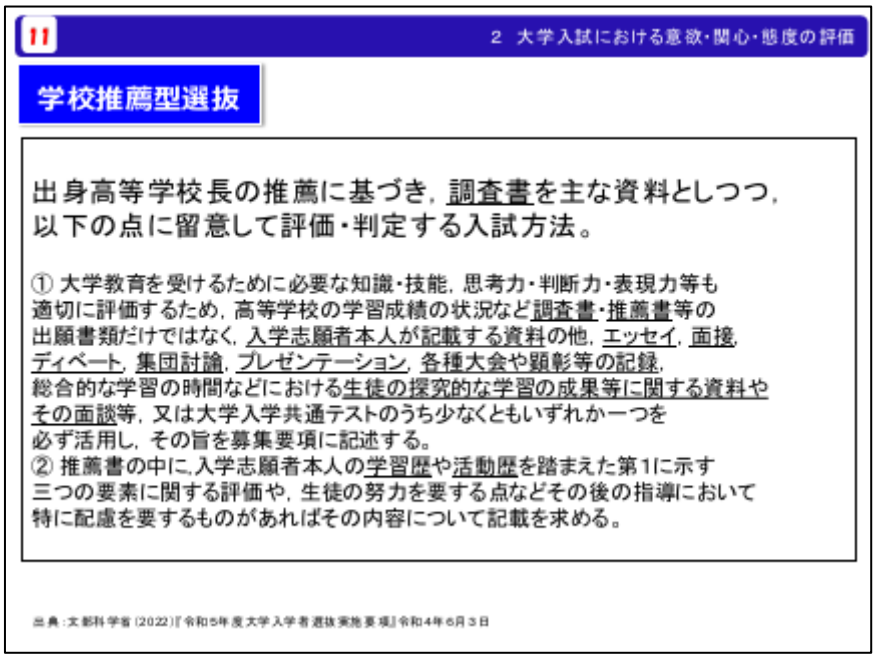


また，公立大学の総合型選抜については免除型が徐々に増えています。



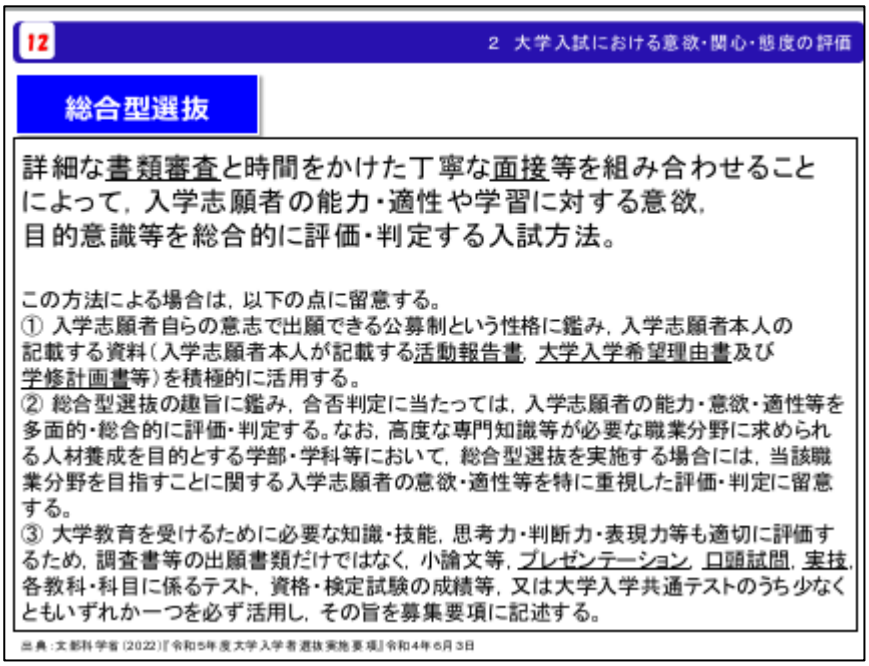
これらを年内入試に絞って整理します。国立大学については，学部数の割合から見ると，年内入試は総合型選抜に徐々にシフトしてきているのではないかと言えます。

一方，公立大学については，年内入試は総合型選抜が増加傾向ですが，依然として学校推薦型選抜が中心であることが分かります。



続いて，大学入試における意欲・関心・態度の評価について整理していきたいと思います。まず，学校推薦型選抜の定義についてです。これは文部科学省から出されている令和 5 年度大学入学者選抜実施要項です。「出身高等学校長の推薦に基づき，調査書を主な資料としつつ，以下の点に留意して評価・判定する入試方法」とあります。

下線を引いてある箇所がいわゆる基礎学力以外の評価方法に当たるものと考えられます。調査書・推薦書や入学志願者本人が記載する資料，エッセイ，面接，ディベート，集団討論，プレゼンテーション，各種大会の記録等になります。



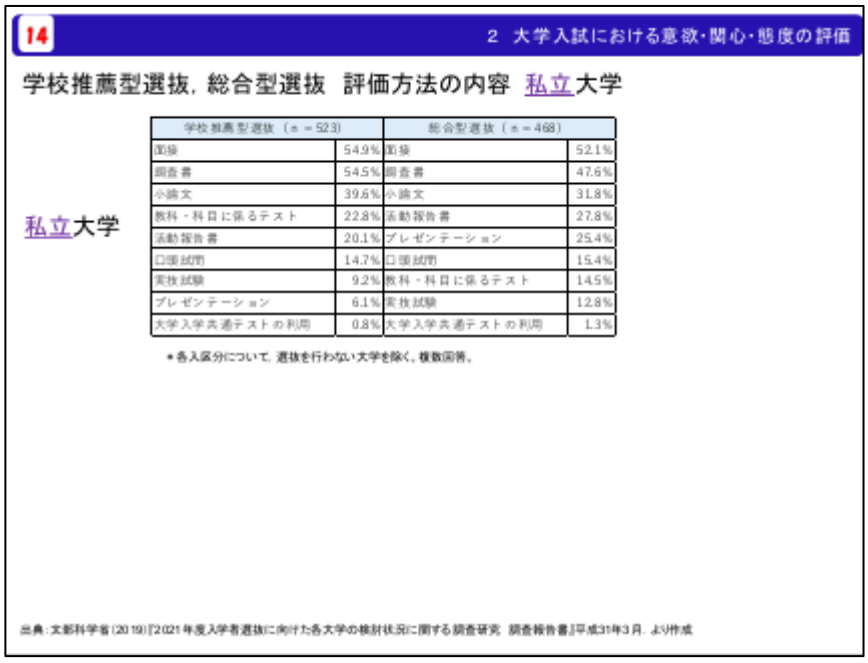
総合型選抜の定義は「詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって，入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲，目的意識等を総合的に評価・

判定する入試方法」とあります。

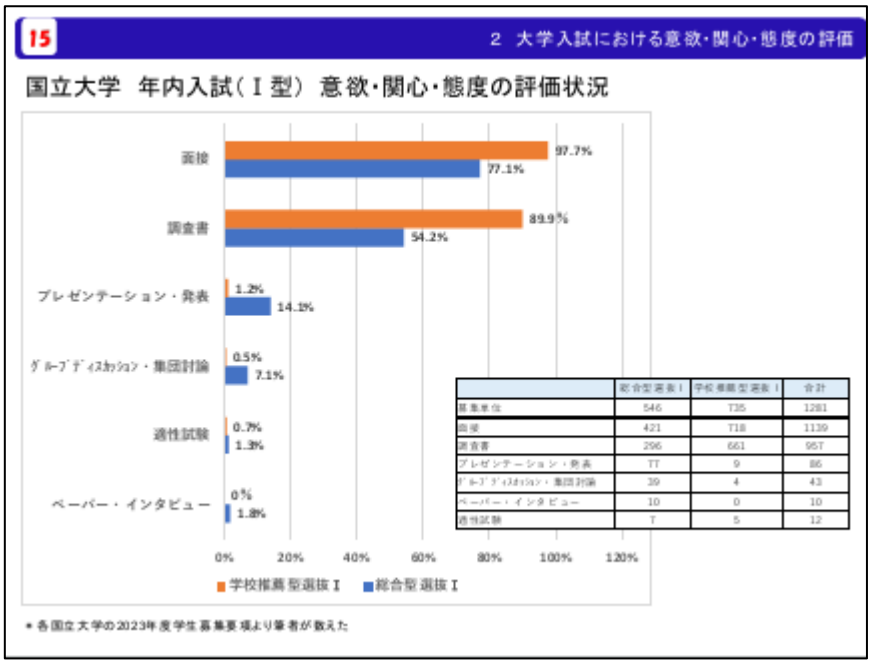
ここで，改めて注目したのが，「詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接を組み合わせる」ということです。従来から言われているとおり，非常に手間がかかる選抜であり，募集人員の規模が小さければ求める人材像に沿って丁寧な選抜ができますが，規模が拡大した場合，様々な課題が生じると言えるかと思います。これについてはまた後ほど報告させていただきます。



次に，先ほどの椎名先生と重なる部分があって恐縮ですが，国公私立大学の総合型・学校推薦型選抜の評価方法について，文部科学省の 2021 年の報告書より抜粋したものになります。総合型・学校推薦型ともに，上位の 2 項目は調査書と面接です。3 番目は，推薦は小論文，総合型は口頭試問や活動報告書となっています。



私立大学も同様です。私立大学の場合は選抜区分にかかわらず小論文が 3 番目に多い結果となっています。



先ほどの統計資料は，年内入試Ⅰ型と大学入学共通テストを課すⅡ型の合算ですので，国立大学について，年内入試に絞ったものが次の資料になります。

私自身で 2023 年度入試の募集要項から実施状況をカウントしたものですので，誤差がありましたらご容赦いただければと思います。オレンジ色が学校推薦型選抜Ⅰ，ブルーが総合型選抜Ⅰですが，学校推薦型選抜については圧倒的に面接と調査書が多いです。

調査書については，評定平均値を利用する場合を数えています。例えば，これに履修制限等を加えれば 90％台後半になりますので，補足いたします。いずれにせよ，学校推薦型選抜については面接と調査書が多いです。総合型選抜については，面接と調査書に加え，プレゼンテーションや集団討論・グループディスカッション，ペーパー・インタビューなどがあり，各大学が求める人材像に応じて様々な評価方法を取り入れていることがうかがえます。

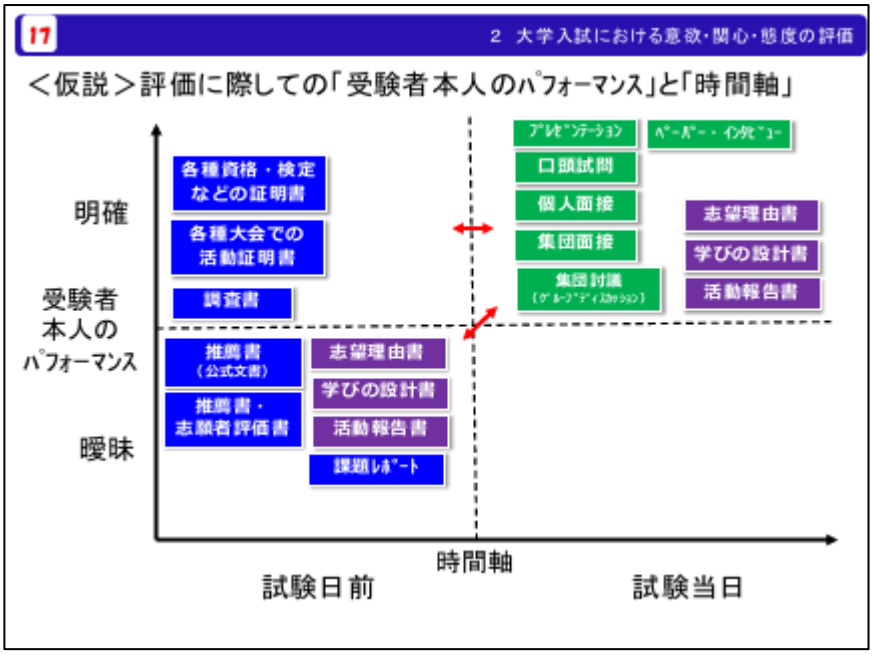


	学校推薦型選抜	総合型選抜
推薦書	学校長による推薦	受験生の自己推薦
定員	5割まで	制限を設けない
出願資格	主に卒業見込者	主に制限を設けない
出願時期	11月以降	9月以降
合格発表時期	12月以降	11月以降
主な選抜方法	出願書類，面接，小論文，学力検査などを含めて多様	
共通テスト	大学・選抜単位によって異なる	
入学義務	あり	主にあり

出典：林篤裕「日本の入試制度概論」大阪大学高等教育・入試研究開発センター編『未来志向の大学入試デザイン論』7章，109-126．出願資格については筆者が加筆した。

こういった中で外形的な入試区分別の特徴を見ていきますと定員の問題があります。学校推薦型選抜については 5 割までということで規定がありますが，総合型選抜については制限を設けないことになっています。

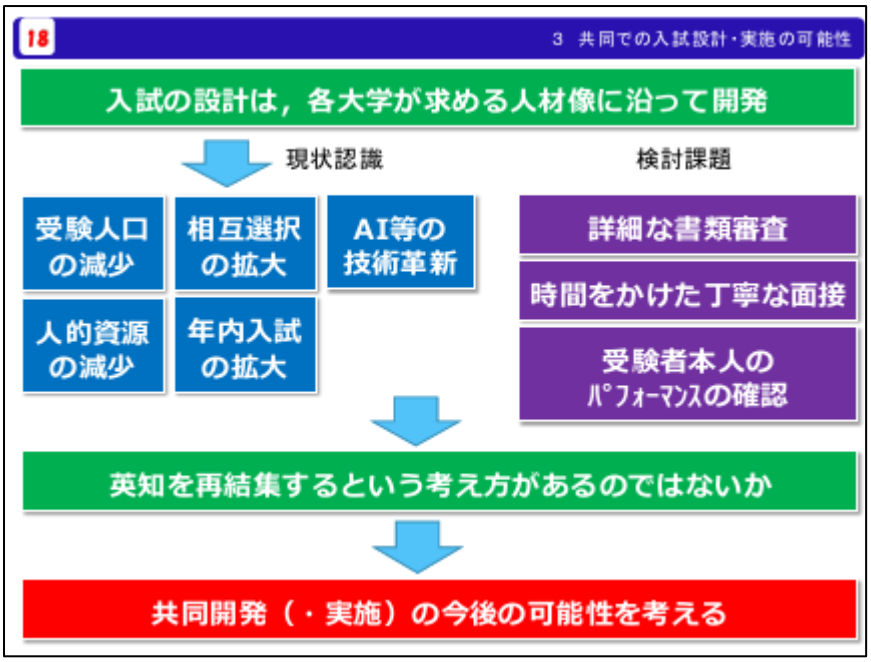
そうしますと，詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接を組み合わせることについて，規模が拡大した時にどのように質を保証するのかという問題があるのではないかと改めて認識しています。



加えて，私の仮説として，評価に際しての受験者本人のパフォーマンスと選抜の時間軸を常に気にしています。横軸の「選抜の時間軸」は，右側が試験当日に行うものを指し，試験当日に行うものであれば，本人のパフォーマンスであることが明確ですので，

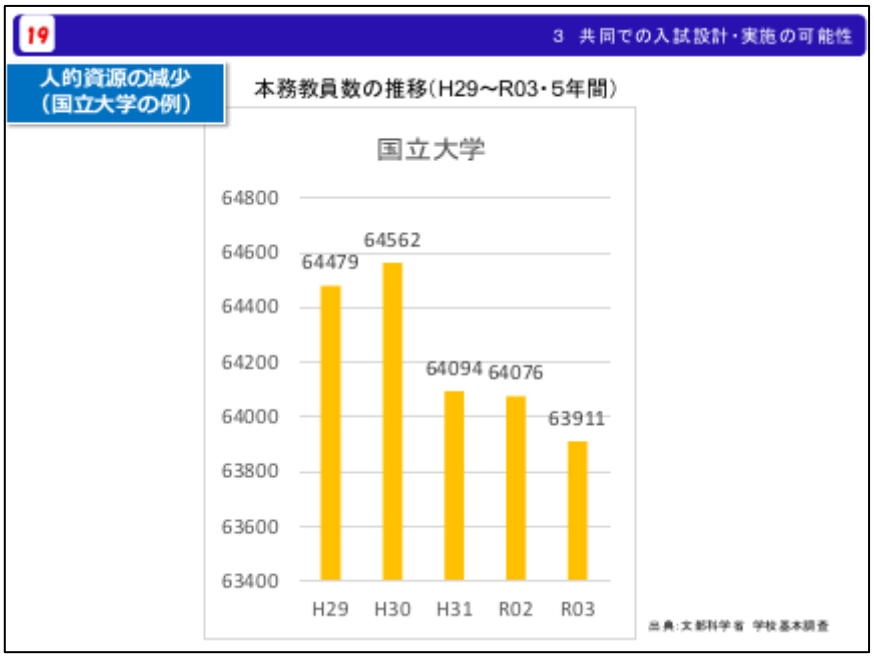
第 1 象限に入れています。

一方で，「試験日前」と書いてありますのは，出願書類の中で一定の評価をするものを指します。もちろん受験者本人のパフォーマンスであるのですが，試験当日に確認するものと比較すると，見えにくい部分が若干あるのではないかと認識しています。ここ最近は生成系 AI の影響もあり，この部分の問題認識を深めていくことが重要ではないかと考えています。



こういった中で，ここからは大学間共同の可能性について報告いたします。入試の設計は，各大学が求める人材像に沿って開発するものであり，各大学が行うものです。

ただ，受験人口の減少や相互選択の拡大，AI の影響，大学教員数の減少，年内入試の拡大といった現状認識があります。さらに規模拡大の中で，丁寧な選抜と本人のパフォーマンスの確認を実現しなければならないという課題を踏まえると，大学間で英知を再結集していくという考え方が必要ではないかと認識しています。大学間での共同開発・実施の可能性を考えるということを強調したいところです。



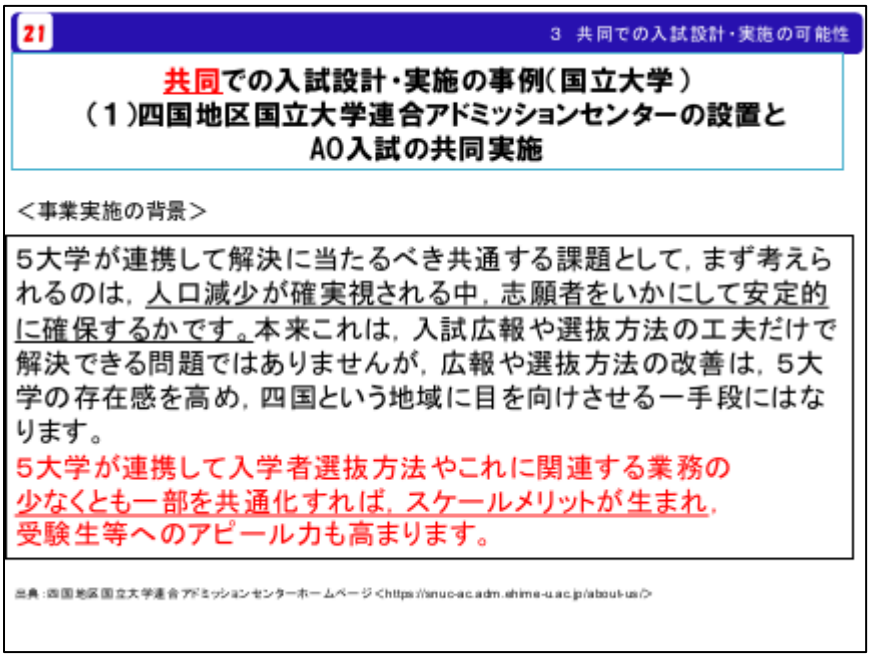
こちらは国立大学の教員数の推移を示すものです。参考データとしましてご覧いただければと思います。



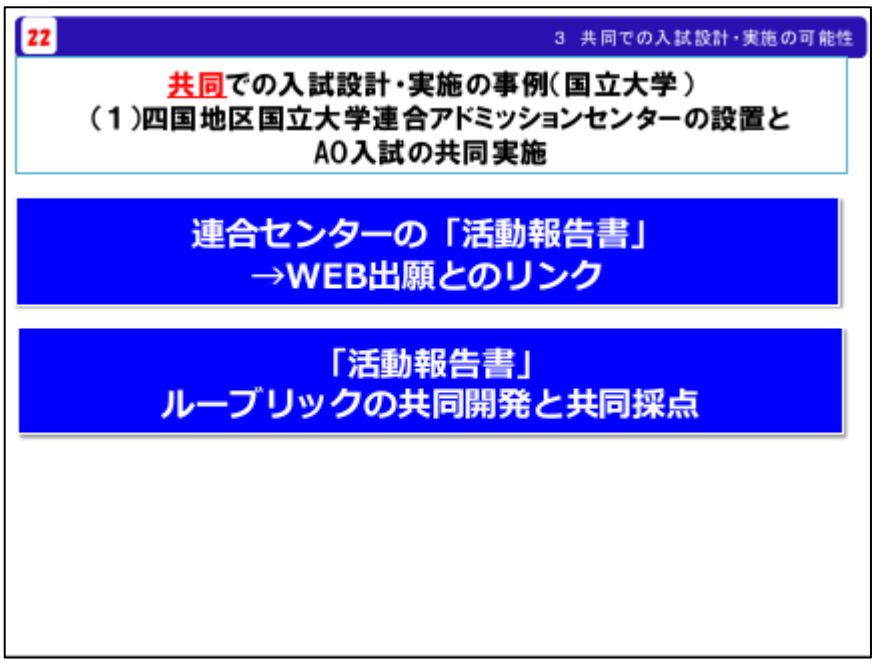
ここからは 2 つの共同という事例についてご紹介させていただきます。１つ目は，四国地区の５つの国立大学が共同で新たな AO 入試を行うという取り組みです。これは 2012 年度からスタートして，今，11 年目です。国立 5 大学とは愛媛大学を基幹大学として高知大学，香川大学，鳴門教育大学，徳島大学を指します。

本入試では，入試のみを担当する専任の教員が志願者を評価しています。そして，志願者の日常的な学習活動を重視する総合評価，出願書類・記載事項の事実確認については，複数の大学のアドミッションセンターの教員が集まって企画しており，画期的な事

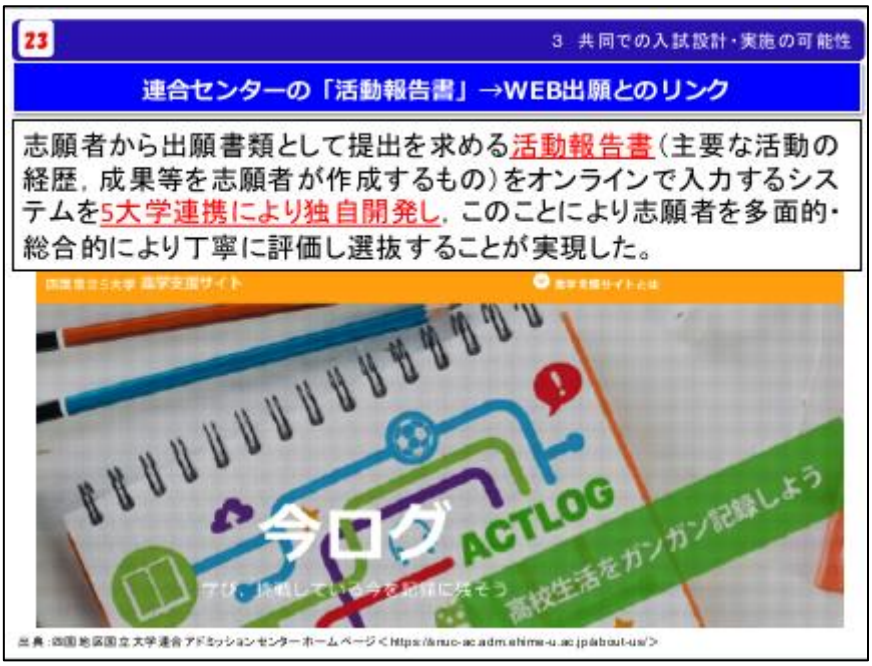
例の一つではないかと思います。



これはホームページから抜粋させていただいたものです。人口減少が確実視される中，志願者をいかにして確保するかという問題意識のもと，大学間共同によってスケールメリットが生まれ，受験生へのアピールも高まるとうたわれています。

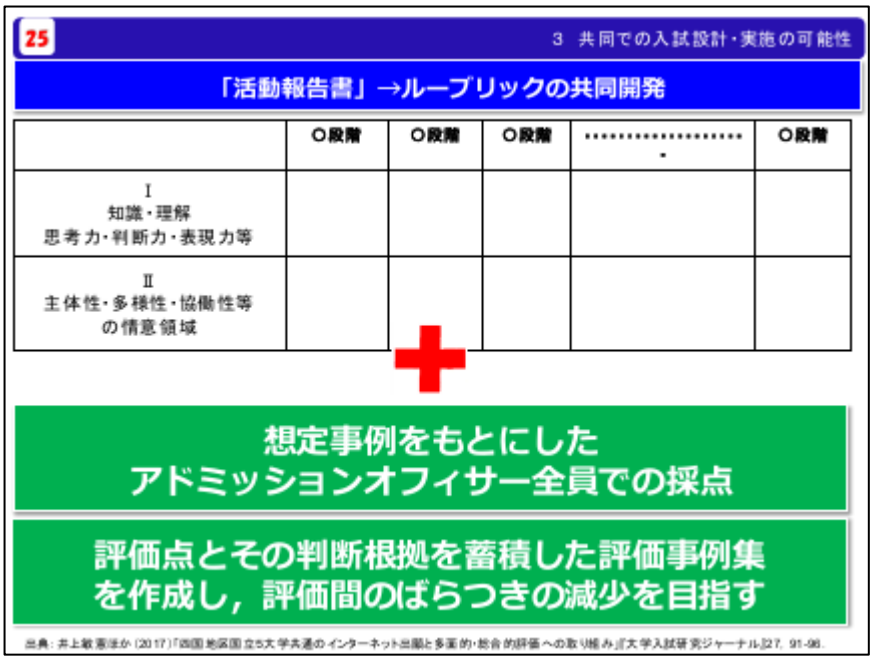


具体的な取り組みとしましては，四国の 5 大学の連合センターにおきまして出願書類の活動報告書を開発し，それを利用してウェブ出願とリンクさせています。そして，その活動報告書についてルーブリックの共同開発と共同採点という点が大きな特徴ではないかと考えます。

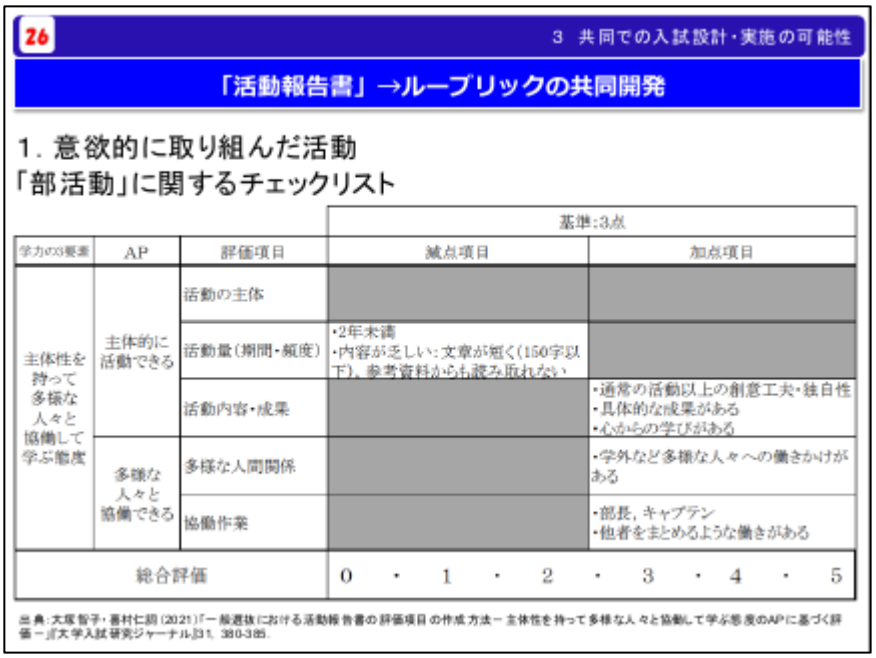


活動報告書とウェブ出願とのリンクについて，「今ログ」という名称で行われています。志願者はオンラインで入力した活動報告書を出願に使うことができます。開発は共同で行いますが，どの項目を採用するかは各大学の判断に委ねられています。志願者は，入力したものを使って 5 大学に出願する場合，記録した内容をウェブ出願時に呼び出すことができ，連携の特徴と言えます。





そして，活動報告書のルーブリックの共同開発についても，例えば，こちらは愛媛大学の井上先生などが発表されているものですが，知識・理解や主体性・多様性・協働性等の領域について数段階でルーブリックを作ります。その上で，想定事例を基にしたアドミッションオフィサー全員での採点を行います。そして，事例を積み重ねてばらつきをなくしていくということです。



これは高知大学の先生方が発表されたものを引用したものです。意欲的に取り組んだ活動の部活動に関するチェックリストですが，5 点満点で基準点は 3 点です。例えば上から 2 つ目の「主体的に活動できる」の「活動量」の減点項目の記述や，一番下の「協働作業」加点項目の記述は誰が見ても評価がすぐできるかと推測します。

その一方で「多様な人間関係」の加点項目にある，「学外などさまざまな人々への働きかけがある」，「心からの学びがある」といった記述は，複数の大学のアドミッションオフィサーが話し合い，事例を積み重ねていくというところではないかと推測します。

このような取り組みが続けて継続的に行われており，今も四国の 5 大学連合は 2 週間に一度ミーティングを行い，様々な意見交換を行いながら次の展開を考えています。



２つ目は，千葉大学，新潟大学，金沢大学，岡山大学，長崎大学，熊本大学の国立六大学が連携したコンソーシアムの協議会の中の入試専門部会での取り組みについてご紹介します。こちらは 2013 年から発足されています。



こちらの六大学の入試専門部会ではペーパー・インタビューを開発し，文部科学省が公表した令和 3 年度の大学入学者選抜における好事例集に採択されています。採択された 18 件のうちの 1 つです。テーマ別に見ますと，「高校との連携をはじめとする高大接続改革の推進」というテーマで採択された 6 件のうちの 1 つとして評価されたものになります。

こちらのペーパー・インタビューについて，「口頭のやりとりで得たい情報を紙面に書かせ，従来の面接に代わり」とあります。面接に代わるものということですね。複数の大学の入試の担当の先生方が集まって，意欲・関心・態度の評価方法の仕組みを共同開発されたということで非常に意味があるものではないかと認識しています。

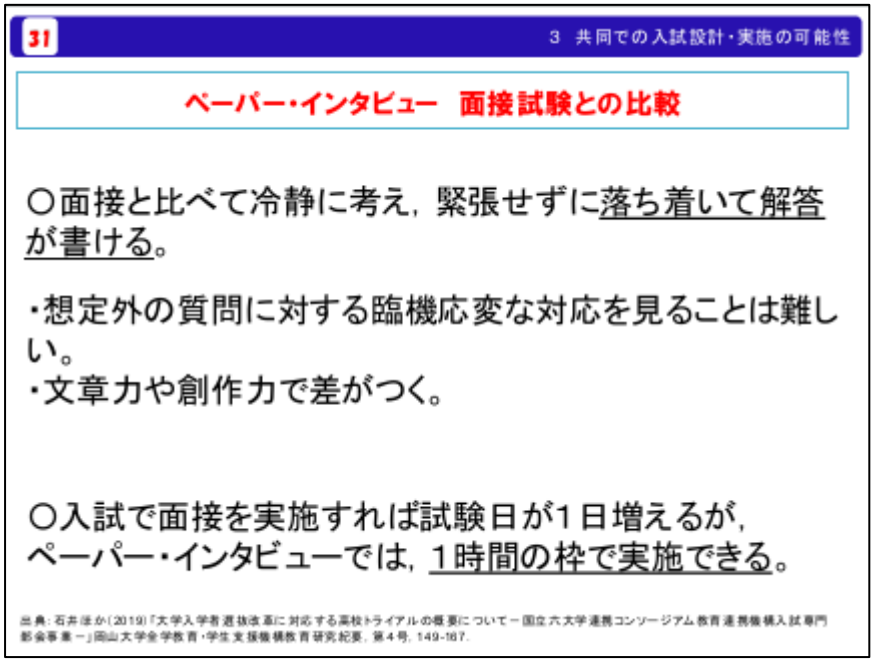


こちらは岡山大学で発表された論文から引用したものです。六大学連携専門部会の概要としては，2016 年にまず情報収集からスタートし，高校でのトライアル実施・検証，そして，結果の利用を積み重ねた上で導入に至ったということで，少なくとも 6 年間準備された取り組みです。

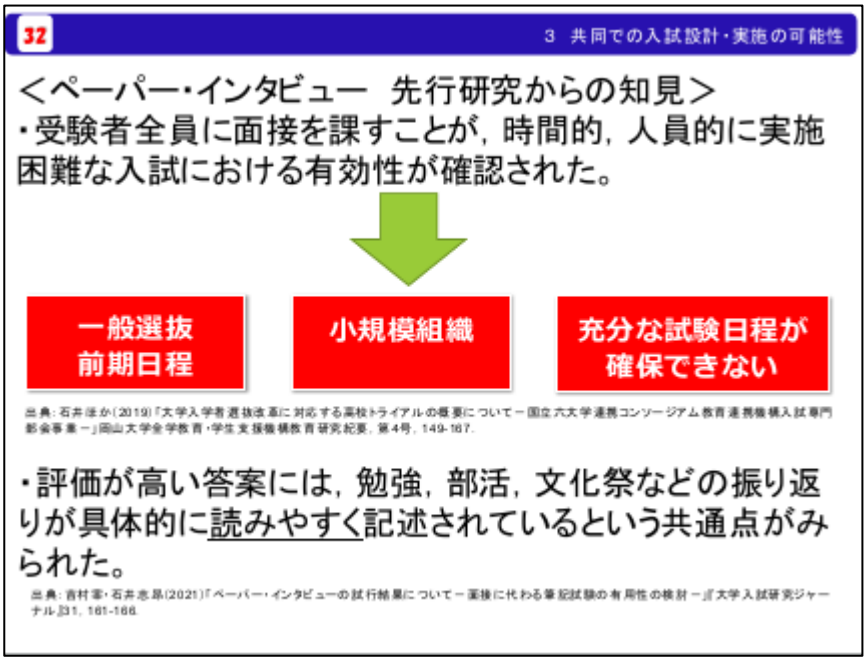


長崎大学の吉村先生の論文から引用したものですが，ペーパー・インタビューとは，可能な限り紙面上で構造化面接試験を再現しようとするものであるということです。

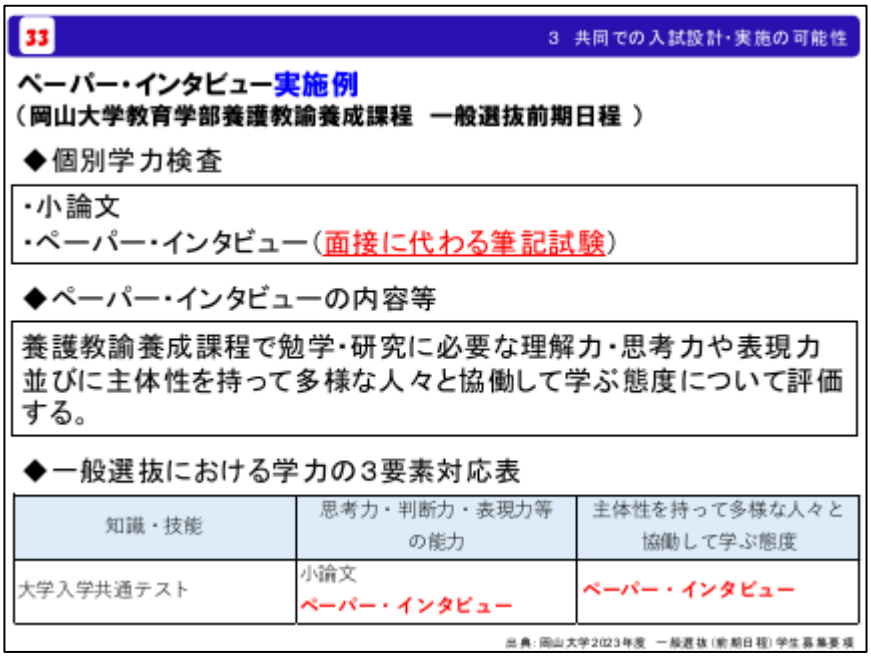
また，他の岡山大学の先生方からの引用を見ると「口頭でのやりとりで得たい情報を紙面に書かせるもの」，「一般選抜前期日程では，受験者が多数で，時間的，人員的に面接の実施が困難である。その中で，多面的・総合的評価を行うための方法である」と述べられています。ペーパー・インタビューは受験者数が多い一般選抜を中心に導入されていますが，総合型選抜が今後拡大していく中で，適用される入試区分が広がっていく可能性があることを示唆しているのではないかと考えます。



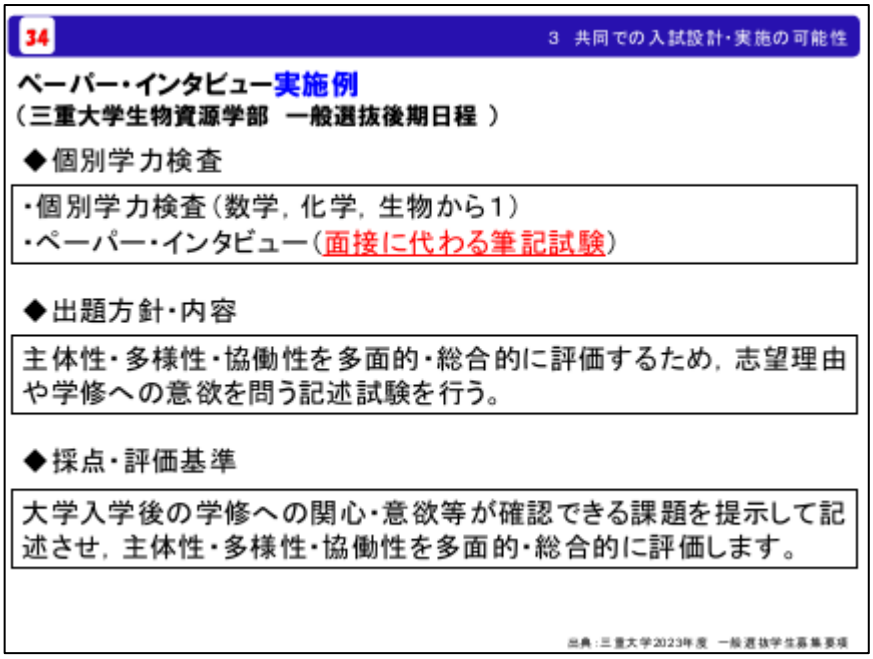
ペーパー・インタビューは，「面接と比べて冷静に考え，落ち着いて回答ができる」，「面接は１日かかるのに比べ，１時間の枠で実施できる」といったメリットがあると考えられています。一方で，「100％は面接と同様にはできないため，想定外の質問に対する臨機応変的な対応を見ることがなかなか難しい」，「文章力で差がつく」という指摘もあります。

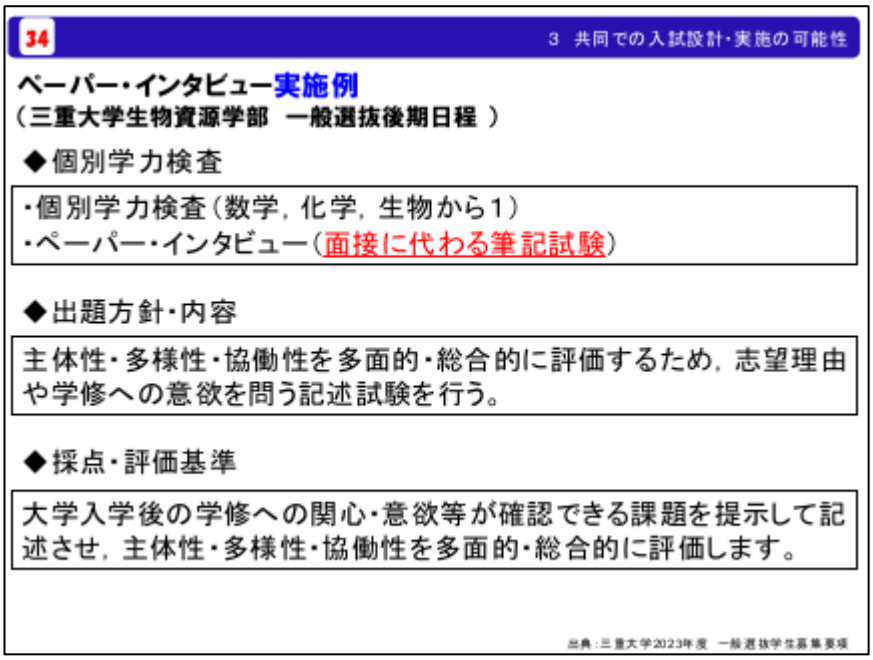


ペーパー・インタビューの先行研究からの知見としまして「受験者全員に面接を課すことが，時間的，人員的に実施困難な入試における有効性が確認された」ということで，例えば，受験者数が多い一般選抜前期日程，また，実施する側の規模が小さい場合や，十分な試験日程の確保が難しいケース等において，有効性があると考えています。



次に実際にペーパー・インタビューの実施例を幾つか見てまいりたいと思います。まず，六大学の中の一つ，岡山大学の教育学部です。一般選抜の前期日程で実施されています。募集要項によると，ペーパー・インタビューは面接に代わる筆記試験とされています。学力の 3 要素の対応表では「思考力・判断力・表現力等の能力」と「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の 2 つに記載があります。





こちらは三重大学の生物資源学部の一般選抜後期日程です。こちらもペーパー・インタビューは面接に代わる筆記試験であり，学力の 3 要素の対応表では，「表現力」と「主体性を持ち，多様な人々と協働しつつ学習する態度」という 2 つに丸が付いています。



36　3 共同での入試設計・実施の可能性

ペーパー・インタビュー実施（予告）例 ＊2025年度入試～
（福島大学食農学類 一般選抜後期日程 ）

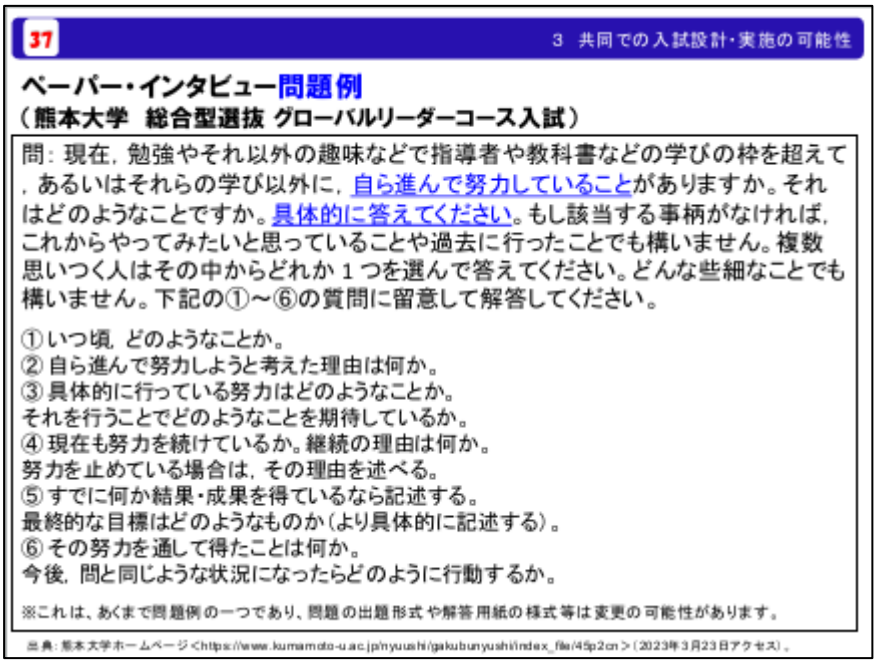
・ 個別学力検査等の学力検査（数学・英語から選択）と面接を廃止し，ペーパーインタビュー（注）を導入します。

	学力検査						ペーパーインタビュー	小計	総点
	国語	地歴・公民	数学	理科	外国語	情報			
共通テスト	200	100	200	200	200	100		1,000	1,100
個別学力検査等							100	100	

（注）ペーパーインタビューは，本学類が求める能力を多面的・総合的に評価するために，紙面に記載された質問を読んで回答を記述する筆記型の試験です。詳細については，令和5年度中に公表する予定です。

出典：福島大学（2023）『令和7年度入学者選抜における学力検査実施教科・科目等に関する予告および共生システム理工学類・食農学類の選抜方法の見直しについて』令和5年3月28日 <https://www.fukushima-u.ac.jp/news/Files/20230327c8be...> （2023年4月14日アクセス）。

こちらは，今後実施予定の福島大学食農学類の一般選抜後期日程です。これは予告のものなのですが，面接を廃止し，ペーパー・インタビューを導入するという事例になります。



37　3 共同での入試設計・実施の可能性

ペーパー・インタビュー問題例
（熊本大学 総合型選抜 グローバルリーダーコース入試）

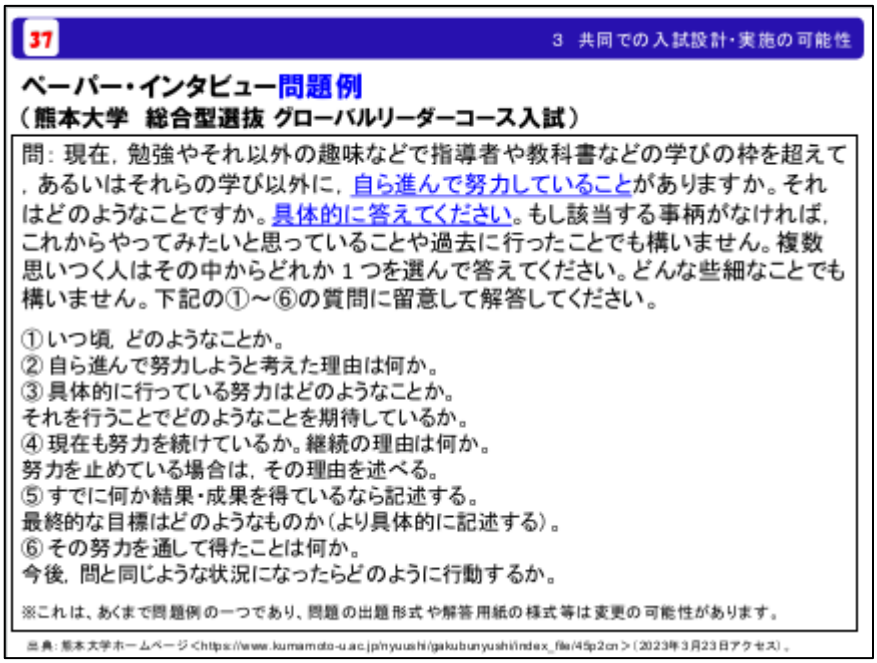
問：現在，勉強やそれ以外の趣味などで指導者や教科書などの学びの枠を超えて，あるいはそれらの学び以外に，自ら進んで努力していることがありますか。それはどのようなことですか。具体的に答えてください。もし該当する事柄がなければ，これからやってみたいと思っていることや過去に行ったことでも構いません。複数思いつく人はその中からどれか 1 つを選んで答えてください。どんな些細なことでも構いません。下記の①～⑥の質問に留意して解答してください。

①いつ頃，どのようなことか。
② 自ら進んで努力しようと考えた理由は何か。
③ 具体的に行っている努力はどのようなことか。
それを行うことでどのようなことを期待しているか。
④ 現在も努力を続けているか。継続の理由は何か。
努力を止めている場合は，その理由を述べる。
⑤ すでに何か結果・成果を得ているなら記述する。
最終的な目標はどのようなものか（より具体的に記述する）。
⑥ その努力を通して得たことは何か。
今後，問と同じような状況になったらどのように行動するか。

※これは，あくまで問題例の一つであり，問題の出題形式や解答用紙の様式等は変更の可能性があります。

出典：熊本大学ホームページ <https://www.kumamoto-u.ac.jp/nyuushi/gakubunyushi/index_file/45p2cn> （2023年3月23日アクセス）。

熊本大学の総合型選抜のグローバルリーダーコース入試の問題例が大学のホームページで公開されています。「現在，自ら進んで努力していることを具体的に答えてください」と書いてあり，「1 から 6 の質問に留意して回答してください」とあります。当然，何度もやりとりできるものではなく，一回，示して，それに対して書いてもらうものですから限界はあると思うのですが，面接と比べますとかなり細かく質問されています。

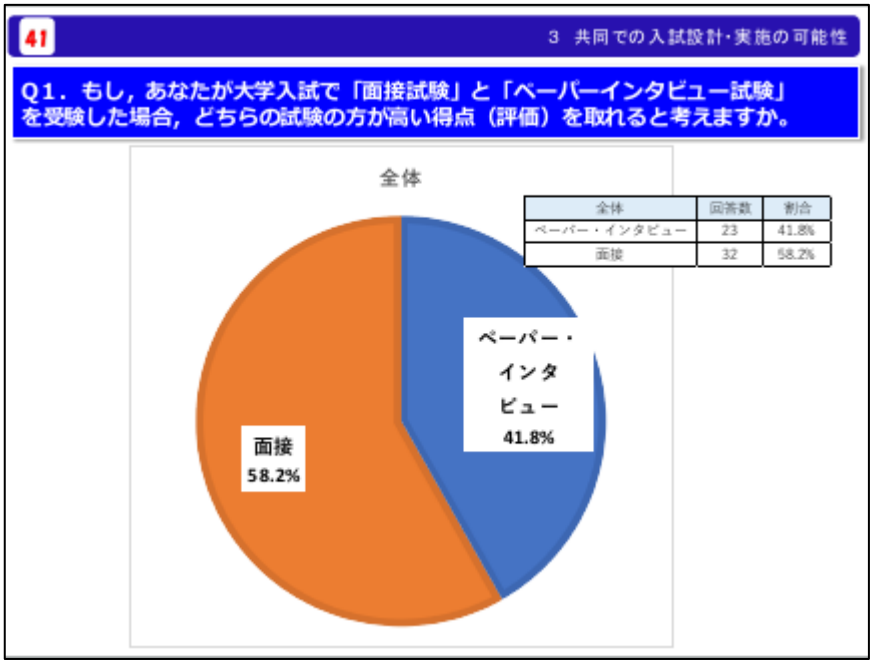


熊本大学では，各学部共通のペーパー・インタビューの評価基準として，リーダーシップ，協調性，自己表現能力，課題解決能力等を挙げています。他の面接や論述審査，口述審査なども，学部により行われているということで，意欲・関心・態度等について複数の評価手法を用いて非常に丁寧に評価されていることがうかがえます。

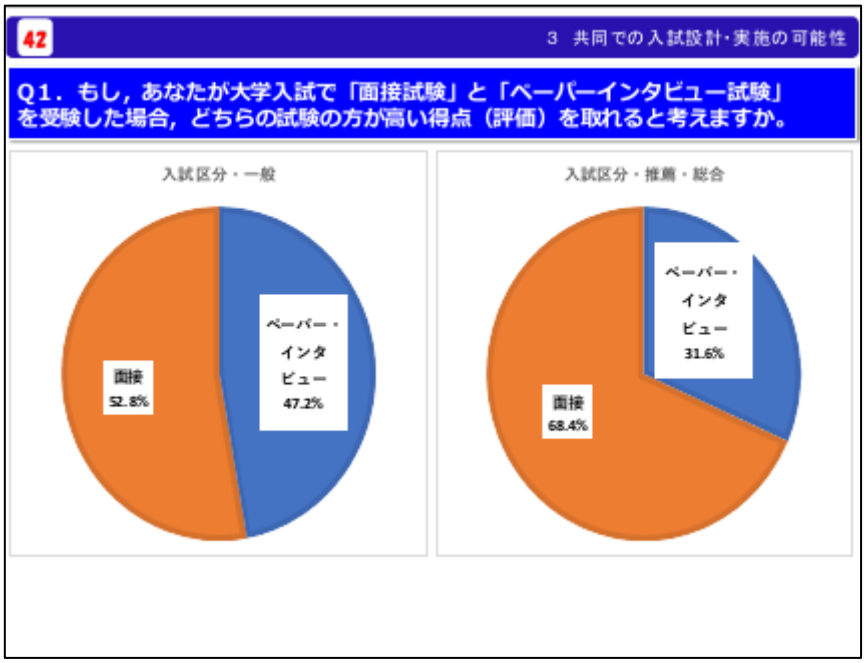
こちらのスライドは投影のみの報告になります。私が実際にペーパー・インタビューを受験した生徒がいる高校から受験の感想をいくつか拾ったものになります。共通しているのは「時間が足りない」，「問題が多い」，「質問が多い」，「書く量が多い」ということです。それ以外に上から 2 つ目は「一文で書く練習をしたほうがよい」という対策も述べられています。実際に 2022 年度の三重大学の人文学部の後期日程では，「一文で書いてください」と指定されているケースもありました。この方が三重大学を受験されたかどうかは不明ですが，このような感想もありました。

それから，4 番目で「作文の練習をしていたほうがよい」ということでペーパー・インタビューと作文に親和性を感じている受験生がいるようです。「小論文とは違う」という感想もありました。違うのは当たり前だと思うのですが，改めてそう書いている受験生がいました。

全体会 3

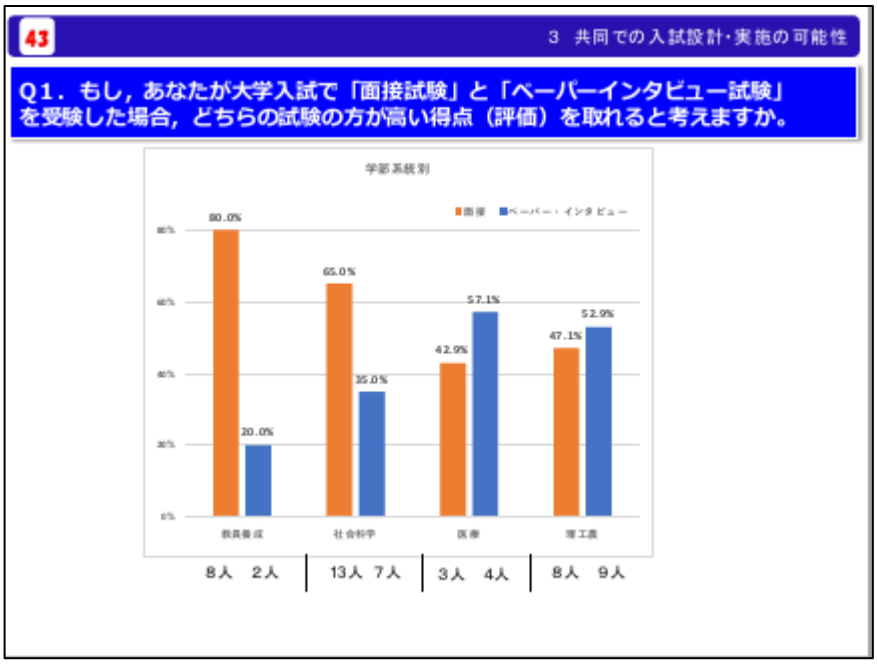


ペーパー・インタビューが導入されていない K 大学において，どのような印象を持っているのかということを把握するために調査を行いましたので，報告させていただきます。調査は，新 1 年生と上級生が交ざっていますが，55 人を対象としました。55 人のうち 36 人が一般選抜を経た入学者，それから 19 人が学校推薦型選抜・総合型選抜を経た入学者になります。



質問項目は「もしあなたが大学入試で面接試験とペーパー・インタビュー試験の両方を受験した場合，どちらのほうが高い点数（評価）を取れると考えるか」，そして「その理由を教えてください」というものです。

全体としましては，約 6 割が面接，約 4 割がペーパー・インタビューという結果でしたが，入試区分ごとに見ると，一般入試で入学した学生については拮抗していて半々ぐらい，推薦・総合で入学した学生は面接のほうが多いという結果でした。



ここまでは大体予想どおりでしたが，学部系統別に見ると，教員養成系や社会科学系は面接のほうが高い点数が取れそうだという回答割合が高く，医療系や理工農系ではほぼ拮抗しているといった状況がうかがえました。

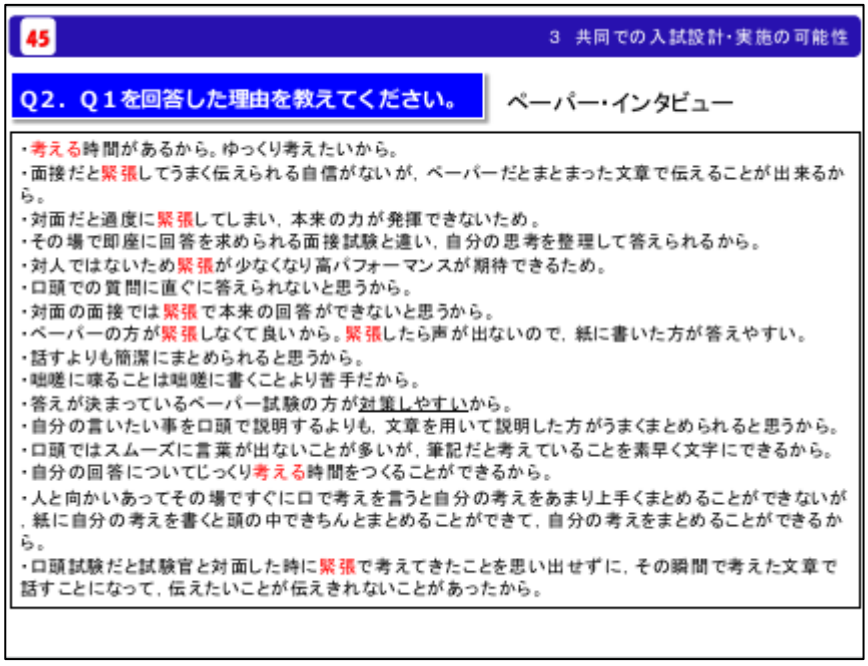
続いて，さらに人数が細かくなりますが，一般と推薦・総合に分けてみました。文系学部と比較すると理系の一般選抜などではペーパー・インタビューを導入しても受験動向には大きな影響がそれほどないのかなと感じています。



順位	キーワード	重要度	関連テキスト数	出現頻度
1	緊張	1.712125	8	8
2	かんがえる	1.696097	7	11
3	ある	1.385768	3	3
4	出来る	1.066394	5	7
5	伝える	1.01368	3	5
6	思う	0.979705	4	4
7	自分	0.951601	5	7
8	纏める	0.907231	4	5
9	回答	0.854977	3	3
10	ペーパー	0.828564	3	3

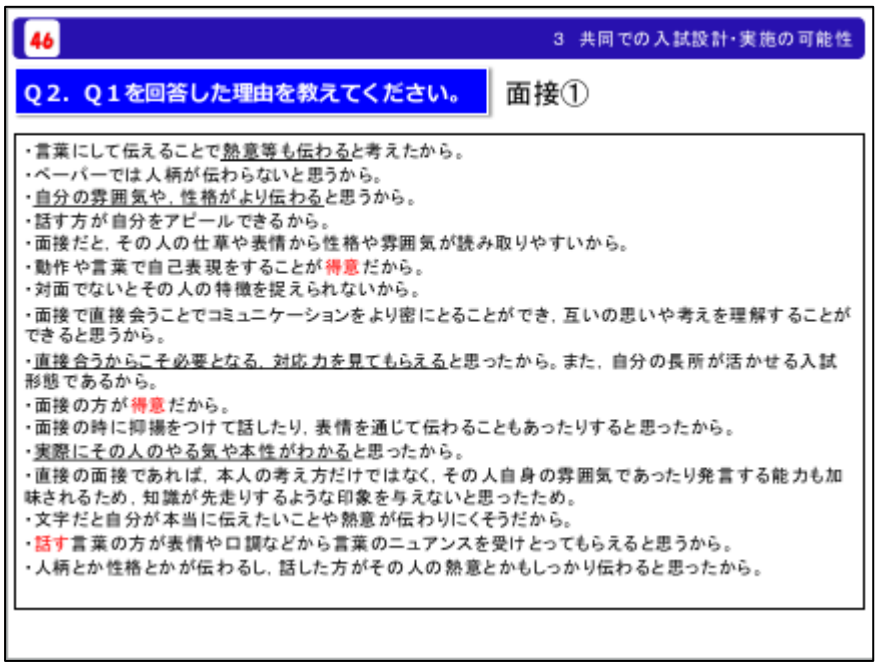
順位	キーワード	重要度	関連テキスト数	出現頻度
1	得意	1.722348	4	4
2	話す	1.399013	10	12
3	面接	1.280944	7	7
4	思う	1.279079	11	11
5	伝わる	1.260238	8	9
6	言葉	1.218115	4	5
7	表情	1.199584	6	7
8	見える	1.190292	2	2
9	出来る	1.148226	5	9
10	その人	1.059757	5	5

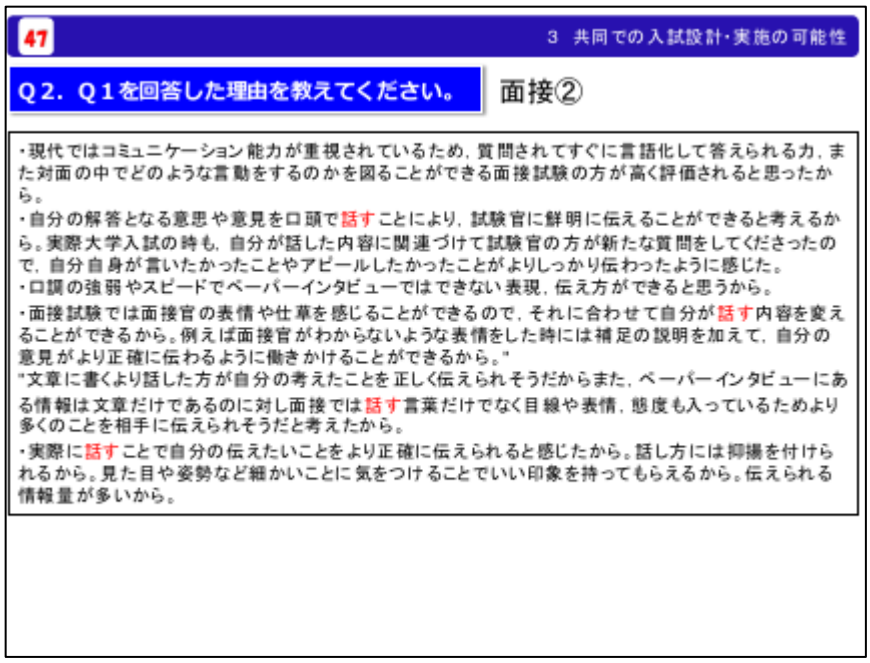
理由の回答内容の重要度をキーワード分析，テキスト分析で出したものを見ると，ペーパー・インタビューではキーワードとして上位の 2 つにあがってきたのが「緊張」「考える」です。面接では「得意」「話す」ということでした。



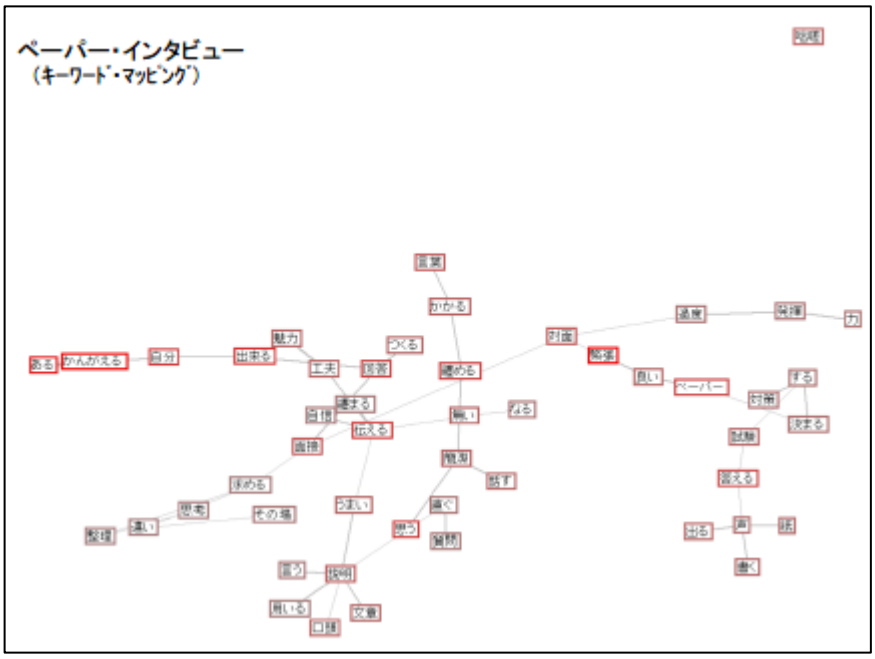
具体的な理由について，先ほどあげた上位 2 項目は赤字にしています。例えば，一番上理由は，先行研究と一致しています。「考える時間があるから」，「ゆっくり考えたいから」，「ペーパーだとまとまった文章で伝えることができるから」といった意見が多く見られました。

中ほどから少し下のところに「答えが決まっているペーパー試験のほうが対策しやすいから」という記述があります。受験生は，どちらの方が対策しやすいのかということを考えるのだなと改めて感じたところです。





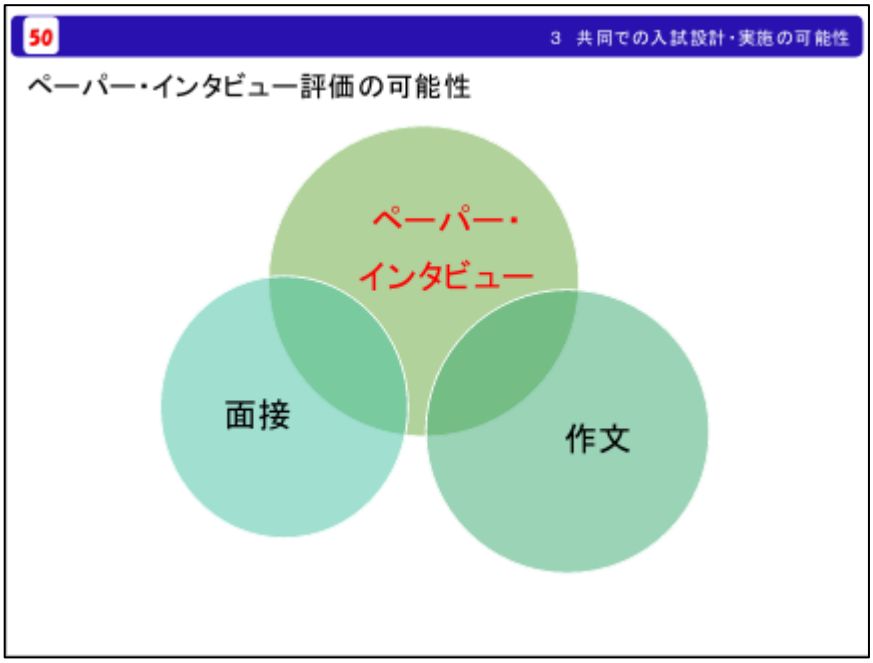
こちらは「面接のほうが高く取れそうだ」という理由ですが，これは従来からいわれていることですので，資料の紹介のみとさせていただきます。

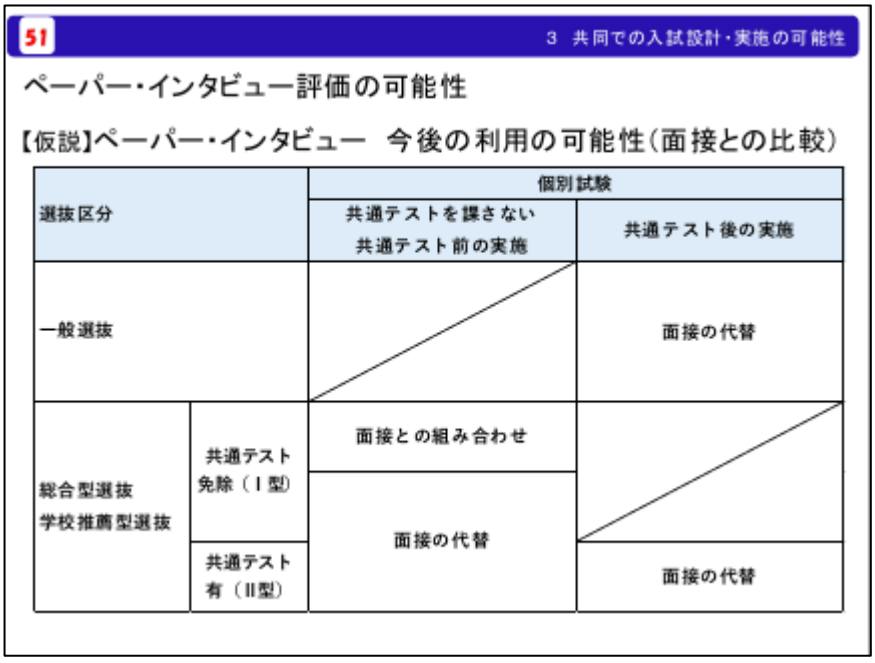


このキーワードについてマッピングをしてみました。１つは「対面」と「緊張」が近いということで，これは関連性の強いキーワードは近くに配置されます。注目したのはこの点と，「ペーパー」と「対策」です。また，「咄嗟」が非常に遠いということですね。この辺りに特徴があるのかなと。

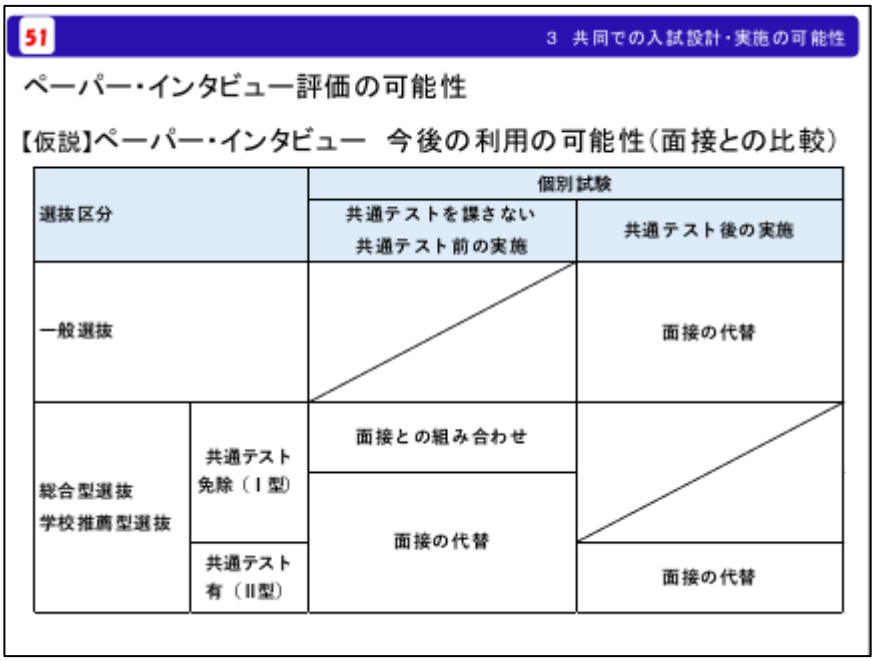
面接については，「得意」とか「話す」とか「好き」とか，そういったものが近くにあります。ペーパー・インタビューと面接は当然重なっている部分も多いですし，今回，事例を整理してみて，作文もかなり親和性が高いということが確認できたのではないか

と思います。





今後のペーパー・インタビューの評価の可能性についてです。国公立大学について，縦が選抜区分，横が共通テストを基準とした実施時期として分類しました。今後は，総合型選抜の年内入試拡大の可能性が想定されることから，面接の代替に加え，面接との組み合わせがポイントになると考えられます。各大学は求める人材要件に応じてどのような組み合わせがあるのか，あるいは代替するのか，さまざまな利用方法があるのではないかと認識しています。



最後にまとめです。今後の大学間共同開発・共同実施の可能性を考えるということで整理させていただきました。基礎学力系においては，大学入学共通テストや入試過去問題活用宣言が共同の実績と考えられるのではないかと思います。一方で，基礎学力以外のところで見ますと，今日，報告させていただいた活動報告書，それから，ウェブ出願とのリンクという研究は，詳細な書類審査のための共同開発と捉えることもできるのではないかと考えます。

それから，ペーパー・インタビューは規模が拡大してきた時に，時間をかけた丁寧な面接をどうやって担保していくかといった点を踏まえた共同開発ではないかと認識しています。

大学間共同開発のメリットとしましては，大学コミュニティの共有財産の活用ができるということです。英知の再結集により最適性の追求が可能です。加えて，学力試験と比べて同一日時での実施に縛られにくいということが挙げられると思います。PBT の学力試験は同時刻の実施が求められますが，基礎学力以外については，共同開発して実施を各大学に委ねられれば，必ずしも縛られないと認識しています。一方で，検討を要する事項としては，開発段階で各大学のアドミッション・ポリシーの整合性を確認しながら進めていく必要があると考えています。

以上，私からの報告とさせていただきます。ありがとうございました。

【川嶋・司会】　竹内先生，ありがとうございました。先ほどの椎名先生のご報告が各大学は基礎学力をどのように把握しているのかということだったのに対し，基礎学力以外の非認知的な能力をどのように評価したらいいのかということ，及び効率的・効果的な実施のために大学間の共同は非常に重要であるというお話でした。

別の入試に関するシンポジウムでも，最後のまとめにもあったとおり，個々の大学が実施するということと共同で実施することのどこにバランスを求めるのかという話がありました。大変，興味深いご発表でした。ありがとうございました。

それでは，最後になりますが，令和 5 年度から高等学校に導入されました総合的な探究活動の時間について，これまでも探究活動の成果を大学入試にどのように生かしていくかという議論がされていました。今回は探究学習等の成果の評価方法に焦点を絞り，立命館大学の本郷真紹先生からご報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。■

全体会 3 ◎ 報告 3

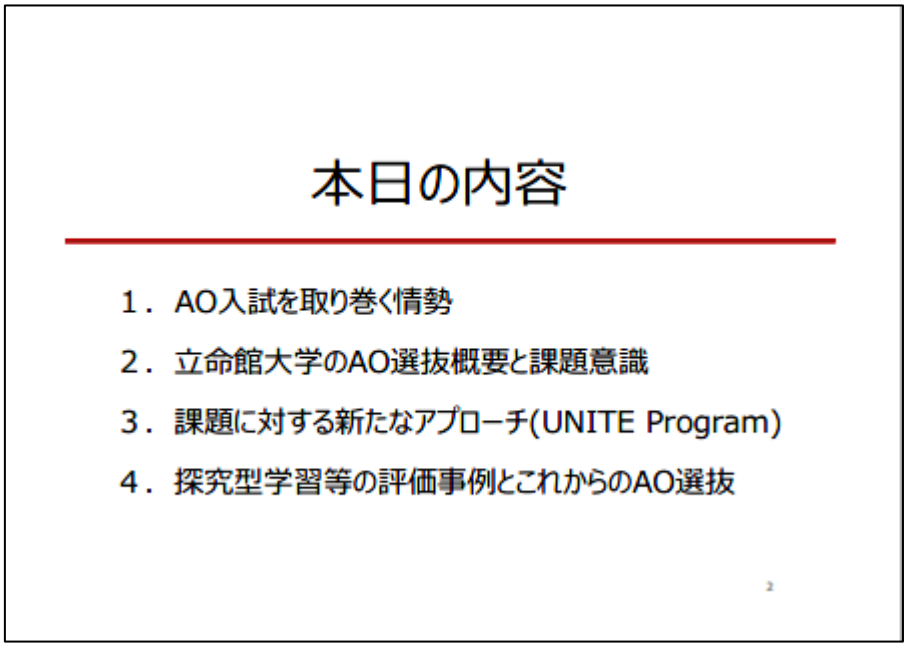
探究学習等の成果の評価方法

■本郷　真紹（立命館大学文学部特命教授）

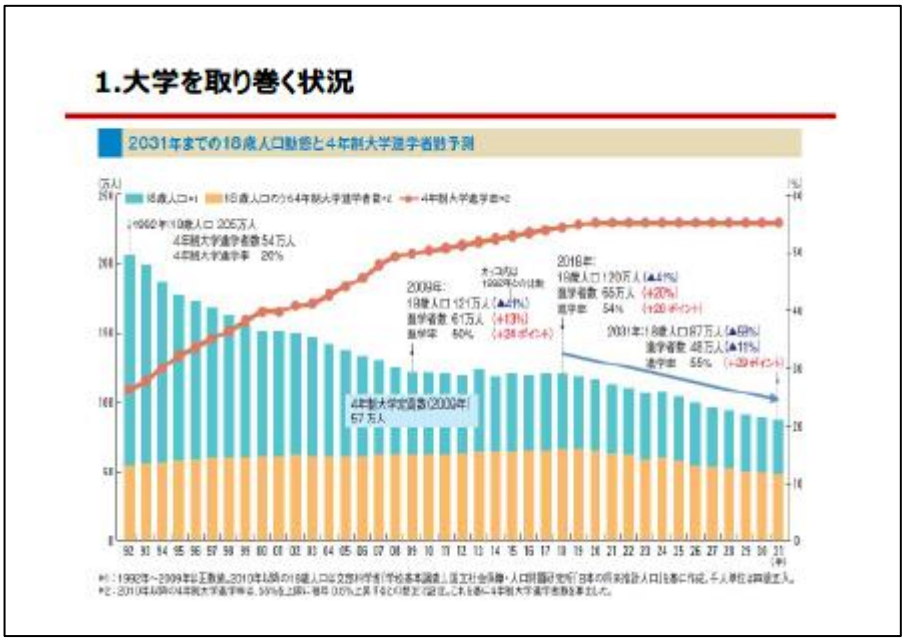
どうもありがとうございます。立命館の本郷です。「探究学習等の成果の評価方法」という題でお話しさせていただきます。



1990 年代以来，AO 入試・特別入試と，その都度，試行錯誤を繰り返してまいりましたが，その軌跡をたどりながら，改めて，今日の一つの AO 入試の手段，総合選抜の手段となっているという実態をお示しさせていただきます。



本日の内容は，①AO 入試を取り巻く情勢，②本学における AO 選抜の概要と課題認識，③課題に対する新たなアプローチである UNITE Program についてです。最後に，④新たな入試取り組み結果から見る今後の大学のミッションについてお話しさせていただきたいと思います。

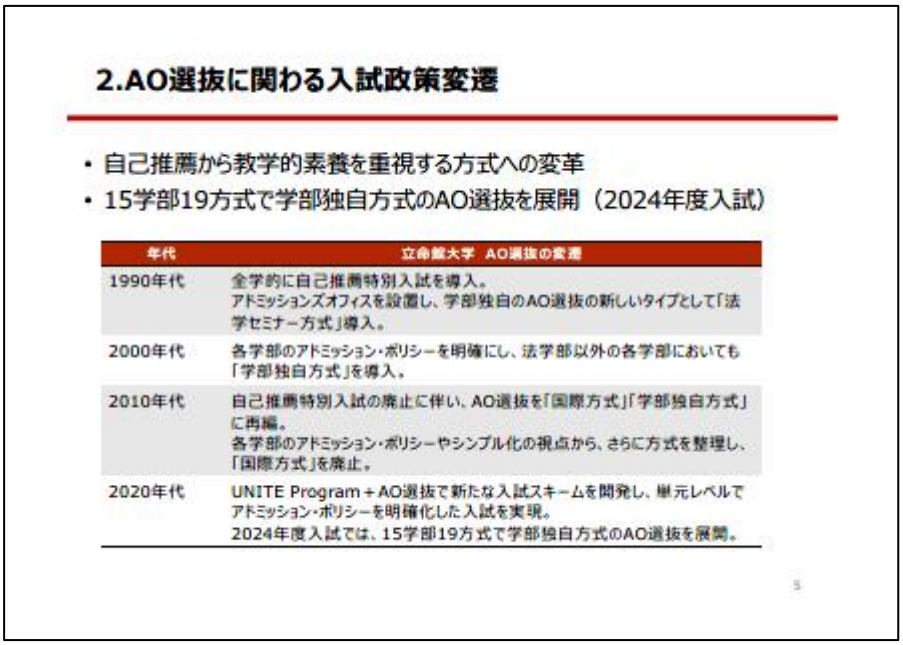


まず，簡単に触れるにとどめますが，AO 選抜どころか大学を取り巻く状況は非常に激動しており，18 歳人口の激減の中で大学入試のありようが多様化しています。

一方で，大学への進学層は増えていますので，現時点では志願者や入学者等に大きな影響は及んでいませんが，中長期的にはかなり厳しい状況が訪れるということです。

その中で，国立大学は入学者全体の 3 割を推薦入試，AO 選抜，総合型の選抜によって

選抜するというアクションプランを提示しました。これまで AO・推薦といった総合選抜に頼る部分の大きかった私立大学は，国公立大学との兼ね合いでどのような入試を模索すべきか，大きな課題として課されているところとなっています。大学を取り巻く状況はご覧のとおりです。



立命館大学の AO 選抜に関わる入試政策の変遷を見ますと，1990 年代に慶應大学 SFC で最初にアドミッション・オフィス入試が行われたことを受け，それに追随するような形で，本学もすぐに AO 入試を導入しました。全学的には自己推薦の特別入試を，法学部では法学セミナー方式を導入しました。この二本立てで始めたのですが，2000 年代には，各学部が法学部に追随するような形で，それぞれのアドミッション・ポリシーにのっとった独自方式を導入し，自己推薦と学部独自方式の二本立てで AO を展開するようになりました。

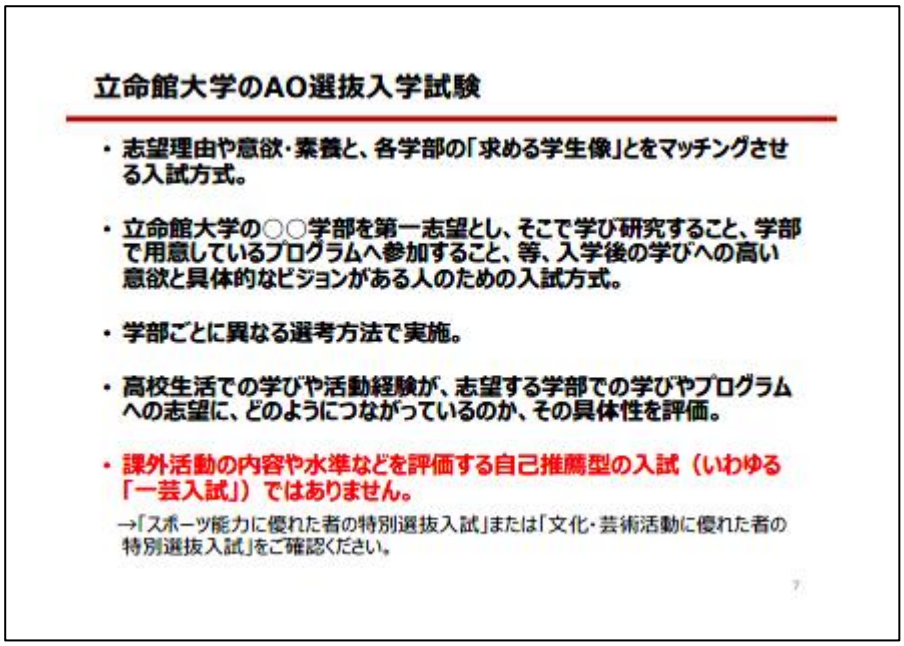
2010 年代には，志願者それぞれの取組みを独自に訴えてそれを評価する，自己推薦特別入試を廃止し，国際方式と学部独自方式に再編しました。国際方式とは，いわゆる英語の 4 技能の成果をベースとするような AO 入試になります。これも 2010 年代の後半期には廃止し，学部独自方式に一本化しました。

2020 年度になってから，UNITE Program＋AO 選抜で新しい入試スキームを開発し，教科・科目の中でどのような内容が各学部での学びに必要かという観点から，単元ごとの検証という形でもう一度設定し直しているというのが現状です。

最後の UNITE Program についてはまた少し後でも触れさせていただきたいと思います。2024 年度入試では，15 学部 19 方式でそれぞれ学部独自の AO 入試を展開する運びになっています。



AO 選抜志願者層の推移については，今年は昨年に比べ微減しましたが，2013 年から 2022 年に至るまで，ほぼ増加の傾向にあります。

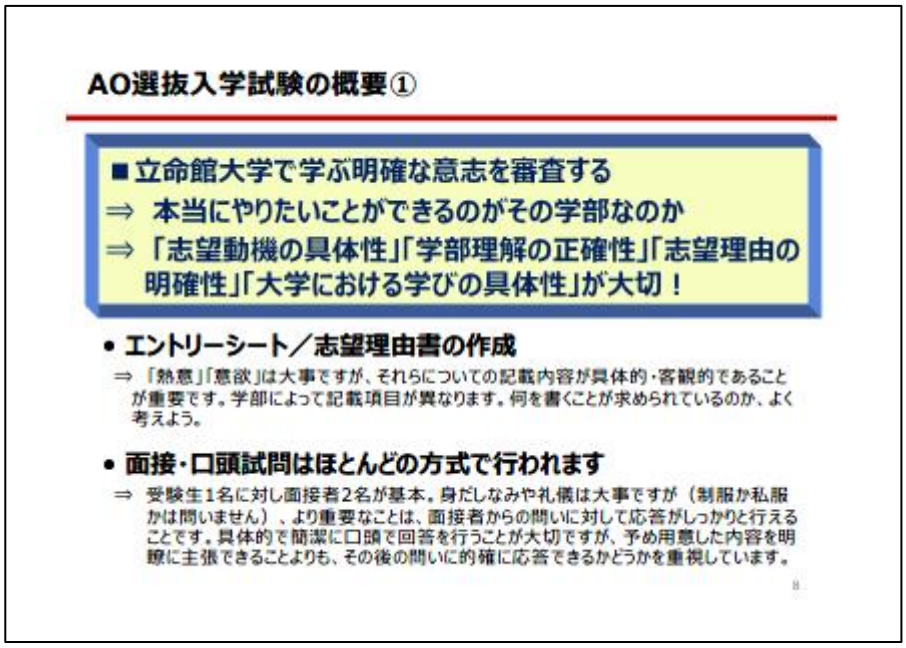


AO 選抜の基本方針として，志望理由や意欲・素養と，各学部の「求める学生像」とをマッチングさせる入試にしたいということがあります。

2 番目に，第 1 志望の学部を明確にして，そこで学び，研究すること，それから，学部で用意しているプログラムへ参加することなど，入学後の学びへの高い意欲と具体的なビジョンがある人のための入試方式であると規定しています。

学部ごとに異なる選考方法で実施します。高校生活での学びや活動経験が志望する学部での学びやプログラムへの志望にどのようにつながっているかということの具体性を評価します。

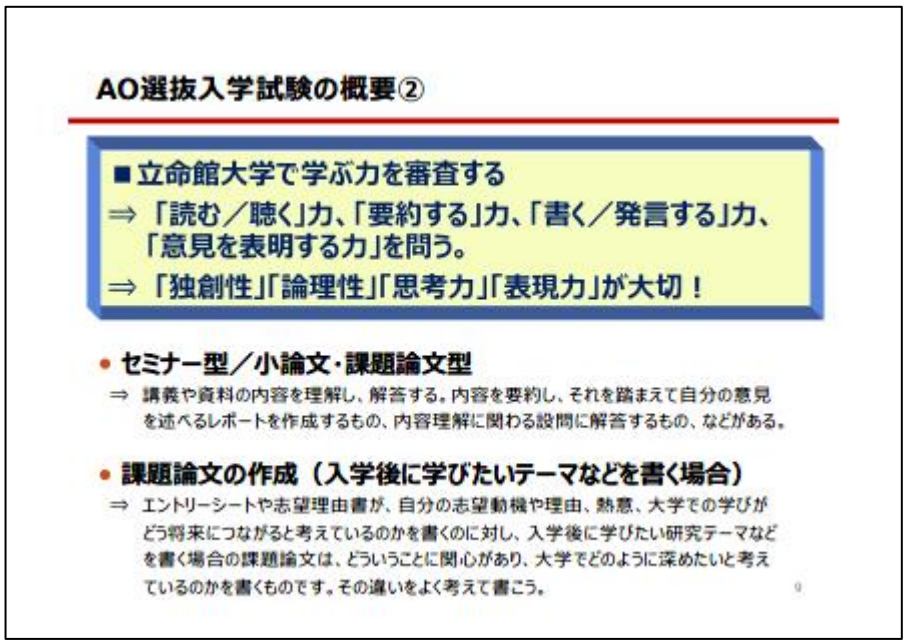
特に，今日，高校の指導要領が大幅に改編される中で，4 番目の項目の内容の充実化を図っていかなければならないわけですが，いわゆる自己推薦型の課外活動の内容や水準などを評価するものではありません。俗に一芸入試といわれる，いわゆるスポーツ選抜や文芸ではないということです。あくまでも成果をベースとする探究型の学びの内容を検証する方向で行うということです。



概要ですが，立命館大学で学ぶ明確な意志を審査するということですから，まずこの点が大事になります。

かつては指定校推薦などで，学校側からの要望を受けて指定校に入学してきていました。生徒本人は，具体的にその学部で何を学ぶのかをさほど意識せず入学し，いざ大学の授業に出てみると思っていたのと大きく違っていたということがありました。学部の名称だけでは十分に中身を理解できない可能性があり，漠然とでありながらも彼ら彼女らが抱いている自身のキャリアビジョンや志向性と，その学部での学びがそぐうものなのかを厳しく検証し，ミスマッチをなくす仕組みが必要だということになりました。志望動機の具体性，学部理解の正確性等，様々な手だてで広報は打っていますが，そのミスアンダースタンディングがないのかということです。

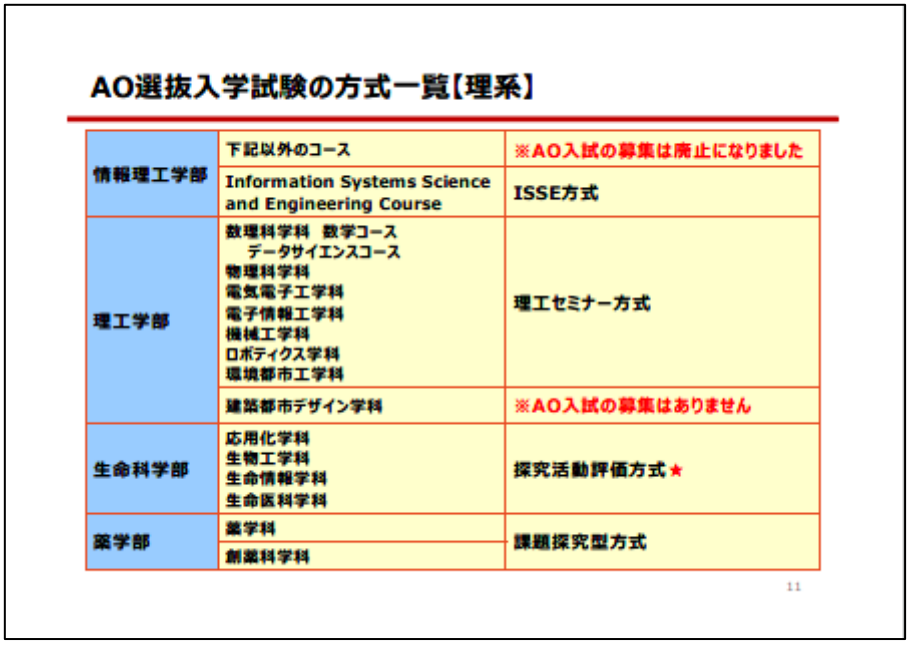
そのため，志望理由の明確性や大学における学びの具体性を審査するための選考方法として，エントリーシートや志望理由書の作成，さらには面接や口頭試問などを通してその中身を確かめています。



2 番目に，もう一つの大事な点として，学ぶための力があるのかということです。読む／聴く力，要約する力，書く／発言する力，意見を表明する力などを問います。これを基礎学力と言っていいのかどうかということになるわけですが，加えて独創性，論理性，思考力，表現力といった今日の 3 つの学力で求められている内容をどの程度兼ね備えているのかということを併せて確かめます。

選考方法としては，セミナー型，小論文・課題論文型，あるいは，入学後にこのようなことを学びたいという，自分自身が課題意識として持っている内容やテーマなどを書く課題論文の作成など，様々な手だてで検証を行っています。



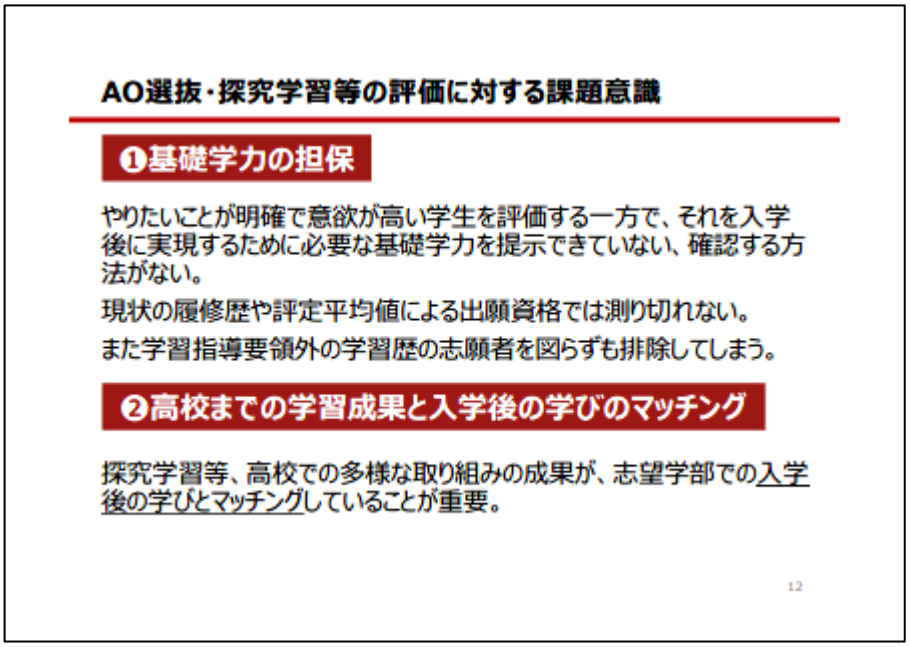


AO選抜入学試験の方式一覧【理系】

情報理工学部	下記以外のコース	※AO入試の募集は廃止になりました
	Information Systems Science and Engineering Course	ISSE方式
理工学部	数理科学科　数学コース データサイエンスコース 物理科学科 電気電子工学科 電子情報工学科 機械工学科 ロボティクス学科 環境都市工学科	理工セミナー方式
	建築都市デザイン学科	※AO入試の募集はありません
生命科学部	応用化学科 生物工学科 生命情報学科 生命医科学科	探究活動評価方式★
薬学部	薬学科	課題探究型方式
	創薬科学科	

11

時間の関係で個々にはご説明申しませんが，文系の学部では全ての学部でそれぞれ特色ある学部独自の方式を取り入れています。それは各学部のアドミッション・ポリシーを反映したものですので，独自のやり方をとっています。理系でも同様に，各学部にとって最も望ましいと思われる方式で行っています。



AO選抜・探究学習等の評価に対する課題意識

❶基礎学力の担保

やりたいことが明確で意欲が高い学生を評価する一方で、それを入学後に実現するために必要な基礎学力を提示できていない、確認する方法がない。

現状の履修歴や評定平均値による出願資格では測り切れない。

また学習指導要領外の学習歴の志願者を図らずも排除してしまう。

❷高校までの学習成果と入学後の学びのマッチング

探究学習等、高校での多様な取り組みの成果が、志望学部での入学後の学びとマッチングしていることが重要。

12

その上で AO 選抜・探究学習等の評価に対する課題意識としては，志望者の目的意識や入学後・卒業後のビジョンを持っていることに加え，これが非常に大事だと思っているのですが，自分はどのような形で社会に貢献できるのかという点についての意識をどれだけ明確に持っているかです。こういった点を積極的に評価していきたいと思っていますが，「言うは易し行うは難し」で十分になし難い現状があります。

課題の一つとして，選抜方法の追究による執行業務の負担増加があります。大学側が

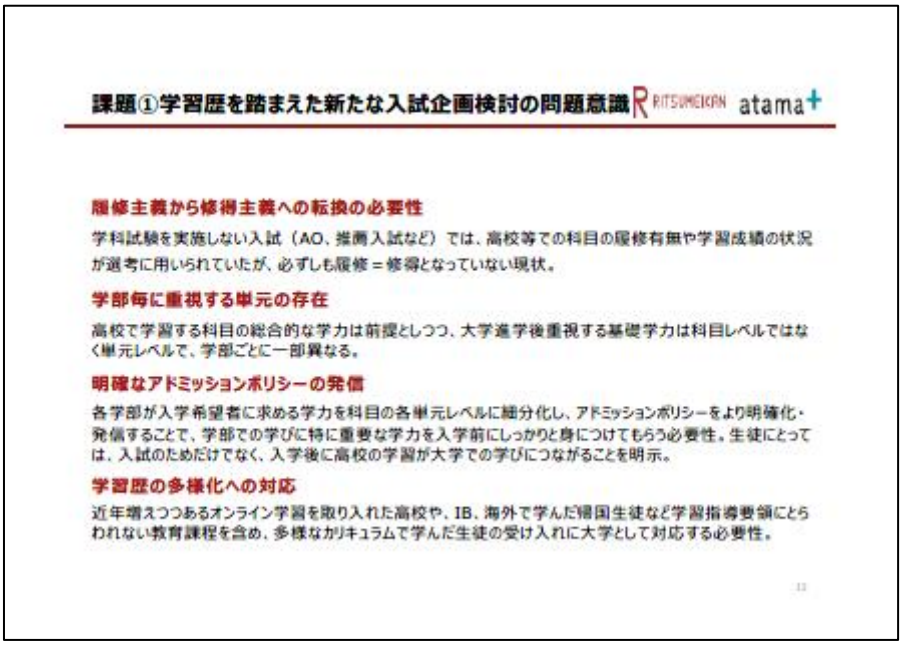
よりよい評価体系や選抜方法を検討して実行していきたいと試行錯誤を重ねると，選抜に係る入試執行の業務の負担がトレードオフの関係となり，実現にハードルが生じてしまうということになるのです。

話が横道にそれますが，20 年ほど前，AO 入試を始めてちょうど 5 年がたった頃に今日でいう探究学習の重視と同じような課題意識を抱き，高校生が日常的に課題として取り組んでいることとミスマッチなく，大学の学部での学びにつながり，真の高大接続を成し得るにはどうすればよいかを議論しました。その結果,「立命館サマーカレッジ」という合宿形式のイベントを催しました。本学を志望してくれる高校生を夏休みに集めて，全学部が基礎となるような講義を提供し，2 日間で最低 6 つの学部の講義が聴ける仕組みです。

それを受講した上で，残りの 2 日間，大学院生をバディにつけて，アトランダムにグループを編成し，近くの琵琶湖を舞台にフィールドワークを行いました。グループの課題とそれについての探究内容についてプレゼンテーションをさせ，みんなで議論する形の催しをやりました。当時は，自己推薦型を行っていましたので，自分のやった成果をそこに盛り込んでレポートに出すということをやったのです。

こちらは何せ自己推薦型の AO 入試であり，自ら訴える重要なポイントになるということもあり，2 年目には 100 名を超える高校生がエントリーしました。結局，収拾がつかなくなってしまって数年で終えてしまったのです。やろうとした意図や方向性としては望ましいことであったと思っていましたので，後で時間があればご紹介しますが，そういったことを参考に，現在，国立青少年教育振興機構で催されている探究学習のアワードで制度設計に生かしてもらっています。

これは後にまたご説明を申し上げます。元へ戻りまして，もう一つが 2 番目にあります基礎学力の担保です。やりたいことが明確で意欲が高い学生を評価する一方，入学後にそれを実現するための基礎学力が重要ですが，それを明確に提示できていない，確認する方法がないという課題があります。つまり，現状の履修歴や評定平均値等によりましては計りきれないものがあり，また，学習指導要領外の学習歴の志願者を図らずも排除してしまうことにもなっています。いわゆる学力の検証をどういう形でこの入試に含めるかということは非常に重要な問題になっています。



そういった経験から導き出された一つの方向性として，基礎学力と意欲・ビジョンを測るためには，まず履修主義から習得主義への転換が必要ということです。「一応，この単位を取りました」，「評定値はこうです」という履修主義ではなく，本当の意味で自らが大学で学ぶための基礎学力にするために習得するということです。

学科試験を実施しない入試では，高等学校での科目の履修の有無や学習成績の状況が選考に用いられていましたが，それは本当の意味でのその学部の学びのために必要な学力の習得には，必ずしもなっていないということです。それをどのように真の意味での習得に変えていけるのかという問題があります。

２番目に，学部ごとに重視する単元の存在です。高等学校で学習する科目の総合的な学力，学習指導要領にのっとった全ての教科・科目に対する履修は重要です。ただし，大学進学後，特に必要とする不可欠な基礎学力は，科目レベルよりさらに細かな単元レベルで見た場合，学部により異なっているということですね。

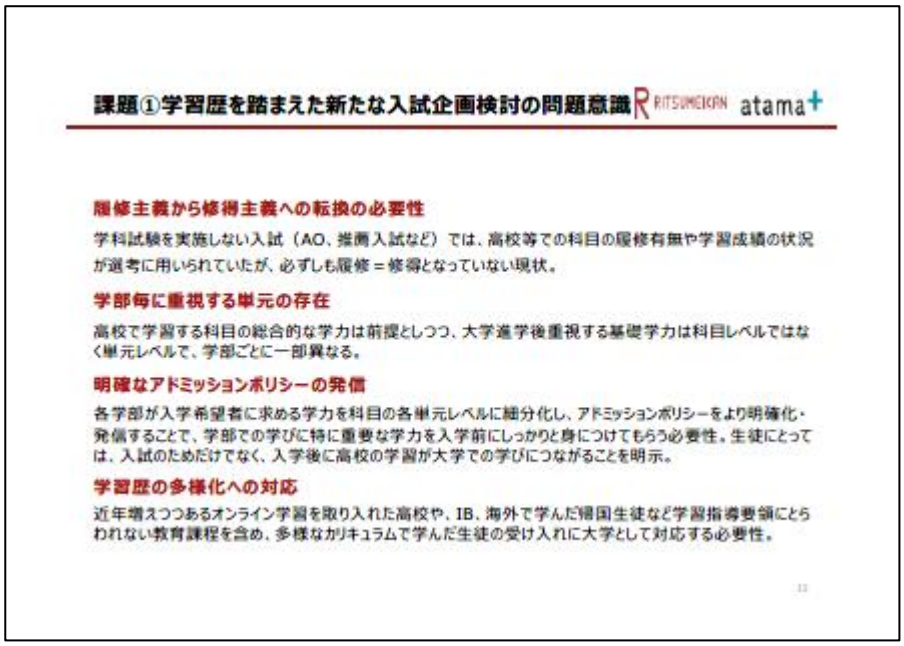
私立大学ですと数学という入試科目を課さない選抜もありますが，例えば，経済学などを学ぶ上では，やはり数学の，ある単元はどうしても必要となってきます。それを入学後にリメディアルという形で再履修させるのは時間的にもかなり不合理なところがありますので，もう少し細かく単元ごとに指定して，例えば「経済学部に進学するのであれば，数学の中でもこの単元だけは履修してきてもらうことが望ましい」といった形で示す必要があるということです。

３番目に，明確なアドミッション・ポリシーの発信です。２番目とも関連しますが，各学部が入学希望者に求める学力を科目の各単元レベルに細分化して，アドミッション・ポリシーをより明確化して発信するということです。どういうことがどういう形で大学での学びに役立つかを確信させるということです。学部での学びに特に重要な学力を入学以前にしっかりと身に付けてもらうことが必要であるということです。

それにより，生徒にとっては，入試に合格するためではなく，入学後にそれが大学で

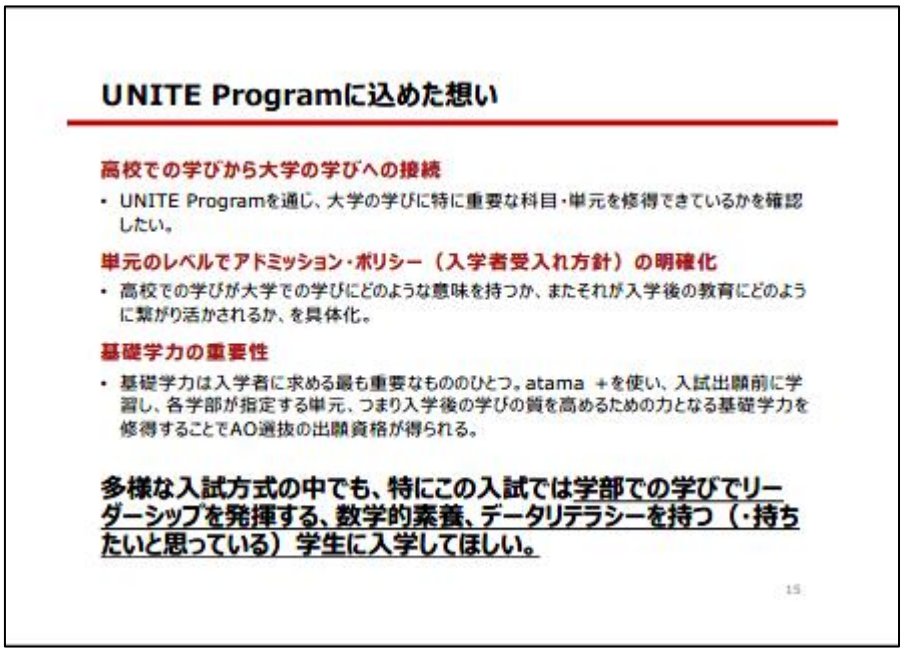
の学びに生かせる，それが一番基礎になるという意識が高まり，学ぶモチベーションとインセンティブが生まれると考えられます。このような観点から，効果的な学びを導く重要なポイントになるのではないかと考えているわけです。

最後に学習歴の多様化ということで，最近は，オンライン学習のみでほぼ卒業が可能となる高校のシステム，あるいは，海外で学んだ帰国生徒等，従来の学習指導要領にとらわれない多様な形の高校卒業生が実際に出てきていますので，そういう者たちを受け入れる際に，大学として，必要な基礎学力をどのようにして求めるのかということを考えていかなければいけません。こういうことが基本的な企画の方針として想定されます。



現在，取り組み出した企画は，UNITE Program という学部指定の単元 AI 学習プログラムです。現在は 3 学部で行っています。各学部での学びに必要な教科の「単元」を指定していただき，提携している atama＋の株式会社から提供していただいている AI 教材で学習してもらいます。各単元の習得認定試験に合格してプログラムを修了することを AO 入試の出願要件とするということです。AI 学習プログラムを受ければ無条件に合格，あるいは，その AI 教材での学習を試験という形で検証する，ということではなく，あくまでも基礎資格とし，その上で各学部が準備する AO 入試を受けていただくということです。

こうすることにより，評定値が出願要件として課されていると出願できなかった，多様な形の高校卒業生たちに対応できる部分が表れてくるということです。また，単元レベルの習得状況を確認したくてもこれまでは可視化するすべがありませんでしたが，少なくともその単元に関しては一定期間学んできており，学習内容もきちんと確かめられていることが大学としても確認できるというメリットがあります。



高大接続の観点から，大学の学びに特に重要な科目・単元を習得できているかを確認したいということです。また，単元レベルのアドミッション・ポリシーの明確化により，高校での学び，特に単元の学びや習得がどのような意味を持ち，入学後どのように役に立つのかを高校生に意識させるということです。

さらには，基礎学力の重要性です。各学部が指定する単元を入学前に学習することで，入学後の学びの質を高めるための力となる，真の意味での基礎学力を習得し，それによって AO 選抜の出願資格が得られるので，結局はミスマッチをなくすことにつながります。

特にこの入試では，多様な入試方式の中でも，学部での学びでリーダーシップを発揮する数学的素養，データリテラシーを持つ／持ちたい入学生を望んでいます。

これはなかなか難しい問題と思われます。一つ，身近な例として，私は文学部の日本史の教員なのですが，極端な言い方をしますと，あえて語弊があると申し上げておきますが，高等学校の日本史を通じて非常に細かな日本史の用語や知識を持ち合わせて入ってくれることよりも，数学的なロジック，あるいは，国語の文章読解力や構成力を基礎学力として持って入ってきてくれるほうが本来は望ましいのですね。

基本的な歴史の流れだけ分かってくれれば，入学後に必要な知識を習得させることはいとも簡単ですが，ロジックや文章読解力などに難がある場合，これをリカバーすることは非常に難しいです。「高等学校の履修段階で意識して学んできてください」ということを，こういう手だてで訴えることがむしろ効果的なのではないかと考えています。



学習内容

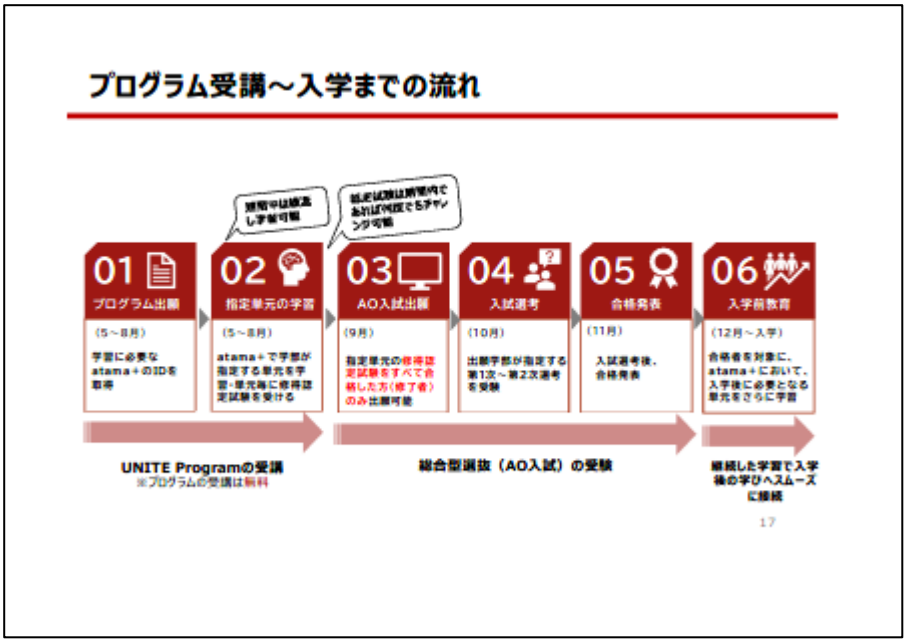
- 高等学校の**数学全体**（atama＋内 78単元）のうち、**各学部が5~8単元を指定し**、atama+のAI学習システムで学ぶ。
- 所要時間の目安は、1日1時間学習した場合半月～1か月程度*

科目	単元分野	経済学部	スポーツ健康科学部	食マネジメント学部
数学Ⅰ	2次関数（2次関数とグラフ）			○
	データの分析（データの散らばり）	○		○
	データの分析（データの相関）	○	○	○
数学A	場合の数と確率（確率）	○	○	○
	場合の数と確率（場合の数）			○
	場合の数と確率（順列）			○
	場合の数と確率（組合せ・組分け）			○
数学Ⅱ	倒数と対数（倒数・対数の応用）	○		
	整式の微分法（微分法の応用）	○	○	
	整式の積分法（積分と面積）	○	○	
数学B	数列（2の計算）	○		
	数列（いろいろな数列）	○		
	空間ベクトル（ベクトルと図形）		○	
修了までの所要時間目安（単位：分）*		1873	1094	1802

*本データは統計値であり、実際に要する時間は該当単元の習熟度により個人差があります。

16

具体的な学習内容はこのとおりです。経済学部とスポーツ健康科学部と食マネジメント学部で，atama＋の AI 学習を取り入れていますが，数学Ⅰ，数学 A，数学Ⅱ，数学 B のうち，学部の学びで必要になる単元を習得してもらうということです。

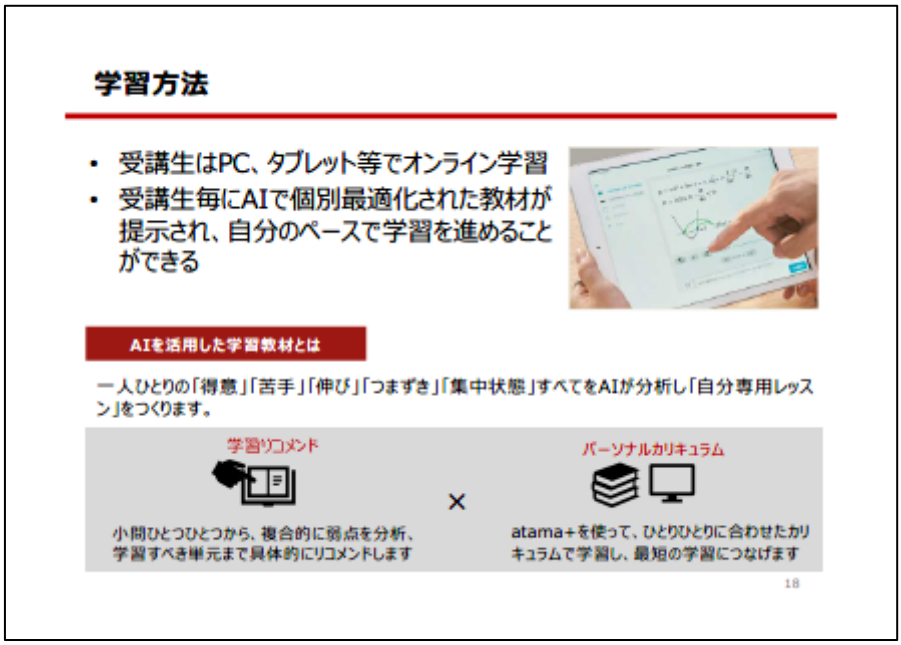


プログラム受講～入学までの流れ

17

プログラムへの出願が 5～8 月なので，その間に必要な atama＋の ID を取得していただき，指定単元を学習してもらいます。指定単元の習得認定試験に全て合格し，AO の出願資格を得た生徒に，9 月にエントリーしていただきます。その上で，学部が指定する第 1 次から第 2 次選考，これは従来の AO で行っていたそれぞれの志望内容や，高等学校で自らが課題として取り組んだ事柄などについて，小論文や面接などの方法を通じて学部独自の方式で聞いていき，それによって合格を決めます。

合格者には，再び atama＋を使って，入学後に必要となる単元をさらに深める入学前教育を行っています。



学習方法はタブレット等によるオンライン学習になりますから，それぞれのペースで進めることができます。将来的に反転学習がもっと大きく取り入れられるようになれば，それに即応したものと言えるのではないかと思います。GIGA スクールなども同じようなものだと思います。



受講者数，修了者数，志願者数はこのとおりです。プログラム修了者数が 140 名，志願者が 128 名です。出願資格を持った 140 名のうち，志願した者が 128 名であったということです。



普通科以外のプログラム受講者数

RITSUMEIKAN atama+

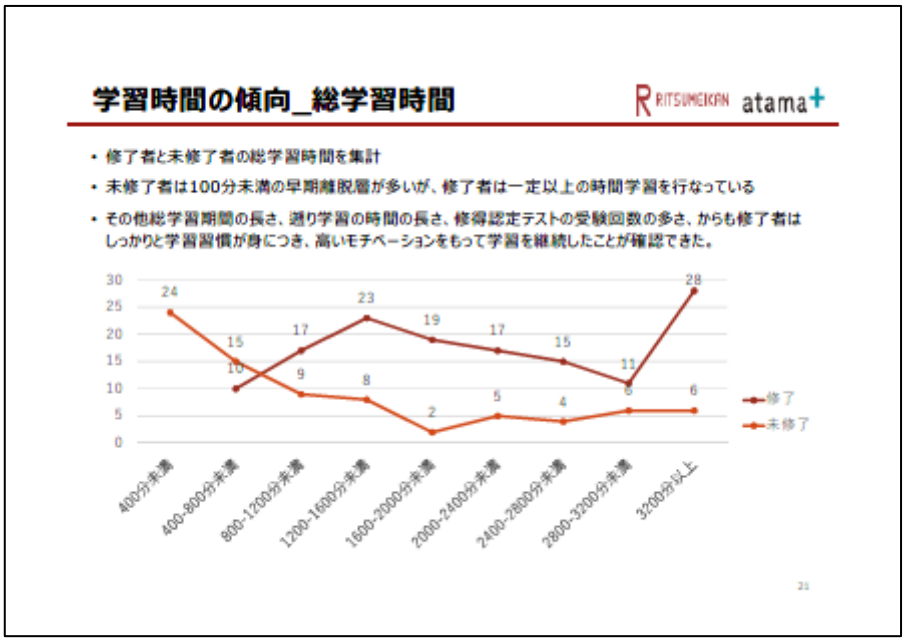
- 普通科（全日制・単位制）以外の高校・コース所属の受講者は全体の12.8%に当たる29名。
- （当該学部の他の方式と比べて）経済はN高を中心に通信制高校が多く、食マネはIBが多くかつ多様。

→今回の目的の受講者の多様性担保が達成できている

高校種別	IB	インターナショナル	海外	工業	商業	体育	通信	特別支援学校	総計
経済	1	-	3	-	4	-	4	-	12
スポーツ健康科学	1	1	-	-	2	2	-	-	6
食マネジメント	4	1	1	1	1	-	2	1	11
総計	6	2	4	1	7	2	6	1	29

20

プログラム受講者数についてです。高校種別としましても，特に食マネジメント学部は IB，インターナショナル，海外，工業と，満遍なく様々なタイプの高校から受講していることが分かります。



学習時間の傾向_総学習時間

RITSUMEIKAN atama+

- 修了者と未修了者の総学習時間を集計
- 未修了者は100分未満の早期離脱層が多いが、修了者は一定以上の時間学習を行なっている
- その他総学習期間の長さ、週り学習の時間の長さ、修得認定テストの受験回数の多さ、からも修了者はしっかりと学習習慣が身につき、高いモチベーションをもって学習を継続したことが確認できた。

21

学習時間の傾向について，修了者と未修了者の総学習時間を集計したところ，未修了者はいったん受講したが持続できずに早期に離脱する人が多いのに対して，修了者は，かなり長い時間，十分に履修したことが確認できます。それは紛れもなく本人の持っているモチベーション，あるいはインセンティブであり，こういったものを測ることも可能となっています。

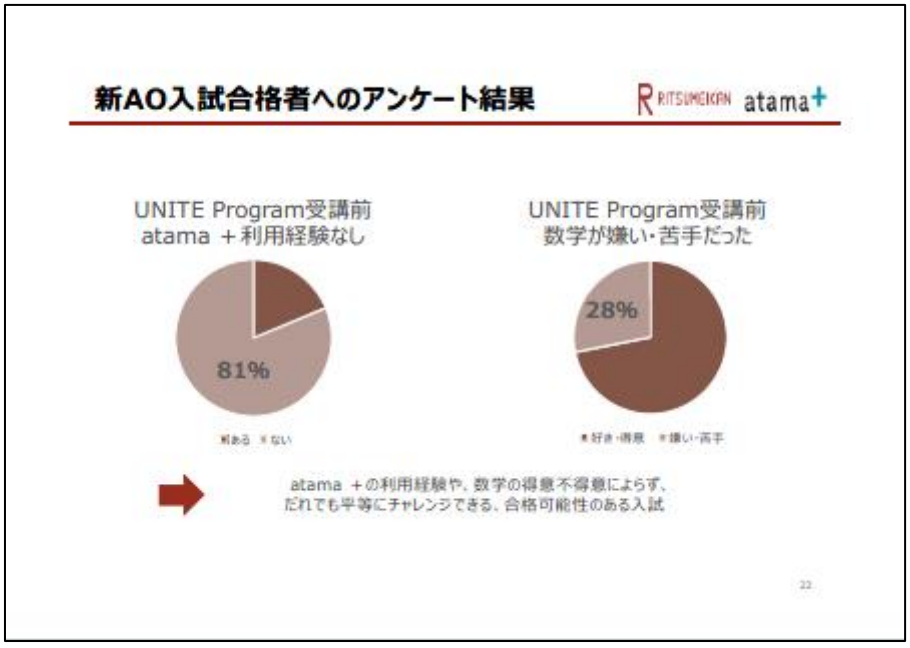
対象入試の評価方法の事例について，例えば，経済学部の数学重視方式の第 1 次選考

では，志望理由等の出願書類で，2 番目の項目をご覧ください。ここが本日の課題に即したものだと思うのですが，出願書類の中で自らの数学やデータ分析への興味・関心のきっかけについて高等学校以前の具体的な取り組みを問う項目を設けています。

例えば，中学校の時に校外学習で，自分なりに統計を取ってこういう意見を提出したということなど，何か自分自身で数学やデータ分析に関して取り組んだ経験があるかということを聞くわけなのですね。

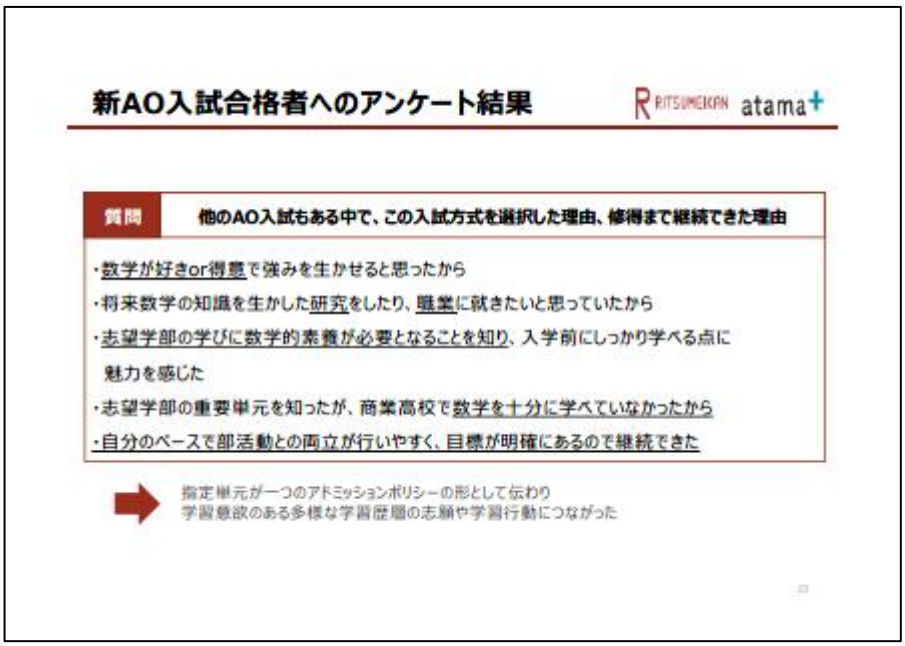
これは高校以前と書いていますが，高等学校で探究学習の一環としてやったことについて聞く項目ももちろんあります。高等学校ではこういうことに自分は取り組んできたということを書いてもらい，経済学部における学部としての学びとの連動性について，担当の教員が判定していくことになります。

その上で，経済学専攻への志望動機や経済社会や数学やデータ分析に関する興味・関心の程度等を推し量るということですね。これが AO 選抜の数学重視方式で今年度初めて取り入れられた方法です。



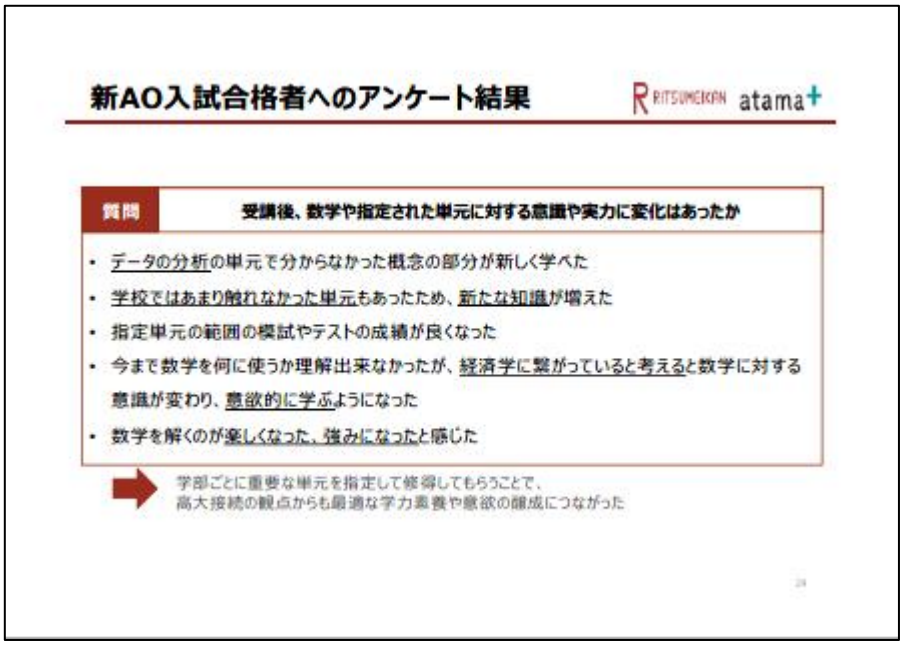
対象の AO 選抜合格者へのアンケート結果では，それ以前から atama＋という AI 学習を行っていたかという質問に対しましては 80%以上がやったことがなかったということでした。

受講前に数学は嫌い・苦手だったかを聞いたところ，むしろ好き・得意とする人間がこれを受けていたということが分かります。つまり，atama＋の利用経験や数学の得意・不得意によらずに誰でも平等にチャレンジできて合格可能性のある入試であるということですね。



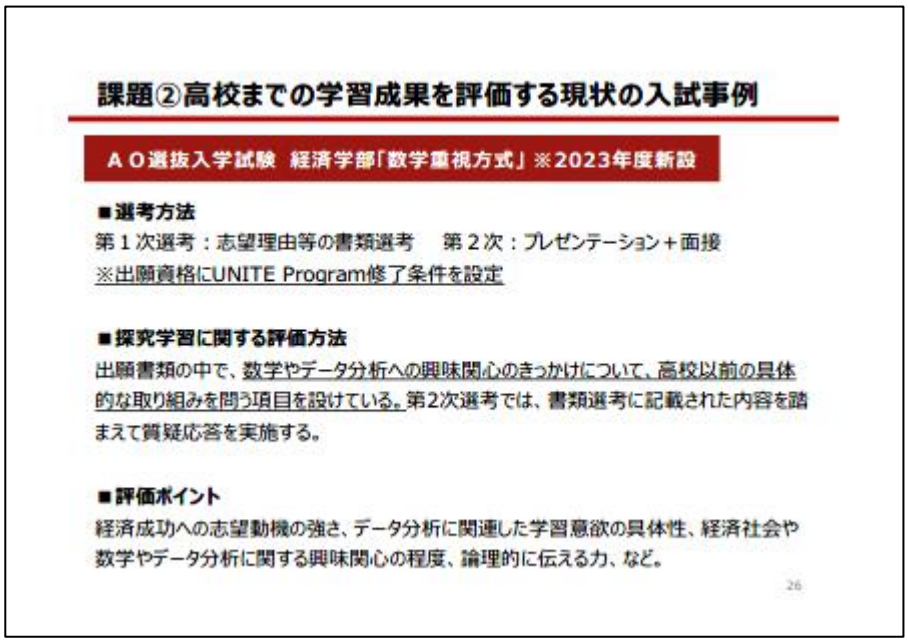
同じく，この入試方式を選択したのはなぜか，また習得まで継続できたのはなぜかという質問には，「数学が好きあるいは得意であったから」，「将来，数学の知識を生かした研究をし，職業に就きたいと思っていたから」という回答がありました。

注意していただきたいのは，これは全て文系の学部の受験生の回答であるということです。理系志望でしたら，数学が好きであること，それを生かした将来のビジョンを持っていることは分からないでもないのですが，あえて文系の経済学部や食マネジメント学部に進みたいと思いながらも，一方で，自分は数学に少なからず興味・関心を抱いていたということで，ならば，その中で何がどう役立つかを明確に把握して認識した上で，それを活かして入試選考に当たるということを経験していくことになろうかと思います。



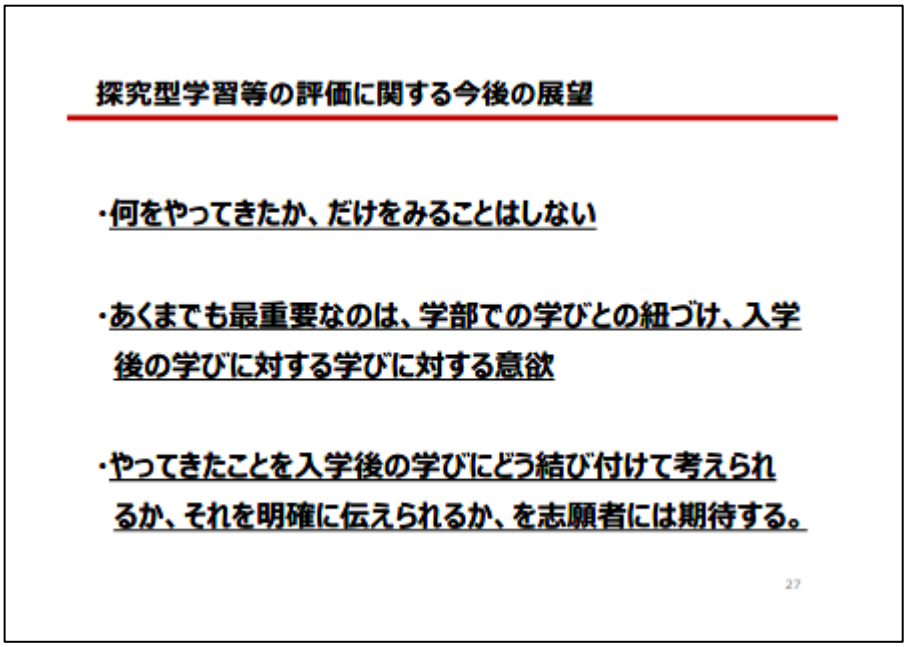
「受講後に数学や指定された単元に対する意識や実力に変化はあったか」という質問について，これは非常に手前みそですが，かなり効果はあったということです。「新たな知識が増えた」，「今までは何のために数学を勉強するのか，もう一つ確信が持てなかったが明らかにこれから自分が学ぼうとしている経済学に対してこれが重要だと認識できた」，「より意欲的に学べるようになった」，あるいは「楽しみを感じるようになった」という回答がありました。学部ごとに重要な単元を指定して習得してもらうことで，むしろ当初目指していました高大接続の意味がさらに深まり，そういう意欲の醸成につながったといえるのではないかと思います。





今後の展開としては，学部の募集枠の拡大あるいは他学部や立命館アジア太平洋大学（APU）でも導入を検討したいということで，来年から薬学部の化学で導入します。立命館アジア太平洋大学でも導入が予定されています。それから，先ほど少し触れた入学前教育への教材活用も始まっています。

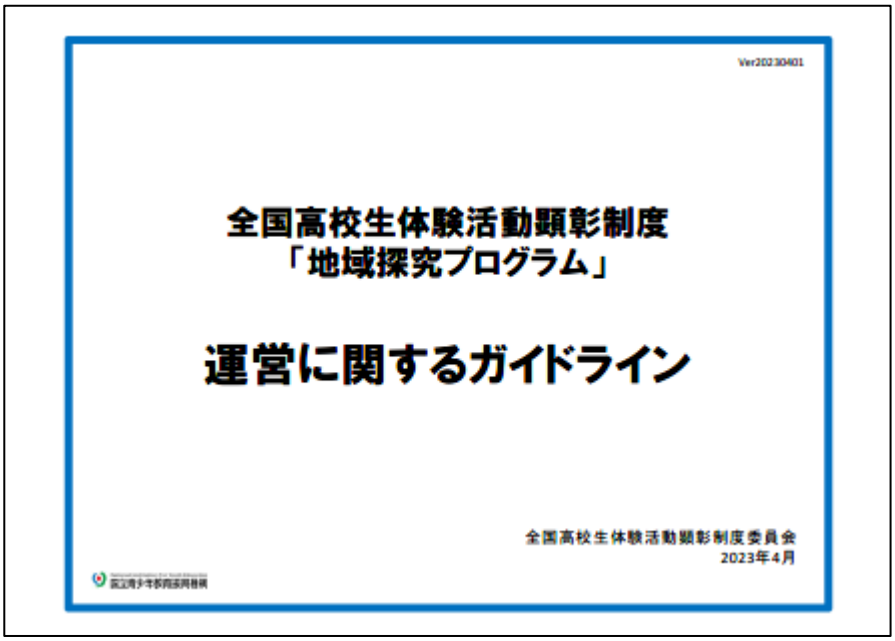
高校と大学との学びの接続に向けて，習得主義に基づき，過去の成績や資格の評価のみによらず，受験生が努力すれば平等にチャレンジ可能な入試を広げたいということで，一定，ここでの検証を重ねながら重点化を図っていきたいと考えています。



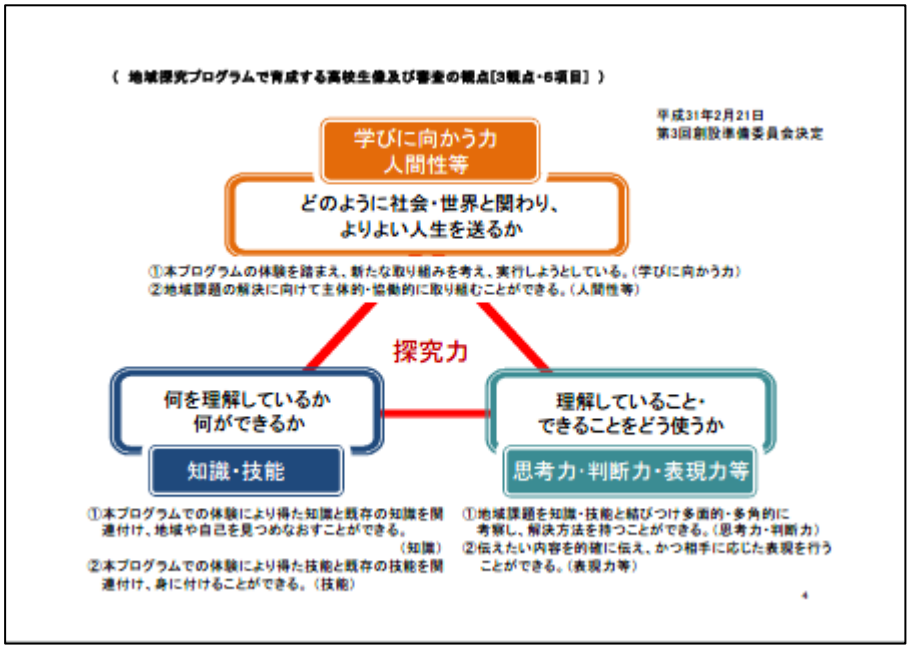
最後に総括です。入試のための勉強ではなく，やりたいことを実現するために重要な単元を指定するという大学からのメッセージを発信して，本当の意味での高大接続の理念になるべく近付けたいということです。志願者が単元の得意・苦手，得手不得手によらずに自分が本当にやりたいことを実現するために主体的に学習する行動が明確に確認できたと思っています。すなわち，目的が伝われば子どもたちは主体的におのずから学習することになるということです。

その際に AI 教材を活用することにより，結果として，課題であった教員等の入試執行業務の負担を増やすことなく理想的な形に近付けることができたということです。

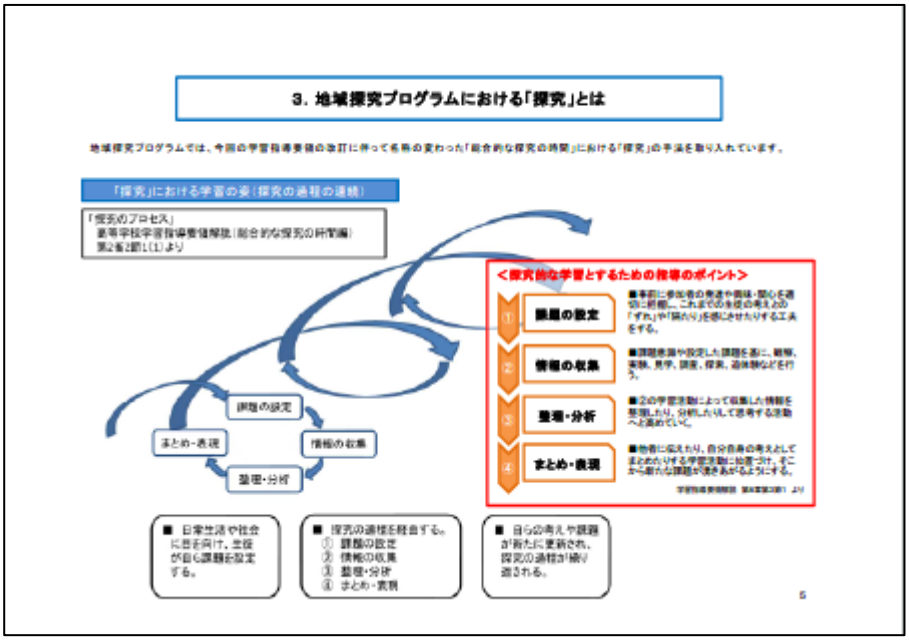
そういうことで，今後，高校までの探究学習の成果を踏まえて自身のやりたいことやビジョンあるいは目標を育ててしっかりと評価するという方向の仕組みをさらに発展させていきたいと考えています。



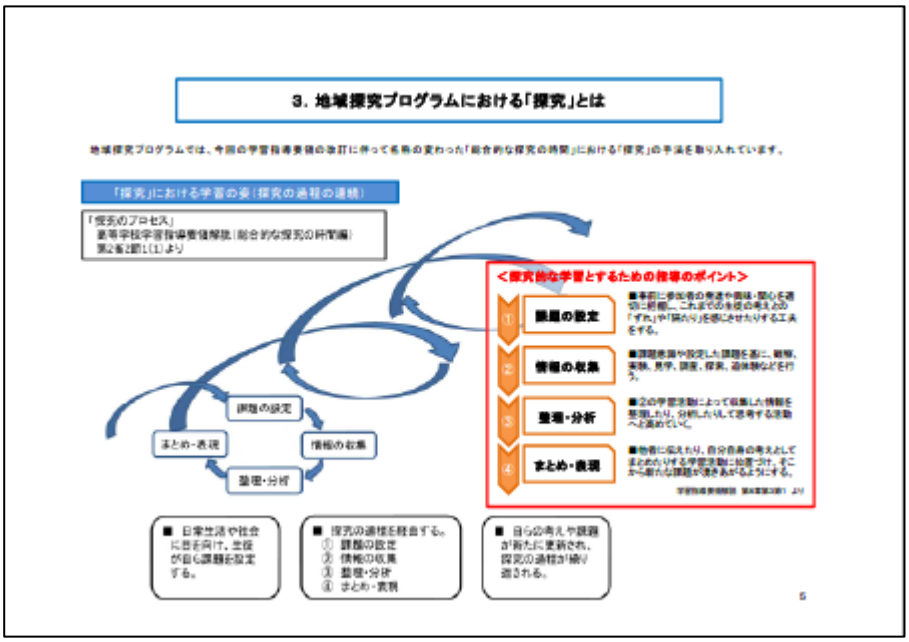
最後に，先ほど少し触れた，かつて立命館でやっていた立命館サマーカレッジは，高等学校の生徒を集めて各学部の提供する講義に触れさせて，その上で，グループワーク，フィールドワークを行ってプレゼンテーションをするというものでしたが，そのノウハウを制度設計の時から参考にしていただき，現在は国立青少年教育振興機構が実施している全国高校生体験活動顕彰制度の地域探究プログラムについて若干紹介させていただいて終わりたいと思います。



学びに向かう人間性，知識・技能，さらには理解していることやできることをどう使うかという思考力・判断力・表現力がトータルされたものがまさしく探究力であるということです。この探究力を高校生の段階で表彰することで，より一層，学びの内容を内実化する方向へ持っていきたいという意図でなされました。

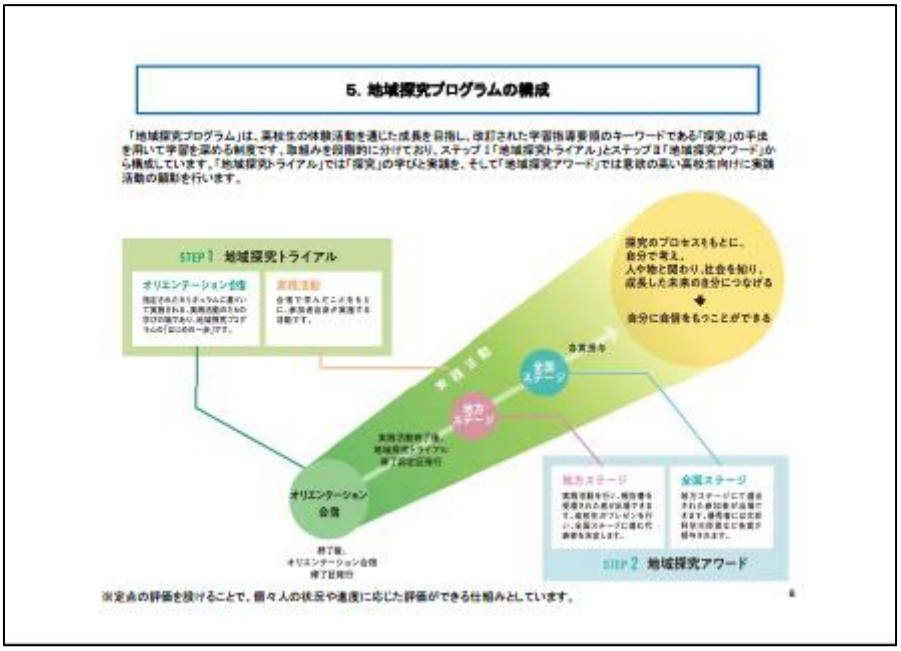


地域探究プログラムにおける探究とは，課題設定，情報収集，整理・分析，まとめ，表現するというサイクルでグループ作業を行います。最終的に，このアワードそのものには個人もしくはグループでエントリーすることになっています。



メリットとしましては，何ができるようになるか，何を学ぶか，どのように学ぶかということを兼ね備えた一つの重要な機会を高校生に与えることになるということです。

もう一つは，ここにありますように集団宿泊活動の促進です。もちろん学校単位でエントリーされているところもありますから，その場合は日常で学んでいる友達同士が新たにこういう機会に接することになるのですが，場合によっては違う学校の同じ高校生同士が新たなグループを構成して，共通の課題に向けてグループワークを行うという重要な経験をさせています。



全国にある青少年自然の家でオリエンテーション合宿を行いまして，課題探究とはどういうものか，どういうことを通じて何が問題なのかということを自分なりに把握して，そのために何ができるか，他者の意見も参考にして聞きながら進めていきます。最終的には書類でエントリーしていただき，地方ステージと全国ステージを経て表彰する対象を絞り込んでいくことになるわけです。

プレゼンテーションをする時には，スキルを用いて，それぞれが独自のやり方で自分たちの訴えを行っています。こちらが予想した以上にかなり意欲的に取り組んでおり，傾聴に値するような提言もよく出されています。

実際にこれでアワードを取った学生に話を聞くと，入試に連動させることを目的に参加したわけではありませんでしたが，結果としては，自分が行きたい大学や学部を絞り込んで自らのキャリアビジョンと矛盾なく結び付けた上でその道に進んでいるという実例が出ています。

たくさんの参考資料のファイルをご提供いただいていますので，ここに付けておきましたので，ご参照いただければと思います。

私の報告はこれで終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

【川嶋・司会】　本郷先生，ありがとうございました。総合型選抜，AO 入試において，大学入学後に必要な学力を具体的に志願者に示すことによって，これまでの高校の探究活動の意味を改めて振り返ることと，大学入学や進学の意味を考えさせるという新しい取り組みのご紹介だったと思います。ありがとうございました。■

全体会 **3** ◉ 全体討論

総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて

■椎名　久美子（大学入試センター試験・研究副統括官，研究開発部教授）/**竹内　正興**（香川大学アドミッションセンター教授）/**本郷　真紹**（立命館大学文学部特命教授）/**川嶋　太津夫**（大阪大学特任教授■司会）/**荘島　宏二郎**（大学入試センター教授■司会）

【荘島・司会】　サブ司会の大学入試センターの荘島です。頂いた質問を先生方に振ってご回答を頂きたいと思います。Q＆A にご質問を何件か頂いています。私のほうで代読してまいりますので，質問された先生方は適宜ご回答いただけたらと思います。それでは，私から読み上げたいと思います。

　まず，竹内先生へのご質問です。3 点あり，まず 1 つ目です。「竹内先生のご発表の資料の 18 ページに AI 等の技術革新についてというところがあります。志願者が ChatGPT 等を利用して事前課題への回答を作成してしまうというリスクを指すのでしょうか。この場合，対抗策等の展望があるでしょうか」というご質問ですが，いかがでしょうか。

【竹内】　今ご指摘いただいたとおりです。対抗策としては，それ単独で評価はしないということが重要ではないかと思います。つまり，例えば，出願に作成された書類を見ながら実際に面接で利用して確認するといったことですね。評価の組み合わせが重要な点ではないかと思いますし，その他についても今後考えていくべき課題の一つだと思っています。

【荘島・司会】ありがとうございます。2 点目のご質問は，ペーパー・インタビューの作問についてです。「過去問は公表されている大学もあるが，今後の作問上の難しさ（一定程度の時期を過ぎると類似問題になりやすいのか）等について展望があれば教えてください」というご質問ですが，いかがでしょうか。

【竹内】　今回，ペーパー・インタビューを事例として報告させていただいたのですが，どのような選抜の方法を用いても，新しいことを取り入れれば時期がたてば対策が進み，それにどう対応するか検討することになるのは，どの試験でも同じかと思います。

　私見になりますが，私自身は 2 つの対応方法があるのではないかと考えています。対

策が立てられないよう，設問を工夫して出題していくというのが一つの考え方だと思います。もう一つとして，対策はされてもいいという考え方もあるのではないかと思います。なぜかといいますとこれは教育効果につながるからです。つまり，選抜という過程の中で，受験生が，大学への志望動機といいますか，進学動機を明確にしてその中で学びに向けて成長していけば，それは一つ効果があるのではないかという考え方があるかと思います。

ただ，この場合，ほとんどの方が高評価となる傾向が出るかと思いますので，評価基準を併せて検討することが必要です。先ほど冒頭で川嶋先生から選抜から相互選択へというお話がありましたが，まさしく相互選択へと移る中で一つのポイントになるところかなということで，教育効果を狙った選考といいますか，選択はあるかなと思います。以上です。

【荘島・司会】　ありがとうございました。最後，3 点目です。「一般論として」というかっこ付きなのですが，入学後の学生の追跡についてということで「多彩な入試で入学した学生について，例えば選抜の種類ごとに在学成績や進路先を分析して入試の改善に反映させる等は一般的になされているものなのでしょうか」というご質問です。いかがでしょうか。

【竹内】　全ての大学について知っているわけではありませんが，私が知る限りでは多くの大学で，入試区分ごとの入学後の追跡調査はされていると認識しています。つまり，追跡調査の結果を踏まえて，入試区分ごとの割合をどうするか，この入試区分は続けていくか等の検討する大学が多いのではないかと認識しています。

【荘島・司会】　竹内先生，どうもありがとうございました。続きまして，本郷先生へ「普通科以外のプログラム受講者のうち，どのくらいが習得認定試験に合格し，どのくらいが出願に結び付いているのでしょうか」というご質問ですが，いかがでしょうか。

【本郷】　先ほど報告の中の表でお示しさせていただきましたとおり，普通科以外の受講者は 29 名ですね。全体で 227 名受講した人がいるのですが，29 名の受講者がいます。そのうち最後まで履修して認定書をもらった人は 8 名です。

8 名のうちどれだけ志願したかということですが，この試みは，もともと本学の当該学部を第 1 志望で受けることを前提に志望理由書まで書いて出していただくものです。プログラムの修了まで来れば，ほぼ全員，正確には 140 名中の 128 名ですから 9 割以上がそのまま志願していくことになりました。手元に正確な資料はありませんが，恐らく修了した 8 名はそのまま志願してくれているものだと思っています。

【荘島・司会】　どうもありがとうございました。本郷先生に続けてご回答いただきたいと思います。「出願前の atama＋での学習は他大学の入試対策としても有効でしょうか。

その場合，自主学習ツールとして活用する高校生もいるのでしょうか」というご質問です。いかがでしょうか。

【本郷】　先ほどご説明申し上げましたように，大学入学後の学部での学びの基礎学力として必要な単元を，各学部から指定いただき，それを atama＋を通じて提供して履修してもらうものになります。確かにその単元については，より一般的な学びの深化につながるとは思いますが，果たしてそれが他大学の例えば一般の数学入試の対策になるかと言われましたら，それは全く役に立たないことはありませんが，若干，趣旨が違うとしか申しようがありません。自主学習ツールとして活用する高校生もいるかということですが，入試対策学習の手だてや手段としては少し性格が違うと思います。

さらに，生徒さんは志望理由書まで出していただき，本学の当該学部を受けたいという意志を明確にお持ちの方です。それを確認した上で受けていただいていますので，他の大学の志望にも役立てられるという性格のものではないとご理解いただきたいと思います。

【荘島・司会】　ありがとうございました。それでは，続きまして椎名先生へのご質問です。「基礎学力把握のための簡易な検査という『簡易な』というレベルをどのくらいのレベル感でお考えでしょうか」というご質問です。いかがでしょうか。

【椎名】　われわれも「簡易な」というところをどうやってつかまえようかという点は非常に苦労したところなのです。大まかに言いますと多面的・総合的評価を行うという枠組みの中で，他の選抜資料と組み合わせて検査を実施するという前提で，普通の数学や英語といった通常の教科・科目テストほどはヘビーではないが自分の大学で学ぶのに必要なところはクリアしてきてほしいというところを確認する意味合いが強いということでの「簡易」ではないかと考えています。

大学の募集要項等を見ると「簡易な」というところは大学の実情に応じて解釈して運用していると思いました。大学によっては，非常に短時間，例えば，10 分でやる大学もあれば 30 分というところもあるのですが，例えば，90 分などというところは少なくて比較的短時間で測る傾向が見受けられます。時間的なところからすると，そこは一つの「簡易な」というところなのかなと思います。

難易度については，先ほどスライドの中で教科書の章末問題レベルといった説明が見られたと報告したのですが，授業の中で，通常，章末問題はやるでしょうからそこはクリアしてくださいというメッセージのようにも思います。

また，難易度に関しては非常に大学によって捉え方がさまざまだと思っています。「簡易」というところで難易度は一概に言えないと思っています。中には，義務教育レベルを「簡易」として要求しているかなというケースもあります。分数の加減乗除や割合を当てはめた計算の確認，濃度計算や小数点の理解などを問うといったことを募集要項の中で明示している大学もあり，そういったいわゆる義務教育レベルのことを問うという

ことで「簡易」としているところもありました。

さらに，分野について入学後の学びに直結するようなところにぎゅっと絞ったというケースも見られます。先ほど本郷先生のお話の中で，学部でどうしてもここはというところを幾つか絞ったというプログラムが紹介されましたが，割とそれに近いような特定の単元に絞って聞くといったところを「簡易」と捉えているところもありました。これで回答になりますでしょうか。

【荘島・司会】　ありがとうございました。それでは，再び，竹内先生にご質問を差し上げたいと思います。「ペーパー・インタビューは一斉に実施できるため面接に比べて試験当日の時間をかなり減らすことができると思うのですが，採点作業について作業時間が増加するのではないかと思います。導入された事例からこの辺りのフィードバックや実際の対応事例（工夫）などがございましたらご教示いただけますでしょうか。可能な範囲でご教示いただけますと幸いです」というご質問でした。いかがでしょうか。

【竹内】　まず，今回の事例について，具体的にどのような採点をされているかについて私は把握できていませんので，あくまでも自分自身のこれまでの経験等を踏まえてということになりますが，2 つの考え方があると認識しています。

一つは，ご指摘いただいたとおり，採点の負担が増えるのは事実だと思います。採点の負担が増えることと，試験当日の面接の負担が大きいことのどちらが負担が少ないかという視点があります。私自身は，採点のほうが負担は少ないと考えました。これが一つです。

もう一つは，これは私自身のこれまでの経験則になりますが，こういった問題を設計する際には，必ず採点基準も一緒に検討して，例えばルーブリックなどを利用してかなり詳細に採点基準を決めておくというところがポイントになってくると考えます。
もし仮にルーブリックがあれば，それを採点者に共有して事前研修をしっかり行っておけば，1 日～2 日はかかるかもしれませんが，何日も何日も時間がかかるものではないと認識しているところです。

つまり，試験当日に面接を行うことの時間的負担との比較という視点をもった上で，採点の負担を減らすために問題作成時点から採点基準を精緻化し，それを関係者へ事前共有し研修をすることがポイントではないかと考えています。

【荘島・司会】　ありがとうございました。参加者の方より情報提供がありましたので代読させていただきます。「竹内先生のご発表の中で言及のあった六大学連携入試事業についてですが，この事業の一環として作成した面接・ペーパー・インタビューについての教員向けの教材動画（Blu-ray ディスク）が多数余っています。興味，ご関心のある方は，返信用のレターパックなどを同封の上，長崎大学入試課へご請求ください」ということです。どうもありがとうございます。

【荘島・司会】　続いて，本郷先生へのご質問です。「貴学新 AO 入試は志願者との時間を十分にかけて入学許可される形と存じます。AO（総合型選抜）は，推薦入試とも違い，入学自体，かつ在学中の断念もあるかと思いますが，本入試による合格者は就学の意志がより固いように想像できますので，この先，本入試経由の辞退状況や在学生の動向を追跡していただけたら幸いです」というご質問といいますか，ご要望といいますか，そういったコメントがありました。

【本郷】　在学生の動向という点については，何せこの形式の入試による入学制はこの 4 月が 1 期生であり，また 2 カ月もたっていませんので，就学状況はどうか，あるいはどれだけ熱心に取り組んでいるか，成績がどうかということについてはまだ検証するすべを持っていません。入試経由の辞退状況ということなのですが，結果として最終的にこの方式で受けて最終合格になりながら辞退した生徒というのは，関わっている中では 1 人だけです。エントリーする段階から明確に大学・学部に対する志願というものの意向を持っているということを具体的に記して志望理由書を出していただいています。ついては基本的には入学辞退はこちらも想定していないわけなのですが，これが現状です。

今後，この入試方式で入った学生が，他の方式あるいは一般入試の学生と比べてどうなのかということについて検証を行った上で，しかるべき場で報告をさせていただきたいと思います。

【荘島・司会】　どうもありがとうございました。今のところ，頂いたご質問は全部ご回答いただきました。いったん，川嶋先生に司会をお返しします。よろしくお願いします。

【川嶋・司会】　ありがとうございます。他の全体会とも，相互に関係があるのかなと思いますので，何点か先生方にお尋ねしたいことを整理してみました。

それぞれのご発表の中でこの論点について言及されているところもあるのですが，改めて投げかけさせていただきたいと思います。

冒頭に私から申しましたように少子化とか大学全入化が現実のものとなりそうなのですが，まず報告者のそれぞれのお立場，所属されている大学から考えて今後の総合型選抜・学校推薦型選抜の役割とかその行方をどのように予測されているのか，お考えになっているのかについてご意見をお伺いしたい。

2 つ目は，これは既に各ご報告の中で言及されているかとは思うのですが，総合型選抜・学校推薦型選抜を量的のみならず質的にも充実させるための課題は何なのかということを改めてお聞きしたい。

3 つ目は，昨日，行われた全体会 1，それから，先ほど午後に行われた全体会 2 から総合型選抜・学校推薦型選抜を質的・量的に充実させるためのヒントや示唆は何かありましたでしょうか。

この 3 つの問いかけを改めてさせていただきたいと思いますので，まず 1 つ目についてそれぞれのお立場からご発言をお願いしたいと思いますが，まず椎名先生はいかがで

しょうか。センターとしてどのようにお考えなのか，対応されているのか。別にセンターとしての公式見解ではなく，椎名先生の個人的なご意見になるかと思いますが，お聞きしたいです。いかがでしょうか。

【椎名】　私の個人的な考えという回答になりますが，トレンドを見ますと，一般選抜での入学者が段々減って，それ以外の総合型や学校推薦型の人，特に総合型が拡大していますが，共通テストでその人たちの基礎学力を把握するのは時期的な問題からするとなかなか難しいことになるのかなと思います。ただ，役割的には多様な入り口を用意しておくということは必要なことではないかと思っています。

【川嶋・司会】　ありがとうございました。既に言及されている箇所もあるかと思いますが，竹内先生はいかがですか。

【竹内】　重複してしまうところもありますが，私見について 2 点申し上げさせていただきたいと思います。私は，今現在，香川大学という四国の国立大学に勤務していますが，香川大学は推薦・総合の募集枠が 3 割を超えている大学です。30％を超えている大学は少ないため，学校推薦・総合型で多く取っている大学といわれています。その中で感じることは 2 つあります。

一つは，志望度が高いということですね。一般選抜は共通テストの結果を見て，自分の希望と合格の兼ね合いを見ながら出願校を決めるというシステムになっています。それを比較すると，ぜひここに行きたい，学びたいと思う大学に出願できる選抜区分であり，志望度が高い人材を獲得できるというところに大きなメリットを感じています。ですので，どこまで拡大できるかというのは議論がありますが，学校推薦型選抜・総合型選抜は一定割合必要だと考えています。

もう一つは，多様な人材を確保できるということになります。もちろん一般選抜で入学してくる学生は共通テストを経て基礎学力が一定以上あって入学してきますので，入学後の授業もきちんと対応できます。ただ，様々な入試形態で入学した学生を迎え入れることで，学生同士がお互いに異質な人たちと触れ合う中で刺激を受けて知的レベルを上げていると感じています。繰り返しになりますが，やる気がある学生が多く集まりやすいという点，そして，多様な人材が集まって知的な刺激を受け合って，知的な触発の機会が増えるという点から見て，総合型選抜・学校推薦型選抜は大きいですし，これからも維持していくべきと考えています。

【川嶋・司会】　ありがとうございます。国立大学は全体として 30％を総合型・学校推薦型で募集するという国大協全体の目標を掲げていましたが，全体ではまだ 2 割弱という状況です。その中で 3 割を超えているという大学はまだ少ない中で，今後の展望をお話しいただきました。

次に，本郷先生，私立大学あるいは立命館大学というお立場から。既に私立大学では

入学者の半数以上が総合型選抜・学校推薦型で入学しているわけですが，この 2 つの選抜方法についてどのような方向性を考えておられるのか。もう既に 5 割を超えている状況の中で今後の課題という，この 2 つ目の論点と併せてお話しいただければ幸いです。

【本郷】　ご承知のとおり，もう既に大学全入時代が実際に訪れていて，特にあまたある私立大学の中には，入学時における競争的環境が維持できず全員を受け入れざるを得ない，それでも入学定員を満たないということで，残念ながら大学そのものをやめてしまうというところも出てきているのが現状です。

その中で，今後の情勢を見計らった場合に，もししかるべき政治的・経済的援助によって子どもたちが大学で学ぶ機会がより多く提供されたとするならば，これまでのような画一的な評価指標によって学力を判断するとはじき出される層に対し，どう手当てをするのかということが当然重要な問題になってくるのだろうと私は思います。

確かに，いわゆる教科科目学力に関しては，大学の学びには十分とは言えないということで入学の機会が損なわれるということがあります。一方で，ベンチャーなどをあえて志すような学生の中にはそういう人が多いということです。やはり画一的な手法では判断し切れないような，多様な個性を持ち，ずるい言い方ですが，大学で何に接して大化けするか分からないという学生がたくさんいます。そうなってくるとより一層のこと，そういう学生に機会を提供するというのが，今後の私立大学として果たすべきミッションではないかと考えているわけです。

その場合に，一番大事なことは，先ほどのご報告でも申し上げましたように，ミスマッチを起こさせないということです。つまりこの大学にはどのような特色があり，どのような人材を育成することを目的として教育に取り組んでいるのか，正確に分かりやすく伝えることが重要です。その上で，彼らのモチベーション，あるいは，インセンティブをより高めるための手だてを考えた上で，明確な志望を持ってその大学・学部を目指す仕組みをなるべく多様につくっていくことが当然必要であろうと思います。

そのために何ができるかということで，われわれは先ほどご説明したとおり，入学後の学びの一番基礎となる学力を示し，この単元を重点的に習得することで，一層自分のやりたいことへの展開，発展ができるということを確信させて入学していただく仕組みをつくったところです。

入試とは，従来のように志願者を選別するのではなくて，むしろ志願するモチベーションを導き出すための手段として入試の仕組みを築いていくということが大事なのではないかということですね。やりたいことができて，なりたい自分になれるということを伝えられるような，そのメッセージとなるような多様な入試の仕組みが今後の総合型選抜に求められるものではないかと考えています。

私どもが取り組んでいる具体的な試みについては先ほどご報告申し上げたとおりです。

【川嶋・司会】　ありがとうございました。これから増えるとするとミスマッチをいかに防ぐかということで，入学のための学びと入試に至る道筋を明確にするというご意見だ

ったと思います。

竹内先生，既に香川大学では 3 割という状況のようですが，これをさらに割合を増やすとすると何か課題などはありますでしょうか。

【竹内】　今のところ，増やすという議論は出ていなくて，3 割に到達できた点を評価しているところなのです。さらに増やすという議論があるとすれば，先ほど川嶋先生が 2 点目に挙げられた質的なところを選抜でどのように維持していくか。そこが非常に大きな課題ではないかと考えています。その際にポイントとなりますのは，先ほどの報告とも重複しますが，選抜の組み合わせではないかなと考えています。

出願前の基礎学力の担保，出願時の書類審査の工夫，実際に試験当日に来てもらった時の説明，面接等の組み合わせをどのように行っていくか，その中でどのように量的なものを解決していくのか。その辺りが議論をしていかなければならない点かなと考えているところです。

【川嶋・司会】　ありがとうございました。椎名先生，基礎学力の評価として共通テストを使うとすると実施時期が問題ではないかという話がありましたが，それを含めて，今後総合型選抜・学校推薦型選抜が広がった際の課題など，もしお聞きすることがありましたらお願いしたいと思うのですが，いかがでしょうか。

【椎名】　基礎学力の担保については，総合型・学校推薦型でも必要になってくるわけですが，量が拡大した時に，一定程度，何らかの基礎学力を確認のために見るという仕組みを，求めるレベルが似ている，共通している複数の大学が共通して使えるような仕組みも必要になってくるのかなと思っています。

【川嶋・司会】　椎名先生たちが研究されておられた，第 2 の共通テストではありませんが，入学後の教育につながる基礎的学力テストなどが，先ほど竹内先生からご紹介にあった再利用のコンソーシアムといった形で広がっていくのか，まさに大学間共同が広がればいいというご意見でした。

ただ今, 大学関係者の 3 名の方からご意見を伺っている中で Q＆A に高校関係者の方からもご意見やご質問が挙がっているようなので，荘島先生，ご紹介いただけますか。

【荘島・司会】　頂いたご質問を代読させていただきたいと思います。「高校現場の立場を考えますと，年内入試拡大により教員の先生方には個々の生徒の志望理由書作成や面接対策が新たな負担となっているのではないかと危惧しています。本来であれば，高校 3 年生は教科学習において最も大事な 1 年であるはずです。とめどもなく年内入試が拡大する現状を黙認せざるを得ないのか。先生方のご所見をお伺いできれば幸いです」。

これは皆さまに対する質問だと思いますが，時間も差し迫っていますので簡潔に順番に先生方にお答えいただけたらと思います。まず，椎名先生，いかがでしょうか。

【椎名】　現状で総合型など，いわゆる年内入試が増えているという現状はあります。ご質問では高校の負担について触れられていますが，多面的・総合的な評価のやり方は，かなり限られたリソースでやることになり，大学にとってもかなりの負担ではないかと思っています。私は大学の事情については把握していませんが，とめどなく拡大する状況に大学がどこまで耐えられるのかという点は私も疑問を持っています。

【荘島・司会】　続いて，竹内先生お願いします。

【竹内】　私見になってしまいますが，受験生の方が教科・科目の勉強をしている時に志望理由書の作成もしていくのは大きな負担であるということは理解できます。

一方で，受験生にとっては，志望大学に合格することはもちろん，入学した大学で充実した大学生活を過ごすことがさらに大事ではないかと認識しています。そのために高校 3 年間のどこかのタイミングで，志望理由をきちんとまとめておくという作業は絶対に必要だと思います。

私も，仕事柄，高校現場に伺わせていただくことが多いですが，そうお考えの高校の先生方も多くいらっしゃいます。高校 3 年の 8 月から志望理由書を書くことは負担であるとすると，どのように対応しているか，一つの事例をご紹介いたします。大学進学希望者全員，高校 1 年，あるいは 2 年のロングホームルームや総合的な学習の時間の中で志望理由書を書かせる時間を設けて，それを 2 年生の終わりまでにいったん仕上げておき，3 年生で受験大学を決めていく時に精緻化していくそうです。高校 3 年間のどこかで自分が行きたい大学をきちんと見据えて志望理由を固めておくという作業は欠かせないと思います。

ただ，それを高 3 の段階で行うことに負担があれば，早い段階からやっておくというのも一つの考え方かと思います。大事なことはミスマッチを防いでいくことだと思っています。

【荘島・司会】　続いて，本郷先生お願いします。

【本郷】　高校現場を預かる先生方からしますとこれは由々しき事態であり，高校 3 年生の後半期において，入試によって本来の授業が損なわれてしまうという懸念を持たれるのは理解できるのですが，結局，子どもたちがどの時点で自らのキャリアビジョン，あるいは，進学意識を持つかということが非常に重要な意味を持ってくると思います。

早くからある程度固まっている生徒は，時間的に比較的余裕のある時から志望理由等を書いていくことができると思うのですが，高校における学習を一通り終えた上で考えるということになってきますと，それが高校 3 年生の段階であれば，当然のことながら気が付いた時には書かざるを得ない段階に達しているということですね。

今後，本課題をどのように捉えていくのかというのは非常に重要な問題です。ある意味では，大学においても 4 年生はほとんど就活に飛び回っているようなことになってい

ますから，本来の 3 年間や 4 年間の教育の意味をどう考えるのかということは必要になってくると思います。その中で，致し方のない部分があるといいながらも，私はこの場で大学の関係者と高校の関係者が本当の意味で膝を合わせて，いわゆる円滑な接続とは何なのかということをもう一度議論していく必要があるのかなと思います。

その上で，制度的な制約もあるかもしれませんが，本当の意味での基礎となる力を付けてもらいたいという大学側のメッセージと，高校側からのこれだけの力を付けたいということの中で，意見の一致が得られれば，それに沿った入学者選抜の形はどういうものなのかと改めて考える必要があるのではないかと思います。

ただ，一方で，大学の経営という観点からしますと，やはり総合型選抜が充実されれば前倒しになっていくのはある意味で致し方ないところがあります。国公立大学において総合型選抜の枠組みが大きくなって，その分，秋入試を重点化されるとなると，日本の大学の場合，私立大学はまず先に合格を出して，国立大学へ抜けていく方は見送った上で，どう補充するかという形で入学定員を確保していくのが通常の形になっています。できるだけ歯止めがかからないように，何らかの工夫を加えていく必要があるだろうという認識は持っています。今のところ，申し上げられることはそのようなことです。

【荘島・司会】　ありがとうございました。続きまして，もう 1 件ご質問がございました。

「高校から大学へ，入学後の大学教育に円滑につなげるためについてのお話をありがとうございました。大学から社会へ，入職後の働きに遠隔につなげるための検討も進んでいると思います。高校現場では生徒の 5 年後 10 年後の自分の姿を考えさせることもあるものですから少々気になった次第です。」というご質問といいますか，ご感想を頂きました。先生方，いかがでしょうか。

【椎名】　質問の意図としては，大学教育の中でどれぐらい卒業後の働くことについて，円滑につながるようになっているのかということかなと思います。大学のシラバスなどを見ると，何十年か前に自分が学生だった時に比べて，特定の資格を得るためにこの科目が必須ですということが明示的に示される傾向が最近強くなっているかなと思います。

入職後の働きをどう捉えるかにもよると思うのですが，この科目を学ぶことでどういう力が，あるいは，どういう資格ということにつながるのかということが割と昔よりも明示されるようになっているかなと思っています。

【荘島・司会】　続きまして，竹内先生いかがでしょうか。

【竹内】　まず, 5 年後 10 年後を考えるということは非常に重要なことであると思います。以前は学年が上がってから将来を考えていく機会を多く設けている大学が多かったと思いますが，今は多くの大学がもう入学後 1 年次からいわゆるキャリア教育的な，キャリアデザイン的な科目を用意するなど，考える機会を多く持たせていると認識しています。

大事なことは考える機会を生徒たちに多く持たせて，その中で試行錯誤しながら将来

の自分を考えていく機会を教育機関は提供していかなければいけないと私自身も日々考えて望んでいます。

【荘島・司会】　最後に本郷先生，お願いします。

【本郷】　既に両先生がお答えのとおりなのですが，最近，大学でも早い学年の段階から，インターンシップ等で自分の将来の働く場で様々な経験をする中で試行錯誤を繰り返して，改めて大学で何を学ぶのかを自覚させることが重要であるということで，どの大学でもそういう取り組みが行われていると思います。

つまり，働きの経験をしながら学びの内容を決めていくということ，それをより深めるということを行っています。それが大学と社会を結び付ける一つの道になっているとすると，同じことがある意味では大学と高校でも言えるのではないかと。つまり大学で何を学ぶのか，そのために高校で何を勉強していかなければいけないのか。何を経験しなければいけないのかについて，もっと大学のほうはいろいろな形で発するメッセージを通じて，なるべくミスマッチがなく，本当の意味で本領が発揮できる大学に進めるように，それに導く手だてを考えていくことが必要ではないかと思います。

【荘島・司会】　ありがとうございました。

【川嶋・司会】　予定した時間となりました。ご報告者の方，それから視聴していただいた皆さま，大学入試センターの事務担当の方，お世話になりました。

大会冒頭の文科省からの挨拶で，少子化時代の大学教育の在り方について，今後，大学分科会で議論されるというお話がありましたので，少子化あるいは大学全入時代の大学入試，入学者選抜の在り方についてもぜひ議論をしていただければと思います。

最後に，私見になりますが，私は高校側と大学側がそういう両方の観点から見た時に，高校 3 年間の学習や様々な活動の先に大学入試があるという発想に今後変えていく必要があるのかなといつも思っています。

本日はご参加いただきまして，ありがとうございました。これにて閉会とさせていただきます。

【一同】　ありがとうございました。■

令和５年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 18 回）　実施結果

１．大会実施概要

期　　日　：令和５年５月１８日（木）～２０日（土）
主　　催　：独立行政法人大学入試センター
共　　催　：北海道大学
参 加 費　：1人 3,000円（税込）
開催形式　：Zoomによるオンライン開催
参加申込者数　：400人　（令和４年度参加者数 430人）

		国立大学	公立大学	私立大学	高等学校	その他	合計
参加申込者数		150(151)	83(74)	108(123)	37(55)	22(27)	400(430)
内訳	教員・研究者	98(100)	45(36)	35(27)	36(53)	0 (1)	214(217)
	事務職員等	52 (51)	38(38)	73(96)	1 (2)	22(26)	186(213)

単位：人　　（　）は前回大会の参加申込者数。

２．日程・プログラム

日　　程	プログラム	時　　間
【１日目】 ５月１８日 （木）	全体会１（センターセミナー） 「CBT(Computer Based Testing)における大学等機関の有機的な連携に向けて」	13:00 ～ 16:00
【２日目】 ５月１９日 （金）	主催者挨拶，来賓挨拶 全体会２ 「国際入試の現状と展望」 全体会３ 「総合型・学校推薦型選抜における多面的・総合的評価の充実に向けて」	9:40 ～ 10:00 10:00 ～ 12:30 14:00 ～ 17:00
【３日目】 ５月２０日 （土）	研究会（交流の場：各30分を含む） ◆オープンセッション（第１部） ・第１セッション〔総合型選抜，学校推薦型選抜〕 ・第２セッション〔入試広報〕 ・第３セッション〔ｱﾄﾞﾐｯｼｮﾝ･ﾎﾟﾘｼｰ,志願者動向,入試方式〕 ◆オープンセッション（第２部） ・第４セッション〔段階評価，多面的評価〕 ・第５セッション〔高大接続，高大連携〕 ・第６セッション〔選抜方法，入学後の教育〕	 9:30 ～ 12:00 9:30 ～ 12:00 9:30 ～ 12:00 13:30 ～ 16:00 13:30 ～ 16:00 13:30 ～ 15:40
	◆クローズドセッション（第１部）〔選抜方法，英語試験〕 ◆クローズドセッション（第２部）〔高大接続，志願者動向，多面的評価〕	9:30 ～ 12:00 13:30 ～ 17:10

大学入試研究の動向

41 号

令和 5 年 12 月

発行/独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

https://www.dnc.ac.jp/ ☎03-3468-3311

編集/試験企画部試験企画課